

Ⅱ. 「SIH 道場～アクティブ・ラーニング 入門～」の取組

1. 平成 30 年度「SIH 道場～アクティブ・ラーニング入門～」の実施

1) SIH 道場の概要

SIH 道場は、徳島大学の 1 年次学生全員が前期に受講する初年次教育科目であり、各学部・学科で設計したアクティブ・ラーニングの手法を導入した授業において、学生は (1) 専門分野の早期体験、(2) ラーニングスキルの習得、(3) 学習の振り返りを行う。教員は本授業の担当を通して、アクティブ・ラーニングの手法を学び、授業実践の省察を行う。平成 30 年度 SIH 道場においては、学部 1 年生 1303 名が受講し、184 名の教員が授業を担当した。

SIH 道場の授業設計は各学部・学科単位で行い、「授業設計コーディネーター」が責任を担う。授業設計コーディネーターは、(1) 専門分野の早期体験、(2) ラーニングスキル (文章力・プレゼンテーション力・協働力) の習得、(3) 学習の振り返りの SIH 道場の三つの必須要素を組み込んだ授業を設計する。

授業の概要

SIH道場

～アクティブ・ラーニング型初年次科目～

SIH道場とは、**徳島大学の1年次**全員が前期に受講する初年次教育科目で、**①専門分野の早期体験、②ラーニングスキルの習得、③学習の振り返り等の主体的な学習習慣を身につける**ことを主な目的としています。授業内容は、各学部の事情に合わせて授業を設計し、学部教員が授業を担当します。

キーワード：専門分野の早期体験、アクティブ・ラーニングスキルの獲得、eポートフォリオによる学習の振り返り

◆授業の設計手順

授業は、**各学部・学科の事情に合わせて、個別に設計**を行います。授業設計の責任者は、「授業設計コーディネーター」であり、その選出や当該学部の状況把握等は専門委員会委員が行います。また、授業設計においては、**総合教育センター教育改革推進部門教員とコンテンツ作成ワーキンググループ**のメンバーが、**設計のための支援**を行います。

授業内容は、各学部・学科の専門に即して個別に計画されますが、上記の目的を踏まえること、学生がアクティブ・ラーニング型授業を体験し、自らの学習経験を振り返ることを通じて、学習の計画や実施をしていくための能動的学習の基礎を身につけるような要素を盛り込みます。そのために、**下記の内容を必須項目として実施します。**

- ①**専門分野の早期体験**
→先端研究、現場体験、臨床体験、先輩からのメッセージ等
- ②**ラーニングスキルの習得 (反転授業・グループワーク等の実施)**
→文章力・プレゼンテーション力・協働力
- ③**学習の振り返り (eポートフォリオによる省察)**
→学習内容の省察・記録、学生、教員間での共有等

※①～③をそれぞれが関連し、スキルの習得と体験が同じフィールドで習得できるように体系的に組み立てます。

◆授業のひな形 (1つの例) ※より詳細なひな形は別紙

(1) 導入：大学での学び・動機づけ
①先輩の声「テーマ：○○学科における大学での学びと○○技師」(講演or映像)
→その内容について、レポートとして文章にまとめる。
グループでコンテンツを作り、プレゼンテーションを行う。
→授業外：学んだことをe-ポートフォリオに記入。教員はコメントをフィードバックする。

(2) ラーニングスキル入門：学習を行う上で共通する基本技能の習得
①文章の書き方
→反転授業事前学習：レポートの書き方入門
→対面授業：(1)で作成したレポートについて、ルーブリックを用いたピア評価、ポイント確認、フラッシュアップ
→授業外：学んだことをe-ポートフォリオに記入。教員はコメントをフィードバックする。
②プレゼンテーションの仕方
→反転授業事前学習：効果的なプレゼンテーションの仕方
→対面授業：(1)で実施したプレゼンテーションについて、ルーブリックを用いたピア評価、ポイント確認、フラッシュアップ
→授業外：学んだことをe-ポートフォリオに記入。教員はコメントをフィードバックする。
③グループワーク (他者との協働)
→反転授業事前学習：アイデアの発想・収束 (KJ法)
→対面授業：KJ法ワークを実施し、ルーブリックを用いたピア評価を行う。
→授業外：学んだことをe-ポートフォリオに記入。教員はコメントをフィードバックする。

(3) 早期体験：○○分野の先端研究・現場体験
①○○現場体験
→その内容について、レポートとして文章にまとめる。
グループでコンテンツを作り、プレゼンテーションを行う。
ルーブリックを用いたピア評価を行う。
→授業外：学んだことをe-ポートフォリオに記入。教員はコメントをフィードバックする。

2) SIH 道場の各アクターの役割

SIH 道場の実施にあたっては、大学教育再生加速プログラム（AP）実施専門委員会、各学部・学科の授業設計コーディネーター、各学部・学科の授業担当者、総合教育センター教育改革推進部門、SIH 道場コンテンツ作成ワーキンググループが、授業計画から準備、実施、振り返りまでの過程において、以下のようなそれぞれの役割を果たしている。

平成 30 年度 SIH 道場各アクターの役割

	授業計画 10月～2月	準備 2月～3月	実施 4月～9月	振り返り 10月～12月
大学教育再生 加速プログラム 実施専門委員会	<ul style="list-style-type: none"> ◆AP事業全体像の把握 ◆コーディネーターの選出 	<ul style="list-style-type: none"> ◆SIH道場の準備状況の把握 	<ul style="list-style-type: none"> ◆SIH道場の実施状況の把握 (特に自学部) 	<ul style="list-style-type: none"> ◆SIH道場の振り返り (全体運営) ◆シンポジウムの開催 ◆報告書の作成
授業設計 コーディネーター	<ul style="list-style-type: none"> ◆SIH道場の授業概要の把握 ◆授業設計(目的・目標・スケジュール・教材・評価等のシラバスの作成) 	<ul style="list-style-type: none"> ◆授業担当者の選出 ◆SIH道場担当者FDに参加 ◆授業準備・スケジュール等の最終確認など、実施するために必要なことすべて 	<ul style="list-style-type: none"> ◆授業担当者の支援 ◆授業実施状況の把握 ◆自身の授業を振り返り、eポートフォリオを活用した省察 	<ul style="list-style-type: none"> ◆SIH道場の振り返り ◆自己評価シートの作成 (自部局) ◆シンポジウムでの報告
授業担当者		<ul style="list-style-type: none"> ◆授業準備・スケジュール等の最終確認など、授業を担当するために必要なことすべて ◆SIH道場担当者FDに参加 	<ul style="list-style-type: none"> ◆授業の実施 ◆学生のポートフォリオに対するコメント等のフィードバック ◆自身の授業を振り返り、eポートフォリオを活用した省察 	<ul style="list-style-type: none"> ◆SIH道場の振り返り (自クラス) ◆授業設計コーディネーターへの報告
総合教育センター 教育改革推進部門	<ul style="list-style-type: none"> ◆授業設計の支援 	<ul style="list-style-type: none"> ◆FD・説明会の実施 	<ul style="list-style-type: none"> ◆随時相談対応 	<ul style="list-style-type: none"> ◆SIH道場の振り返り(全体) ◆シンポジウムでの報告 ◆報告書の作成 (運営・支援)
コンテンツ作成WG	<ul style="list-style-type: none"> ◆授業設計の支援 ◆反転授業コンテンツ、教材、ワークシート、eポートフォリオ、評価ツール等の作成 	<ul style="list-style-type: none"> ◆反転授業コンテンツ、教材、ワークシート、eポートフォリオ、評価ツール等の作成 ◆担当者へ使い方等の説明 	<ul style="list-style-type: none"> ◆随時相談対応 	<ul style="list-style-type: none"> ◆SIH道場の振り返り (コンテンツ) ◆報告書の作成(コンテンツ)

3) 授業設計コーディネーターの役割

各学部・学科の授業設計コーディネーターは、プログラム単位で授業設計を行い、目的・目標の設定、スケジュール、教材、評価方法の設定等を行うという中心的な役割を担う。その際には、「授業設計概要」、「授業設計詳細」をフォーマットに従い作成し提出する。加えて、授業担当者を選出し取りまとめを行いながら、連携して授業運営を行う。授業の実施後には学生アンケートを行い、教育改革推進部門による集計結果等を参考にしながら、「プログラム設計評価シート」のフォーマットに従い、実施したプログラムを振り返り自己評価を行い、課題を明確化し次年度の改善点を具体的に記述する。全プログラムの実施内容やその成果と課題については、SIH 道場の全てのプログラムが終了した 11 月中旬に開催する「SIH 道場振り返りシンポジウム」において共有を行う。

4) 平成 30 年度の SIH 道場プログラム

平成 30 年度の SIH 道場については、①総合科学部（国際教養コース・心身健康コース・公共政策コース・地域創生コースの 4 コース合同）、②医学部医学科、③医学部医科栄養学科、④医学部保健学科看護学専攻、⑤医学部保健学科放射線技術科学専攻、⑥医学部保健学科検査技術科学専攻、⑦歯学部（歯学科・口腔保健学科の 2 学科合同）、⑧薬学部、⑨理工学部社会基盤デザインコース、⑩理工学部機械科学コース、⑪理工学部応用化学システムコース、⑫理工学部電気電子システムコース、⑬理工学部情報光システムコース、⑭理工学部応用理数コース、⑮生物資源産業学部（応用生命コース、食料科学コース、生物生産システムコースの 3 コース合同）の 15 プログラムが展開されると共に、⑯医療教育開発センターによる医・歯・薬学部合同の「チーム医療入門」ワークショップが実施された。このうち、各学部・学科・専攻・コースにおいて実施されたプログラムの SIH 道場必須項目の内容については、表のとおりである。

平成 30 年度 SIH 道場プログラムにおける必須項目一覧表

学部	学科	①体験学習	②ラーニングスキル			③振り返り
			文章力	プレゼン力	協働力	
総合科学部	国際教養コース 心身健康コース 公共政策コース 地域創生コース	大塚美術館見学	・読書レポートの作成 ・体験学習レポートの作成	課題発見ゼミナールにおいて共同でプレゼン作成・実施		プロダクトへ教員がコメントし、学生が振り返りを行う
医学部	医学科	・診療現場体験 ・振り返りWS	振り返りWS終了後にレポート作成	振り返りWSでKJ法を用いて班単位でプレゼン・討議		学生が振り返りを行い教員がコメント
	医科栄養学科	先輩の講演の聴講（「チーム医療入門」）	WS時にKJ法で出した意見をまとめる	作成したプロダクトに基づきプレゼン	班単位でWSを行いプロダクト作成	学生が学んだことを書き、教員がコメント
	保健学科（看護）	「先輩からのメッセージ」の聴講	講義および書かせたもののピア評価	「先輩からのメッセージ」でのプレゼン	仕事に対する将来像についてKJ法ワーク	学生が振り返りを行い教員がコメント
	保健学科（放射）	先端研究の体験	体験学習のレポート作成	報告会でのプレゼン	短期研究室配属での協働作業	学生が振り返りを行い教員がコメント
歯学部	保健学科（検査）	「先輩からのメッセージ」聴講	レポートを書かせピア評価	「チーム医療入門」でのプレゼンのピア評価	「チーム医療入門」でのKJ法ワーク	学生が振り返りを行い教員がコメント
	歯学科 口腔保健学科	・「気づきの体験学習」 ・「相互歯磨き学習」	・「アカデミック・ライティング入門」聴講 ・読書レポート作成	グループでのプレゼン	「新入生研修」でのコンセンサスゲーム、ワールドカフェ	学生が振り返りを行い教員がコメント
薬学部	薬学共通	先輩の講演（「チーム医療入門」）	・WS時にKJ法で出した意見をまとめる ・最終レポート作成	作成したプロダクトに基づきプレゼン	班単位でWSを行いプロダクト作成	学生が振り返りを行い教員がコメント
理工学部	社会基盤デザインコース	現場見学	レポートに対するコメントと学生による議論	体験学習に関するプレゼンと質疑応答	ポスター作成	学生が振り返りを行い教員がコメント
	機械科学コース	「機械科学実験Ⅰ」での技術体験	「集中研修」での書き方指導	「集中研修」で、グループ作業でディベートを準備・実施		学生が振り返りを行い教員がコメント
	応用化学システムコース	研修旅行	自分が興味のある科学技術について発表要旨を作成・発表			ルーブリックでの自己評価に教員がコメント
	電気電子システムコース	「STEM演習」における電気電子工学の演習	論理的文章の書き方についての講義	STEM演習におけるポスター発表	STEM演習におけるポスター発表	学生が振り返りを行い教員がコメント
	情報光システムコース	研究室見学	論理的文章の書き方についての講義	プレゼンテーションについての講義	専門分野のトピックについてのKJ法	学生が振り返りを行い教員がコメント
生物資源産業学部	応用理数コース	研究室見学	体験学習のレポート作成・ピア評価	報告会におけるプレゼンテーション	報告会にむけての資料作成	学生が振り返りを行い教員がコメント
	応用生命コース 食料科学コース 生物生産システムコース	学外研修とレポート作成	「体験学習Ⅰ」のレポート作成・ピア評価	「体験学習Ⅱ」でのグループ製作を行い、プレゼン・ピア評価		学生が振り返りを行い教員がコメント
医療教育開発センター		専門家の講演の聴講とグループワーク	ワークショップについての振り返りレポート	グループでの討議とプレゼンテーション		学生が振り返りを行い教員がコメント

平成30年度 SIH道場プログラム資料

- ◆ SIH道場 必須項目設計表（概要）
- ◆ SIH道場 プログラム設計評価シート
- ◆ SIH道場 授業詳細

プログラム実施単位

1. 総合科学部
2. 医学部医学科
3. 医学部医科栄養学科
4. 医学部保健学科看護学専攻
5. 医学部保健学科放射線技術科学専攻
6. 医学部保健学科検査技術科学専攻
7. 歯学部
8. 薬学部
9. 理工学部社会基盤デザインコース
10. 理工学部機械科学コース
11. 理工学部応用化学システムコース
12. 理工学部電気電子システムコース
13. 理工学部情報光システムコース
14. 理工学部応用理数コース
15. 生物資源産業学部
16. 医療教育開発センター

SIH道場必須項目設計表 (概要のみ)

総合科学部社会総合科学科

1. 総合科学部

	到達目標	評価方法・基準	内容		授業実施枠	
			事前学習	授業		
① 体験学習	芸術作品の鑑賞を通して、「デスクリプション」による絵画情報の客観的な記述能力の習得を目指す。	レポートをチェックすること、事前学習の指示に従った記述ができているかなどについてコメントする。	美術史の担当教員による、絵画の基本的な見方、デスクリプションについての講義を受講する。	事前学習後、大塚美術館を訪問し、学生が興味、関心を抱いた絵画・作品を選択し、「デスクリプション」に従ってレポートを作成する。	mahara飛ぶノートの「リフレクションシート」を用いて振り返りレポートを作成する。講義担当教員とコーディネーターはレポートをチェックのち、必要に応じてコメントをフィードバックする。	SIH道場
文章力	1. 学術的文章の基本的なルールや方法を習得する。2. 読書レポートを作成し、担当教員のコメントや評価による指導を受けるとして、レポート(論理的文章)の書き方について理解を深める。	担当教員は、自身の推薦書が対象となった読書レポートにコメントする。レポートにも、ルーブリックに基づいて評価する。	総合科学入門講座において「学術的文章の書き方について」を受講する。	1. 学術的文章の書き方についての講義を行なう。2. 学生は推薦図書の中から一冊以上を選択して読破し、「読書レポート」を作成する。3. 提出された「読書レポート」に対しては、担当教員がコメントとルーブリックに基づき評価を行ない返却する。	Moodleを用いて、提出した読書レポートに対する担当教員からのコメントを受け取る。その内容に基づいて、学術的な文章の書き方についての理解を深め、担当教員に対し再びレポートを提出する。	SIH道場(読書レポート)総合科学入門講座
② プレゼンカ	1. プレゼンテーションの基本的所作を習得し、自身の考えを他者に伝えることができ、他者による評価を通じて、自己の現状を把握する。	教員はコメントによる評価をフィードバックする。	グループワークの内容や、ルールに関する事前資料・説明の内容を理解する。	担当教員は学生の事前学習の内容を確認し、必要に応じてプレゼンテーションの手法について説明する。学生は一定範囲のテーマについて、プレゼンテーションの資料を作成し発表する。プレゼンテーションについては、ルーブリックを用いて評価する。	1. 学生は、グループ内で相互評価を行なう。2. 課題発見ゼミナールの最終授業において、成果発表やグループワークを通じて学習の振り返りを行う。教員はコメントをフィードバックする。	SIH道場(学友コミュニケーション)課題発見ゼミナール(1年後期)
協働力	1. 協働力養成のための基本的な手法を知る。2. 実践とその把握を通して、自己の現状を把握する。(上記のプレゼン力養成プログラムをグループで行なう。同一の授業で二つの力を養成するものである。)	ルーブリック評価表に基づいて評価する。	グループワークに用いる手法に関する事前資料の内容を理解する。	1. 学生は、グループごとにひとつのテーマを選び、共同でプレゼンテーションの資料を作成し、発表する。2. または、個々にプレゼンテーションの資料を作成し発表することで、グループ内でのルーブリックによる相互評価を行なう。	1. 学生は、グループ内で相互評価を行なう。2. 「課題発見ゼミナール」の最終授業において、成果発表会やグループワークを通じて、学習の振り返りを行う。教員は評価コメントをフィードバックする。	SIH道場(学友コミュニケーション)課題発見ゼミナール(1年後期)

平成30年度 総合科学部社会総合科学科 SIH 道場 < 授業詳細表 >

◆SIH 道場 (体験学習)

目的

西洋絵画の見方についての講義を受講し、それをふまえて大塚国際美術館を訪問し、事前に学んだ「デスククリプション」の方法によりひとつの作品を文章により記述する。

大塚美術館は西洋の名画の模写を多数展示しているが、精確な写真撮影をもとに制作した実物大の陶板が使用されるとともに、作品を含む教会堂などの内部空間が再現されているのが特徴である。

学生は、数多くの作品を鑑賞することで、美的感性を触発されるだけでなく、専門家による事前指導を通じて、芸術だけでなく、作品を鑑賞すること、その背景を触発されるだけでなく、専門家による事前指導を通じて、芸術だけでなく、作品を鑑賞すること、その背景を触発されるだけでなく、専門家による総合的関連性について考える端緒となる。

デスククリプションの方法は、主観的解釈あるいは予備知識を排し客観的態度で対象に向かい、視覚的イメージを文章化することを目指すものである。これを体験することで、学生は客観的な観察と正確な記述という汎用技能を学ぶことになる。

到達目標

芸術作品を鑑賞し、事前に学んだ「デスククリプション」という方法により、絵画の情報を客観的に記述することができる。

芸術とその背景にある歴史、文学、宗教などの文化的諸要素との総合的関連性について考えをきつかけとする。

授業内容

・「SIH 道場 4-1」西洋絵画の見方についての講義 (担当：田中佳)
絵画の鑑賞と理解のひとつの方法として、絵についての文章による客観的記述 (デスククリプション) の仕方を紹介し、資料、記入用紙を配付する。

・「SIH 道場 4-2」大塚国際美術館見学
大塚国際美術館を訪れ、絵画を鑑賞し、文章による客観的記述を行なう。その後、作成した文章を提出する。

成績評価

レポートをチェックし、事前学習の指示に従った客観的な記述ができているかなどについて、コメントしフィードバックする。

◆SIH 道場 (文章力)

目的

レポートの書き方、メディア・リテラシーに関する内容を「SIH 道場」および「総合科学入門講座」を通じて学ぶ。具体的には、授業内容のレポート、読書レポートなどの課題を通して、担当教員によるコメント、ループリリックによる評価を行なう。具体的な目的は、以下の4点である。

- (1) 学生の読書離れが進む中、本を手にした図書館を利用したりするきっかけを与える。
- (2) 大学で必要とされるレポート、論理的な文章の書き方について理解させる。

- (3) レポート課題に取り組むことで、学生に自己の能力や課題を認識させる。

- (4) 学生のレポートを添削指導する教員が、今後継続的に行なうべきアカデミック・ライティングの指導の参考にする。

到達目標

1. 学術的文章の基本的なルールや方法を説明することができる。
2. 読書レポートの作成とそれに対する教員のコメントや評価により、レポート (論理的文章) の書き方に関する自己の現状を認識し、今後に生かす。

授業内容

- ・「SIH 道場 3-1」読書レポートについての講義 (担当：矢部)

読書レポート企画の概要を説明し、推薦図書リスト、ループリリックなどを学生に提供する。

続いて、学生は推薦図書の中から一冊を選択したのち「読書レポート」をワードファイル (A4で2、3枚) で作成し、学内システムの Moodle にて提出する。

提出されたレポートは、原則として推薦図書を選んだ教員がコメントとループリリックによる評価を行ない、Moodle を通して学生に送付する。

- ・「SIH 道場 8」 「総合科学入門講座」学術的発想と書き方についての講義 (担当：山口裕之)

SIH 道場では、最初にレポートの書き方とメディア・リテラシーに関して講義する。2 回目以降は、総合科学入門講座にて継続的に関連の講義を行なうとともに、他の教員によるレポート課題と、その評価を行なう。

成績評価

担当教員は、自分の推薦図書について作成された読書レポートにコメントするとともに、ループリリックに基づいて評価する。

◆SIH 道場 (学友コミュニケーション)・課題発見ゼミナール (プレゼンテーション力・協働力) 目的

学友コミュニケーション (SIH 道場) においては、まず自己のプレゼンテーション力や協働力に関してアセスメントを行なうことを目的とする。アセスメント結果に基づき、個人のテーマや目標を明確にした上で「課題発見ゼミナール」に臨ませる。

この講義は必修であり、学生の希望調査に基づいて所属クラスが決定される。各クラスの扱うテーマや具体的な内容は、担当教員の裁量により設計されるため、文章力養成、体験学習なども取り入れた場合がある。

授業内容

SIH 道場では、主にプレゼンテーション力や協働力のアセスメントに主眼をおき、グループとしての意思決定を行なうワーク (コンセンサス・ゲーム) を実施する。自己の考えを表明し、他者の意見を十分に聴くなどの行動に対して相互に評価を行なうとともに、他者からのフィードバックに基づき、各自が自己のアセスメントを実施する。

課題発見ゼミナールでは、ブレゼンテーション力と協働力の養成に主眼をおき、すべてのクラスで、授業の一部には少なくとも、以下のような要素を含むこととする。

学生は、授業の前に反転授業のためのビデオ、または担当教員が作成あるいは採用した教材などを用いて先行的自習を行なう。また、それぞれのクラスのテーマ・課題の範囲内でグループ・ワーク（ディスカッション、調査・発表内容の作成など）を行ない、その結果を発表する。グループ・ワークとブレゼンテーションを、別々の課題設定で実施することもできる。

以上のプロセスの中で、ルーブリック表を用いて学生が相互評価を行ない、担当教員は全体的にチェックする。

到達目標

- 1) ブレゼンテーション力・協働力における自己の現状を把握する。
- 2) 効果的なブレゼンテーションを行なうための基本的な手法・ツールを身に付ける。
- 3) 他者と協同して課題に取り組みることができる。
- 4) 自身の学習活動を振り返る習慣を身につける。

成績評価

ルーブリック評価表を用いる。

平成30年度 SIH道場必須項目設計表(概要のみ)

医学部医学科

2. 医学部医学科

	到達目標	評価方法・基準	内容		授業実施枠	
			事前学習	授業		
① 体験学習	医師の役割・業務内容や必要とされる能力を理解し、それらと関連づけて大学における学習について説明することができる。	病院ルールについて試験を行う。 リフレクションシートと振り返りレポートで評価する。	身だしなみ、診療現場でのルール、個人情報保護、感染制御等に関する資料を予習する。	1) カリキュラム、キャリア形成、診療現場でのルール、プロフェッショナルリズム等に関する授業。省察をテーマとしたワークシヨップ。 2) 診療現場体験 3) 振り返りワークシヨップ	ワークシヨップ形式で診療現場体験の振り返りを行う。 リフレクションシートと振り返りレポートに学んだことを記入し、それに対する教員コメントおよび評価をeポートフォリオで確認する。 教員はコメントをフィードバックする。	準備学習：4月3日 8:35-10:00, 4月4日 13:00-17:00, 4月7日 8:30-11:00 5月2日13:00-16:00。 診療現場体験：5月11,18日13:00-17:00。 振り返りWS：5月25日 13:00-16:30
文章力	自らの経験をもとにこれからの大学での学習について自分自身と考えたことを論理的に文章で表現することができる。	振り返りレポートをルーブリック評価表で評価する	文章力のビデオ教材(4つの観点)「主張の根拠付け」、「構成の明快さ」、「文章表現の適切さ」、「出典表示など」の視聴	1) 文章力の授業 2) 振り返りワークシヨップとチーム医療入門ワークシヨップ終了後に自分の意見をレポートとしてまとめ、提出する。	教員はコメントをフィードバックする。 レポートの評価結果と教員コメントをeポートフォリオで確認する。	準備学習：5月2日 13:00-16:00 振り返りWS:5月25日 13:00-16:30 チーム医療入門: 9月28日13:00-17:00
② プレゼンカ	自分自身の考えを他者が理解できるように効果的にプレゼンテーションすることができる。	ルーブリック評価表を用いて評価する(教員による班全体の評価と学生相互評価)。	プレゼンテーション力のビデオ教材(3つの観点)「内容の構成」、「姿勢」、「視覚資料」の視聴	1) プレゼンテーションの授業 2) 振り返りワークシヨップとチーム医療入門ワークシヨップで、各テーマについてKJ法で作成したプロダクトを各班が発表し討議を行う。	リフレクションシートや振り返りレポートに学んだことを記載する。 eポートフォリオで教員と学生相互による評価を確認する。 教員はワークシヨップの中でフィードバックする。	準備学習：5月2日 13:00-16:00 振り返りWS:5月25日 13:00-16:30 チーム医療入門: 9月28日13:00-17:00
協働カ	他者と協同して1つの課題に取り組むことができる。	ルーブリック評価表を用いて評価する(教員による班全体の評価と学生相互評価)。	協働力のビデオ教材(3つの観点)「協働のため」のルール」、「話し手と聞き手のスキル」、「アイデアの発想と収束」の視聴	振り返りワークシヨップとチーム医療入門ワークシヨップで、各テーマについてKJ法により班単位でプロダクトを作成する。各班の発表と討議の際には追加発表等により発表者をサポートする。	リフレクションシートや振り返りレポートに学んだことを記載する。 eポートフォリオで教員による評価を確認する。 教員はワークシヨップの中でフィードバックする。	振り返りWS:5月25日 13:00-16:30 チーム医療入門: 9月28日13:00-17:00
注意点	学生が授業を通して何ができようになるのかについて具体的に明記する。明記の仕方として「〇〇できる」と表現すると良い。	反転授業の形式で設計し、コンテンツを使用することを推奨する。	アクティブ・ラーニング型授業で実施する。	eポートフォリオを活用し、学生と教員間のコメントのやり取りを行う。	「①体験学習」のように既存の授業で置き換えることも可能です。	

SIH道場 プログラム設計評価シート

医学部 医学 学科 専攻

※学生のeポートフォリオを参考に記入してください。

要素	項目	チェック	学生の学修効果・成果	改善したい点	次年度に向けた対応	
早期体験	①設計した到達目標を学生は達成することができた	<input type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> どちらでもない <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/> 設計していない	実施後アンケートでは学生の満足度は非常に高かった。	・診療科間で学生への対応に、その時間や内容に格差がある。 ・診療現場の指導教員の負担感が大きい。 ・アウトカムを基盤とした振り返りや評価が不十分。	・担当教員間での意見交換を行い、情報の共有を進める。 ・アウトカムについての達成度評価表を作成し、学生による自己評価を行う。	
	②設計した内容は、専門分野の学修に対して学生を動機づけるという点で効果的だった	<input type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> どちらでもない <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/> 設計していない	経験を学際的に振り返ることを目的とした文章の作成を行うことができた。文章力に大きな個人差がある。	・文章に関する系統的な教育がない。 ・評価師の意見交換などが必要。	・科学的文章作成について、他の関連した教養科目などとの連携を有機的に図る。 ・評価師と委員の意見交換を実施する。	
	③学生に課した事前学習は、学生の体験学習を意義あるものにするために効果的だった	<input type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> どちらでもない <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/> 設計していない	グループワークで作成したプロダクトを基に発表する手法を参加者全員が体験できた。	グループワークで作成したプロダクトを基に発表する手法を参加者全員が体験できた。	・ブレゼンテーションに関する形成的評価も必要であるが、そのための担当教員数が不十分である。	・学生による自己評価と学生間のピア評価を実施する。
ラーニングスキル	④設計した到達目標を学生は達成することができた	<input type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> どちらでもない <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/> 設計していない	グループワークで作成したプロダクトを基に発表する手法を参加者全員が体験できた。	グループワークで作成したプロダクトを基に発表する手法を参加者全員が体験できた。	グループワークで作成したプロダクトを基に発表する手法を参加者全員が体験できた。	
文章力	⑤設計したアクティビティ、ラーニング型授業は、学生の学修にとって効果的であった	<input type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> どちらでもない <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/> 設計していない	グループワークで作成したプロダクトを基に発表する手法を参加者全員が体験できた。	グループワークで作成したプロダクトを基に発表する手法を参加者全員が体験できた。	グループワークで作成したプロダクトを基に発表する手法を参加者全員が体験できた。	
	⑥学生に課した授業外学修（事前、または事後）は、学生の学修にとって効果的であった	<input type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> どちらでもない <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/> 設計していない	グループワークで作成したプロダクトを基に発表する手法を参加者全員が体験できた。	グループワークで作成したプロダクトを基に発表する手法を参加者全員が体験できた。	グループワークで作成したプロダクトを基に発表する手法を参加者全員が体験できた。	グループワークで作成したプロダクトを基に発表する手法を参加者全員が体験できた。
	⑦学生の評価は、ルーブリック等で基準を明確に行っていた	<input type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> どちらでもない <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/> 設計していない	グループワークで作成したプロダクトを基に発表する手法を参加者全員が体験できた。	グループワークで作成したプロダクトを基に発表する手法を参加者全員が体験できた。	グループワークで作成したプロダクトを基に発表する手法を参加者全員が体験できた。	グループワークで作成したプロダクトを基に発表する手法を参加者全員が体験できた。
ラーニングスキル	⑧設計した到達目標を学生は達成することができた	<input type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> どちらでもない <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/> 設計していない	グループワークで作成したプロダクトを基に発表する手法を参加者全員が体験できた。	グループワークで作成したプロダクトを基に発表する手法を参加者全員が体験できた。	グループワークで作成したプロダクトを基に発表する手法を参加者全員が体験できた。	
	⑨設計したアクティビティ、ラーニング型授業は、学生の学修にとって効果的であった	<input type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> どちらでもない <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/> 設計していない	グループワークで作成したプロダクトを基に発表する手法を参加者全員が体験できた。	グループワークで作成したプロダクトを基に発表する手法を参加者全員が体験できた。	グループワークで作成したプロダクトを基に発表する手法を参加者全員が体験できた。	
	⑩学生に課した授業外学修（事前、または事後）は、学生の学修にとって効果的であった	<input type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> どちらでもない <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/> 設計していない	グループワークで作成したプロダクトを基に発表する手法を参加者全員が体験できた。	グループワークで作成したプロダクトを基に発表する手法を参加者全員が体験できた。	グループワークで作成したプロダクトを基に発表する手法を参加者全員が体験できた。	グループワークで作成したプロダクトを基に発表する手法を参加者全員が体験できた。
ブレゼンタ	⑪学生の評価は、ルーブリック等で基準を明確に行っていた	<input type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> どちらでもない <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/> 設計していない	グループワークで作成したプロダクトを基に発表する手法を参加者全員が体験できた。	グループワークで作成したプロダクトを基に発表する手法を参加者全員が体験できた。	グループワークで作成したプロダクトを基に発表する手法を参加者全員が体験できた。	
	⑫設計した到達目標を学生は達成することができた	<input type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> どちらでもない <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/> 設計していない	グループワークで作成したプロダクトを基に発表する手法を参加者全員が体験できた。	グループワークで作成したプロダクトを基に発表する手法を参加者全員が体験できた。	グループワークで作成したプロダクトを基に発表する手法を参加者全員が体験できた。	
	⑬設計したアクティビティ、ラーニング型授業は、学生の学修にとって効果的であった	<input type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> どちらでもない <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/> 設計していない	グループワークで作成したプロダクトを基に発表する手法を参加者全員が体験できた。	グループワークで作成したプロダクトを基に発表する手法を参加者全員が体験できた。	グループワークで作成したプロダクトを基に発表する手法を参加者全員が体験できた。	
ラーニングスキル	⑭学生に課した授業外学修（事前、または事後）は、学生の学修にとって効果的であった	<input type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> どちらでもない <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/> 設計していない	グループワークで作成したプロダクトを基に発表する手法を参加者全員が体験できた。	グループワークで作成したプロダクトを基に発表する手法を参加者全員が体験できた。	グループワークで作成したプロダクトを基に発表する手法を参加者全員が体験できた。	
	⑮学生の評価は、ルーブリック等で基準を明確に行っていた	<input type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> どちらでもない <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/> 設計していない	グループワークで作成したプロダクトを基に発表する手法を参加者全員が体験できた。	グループワークで作成したプロダクトを基に発表する手法を参加者全員が体験できた。	グループワークで作成したプロダクトを基に発表する手法を参加者全員が体験できた。	
	⑯振り返りの意義や方法について、学生に説明する、またはフィードバックの利用などで理解を促した	<input type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> どちらでもない <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/> 設計していない	振り返りワークショップおよび振り返りレポートの作成により、経験を振り返って一般化・概念化し、次の学修に活かしていくサイクルを学ぶことができた。	振り返りワークショップおよび振り返りレポートの作成により、経験を振り返って一般化・概念化し、次の学修に活かしていくサイクルを学ぶことができた。	振り返りの重要性について、他の教養科目においても同様に振り返りを強化しながら、科目間で有機的に連携を図る。	
振り返り	⑰各授業（体験を含む）の最後やSIH道場の終了時に学生が振り返る時間を設けた	<input type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> どちらでもない <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/> 設計していない	振り返りワークショップおよび振り返りレポートの作成により、経験を振り返って一般化・概念化し、次の学修に活かしていくサイクルを学ぶことができた。	振り返りの重要性について、他の教養科目においても同様に振り返りを強化しながら、科目間で有機的に連携を図る。	振り返りの重要性について、他の教養科目においても同様に振り返りを強化しながら、科目間で有機的に連携を図る。	
	⑱学生が振り返った内容について教員がフィードバックを行った	<input type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> どちらでもない <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/> 設計していない	振り返りワークショップおよび振り返りレポートの作成により、経験を振り返って一般化・概念化し、次の学修に活かしていくサイクルを学ぶことができた。	振り返りの重要性について、他の教養科目においても同様に振り返りを強化しながら、科目間で有機的に連携を図る。	振り返りの重要性について、他の教養科目においても同様に振り返りを強化しながら、科目間で有機的に連携を図る。	
	⑲振り返りの意義や方法について、学生に説明する、またはフィードバックの利用などで理解を促した	<input type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> どちらでもない <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/> 設計していない	振り返りワークショップおよび振り返りレポートの作成により、経験を振り返って一般化・概念化し、次の学修に活かしていくサイクルを学ぶことができた。	振り返りの重要性について、他の教養科目においても同様に振り返りを強化しながら、科目間で有機的に連携を図る。	振り返りの重要性について、他の教養科目においても同様に振り返りを強化しながら、科目間で有機的に連携を図る。	
総合	⑳実際のSIH道場プログラムの総合的に見て、今年度の授業設計は、学生が到達目標を達成するために、(5,10分であった、4,概ね10分であった、3,5分、2,やや不十分であった、1,不十分であった)。	<input type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> どちらでもない <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/> 設計していない	長期体験臨床実習とアクティビティ・ラーニングを有機的に組み合わせたプログラムによって、経験から学ぶ力を修得する第一歩となった。	開始時に設定した目標に対して、どれだけ達成できたかという評価が必要である。	開始時の目標設定と終了時の自己評価・相互評価を行わせる。	
	※その他、他の授業との連携・発展内容・授業運営等の課題がありましたらお書きください。					

2.医学部医学科

平成30年度 医学部医学科 SIH 道場 <授業詳細表> (教員版実施要項)

作成：医学部教育支援センター

1. 概要

オリエンテーションと連携した準備学習、診療現場体験、振り返りワークショップの3つで構成される早期臨床体験実習、ならびに蔵本地区1年次合同チーム医療入門ワークショップを行うことにより、学修の動機付けをはかりながら、医療チームの一員としての医師の役割・業務内容、必要とされる能力、およびそれらと関連づけた大学における学修の方法について学生が理解し、今後の学修に活かしていくことを目指す。ワークショップでは協働力およびプレゼンテーション力の向上、振り返りレポート作成では文章力の向上をはかり、これら一連の学習によって学修振り返りの方法を学ぶ。本科目は大学教育再生加速プログラムとして実施する。

2. 到達目標 (アウトカム)

- 1) 医師の役割・業務内容、必要とされる能力について説明することができる。
- 2) 医学科における学修目標について説明することができる。
- 3) 大学での学修および生活におけるルールを理解し、それを遵守することができる。
- 4) グループで協働して意見をまとめ、それをプレゼンテーションすることができる。
- 5) 自らの学修経験に基づいて、自分の考えを文章にまとめることができる。
- 6) 学修経験に基づいて振り返りを行い、今後の学修計画を立てることができる。

3. 対象者 医学部医学科1年次114名

4. 授業担当

- 1) 早期臨床体験実習準備学習のうち、4月3日、4日、7日の内容は、新入生オリエンテーションや医学部合同新入生研修と連携しながら、医学部教育支援センター教員および医学科教務委員が主に担当する。5月2日は医療教育学分野および医学部教育支援センター教員が実施する。
- 2) 5月に実施する早期臨床体験実習の診療現場体験(学内)は、臨床実習担当分野と卒後臨床研修センターが分担して担当する。実施にあたっては、各担当分野において実務担当者、診療現場体験担当者、振り返りレポート評価担当者を決め、実務担当者が第一教務係、医学部教育支援センターと相談しながら、企画・実施をコーディネートする。

* 下記「7. 早期臨床体験実習実施にあたり各分野の担当教員が行うこと」を参照

- 3) 5月に実施する早期臨床体験実習振り返りワークショップは医学部教育支援センターが企画し、そのチームリーダーは主に医学部教育支援センター、医療教育学分野、医療教育開発センター、教育院医療基盤教育学分野の教員が担当する。
- 4) 9月末に実施するチーム医療入門ワークショップ(蔵本地区1年次合同)は医療教育開発センターが企画し、そのチームリーダーは、あらかじめ医学部教務委員会・教授会議で決定している担当順番に従って各分野から担当者を出す(第一教務係より各分野の教授・教育主任に別途依頼あり)。チーム医療入門振り返りレポートの評価は、教務委員が分担して実施する。チームリーダーへの説明は医療教育開発センターが実施する。

5. 授業実施予定

日時	内容	担当
4月3日(火) 8:35~10:00	【早期臨床体験実習】準備学習 医学科教育課程(6年間)の概略、教養教育と専門教育との関わり、不品行為・不正行為とは、単位認定、担任制、アンケートの意義	西村明儒医学部教務委員長
4月4日(水) 13:00~17:00	【早期臨床体験実習】準備学習 13:00~14:30: キャリア形成(海外留学プログラム、Doctor plus one)、研究倫理 14:45~17:00: 省察ワークショップ	勢井宏義教授 赤池雅史教授、山田佳子技術員
4月7日(土) 8:30~11:00	【早期臨床体験実習】準備学習 (医学部合同新入生研修の一部として実施) 違法ドラッグについて アルコール、感染対策・病院での行動規範 禁煙について	西村明儒教授 赤池医療教育開発センター長 調整中
5月2日(水) 13:00~16:00 (5月4日代替)	【早期臨床体験実習】準備学習 文章力&プレゼンテーション 試験&診療現場体験オリエンテーション	赤池雅史教授
5月11日(金) 13:00~17:00	【早期臨床体験実習】診療現場体験(学内) (各班5~6名に分かれて実施)	臨床実習担当分野、卒後臨床研修センター
5月18日(金) 13:00~17:00	【早期臨床体験実習】診療現場体験(学内) (各班5~6名に分かれて実施)	臨床実習担当分野、卒後臨床研修センター
5月25日(金) 13:00~16:30	【早期臨床体験実習】振り返りワークショップ「医師に必要な能力・資質、医療プロフェッショナルリズム」	医学部教育支援センター、医療教育開発センター、教養教育院医療基盤教育学分野
9月28日(金) 13:00~17:00	チーム医療入門ワークショップ (蔵本地区1年次合同)	医療教育開発センター(各分野教員がチームリーダー担当)

6. 評価・フィードバック方法：下記6つすべて合格することを必要とする。

- 1) 診療現場体験における基本的ルールについてマークシート方式の試験を実施する。
合格基準：正答率80%以上
- 2) 診療現場体験すべてに出席し、診療現場において適切な態度・行動をとる。

- 3) 診療現場体験 (学内) の終了後に学生が「リフレクションシート」を提出し、各分野の診療現場体験担当教員がそれぞれにフィードバックコメントを記載して学生に返却する。
- 合格基準：フィードバックコメントで合格と判定 (修正再提出を指示されていない)。
- 4) 早期臨床体験実習振り返りワークショップでは、ワークシヨップ担当教員が、協働力、ブレゼンテーションについて、所定のルーブリック評価表によりグループ単位で評価する。
- 合格基準：ルーブリック評価尺度すべてが (A) あるいは (B) であること。
- 5) 早期臨床体験実習振り返りワークショップ終了後に、学生が「早期臨床体験実習振り返りレポート」を提出し、それに対して診療現場体験担当分野の振り返りレポート評価担当者が、所定のルーブリック評価表により文章力の評価を行い、フィードバックコメントを記載して学生に返却する。
- 合格基準：ルーブリック評価尺度すべてが (A) あるいは (B) である。
- 6) チーム医療入門ワークショップに参加し、アンケートおよびチーム医療入門振り返りレポートを提出する。振り返りレポートについては、医学科教務委員が分担して、所定のルーブリック評価表により文章力の評価を行い、フィードバックコメントを記載して学生に返却する。
- 合格基準：チーム医療入門ワークショップに参加し、アンケートに回答している。
振り返りレポートのルーブリック評価尺度すべてが (A) あるいは (B) である。

7. 早期臨床体験実習 (学内) 実施にあたり各分野の担当教員が行うこと

早期臨床体験実習 (学内) では、担当する各分野・卒後臨床研修センターにおいて、実務担当者、診療現場体験 (学内) 担当者、振り返りレポート評価担当者を定める。これらの担当は複数で分担、一人ですべて担当がいずれも可とする。診療現場体験担当者は、大学教育再生加速プログラム「SIH 道場～アクトエイブ・ラーニング入門～」の実践型 PD への参加実績として登録するため、前年度までに担当していない教員が含まれていることが望ましい。

1) 実務担当者が行うこと

- (1) 診療現場体験 (学内) 担当者氏名・連絡先、振り返りレポート評価担当者氏名・連絡先、診療現場体験の内容 (中央診療部門の見学が集中することを避けるため他分野との調整が必要であり、その場所・時間を必ず明記)、学生への連絡事項について、「早期臨床体験実習分野担当者・連絡事項記入ファイル (〇〇分野)」に記入し、学務課第一教務係 (isygakumuk@tokushima-u.ac.jp) へ、電子メールで提出する (締切：4月19日)。

* 入力用ファイルは電子メール添付で実務担当者に送信します。

- (2) 診療現場体験担当者、振り返りレポート評価担当者に早期臨床体験実習を含めた SIH 道場の概要・実施方法を説明する。その実施報告を「SIH 道場 PD・説明会に参加できない教員の対応報告書 (〇〇分野)」に記入し、学務課第一教務係 (isygakumuk@tokushima-u.ac.jp) へ電子メールで提出する (締切：5月10日)。

* 説明用資料、対応報告書は電子メール添付で実務担当者に送信します。

2) 診療現場体験 (学内) 担当者が行うこと

- (1) 診療現場体験当日の学生指導 (当日の身だしなみや健康状態のチェックを含む)
- * 原則として見学型実習スタイルとする。一方的なレクチャースタイルのみとしない。
- * 学生への事前説明の内容は「診療エリアとしての蔵本キャンパスでの行動規範 (病院ルール)」参照。

* 身だしなみをチェックし不適切な場合は実習参加不可とする。

* 37.5 度以上の発熱等、感染症状がある場合は実習参加不可とする。

- (2) 学生が提出する「診療現場体験リフレクションシート」(紙媒体)へフィードバックコメントを記載し、学務課第一教務係に提出 (締切：6月5日)。

* 学生とのシートでのやり取りは学務課第一教務係が担当。

* 担当教員にはリフレクションシートが5月28日頃に届く予定。

- (3) e ポートフォリオ (Mahara システム) に授業実践の振り返りを入力する (締切：6月5日)。

* この入力をもって大学教育再生加速プログラム「SIH 道場～アクトエイブ・ラーニング入門～」の実践型 PD への参加・受講完了となります。

* 「Mahara で振り返る方法 (SIH 道場授業担当者用)」、「Mahara 操作マニュアル補足資料 (診療現場体験担当教員用)」を参照

- (4) 早期臨床体験実習診療現場担当者対象アンケートに回答し、第一教務係へ提出する (締切：6月5日)。

* 担当教員にはリフレクションシートと一緒にアンケート用紙が5月28日頃に届く予定。

- (5) SIH 道場についての教員対象アンケート (web) に回答する (総合教育センターから電子メールで依頼があります)。

3) 振り返りレポート評価担当者が行うこと

- (1) 学生が提出する「早期臨床体験実習振り返りレポート」(紙媒体)に対して、「ルーブリック評価シート (文章力)」(紙媒体)にフィードバックコメントと評価を記載し、学務課第一教務係に提出 (締切：6月15日)。

* 学生とのレポートおよび評価表のやり取りは学務課第一教務係が担当。

* 担当教員にはレポートが6月5日頃に届く予定。

添付資料：

- ・ SIH 道場の概要 (ポーン絵)
- ・ 早期臨床体験実習分野担当者・連絡事項記入ファイル (〇〇分野)
- ・ SIH 道場 PD・説明会に参加できない教員の対応報告書 (〇〇分野)
- ・ 診療エリアとしての蔵本キャンパスでの行動規範 (病院ルール)
- ・ 診療現場体験リフレクションシート
- ・ Mahara で振り返る方法 (SIH 道場授業担当者用)
- ・ Mahara 操作マニュアル補足資料 (診療現場体験担当教員用)
- ・ 早期臨床体験実習振り返りレポート
- ・ 早期臨床体験実習ルーブリック評価表 (文章力) A4 縦

SIH道場必須項目設計表 (概要のみ)

医学部医科栄養学科

3. 医学部医科栄養学科

	到達目標	評価方法・基準	内容		授業実施枠
			事前学習	授業	
① 体験学習	<p>早期体験学習として医科栄養学科の8研究室のいずれかを訪問し、研究室の見学や先生・先輩の話を聞く。</p> <p>SIH道場(チーム医療入門WS)における講演を聴講しワークショップに参加する。</p> <p>以上を通じて、医科栄養学科における各自の学習目標を考えることができるようになる。</p>	<p>リフレクションシートと振り返りレポートで評価する。</p>	<p>研究室訪問前に研究室のHPなどを閲覧する。</p> <p>WSテーマに関する資料を閲覧する。</p>	<p>研究室の訪問、先生や先輩の話を聞く。チーム医療入門WSの講演の聴講ならびにWSに参加する。</p>	<p>早期体験学習平成28年9月28日9:00-12:00</p> <p>SIH道場「チーム医療入門WS」平成30年9月28日13:00-14:20</p>
文章力	<p>プログラムの作成において、他の班員と協力して作成する。KJ法で出た意見をまとめて論理的に因果関係を説明することができる。</p>	<p>レポートおよびeポートフォリオ(振り返りレポート)で評価する。</p>	<p>文章力のビデオ教材(4つの観点)「主張の根拠付け」・「構成の明快さ」・「文章表現の適切さ」・「出典表示など」の視聴。</p>	<p>WS終了後に今回のテーマについて自分の意見をレポートとしてまとめ、eポートフォリオに登録する。</p>	<p>SIH道場「チーム医療入門WS」平成30年9月28日14:30-17:00</p>
② プレゼンカ	<p>効果的なプログラムのプレゼンテーションを行うために、ツールを用いて説明することができる。また、他の班のプレゼンテーションを聞いて討議に参加することができる。</p>	<p>グループワーク評価表を用いる(班全体の評価とする)。</p>	<p>プレゼンテーション力のビデオ教材(3つの観点)「内容の構成」・「姿勢」・「視覚資料」の視聴。</p>	<p>3~4班合同でプロダクトをもちに各班の発表と討議を行う。</p>	<p>SIH道場「チーム医療入門WS」平成30年9月28日14:30-17:00</p>
協働力	<p>WSを能動的に進めることができる。WSに積極的に参加することができる。他学部・学科の学生とコミュニケーションを取ることができる、また協力してプロダクトを作成することができる。</p>	<p>グループワーク評価表を用いる(班全体の評価とする)。</p>	<p>KJ法のビデオを視聴する。</p>	<p>講演内容を参考にしてWSのテーマについて班単位でWSを行い、プロダクトを作成する。</p>	<p>SIH道場「チーム医療入門WS」平成30年9月28日14:30-17:00</p>

SIH道場プログラム設計評価シート

※学生のeポートフォリオ、成果物、教員のeポートフォリオを参考にして記述してください。

医学部 医科栄養学科 専攻

要素	項目	チェック	学生の学修効果・成果	改善したい点	次年度に向けた対応
早期体験	①設計した到達目標を学生は達成することができた	はい(2)ち5(5)もい(5)はない(1)え(1) 認計していない	SIH道場の「体験学習」は専門分野に対する興味関心が高まったと回答した者の割合は、「とても当てはまる」が19%、「どちらからか」といえるは当てはまる」が63%であり、合計82%と早期体験学習が効果的であった。	特になし。	早期体験で協力するのみの教員は、授業担当者として登録しない。
	②設計した内容は、専門分野の学修に対して学生を動機づけるという点で効果的だった	はい(2)ち5(5)もい(5)はない(1)え(1) 認計していない	レポート等の学術文章を書く際に必要な準備や基本的なルールを理解した者の割合は、「とても当てはまる」および「どちらからか」といえるは「合わせる」68%、SIH道場で学修した「レポートの書き方」は後述に立っていると回答した割合は、「とても当てはまる」および「どちらからか」といえるは「合わせる」72%であり、学習効果があったと考えられる。	特になし。	特になし。
	③学生に課した事前学習は、学生の体験学習を意義あるものにするために効果的だった	はい(2)ち5(5)もい(5)はない(1)え(1) 認計していない	プレゼンテーションを効果的に行うために必要な準備・姿勢・資料を理解した者の割合は、「とても当てはまる」および「どちらからか」といえるは「合わせる」85%、SIH道場で学修した「プレゼンテーション」は後述に立っていると回答した割合は、「とても当てはまる」および「どちらからか」といえるは「合わせる」75%であり、学習効果があったと考えられる。	特になし。	特になし。
ラーニングスキル	④設計した到達目標を学生は達成することができた	はい(2)ち5(5)もい(5)はない(1)え(1) 認計していない	1つの課題に対して、他者と協力して取り組む際の留意点を理解した者の割合は、「とても当てはまる」および「どちらからか」といえるは「合わせる」90%であり、また、SIH道場で学修した「他者との協働」は後述に立っていると間に、「とても当てはまる」と「どちらからか」といえるは「合わせる」91%であり、学習効果があったと考えられる。	特になし。	特になし。
	⑤設計したアクティブラーニング型授業は、学生の学修にとって効果的であった	はい(2)ち5(5)もい(5)はない(1)え(1) 認計していない	①学生の評価は、ルーブリック等で基準を明確にして行った	特になし。	特になし。
	⑥学生に課した授業外学修(事前、または事後)は、学生の学修にとって効果的であった	はい(2)ち5(5)もい(5)はない(1)え(1) 認計していない	②学生の評価は、ルーブリック等で基準を明確にして行った	特になし。	特になし。
プレゼン力	⑦設計した到達目標を学生は達成することができた	はい(2)ち5(5)もい(5)はない(1)え(1) 認計していない	③学生の評価は、ルーブリック等で基準を明確にして行った	特になし。	特になし。
	⑧設計したアクティブラーニング型授業は、学生の学修にとって効果的であった	はい(2)ち5(5)もい(5)はない(1)え(1) 認計していない	④学生の評価は、ルーブリック等で基準を明確にして行った	特になし。	特になし。
	⑨学生に課した授業外学修(事前、または事後)は、学生の学修にとって効果的であった	はい(2)ち5(5)もい(5)はない(1)え(1) 認計していない	⑤学生の評価は、ルーブリック等で基準を明確にして行った	特になし。	特になし。
ラーニングスキル	⑩設計した到達目標を学生は達成することができた	はい(2)ち5(5)もい(5)はない(1)え(1) 認計していない	⑥振り返りの意義や方法について、学生に説明する、またはテキストの利用などで理解を促した	特になし。	特になし。
	⑪設計したアクティブラーニング型授業は、学生の学修にとって効果的であった	はい(2)ち5(5)もい(5)はない(1)え(1) 認計していない	⑦多授業(体験を含む)の最後やSIH道場の終了時に学生が振り返り時間を設けた	特になし。	特になし。
	⑫学生に課した授業外学修(事前、または事後)は、学生の学修にとって効果的であった	はい(2)ち5(5)もい(5)はない(1)え(1) 認計していない	⑧学生が振り返った内容について教員がフィードバックを行った	特になし。	特になし。
協働力	⑬振り返りの意義や方法について、学生に説明する、またはテキストの利用などで理解を促した	はい(2)ち5(5)もい(5)はない(1)え(1) 認計していない	⑨SIH道場の満足度は、「とても当てはまる」と「どちらからか」といえるは「合わせる」90%、専門科目の学修において役に立っていると回答する者が「とても当てはまる」と「どちらからか」といえるは「合わせる」94%であった。	特になし。	特になし。
	⑭多授業(体験を含む)の最後やSIH道場の終了時に学生が振り返り時間を設けた	はい(2)ち5(5)もい(5)はない(1)え(1) 認計していない	⑩振り返りの意義や方法について、学生に説明する、またはテキストの利用などで理解を促した	特になし。	特になし。
	⑮学生に課した授業外学修(事前、または事後)は、学生の学修にとって効果的であった	はい(2)ち5(5)もい(5)はない(1)え(1) 認計していない	⑪学生が振り返った内容について教員がフィードバックを行った	特になし。	特になし。
振り返り	⑯振り返りの意義や方法について、学生に説明する、またはテキストの利用などで理解を促した	はい(2)ち5(5)もい(5)はない(1)え(1) 認計していない	⑫振り返りの意義や方法について、学生に説明する、またはテキストの利用などで理解を促した	特になし。	特になし。
	⑰多授業(体験を含む)の最後やSIH道場の終了時に学生が振り返り時間を設けた	はい(2)ち5(5)もい(5)はない(1)え(1) 認計していない	⑬振り返りの意義や方法について、学生に説明する、またはテキストの利用などで理解を促した	特になし。	特になし。
	⑱学生に課した授業外学修(事前、または事後)は、学生の学修にとって効果的であった	はい(2)ち5(5)もい(5)はない(1)え(1) 認計していない	⑭振り返りの意義や方法について、学生に説明する、またはテキストの利用などで理解を促した	特になし。	特になし。
総合	⑲実施したSIH道場プログラムを総合的に見て、今年度の授業設計は、学生が到達目標を達成するために、(5.十分であった、4.概十分であった、3.ふつ、2.やや不十分であった、1.不十分であった)。	はい(2)ち5(5)もい(5)はない(1)え(1) 認計していない	⑮実施したSIH道場プログラムを総合的に見て、今年度の授業設計は、学生が到達目標を達成するために、(5.十分であった、4.概十分であった、3.ふつ、2.やや不十分であった、1.不十分であった)。	特になし。	特になし。
	※その他、他の授業との接続・発展内容・授業進捗等の課題が明らかになりましたら書き添ってください。	はい(2)ち5(5)もい(5)はない(1)え(1) 認計していない	⑯実施したSIH道場プログラムを総合的に見て、今年度の授業設計は、学生が到達目標を達成するために、(5.十分であった、4.概十分であった、3.ふつ、2.やや不十分であった、1.不十分であった)。	特になし。	特になし。
	⑳総合的な評価	はい(2)ち5(5)もい(5)はない(1)え(1) 認計していない	⑰実施したSIH道場プログラムを総合的に見て、今年度の授業設計は、学生が到達目標を達成するために、(5.十分であった、4.概十分であった、3.ふつ、2.やや不十分であった、1.不十分であった)。	特になし。	特になし。

3.医学部医科栄養学科

平成30年度 医学部医学科栄養学科 SIH道場 <授業詳細表>

- ◆目的：1) 医療現場で働く各専門職種を目指す学生同士の相互理解を深めることで、将来、共に円滑なチーム医療推進に必要な基盤を形成するための動機付けとする。
- 2) 医療人を目指す学生として準備すべき課題、今後の学生生活で学ぶべき課題、修得すべき課題を、他学部・他学科の学生と共に考え、お互いから学ぶことで、医療人としてのプロフェッションナリズムの醸成を図る。

◆到達目標：

- ① チーム医療の基盤を形成することができる。
- ② 研究室体験やチーム医療入門ワークショップを通じて、大学における各自の学習課題を発見する。
- ③ ノンテクニカルスキル（コミュニケーション力）を育成することができる。
- ④ プロダクトの作成を通じて、協働力を養う。KJ法を用いて意見をまとめ、論理的に因果関係を説明することができる。
- ⑤ 効果的なプロダクトのプレゼンテーションを行うために、ツールを用いて説明することができる。
- ⑥ ワークショップに積極的に参加し、他学部・他学科学生とコミュニケーションを取りながら、能動的に参加し、協力してプロダクトを作成することができる。
- ⑦ 研究室体験やチーム医療入門ワークショップで得た体験や気づきを振り返り、「SIH道場振り返りレポート」としてeポートフォリオシステムへ入力することができる。
- ⑧ 自身の学習活動を振り返る習慣を身につけることができる。
- ⑨ 将来の進路やビジョンについて考えることができる。

◆成績評価：「SIH道場最終レポート」を以下の合格基準をもとに評価する。

【SIH道場最終レポートの内容】

- 以下の1)～4)を含む「SIH道場最終レポート」を作成すること。
- 以下の1)～4)を含むこと。レポートは手書きでも構わないが、電子媒体での作成・提出を推奨する。
- 1) 研究室体験やチーム医療入門ワークショップを通じて学んだことと、大学における今後の各自の学習課題についてレポートを作成する。（文章力・早期体験の目標に対応）
 - ・体験学習で学びたいと考えたこと（事前）、実際に学んだこと（事後）、今後の目標（大学の各自の学習課題）の3点についてA4判1枚程度のレポートを作成する。
 - ・ルーブリックの「文章力」に該当するすべての項目について、自己評価する。
 - 2) チーム医療入門ワークショップにおけるプロダクトの作成（協働力の目標に対応）
 - ・ルーブリックの「協働力」に該当するすべての項目について、自己評価する。
 - 3) チーム医療入門ワークショップにおける学習成果発表（プレゼン力の目標に対応）
 - ・ルーブリックの「プレゼン力」に該当するすべての項目について、自己評価する。

【SIH道場レポートの合格基準】

以下の評価基準のうち、「必須」と書いてある項目をすべて満たすこと。

- ・ 大学入門講座、研究室体験、チーム医療入門ワークショップの全てに出席すること。（必須）
- ・ 体験学習で学びたいと考えたこと（事前）、実際に学んだこと（事後）、今後の目標（大学での各自の学習課題）の3点が記載されていること。（必須）
- ・ eポートフォリオにワークショップにおける学習の成果としてのプロダクトの写真が提出されていること（必須）
- ・ 「自己評価」と「チームメンバーからの評価（平均点）」が記入された「協働力」、「プレゼン力」、「文章力」のルーブリックが添付されていること。（必須）
- ・ 上記ルーブリックの「協働力」「プレゼン力」「文章力」それぞれの総合点が60以上であること。（必須）
- ・ その他、レポートに必要なと思う内容（任意）

◆授業内容

(1) SIH道場（新入生オリエンテーション）

①学科別オリエンテーション・SIH道場

平成30年4月3日（火）8時30分～12時

（目的）大学における学習・生活について学ぶ

（概要）

- ・ 学科長挨拶
- ・ 教務委員挨拶
- ・ 医科栄養学科教員挨拶
- ・ 教養教育科目の履修について
- ・ 学生生活に関する諸注意

②医学部合同オリエンテーション

平成30年4月5日（木）13時30分～16時

（目的・概要）大学における学習・生活について学ぶ

③学科別オリエンテーション

平成30年4月4日（水）13時～15時30分

（目的・概要）大学における単位履修登録について

- ・ 単位履修についてのミニレポート（目的・目標設定）

④医学部・医科栄養学科合同オリエンテーション

平成30年4月6日（金）8時45分～12時

（目的）大学における情報・研究倫理に関する基本ルールを学ぶ

（概要）

- ・ 8時45分～9時15分 情報セキュリティについて
- ・ 9時15分～9時45分 Student Labについて

- ・10時～11時 動物実験講習会
- ・11時～12時 遺伝子操作講習会

⑤医学部合同新入生研修 (SIH道場)

平成30年4月7日(土) 8時30分～13時

(目的・概要) 大学生活における諸注意と医学部新入生、上級生、教員相互の親睦を図る。

(2) SIH道場・早期体験学習(研究室体験)

日時：平成30年9月28日(金) 9時～12時30分

場所：栄養学棟 各分野研究室

目的・概要：医科栄養学科1年次のグループ担任が所属する研究室において、研究内容の説明、卒業研究や大学院での研究室生活について卒論生・大学院生より説明を受けると共に、実際の研究現場を見学する。栄養学の最先端の研究活動に触れることで、学部の間で学ぶべきこと、自身の学習目標、将来のビジョンを考える。

①事前学習

各分野のホームページで研究室の概要・活動内容などについて調べる。

②研究室体験

各分野所定のプログラムによる。

- ・分野の研究概要説明
 - ・卒論生・大学院生による研究生活の説明
 - ・研究室見学
 - ・懇談会(振り返りワークショップ)
- ③事後学習
- ・振り返りレポート (SIH道場・チーム医療入門ワークショップのレポートに含めること)
 - ・前期単位履修時のミニレポートについて振り返りレポート

(3) SIH道場・チーム医療入門ワークショップ

日時：平成30年9月28日(金) 13時00分～17時

場所：蔵本キャンパス内

対象：蔵本地区1年生 約450名

目的：医療現場で働く各専門職種を目指す学生が相互理解し、将来、共に円滑なチーム医療を行うための基盤を形成する動機付けとなる。医療人を目指す学生として、今後の学生生活で学ぶこと、修得することを、他学部・学科の学生と共に考え、お互いに学ぶことで、医療人としてのプロフェッショナルリズムの醸成を図る。

概要：医療安全、コミュニケーション、災害医療などのテーマで講演を拝聴し、テーマに沿ったグループワーク(ディスカッション)を行い、プロダクトを作成・発表・討議する。

テーマ：未定

タイムスケジュール：未定

※詳細は、医療教育開発センターによる授業詳細参照すること。

SIH道場必須項目設計表（概要のみ）

医学部保健学科看護学専攻

	到達目標	評価方法・基準	内容		授業実施枠
			事前学習	授業	
① 体験学習	看護学の分野で活躍する看護職の活動の現場を知るとともに、大学における学習方法について学び、専門職への意欲を持つことができる	レポートの提出	反転授業コンテンツ「SIH道場とは」の視聴	<ul style="list-style-type: none"> 「大学での学び（論文の書き方、プレゼンテーション）」の講義を行う。 「先輩からのメッセージ」として、現場で活躍している看護師・保健師・助産師・養護教諭および大学院生をゲストティーチャーに招き、新入生に対して講演及びデイズカッションを行う。 	保健学科大学入門科目群「大学入門講座」の中で実施
文章力	大学におけるレポート作成の方法を知るとともに、論理的な文章を構成することができる	提出物は、ルーブリックを用いて行う	反転授業コンテンツ「文章力」の視聴	<ul style="list-style-type: none"> レポートの書き方についての講義を行う。 ルーブリックを用いたピア評価を行う。 	保健学科大学入門科目群「大学入門講座」の中で実施
② プレゼンカ	見るものによってわかりやすく説得力のあるプレゼンテーションの評価ができる	プレゼンテーションに対する学生間の相互評価	反転授業コンテンツ「プレゼンテーションカ」の視聴	全体でテーマを設定し、コンテンツ、テックニク、ツールの3要素を活用したプレゼンテーションを実施する。また、学生同士が相互に評価を行う。	保健学科大学入門科目群「大学入門講座」の中で実施
協働カ	他者と共同して1つの課題に取り組むことができる	e-ポートフォリオに記入した内容の中で、他者と共同した成果を1つ以上説明している。	反転授業コンテンツ「協働カ」の視聴	医療・保健分野のトピックスについてKJ法ワークを実施し、ルーブリックを用いたピア評価を行う。	保健学科大学入門科目群「大学入門講座」の中で実施
				③ 学習の振り返り	
					レポートをe-ポートフォリオに記入する。教員はコメントをフィードバックする。
					レポートをe-ポートフォリオに記入する。教員はコメントをフィードバックする。
					学んだことをe-ポートフォリオに記入する。教員はコメントをフィードバックする。
					学んだことをe-ポートフォリオに記入する。教員はコメントをフィードバックする。

4. 医学部保健学科看護学専攻

SIH道場プログラム設計評価シート

医学部保健学科看護学専攻

※学生のeポートフォリオ、成果物、教員のeポートフォリオを参考に記述してください。

要素	項目	チェック	学生の学修効果・成果	改善したい点	次年度に向けた対応
早期体験	①設計した到達目標を学生は達成することができた	<input checked="" type="checkbox"/> はい/どちらでもない/いいえ 認めていない	「大学で必要な基本的知識を身に着けることができた。」「医療現場を目にしてモチベーションが上がった」という意見があったことにより、早期体験が大学における学修の導入に有効であることが考えられた。	十分、達成できていると思います。	十分、達成できていると思います。
	②設計した内容は、専門分野の学修に対して学生を動機づけるという点で効果的だった	<input checked="" type="checkbox"/> はい/どちらでもない/いいえ 認めていない			
	③学生に課した事前学習は、学生の体験学習を意義あるものにするために効果的だった	<input checked="" type="checkbox"/> はい/どちらでもない/いいえ 認めていない			
ラーニングスキル 文章力	④設計した到達目標を学生は達成することができた	<input checked="" type="checkbox"/> はい/どちらでもない/いいえ 認めていない	「レポートの作成に良い練習の場となった。」という学生の意見があり、レポートの記述に慣れている学生が学修によって効果的であると考えられた。	特になし。	特になし。
	⑤設計したアクテブ・ラーニング型授業は、学生の学修にとって効果的であった	<input checked="" type="checkbox"/> はい/どちらでもない/いいえ 認めていない			
	⑥学生に課した授業外学修（事前、または事後）は、学生の学修にとって効果的であった	<input checked="" type="checkbox"/> はい/どちらでもない/いいえ 認めていない			
ラーニングスキル プレゼン力	⑦学生の評価は、ルーブリック等で基準を明確にして行った	<input checked="" type="checkbox"/> はい/どちらでもない/いいえ	「プレゼンの作り方の良い練習の場となった。」という学生の感想があり、これまで、プレゼンの経験の少ない学生にとつて、良い練習になることにも、今後の学修活動の発展や目標を明確にしたものであると考えられた。	特になし。	特になし。
	⑧設計した到達目標を学生は達成することができた	<input checked="" type="checkbox"/> はい/どちらでもない/いいえ 認めていない			
	⑨設計したアクテブ・ラーニング型授業は、学生の学修にとって効果的であった	<input checked="" type="checkbox"/> はい/どちらでもない/いいえ 認めていない			
ラーニングスキル 協働力	⑩学生に課した授業外学修（事前、または事後）は、学生の学修にとって効果的であった	<input checked="" type="checkbox"/> はい/どちらでもない/いいえ 認めていない	「グループで活動することで、ほかの人の意見を取り入れることができようになつた。」「協働作業の中で、自分が何をすべきか考え行動する力が養われた。」という意見や、意見交換により、コミュニケーション能力が培われたことに加え、自発的で深い学びが得られたと考えられた。	十分、達成できていると思います。	十分、達成できていると思います。
	⑪学生の評価は、ルーブリック等で基準を明確にして行った	<input checked="" type="checkbox"/> はい/どちらでもない/いいえ			
	⑫設計した到達目標を学生は達成することができた	<input checked="" type="checkbox"/> はい/どちらでもない/いいえ 認めていない			
振り返り	⑬振り返りの意義や方法について、学生に説明する、またはポスターの利用などで理解を促した	<input checked="" type="checkbox"/> はい/どちらでもない/いいえ 認めていない	ポートフォリオを使っての振り返りを通し、「事前学習の大切さ、体験後の振り返り。」が重要とする意見が示されており、やっぱなしではなくちゃんと振り返る次へつなげることが大事であると考えられた。	特になし。	特になし。
	⑭各授業（体験を含む）の最後やSIH道場の終了時に学生が振り返る時間を設けた	<input checked="" type="checkbox"/> はい/どちらでもない/いいえ			
	⑮学生が振り返った内容について教員がフィードバックを行った	<input checked="" type="checkbox"/> はい/どちらでもない/いいえ			
総合	⑯実施したSIH道場プログラムを総合的に見て、今年度の授業設計は、学生が到達目標を達成するために、(5.十分であった。4.概ね十分であった。3.ふつ。2.やや不十分であった。1.不十分であった。)	⑤ 4・3・2・1	早期体験、発表、グループによる討論等の協働学習が、大学における学修を進めるに当たり、功を奏したと考えられる。	全体的に教員の負担が大きいと考えられる。	特になし。

平成30年度 医学部保健学科看護学専攻 SIH 道場 < 授業詳細表 >

◆目的：徳島大学医学部保健学科看護学専攻の新入生が、大学における学習について理解するとともに、自身の専門分野における先輩からの仕事や研究に関する講演を通して、興味関心を喚起し、徳島大学における学習・研究に対する動機づけを行う。また、学習の基本となる文章の書き方、プレゼンテーションの仕方、振り返りの仕方を学び、それらを自分自身で実践することで、大学における能動的な学習の基本となる知識、技能、態度を身につける。

◆到達目標：

- (1) 自身の専門分野における現場と大学における学習について、関連させて説明することができる。
- (2-1) 論理的文章の作成・レポートの作成において、注意すべき点について1つ以上説明することができる。
- (2-2) 効果的なプレゼンテーションを行うための基本的な手法・ツール等を1つ以上説明することができる。
- (2-3) 他者と協同して1つの課題に取り組みることができる。
- (3) 自身の学習活動を振り返る習慣を身につけることができる。

◆成績評価：

「将来の看護職を考えると、主題したテーマでレポートを以下の合格基準をもとに評価する。

レポートは原則として、電子媒体での作成を推奨する。

個人レポート（文章力の目標に対応）

- ・体験学習で学んだことを踏まえて、「将来の看護職を考えると」を主題にしてA4判1枚程度のレポートを作成する。
- ・グループの「文章力」に該当するすべての項目について、自己評価する。
- ・提出日は、第1回が5月10日8時30分、最終提出は5月31日16時30分とする。

◆グループ分け

5月10日（木）からグループワークとする。グループは学生番号順で6名程度の人数

◆SIH 道場 個人レポートの合格基準

以下の評価基準のうち、「必須」と書いてある項目をすべて満たすこと。

- ・レポートの書き方に従い、「序論（はじめ）」、「本論」「終論（終わりに）」が書かれていること。
- ・引用・参考文献の表記が適切にされていること。
- ・「自己評価」と「文章力」のルーブリックが添付されていること。（必須）
- ・上記ルーブリックの「文章力」の総合点が6割以上であること。（必須）
- ・提出期限の遵守（必須）
- ・その他、レポートに必要だと考えられる内容（任意）
- ・教員のレポート採点は、7月前半まで提出とする

◆授業実施方法

日時	授業名	内容	担当者
4月2日 (月) 10:00~	● 学科別オリエンテーション ● 専攻別オリエンテーション①	大学で学ぶ意味 SIH 道場とは 学修設計とは	保健学科長 教務委員長 学生委員長 1年担当教員（近藤、今井、橋本、飯藤）
4月3日 (火) 9:00- 10:10	● 専攻別オリエンテーション②	ラーニングスキル（文章力） レポートの書き方についての講義 反転授業（文章力、協働、プレゼン）のコンテンツの見方の説明	教務委員 1年担当教員（近藤、今井、橋本、飯藤）
4月4日 (水) 9:00- 12:00	● 専攻別オリエンテーション③	SIH 道場について 事前課題やテーマの提示	教務委員 1年担当教員（近藤、今井、橋本、飯藤）
4月5日 (木) 9:00- 12:00	● 学科別オリエンテーション④ 先輩からのメッセージ 1～将来像のイメージ化～	体験学習 大学院に進学した先輩からのメッセージを聞いて質疑応答。レポートを提出	教務委員 1年担当教員（近藤、今井、橋本、飯藤）
4月5日 (水) 9:00- 12:00	● 図書館ツアー	体験学習 3班に分かれて、図書館の利用の仕方について学修する。	1年担当教員（近藤、今井、橋本、飯藤）
4月7日 (土) 8:35~	● 新入生研修	体験学習、ラーニングスキル（文章力、協働力、プレゼンテーション力）	教務委員 1年担当教員（近藤、今井、橋本、飯藤）
4月26日 (木) 13:00- 15:00 C-23 教室	● 「将来の看護職を考える」に 対してA4（約800字）の 1枚のレポートを作成する（個人 で作成）。	テーマについての図書館などで文献 検索、資料の収集を行なう。	1年担当教員（近藤、今井、橋本、飯藤）
5月10日 (木) 8:30	● 講義の前の8:30までに レポートを提出する。（教室で あつめる）	レポートの提出状況をチェックする。	担当：飯藤
5月10日 (木) 15:30- 16:30 C-23 教室		グループワーク① レポートを一旦返却し、レポートをも とにディスカッションする	1年担当教員（近藤、今井、橋本、飯藤）
5月17日		グループワーク②	1年担当教員（近藤、今井、橋本、飯藤）

(木) 15:30- 16:30 C-23 教室	グループワーク①をもとに、プレゼンテーションできるようにまとめる。	今井、橋本、飯藤
5月24日 (木) 15:30- 16:30 C-23 教室	●発表① 「将来の看護職を考える」について各グループでプレゼンテーションを行なう。	1年担当教員（近藤、今井、橋本、飯藤）
5月31日 (木) 15:30- 16:30 C-23 教室	●発表② 「将来の看護職を考える」について各グループでプレゼンテーションを行なう。	1年担当教員（近藤、今井、橋本、飯藤）

◆授業実施計画

1) SIH 道場とは

【概要】保健学科大学入門講座として行われている学科別ならびに専攻別オリエンテーションにおいて、SIH 道場についての概要を説明する。その際、事前学習に関する内容（反転授業コンテンツ）についても説明する。また、希望学生においては興味をもっている分野の研究室に1年生から入りやすることが可能である旨を説明する。

2) ラーニングスキル（レポートの書き方）（4月2日（月）実施）

【概要】体験学習などの際に提出するレポートの書き方について早期に指導する。

【準備】ビデオ教材「文章力を身につけよう」の視聴を指示

【事前学習】ビデオ教材「文章力を身につけよう」を視聴する

【授業後】学生からのレポート提出、教員によるレポート評価、学生へのフィードバックを行う。

3) 体験学習（先輩からのメッセージならびに図書館ツアー）（4月5日（金）実施）

【概要】保健学科の大学入門講座である「先輩からのメッセージ」では、卒業学生が大学生活の実態について説明する。学生は自分の今後の大学生活について具体的にイメージし、目標を考える。また、図書館ツアーでは、自分たちが学習できる環境についても学ぶ。

【準備】新入生は各自が本学看護学専攻に進学した動機を文章化しておく。

【事前学習】大学生活で自分が身につけたい能力を明らかにし、そのためにどのような授業に最も関心を持っているか、シラバスを読み確認する。

【授業後】「将来の看護職を考える」についてレポート作成継続

4) 新入生研修（4月7日（土）8:30～16:30 実施）

【概要】新入生研修の午後の部を利用して、ワークショップを行う。ワークショップでは、医療（SNS）・情報モラルに

関する身近なテーマについてグループワークを行い、グループごとにプレゼンテーションする。他のグループのプレゼンテーションを見て、各自がグループワーク表に従って評価する。本ワークショップを通して、医療に関する早期体験学習とともに、文章力、協働力、プレゼンテーション力といったラーニングスキルを獲得することを目的とする。

【準備】ビデオ教材「協働力」「プレゼンテーション力」の視聴を指示

【事前学習】ビデオ教材「協働力」「プレゼンテーション力」を視聴

【授業後】学生アンケートを実施して、来年度以降の参考とする

5) 「将来の看護職を考える」を主題とした協働・プレゼンテーション能力の育成（4月26日～5月31日まで毎週）

【概要】看護職を目指す学生が、体験学習「先輩からのメッセージ」などを参考に、自らの「将来の看護職を考える」についてまず個人で文献を用いて調べた後、グループでディスカッションをすることにより、他の学生の価値観を共有しながら、自分自身の考えを深める機会とする。併せて、ディスカッションの結果を、効果的に伝えるためのプレゼンテーション能力を養う機会とする。プレゼンテーションの相互評価及び、グループワークにおける自己評価を行う。

【準備】

①4月4日のSIH道場で概要、グループ分けを説明する。ビデオ教材の「文章力」「協働力」「プレゼン力」をみる。

②各グループで「将来の看護職を考える」のテーマ決定を伝える。③図書館ツアーでの文献の選び方を活用するように指導する。③レポートは5月10日（木）8時30分を期限とし、提出のチェック後レポートともに各グループでのディスカッションを行う。5月31日の発表終了後にレポートを集めて、7月前半までにコメントを入れたレポートを「飛ぶノート」で学生のレポートフォルダに返却する。

【事前学習】4月4日（水）のSIH道場で概要、グループ分けを説明する。4月26日までにビデオコンテンツの「文章力」「協働力」「プレゼン力」をみて自分の活動に生かす。「先輩からのメッセージ」を参考に看護職が行っていること、看護職に求められていることを明らかにしてプレゼンテーションに生かす。

【授業後】次年度の参考のために事後アンケートを実施する。プレゼンテーションや自己評価の結果を学生にフィードバックする。

◆毎回の授業後に担当教員が行うこと

・担当クラスの学生が提出した「振り返りシート」へ一言コメントし、飛ぶノートでレポートフォルダに飛ばす。

◆レポート提出終了後に担当教員が行うこと

1) 担当クラスの学生が提出したレポートの添削

・不合格者には「再提出要求」を出す。

・合格者には点数をつける。（100点満点）

2) 「グループディスカッション実施報告書」の提出

・所定の様式に沿って作成・提出する。（様式は、Word版、e-ポートフォリオ版の2つがある）

・提出先はe-ポートフォリオシステムとする。

3) 他の担当教員の「実施報告書」の閲覧と相互コメント

◆終了後にコーディネーターが行うこと

・授業担当教員の「SIH 道場実施報告書」の提出状況のチェック。未提出者への催促。

SIH道場必須項目設計表（概要のみ）

医学部保健学科放射線技術科学専攻

5. 医学部保健学科放射線技術科学専攻

	到達目標	評価方法・基準	内容		授業実施枠
			事前学習	授業	
①	<p>診療放射線技師の各分野の専門技師から見た教育プログラムを理解する。専門分野における先端研究を体験し、研究内容を大学における学習と関連させることができる</p>	<p>講演プログラムの聴講しその内容をレポートとして提出する。体験学習の報告会でのプレゼンテーションセッションを教員が評価する</p>	<p>各分野の専門技師の認定技師および専門技師の方々を招き、講演聴講し、学生と演者の先生との間で議論を交わす。研究室（または教員グループ）に複数の学生を短期間研究室配属させて体験学習を実施する</p>	<p>③ 学習の振り返り 学んだことをe-ポートフォリオに記入。教員はコメントをフィードバックする</p>	<p>担当教員の指定する時間帯に実施する</p>
			<p>各分野の専門技師の認定技師および専門技師の方々を招き、講演聴講し、学生と演者の先生との間で議論を交わす。研究室（または教員グループ）に複数の学生を短期間研究室配属させて体験学習を実施する</p>	<p>学んだことをe-ポートフォリオに記入。教員はコメントをフィードバックする</p>	
②	<p>論理的な文章を作成する際に注意すべきことを一つ以上説明することができる</p>	<p>体験学習の内容をまとめたレポートを提出させ、教員が評価する</p>	<p>反転授業コンテンツの書き方「レポートの視聴入門」の視聴</p>	<p>短期研究室体験における指導を通して文章力向上を図る</p>	<p>SIH道場の授業枠内で実施</p>
			<p>反転授業コンテンツの書き方「レポートの視聴」の視聴</p>	<p>短期研究室体験における指導を通してプレゼンテーション能力向上を図る</p>	
③	<p>効果的なプレゼンテーションを行うための基本的な技法を一つ以上説明することができる</p>	<p>報告会でのプレゼンテーションを教員が評価する</p>	<p>反転授業コンテンツの発想「アイディアの発想・収束（KJ法）」の視聴</p>	<p>短期研究室配属で協働作業を体験させ、課題解決のための協働力の重要性を認識させる</p>	<p>SIH道場の授業枠内で実施</p>
			<p>反転授業コンテンツの発想「アイディアの発想・収束（KJ法）」の視聴</p>	<p>短期研究室配属で協働作業を体験させ、課題解決のための協働力の重要性を認識させる</p>	
④	<p>他者と協働して一つの課題に取り組みることができる</p>	<p>・体験学習期間中の学習状況を配属先の教員が評価する ・チーム医療入門ワークショップの取り組みに対する評価も加える（評価方法は別途）</p>	<p>反転授業コンテンツの発想「アイディアの発想・収束（KJ法）」の視聴</p>	<p>短期研究室配属で協働作業を体験させ、課題解決のための協働力の重要性を認識させる</p>	<p>SIH道場の授業枠内およびチーム医療入門（IPE）ワークショップで実施</p>
			<p>反転授業コンテンツの発想「アイディアの発想・収束（KJ法）」の視聴</p>	<p>短期研究室配属で協働作業を体験させ、課題解決のための協働力の重要性を認識させる</p>	

SIH道場プログラム設計評価シート

医学部 保健学科 放射線技術科学専攻

※学生のeポートフォリオ、成果物、教員のeポートフォリオを参考に記述してください。

要素	項目	チェック	学生の学修効果・成果	改善したい点	次年度に向けた対応
早期体験	① 設計した到達目標を学生は達成することができた	はい() どちらともいえない() いいえ() 設計していない	放射線技術科学専攻のすべての研究室の紹介を行った後に、学生自らの希望により、短期研究室体験の配属を行った。各研究室での体験を通じて、学生に、学習の目的に關して、最大限のモチベーションを与えることに成功したと考える。実際に、各研究室紹介や研究発表の各テーマに対して、平均として5つ以上の質問が出た。	各研究室の先生方に対して、早期体験の趣旨について、十分に理解いただけていない点があり、教員全体で取り組みを再考する必要がある。	全教員に対して、早期体験の意義や目的を理解していただく、効果的な体験について議論するキックオフミーティングが必要であると考える。
	② 設計した内容は、専門分野の学修に対して学生を動機づけるという点で効果的だった	はい() どちらともいえない() いいえ() 設計していない			
	③ 学生に課した事前学習は、学生の体験学習を意義あるものにするために効果的だった	はい() どちらともいえない() いいえ() 設計していない			
ラーニングスキル 文章力	④ 設計した到達目標を学生は達成することができた	はい() どちらともいえない() いいえ() 設計していない	600字以上の短期研究室体験報告書を作成させ、各研究室の教員の指導を受けることにより、文章力の向上を図ることができた。しかしながら、報告書を返すまで、到達目標を達成できていない学生が少なからず存在するといわゆる状況である。	理科系の文章を書くというところはどうか？という点から、実務的な訓練を踏んでから、体験報告書を書かせることが効果的であると考える。	文章力養成講座の導入を検討する必要がある。
	⑤ 設計したアクティビティ・ラーニング型授業は、学生の学修にとって効果的であった	はい() どちらともいえない() いいえ() 設計していない			
	⑥ 学生に課した授業外学修（事前、または事後）は、学生の学修にとって効果的であった	はい() どちらともいえない() いいえ() 設計していない			
ラーニングスキル プレゼン力	⑦ 学生の評価は、ルーブリック等で基準を明確にして行った	はい() どちらともいえない() いいえ() 設計していない	ほとんどの学生は、原稿を見ずに、自分の言葉で、効果的なプレゼンテーション（各グループ15分）を行うことができた。15分間の質疑応答時間を確保した。時間ギリギリまで、学生間での熱心な質疑応答がなされ、設計した到達目標を達成するということもできた。教員は、学生を評価するという目録ではなく、発表者に対してリスベクトを行う上で、間違った箇所に関して、訂正や補足説明をしたというスラッシュで参加していた。このことが、学生が養育することなく、学生間での熱心な討議に直結したと考える。	特になし。	本年度に導入した活発な質疑応答をさせる取り組みを続けていくことは有効であると考える。
	⑧ 設計した到達目標を学生は達成することができた	はい() どちらともいえない() いいえ() 設計していない			
	⑨ 設計したアクティビティ・ラーニング型授業は、学生の学修にとって効果的であった	はい() どちらともいえない() いいえ() 設計していない			
ラーニングスキル 協働能力	⑩ 学生に課した到達目標を学生は達成することができた	はい() どちらともいえない() いいえ() 設計していない	5名〜6名のメンバーからなる各グループが研究室グループも自分の担当を把握して、協働的に、発表や質問に対する応答を適切に行うことができている。それぞれのグループで、各メンバーが協働的に、短期研究室体験を行い、プレゼンテーション、質疑応答を行なったことで、充実感につながっていることが、体験報告書からうかがえた。	特になし。	本年度に導入した活発な質疑応答をさせる取り組みを続けていくことは有効であると考える。
	⑪ 設計したアクティビティ・ラーニング型授業は、学生の学修にとって効果的であった	はい() どちらともいえない() いいえ() 設計していない			
	⑫ 学生に課した授業外学修（事前、または事後）は、学生の学修にとって効果的であった	はい() どちらともいえない() いいえ() 設計していない			
振り返り	⑬ 振り返りの意義や方法について、学生に説明する、またはテキストの利用などで理解を促した	はい() どちらともいえない() いいえ() 設計していない	600字程度の体験報告書を書かせることは、文章をまとめるための思考を要するので、全体的な振り返りを行うためにも有効であった。さらに、教員が文章や内容をチェックすることで、十分なフィードバックを行うことができた。と考える。	特になし。	本年度に導入した600字程度の体験報告書を書かせる取り組みは有効であると考える。
	⑭ 各授業（体験を含む）の最後やSIH道場の終了時に学生が振り返る時間を設けた	はい() どちらともいえない() いいえ() 設計していない			
	⑮ 学生が振り返った内容について教員がフィードバックを行った	はい() どちらともいえない() いいえ() 設計していない			
総合	⑯ 実施したSIH道場プログラムを総合的に見て、平成30年度の授業設計は、学生が到達目標を達成するために、(5・10分であった。4.総時間は十分であった。3.ふつ、2.いやや十分であった。1.10分不足であった)。	⑤ 4・3・2・1			
	※その他、他の授業の講師・宛先内容・授業運営等の課題が明らかになった点				

平成30年度 医学部保健学科放射線技術科学専攻 SIH 道場 <授業詳細表>

◆目的：本学放射線技術科学専攻新入生が大学における学修について理解するとともに、自身の専門分野における先端研究の体験を通して、興味関心を喚起し、徳島大学における学修・研究に対する動機づけを行う。また、学修の基本となる文章の書き方、プレゼンテーションの仕方、協働の仕方および質疑応答の仕方を学び、それらを実践することで、大学における能動的な学修の基本となる知識、技能、態度を身につける。

- ◆到達目標： (1) 研究室の研究内容を大学における学修と関連させて説明することができる。
 (2) 自分の考えを文章による表現で、ルールを守り、効果的に相手に伝えることができる。
 (3) 自分の考えを口頭による説明や資料を用いて、効果的に相手に伝えることができる。
 (4) 1つの課題に対して、他者と協力して取り組むことができる。
 (5) 他者の発表に対して、適切に質問をすることができる。
 (6) 他者の質問に対して、適切に回答することができる。

◆成績評価：新入生全員が参加する体験学習の報告会を開催し、その中で、文章力の評価として、報告会の抄録や研究室体験の感想文を提出させ、教員が評価する。プレゼンテーション力、協働力、質疑応答力の評価として、報告会での発表を教員が評価する。

◆授業実施方法：

日時	授業名	内容	担当
4月5日(金) 9:00～11:00	保健学科共通 オリエンテーション	先輩からのメッセージ	保健学科教務委員長
4月7日(土) 13:00～17:00	新入生研修	午前には学生生活や行動規範に関する講義、午後はグループディスカッションを中心とした研修	吉永哲哉・河野 理 他
4月26日(木) 8:30～17:00	教育プログラム	各分野の専門技師から見た教育プログラム～将来のエキスパートを目指す“夢”をもって学ぼう～	吉永哲哉・富永正英 他
4月12日(木) 15:30～16:30		SIH道場短期研究室体験の概要説明	授業設計コーディネーター (河野)
5月10日(木) 15:30～16:00	SIH道場	放射線理工学分野紹介	阪間 稔・河野 理
5月10日(木)		医用画像機器工学分野紹介	吉永哲哉・児島雄志

16:00～16:30			
5月31日(木) 15:30～16:00	医用画像情報科学分野紹介		芳賀昭弘・金澤裕樹
5月31日(木) 16:00～16:30	医用理工学分野紹介		森田明典・未定
6月7日(木) 15:30～16:00	医用画像解析学分野紹介		上野淳二・高尾正一郎
6月7日(木) 16:00～16:30	画像医学・核医学分野紹介		大塚秀樹・西原貞光
6月14日(木) 15:30～16:00	放射線治療学分野紹介		生島仁史・富永正英
6月14日(木) 16:00～16:30	短期研究室配属先の決定方法		河野 理・児島雄志
7月5日(木) 15:30～16:30	短期研究室配属先の発表		河野 理・児島雄志
7月～9月まで1～数日程度短期研究室配属	短期研究室体験	・モンテカルロシミュレーション計算による放射線挙動の3次元可視化 ・音楽による感情変化をデータ表現してみよう ・細胞に生じたDNA損傷の検出法	阪間 稔・河野 理 森田明典・未定 吉永哲哉・児島雄志 芳賀昭弘・金澤裕樹 上野淳二・高尾正一郎 大塚秀樹・西原貞光 生島仁史・富永正英
9月〇日(〇) 15:00～18:00	短期研究室体験報告会	各研究分野でプレゼンテーション	専攻全教員
9月28日(金) 13:00～17:00	チーム医療入門	早期体験、ラーニングスキル(協働力、プレゼンテーション力)	医療教育開発センター

◆授業実施計画：

1) 保健学科共通オリエンテーション (4/5 (金) 9:00～11:00 実施予定)

【概要】保健学科大学入門講座として行われている保健学科共通オリエンテーションにおいて、大学生活全般に対するメッセージを先輩学生が紹介する。

2) 保健学科共通新入生研修 (4/7 (土) 8:35～実施予定)

【概要】午前は、医学部合同新入生研修として学生生活や行動規範に関する講義。午後は、保健学科・大学入門講座として行われている保健学科共通オリエンテーションにおいて、SIH 道場の実践として、グループディスカッションを中心とした研修を行う。

3) 教育プログラム (4月27日(木) 8:30～実施予定)

【概要】診療放射線技師の社会的役割や各専門分野に必須の科目群(教育プログラム)を入学当初に理解することにより、将来像の明確化を図ると共に、大学における能動的学修への動機づけを高める。

【事前学習】診療放射線技師の各専門分野の認定技師及び専門技師について事前に調べる。

【授業後】プログラム(講演の聴講)後に学生からの感想文提出、教育プログラム教員による感想文の評価、学生へのフィードバック

4) SIH 道場 (5月10日(木)～7月12日(木)の6講時(15:30～16:30)、計6回)

【概要】本学放射線技術化学専攻の各研究分野の最先端研究の内容を聴講および質問をさせることによって、興味関心を喚起し、徳島大学における学習・研究に対する動機づけを行う。また、短期研究室配属先は、学生自らの希望によって行う方法を採用する。

【事前学習】各研究分野の最先端研究内容について、各教員のホームページ等にてアクセスすることによって調べておくこと。

【授業後】レポート(感想文)提出。

5) 短期研究室体験 (7月～9月まで、各研究室にて1～教日程度実施予定)

【概要】授業実施方法欄の各研究室テーマに配属学生が取り組む。短期研究室体験における指導を通して、文章およびプレゼンテーション能力の向上を図るとともに、協働作業を体験させることで課題解決のための協働力の重要性を認識させる。

【事前学習】反転授業コンテンツ「アイデアの発想・収束(KJ法)」の視聴

6) 短期研究室体験報告会 (9/0(0)15:00～18:00 実施予定)

【概要】各研究室の体験内容について、学生が配属グループごとにプレゼンテーションを行う。プレゼンテーションは配属学生が分担して口頭発表する全員参加形式とし、プレゼンテーション力と質問力と質問力を養う。教員は、発表内容、質疑応答内容に対して、適切な指導を行う。

【事前学習】反転授業コンテンツ「効果的なプレゼンテーションの仕方」の視聴

【授業後】体験内容に関する学生からの感想文提出、教員による感想文の評価、学生へのフィードバック、ポートフォリオ作成。

7) 蔵本地区チーム医療入門ワークショップ (9月28日(金) 13:00～17:00 実施予定)

医療教育開発センターによる授業詳細参照

SIH道場必須項目設計表(概要のみ)

6.医学部保健学科検査技術科学専攻

	到達目標	評価方法・基準	内容		授業実施枠
			事前学習	授業	
① 体験学習	臨床検査分野における先端研究(現場)と大学における学習について、関連させて説明することができる。	レポート提出	<ul style="list-style-type: none"> ・SIH道場の理解 ・先輩からのメッセージ」「臨床検査技師の仕事(仮、準備中)」の内容紹介。関連HP等の閲覧 ・「大学院のすすめ」：HPなどで各分野の研究内容を調査しておく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・SIH道場の目的、実施の流れとその対応(レポートの書き方、ルーブリックについての説明) ・「先輩からのメッセージ」「臨床検査技師の仕事と医療における役割(一部は準備中)」を聞き、様々な臨床検査の分野を知り、自分の進路について考える。 ・「大学院のすすめ」において担当教員から大学院の研究概要を聞き、大学院の進路を考える。 	保健学科「SIH道場」内で実施
文章力	論理的な文章の作成・レポートの作成において、注意すべき点について1つ以上説明することができる。	ルーブリック評価表を用いる	反転授業ビデオコンテンツ「文章力」の動画を視聴	「先輩からのメッセージ」で作成したレポートについて、ルーブリックを用いたピア評価、ポイント確認、ブラッシュアップ	保健学科「SIH道場」内で実施
② プレゼンカ	効果的なプレゼンテーションを行うための基本的な手法・ツール等を1つ以上説明することができる。	ルーブリック評価表を用いる	反転授業ビデオコンテンツ「プレゼンテーション力」の動画を視聴	<ul style="list-style-type: none"> ・「保健学科新入生研修 ワークショップ」で実施したプレゼンテーションについて、ルーブリックを用いた相互評価を行う。 ・「チーム医療入門」で実施したプレゼンテーションについて、ルーブリックを用いたピア評価、ポイント確認、ブラッシュアップ 	保健学科「SIH道場」内で実施
協働カ	他者と協同して1つの課題に取り組むことができる。	ルーブリック評価表を用いる	反転授業ビデオコンテンツ「協働カ」の動画の視聴	<ul style="list-style-type: none"> ・「保健学科新入生研修 ワークショップ」にてKJ法ワークを実施し、ルーブリックを用いたピア評価を行う。 	保健学科「SIH道場」内で実施
注意点	学生が授業を通して何が得意になるのかについて具体的に明記する。明記の仕方として「〇〇できる」と表現すると良い。	反転授業の形式で設計し、コンテンツを使用することとを推奨する。	アクティブ・ラーニング型授業で実施する。	eポートフォリオを活用し、学生と教員間のコメントのやり取りを行う。	「①体験学習」のよいうに既存の授業で置き換えることも可能です。

6.医学部保健学科検査技術科学専攻

SIH道場プログラム設計評価シート

医学部 保健学科 検査技術科学専攻

※学生のeポートフォリオ、成果物、教員のeポートフォリオを参考にし記述してください。

要素	項目	チェック	学生の学修効果・成果	改善したい点	次年度に向けた対応
早期体験	①設計した到達目標を学生は達成することができた	<input type="radio"/> はいどちともいえない 設計していない	授業内容への満足度が高く、疑問点を持った学生が教員に質問に訪れた。将来の仕事内容を早期に学習することで、学生の意欲も上昇し、学修効果は良好と考える。	特になし	より学生の希望を取り入れた形の体験学習へと改訂してゆきたい。
	②設計した内容は、専門分野の学修に対して学生を動機づけるという点で効果的だった	<input type="radio"/> はいどちともいえない 設計していない			
	③学生に課した事前学習は、学生の体験学習を意義あるものにするために効果的だった	<input type="radio"/> はいどちともいえない 課していない			
ラーニングスキル 文章力	④設計した到達目標を学生は達成することができた	<input type="radio"/> はいどちともいえない 設計していない	複数回のレポート提出で学生個々の記述や考察に向上が認められ、学修効果はあったと考える。	一部の学生にWebからの完全コピーのみのレポートが散見された。この点に関しては来年度の課題としたい。	レポートは引用元の表示を徹底すること、考察をより深く記述できる形式に変更したい。
	⑤設計したアクティブラーニング型授業は、学生の学修にとって効果的であった	<input type="radio"/> はいどちともいえない 設計していない			
	⑥学生に課した授業外学修（事前、または事後）は、学生の学修にとって効果的であった	<input type="radio"/> はいどちともいえない 課していない			
ラーニングスキル プレゼン力	⑦学生の評価は、ルーブリック等で基準を明確に行っていた	<input type="radio"/> はいどちともいえない 設計していない	考える力や意見をいう力が身についたとの意見が多かった。社会人となったも役に立つスキルであるとの意見もあり、学修効果は良好と考える。	特になし	特になし
	⑧設計した到達目標を学生は達成することができた	<input type="radio"/> はいどちともいえない 設計していない			
	⑨設計したアクティブラーニング型授業は、学生の学修にとって効果的であった	<input type="radio"/> はいどちともいえない 設計していない			
ラーニングスキル 協働力	⑩学生に課した授業外学修（事前、または事後）は、学生の学修にとって効果的であった	<input type="radio"/> はいどちともいえない 課していない	グループ内の意見とりまよりの難しさ、特にエッセントリックな意見のとりまよりに困難があった。しかしながら、その困難を乗り越えるスキルを身につける必要性については学修できたと思う。	授業外学修については事前のものにももう少し時間をかけるべきと考えた。	左記を次年度の担当者に引き継ぐ。
	⑪学生の評価は、ルーブリック等で基準を明確に行っていた	<input type="radio"/> はいどちともいえない 設計していない			
	⑫振り返りの意義や方法について、学生に説明する、またはスキルの利用などで理解を促した	<input type="radio"/> はいどちともいえない 設計していない			
振り返り	⑬各授業（体験を含む）の最後やSIH道場の終了時に学生が振り返る時間を設けた	<input type="radio"/> はいどちともいえない 課していない	フィードバックには時間をとり、学生との建設的な意見交換ができた。学生間での意見交換もあり、十分な効果があったと考える。	特になし	特になし
	⑭学生が振り返った内容について教員がフィードバックを行った	<input type="radio"/> はいどちともいえない 設計していない			
	⑮実施したSIH道場プログラムを総合的に見て、今年度の授業設計は、学生が到達目標を達成するために、15.10分であった。4.期9.10分であった。3.ふつ。2.やや不十分であった。1.不十分であった。	<input type="radio"/> はいどちともいえない 設計していない			
総合		5・0・4・3・2・1			

※その他、他の授業との接続、発展内容・授業運営等の課題がありましたらお書きください。

平成30年度 SIH道場 医学部保健学科検査技術科学専攻 授業詳細

■目的：保健学科検査技術科学専攻新入生が大学における学修について理解するとともに、自身の専門分野である臨床検査学の先端研究や現場の早期体験を通して、臨床検査学への興味関心を喚起し、大学における学修・研究に対する動機づけを行う。また、学修の基本となる文章の書き方、協働力、プレゼンテーションの仕方、振り返りの仕方を学び、それらを実践することで、大学における能動的な学習の基本となる知識、技能、意欲、態度を身につける。

■到達目標

事前学習、体験授業（「先輩からのメッセージ」、「臨床検査技師の仕事と医療における役割」、「大学院のすすめ」）、振り返り学修（「将来像を描く」レポート作成）によって、臨床検査技師の役割を理解し、臨床検査分野に対する興味関心を高め、自身の将来像について考える。またラーニングスキルを獲得（文章力：「将来像を描く」レポート作成、プレゼンテーション力：「新入生研修」「チーム医療入門」での発表、協働力：「新入生研修」「チーム医療入門」でのグループワーク）して、大学における学修の基本となる能動的学修の基礎を身につけ、学修を振り返る習慣をつけ、自ら学修を計画し実施できる大学生となる。

- 1) 臨床検査学の幅広い分野を知る。
- 2) 臨床検査技師の医療における役割を理解する。
- 3) 臨床検査分野における大学院や科学的研究について知る。
- 4) 将来像について考える。
- 5) 文章力を身につけ、科学的なレポート作成ができる。
- 6) グループで協働して意見をまとめ、それをプレゼンテーションすることができる。
- 7) 学修を振り返り、学修計画を立てて実施することができる。

■成績評価

授業の出席、提出レポートにより評価する。レポート評価に際してはルーブリック「文章力」により行う。なおレポートは手書きでも構わないが、電子媒体での作成・提出を推奨する。

■授業実施方法：

日時	授業名	内容	担当
4月4日(水) 9:00～12:00	SIH道場の理解(概略の説明)	SIH道場の目的・実施の流れとその対応 (事前学習:協働のルール、レポートの書き方、ルーブリック評価についての説明)	遠藤、安藝
4月7日(土) までに	(事前学習)	LMSを利用してビデオ教材の視聴 (協働力、プレゼンカルのビデオ教材)	遠藤

4月5日(木) 9:00～11:00 13:00～16:00	先輩からのメッセージ プレゼンテーションで発表力をつけよう	保健学科新入生研修 ワークショップ	保健学科教務委員、保健学科教官 (協力:大学院生 2名)
4月7日(土) 8:35～16:30	将来像を描くために (SIHの時間他を利用した自己学習)	ラーニングスキル(協働力、プレゼンテーション力) 各自で情報収集(学修のてびき中に紹介したHPや各分野のHP等を閲覧、LMSを利用してビデオ教材の視聴 (文章力、レポートの書き方のビデオ教材の視聴)	遠藤、安藝 (協力:総合教育センター) 保健学科教官
4月26日 (木)までに 時間未定	未定	早期体験(2)	未定
6月末までに		SIH道場のテキストやビデオ教材を利用した自己学習	
6月28日(木) 時間未定	大学院のすすめ	早期体験(3)	保健学科教務委員、保健学科教官 (協力:大学院生 2名)
9月末までに	将来像を描く (「大学院のすすめ」の1週間後までに提出)	各自で学習した情報をもとに、自分の将来像についての考えを文章にまとめる。	遠藤、安藝
9月末(日時) 未定)	チーム医療入門	早期体験、ラーニングスキル(協働力、プレゼンテーション力)	未定

■授業実施計画

1) SIH道場の理解 (4月4日(水) 9:30～12:00 実施)

【概要】検査技術科学専攻におけるSIH道場の目的・実施の流れとその対応について説明し(SIH関連ビデオを視聴)、今後の授業内容を理解させる。また、ルーブリックによる評価法について説明しておく。4月7日の新入生研修に必要なビデオコンテンツを視聴しておくよう指示。

2) 医学部新入生研修・保健学科新入生研修<ワークショップ> (4月7日(土) 医学部新入生研修

8:30～12:00、保健学科新入生研修<ワークショップ>：13:00から16:30 実施)

【概要】新入生研修の午後の部を利用して、総合教育センターの協力のもとワークショップを行う。ワークショップでは、医療に関する身近な話題をテーマとして、グループでワークを行い、グループ

ごとにプレゼンテーションをする。他グループのプレゼンを見て、各自がグループ表に従って評価する。本ワークショップではラーニングスキル（協働力、プレゼンテーション力）の獲得を目標とする。

【準備】ビデオコンテンツ「プレゼンテーション」 「協働力」の視聴を指示。

【事前学習】ビデオコンテンツ「協働力」「プレゼンテーション」の視聴。

【授業後】学生アンケート実施して、来年度以降の授業の参考とする。

3) 早期体験

早期体験①：先輩からのメッセージ (4/5 (木) 9:00~11:00 実施)

(各専攻の大学院学生からのメッセージ)

早期体験②：臨床検査技師の仕事と医療における役割 (4/26 (木) 午後

および 5~6月の木6講時のSIHの時間)

【概要】保健学科新入生オリエンテーション・SIH道場として行われている「先輩からのメッセージ」では保健学科各専攻の卒業生が、各専攻の概要、卒業後の進路等について説明し、後輩の新入生に向けて年齢的にも学生に近い立場からの先輩としてのエールを送る。また、「臨床検査技師の仕事と医療における役割」の授業では、徳島大学病院検査部の見学体験（検査部技師長他）および専攻外の講師による講演を通じて、病院での検査技師の役割や病院以外の場での働き方を知ってもらう。これらの授業による早期体験（疑似体験）を通じて、広い視野で自分の将来像について考える。

【準備】検査技術科学専攻卒業生の発表内容の紹介により、学生に対して事前学習を指導する。

【事前学習】Moodleによる事前学習を必須とする。

【授業後の課題】4~6月中をめぐりに、「自身の将来像を描く」レポートの作成を指示する。

早期体験③：大学院のすすめ (未定)

【概要】大学院担当教員による大学院の概要説明を聞き、大学院を知り、臨床検査学分野の先端研究に興味や関心を持つ。授業を通して、将来像の一つの選択肢として大学院進学を考えるきっかけとする。

【準備】保健科学教育部についてHP等を見て、本教育部にある領域を調べておくように学生に指導する。

【事前学習】HPなどの閲覧。

【授業後】学生の授業での取り組み態度や意見、リフレクションシートから、来年度以降の授業内容を考察する。

4) 将来像を描く

7月上旬までのSIHの時間を使ってレポートを作成（「大学院のすすめ」の1週間後までに提出）

【概要】保健学科大学院入門講座として行われた「先輩からのメッセージ」を聞いて、また早期体験①~③で学んだことをもとにして、「将来像を描く」レポートを作成する。ビデオコンテンツ「文章力」で学んだスキルを活かしてレポートを作成し、文章力を身につけることも目的とする。作成した

レポートをもとに、各自でルーブリック「文章力」による自己評価をして、教員に提出する。教員は提出されたレポートを評価し、学生へフィードバックする。（Mahara 利用）

【準備】ビデオコンテンツ「文章力」の動画視聴を指示、「将来像を描く」レポート作成の課題を出す。

【事前学習】反転授業ビデオコンテンツ「文章力」の動画などを視聴。ビデオを参考に「将来像を描く」レポートを作成。自分の将来を十分に考えるための時間をとることが必要である。

【授業後】学生からのレポート提出、教員によるレポート評価、学生へのフィードバックを行う。

5) チーム医療入門 (未定)

医療教育開発センターによる授業詳細参照

* 夏期休業期間だが、出席は必須であることを全員に周知しておく

SIH道場必須項目設計表 (概要のみ)

歯学部歯学科、口腔保健学科

7. 歯学部歯学科、口腔保健学科

	到達目標	評価方法・基準	内容		授業実施枠	
			事前学習	授業		
① 体験学習	① 基本的マナーを守ることができる。 ② コミュニケーション力を養うことができる。 ③ ホスピタリティ・マインドをもって対応することができる。	・ 授業での取り組み姿勢を評価する。 ・ 作成されたレポートを評価する。	・ 術者歯磨きを行うに当たり必要な事項をキーワードとして考える。	・ 「相互歯磨き学習」ではパートナートと相互の術者磨きを行い、学んだことを話し合う。 ・ 「アカデミック・ライティング入門」では、担当教員は学生から提出された事前レポートに対するフィードバックを行う。学生は重要ポイントを確認し、「読書レポート」の書き方を学ぶ。 ・ 学生は課題図書「読書レポート」を提出する。 ・ 提出された「読書レポート」に対して教員がコメントを記載して返却する。 ・ 学生はコメントを確認、自己評価内容を再度提出する。	「相互歯磨き学習」にて学んだことを文章にまとめ、e-ポートフォリオに記入。教員はコメントをフィードバックする。	1 年次前期：SIH道場「相互歯磨き学習」の中で実施
	文章力	論理的文章の作成・レポートの作成において、注意すべき点について1つ以上説明することができる。	与えられた資料(課題)に対する事前レポートを作成する。 提出された「読書レポート」を評価する。	「アカデミック・ライティング入門」では、担当教員は学生から提出された事前レポートに対するフィードバックを行う。学生は重要ポイントを確認し、「読書レポート」の書き方を学ぶ。 ・ 学生は課題図書「読書レポート」を提出する。 ・ 提出された「読書レポート」に対して教員がコメントを記載して返却する。 ・ 学生はコメントを確認、自己評価内容を再度提出する。	「読書レポート」の書式に従って記載して提出。教員はコメントをフィードバックする。	SIH道場「アカデミック・ライティング入門」「読書レポート」関連授業において実施
② プレゼンカ	グループで討議し、内容について整理してプレゼンテーションすることができる。	ループブック評価表を用いる(班全体の評価とする)。	課題に対する事前学習または発表準備を行う。	グループでコンテンツを作り、プレゼンテーションを行う。	学んだことは振り返りレポート用紙に記入。教員はプレゼンテーションに対するフィードバックを行う。	「歯科衛生士概論」の中で実施
	他者と協同して1つの課題に取り組むことができる。	e-ポートフォリオの内容から評価する。	グループワークに用いている手法に関する事前資料の内容を理解する。	「新入生研修」では、歯科医療従事者としての心構えなどの課題について「コンセンサスゲーム」や「ワールドカフェ」などによるワークを実施する。	学んだことをe-ポートフォリオに記入。教員はコメントをフィードバックする。	1 年次前期：SIH道場「新入生研修」の中で実施
協働力	・ WSを能動的に進めることができる。 ・ WSに積極的に参加することができる。 ・ 他学部学生とコミュニケーションが取ることができる。 ・ 他学部学生と協力してプロジェクトを作成することができる。	ループブック評価表を用いる(班全体の評価とする)。	KJ法のビデオを視聴する。	・ 講演内容を参考にしてWSのテーマについて班単位でWSを行い、プロダクトを作成する。	・ e-ポートフォリオに学んだことを記入する。	大学入門講座「チーム医療入門」の中で実施

SIH道場プログラム設計評価シート

歯学部 歯学科・口腔保健学科 専攻

※学生のeポートフォリオ、成果物、教員のeポートフォリオを参考にして記述して下さい。

要素	項目	チェック	学生の学修効果・成果	改善したい点	次年度に向けた対応	
早期体験	①設計した到達目標を学生は達成することができた	☑️	「シャドワイディング」では、病院での臨床の見学というだけでなく、担当教員がある程度の時間つくことで、病院勤務における多様な業務を認識することができ、また病院の見学以上の効用についての理解ができたようである。歯学科の1年次のプログラムにおいても① 基本的マナー② コミュニケーション力③ ホスピタリティ④ マインド、というキーワードが多くの学生のeポートフォリオに認められ、こちらが期待した効果を得られていると考えられている。新プログラム「研究室早期体験」では、最先端の医学・歯学研究に接することで生命科学研究の成り立ちの理解が深まったと考えられる。	「生命科学の基礎から最先端までの理解」、「これまでの歯科臨床と最先端医療技術の理解」、「患者さんとのコミュニケーション技術の向上」が融合することで今後必要とされる医療人の養成が可能になる。今後、三つのプログラムの連携を特長とする中で、より魅力的な新規プログラムの構築を目指す。	現在、歯学部では歯学科・口腔保健学科ともに順調に、SIH道場担当教員が揃えているが、さらにその学部内における認知を進めるためにも、「シャドワイディング」や「研究室早期体験」における担当教員を入れ替える。	
	②設計した内容は、専門分野の学修に対して学生を動機づけるという点で効果的だった	☑️				
	③学生に課した事前学習は、学生の体験学習を意義あるものにするために効果的だった	☑️				
	④設計した到達目標を学生は達成することができた	☑️		「アカデミック・ライティング入門」の講義においては、論理的な文章の書き方や表記・表現、文章構成を学び、「読書レポート」に反映させようという努力がそのレポートの中に、至真ではないが苦労の片鱗が感じられた。特に感想文にならなければいけぬようにする努力は強く感じられた。フィードバック後では、改善構成及び結論などの構成を理解した。	講義で学んだ内容や、フィードバックを受けたい内容を実践しながら血肉とするためにも、レポート作成量が絶対的に少ないかもしれない。	現代社会に即応するための文章構成、文書制作基本技術の統合的な見直しを進めていきたい。添削指導のさらなる教員確保を検討したい。
	⑤設計したアクティビティ・ラーニング型授業は、学生の学修にとって効果的であった	☑️				
	⑥学生に課した授業外学修（事前、または事後）は、学生の学修にとって効果的であった	☑️				
	⑦学生の評価は、ルーブリック等で基準を明確に行っていた	☑️				
ラーニングスキル 文章力	⑧設計した到達目標を学生は達成することができた	☑️				
	⑨設計したアクティビティ・ラーニング型授業は、学生の学修にとって効果的であった	☑️				
	⑩学生に課した授業外学修（事前、または事後）は、学生の学修にとって効果的であった	☑️				
	⑪学生の評価は、ルーブリック等で基準を明確に行っていた	☑️				
	⑫設計した到達目標を学生は達成することができた	☑️				
	⑬設計したアクティビティ・ラーニング型授業は、学生の学修にとって効果的であった	☑️				
	⑭学生に課した授業外学修（事前、または事後）は、学生の学修にとって効果的であった	☑️				
ラーニングスキル プレゼン力	⑮設計した到達目標を学生は達成することができた	☑️				
	⑯設計したアクティビティ・ラーニング型授業は、学生の学修にとって効果的であった	☑️				
	⑰学生に課した授業外学修（事前、または事後）は、学生の学修にとって効果的であった	☑️				
	⑱学生の評価は、ルーブリック等で基準を明確に行っていた	☑️				
	⑲「新入生研修」では、学生達は初対面の者同士が、きっかけをつかみながらコミュニケーションを取っていくことを意識していたと感じた。それが乗ることで出てきた達成感を感じていたように、独立した振り返り回を設定し、「新入生研修」以上にしっかりと苦勞をしていったようであるが、歯学科を超えた話し合いに興味を示す学生が多かった。					
	⑳グループが盛った段階でインストラクターから説明が質的であるが、協力作業が開始するまで時間が取れない。実質的な作業時間を増やすため、効率化を図りたい。インストラティブをとることへのためらいが強く残った。					
	㉑「新入生研修」では、学生達は初対面の者同士が、きっかけをつかみながらコミュニケーションを取っていくことを意識していたと感じた。それが乗ることで出てきた達成感を感じていたように、独立した振り返り回を設定し、「新入生研修」以上にしっかりと苦勞をしていったようであるが、歯学科を超えた話し合いに興味を示す学生が多かった。					
協働性	⑳協働性に関する到達目標を学生は達成することができた	☑️				
	㉑協働性に関する到達目標を学生は達成することができた	☑️				
	㉒協働性に関する到達目標を学生は達成することができた	☑️				
	㉓協働性に関する到達目標を学生は達成することができた	☑️				
	㉔協働性に関する到達目標を学生は達成することができた	☑️				
	㉕協働性に関する到達目標を学生は達成することができた	☑️				
	㉖協働性に関する到達目標を学生は達成することができた	☑️				
振り返り	㉗振り返りの意義や方法について、学生に説明する、またはフィードバックの利用などで理解を促した	☑️				
	㉘各授業（体験を含む）の最後やSIH道場の終了時に学生が振り返る時間を設けた	☑️				
	㉙学生が振り返った内容について教員がフィードバックを行った	☑️				
	㉚実施したSIH道場プログラムを総合的に見て、平成30年度の授業設計は、学生が到達目標を達成するために、(5.十分であった。4.概ね十分であった。3.ふつ。2.やや不十分であった。1.不十分であった。					
	※その他、他の授業との接続・発展内容・授業運営等の課題がありましたらお書きください。					
	㉛振り返りの意義や方法について、学生に説明する、またはフィードバックの利用などで理解を促した	☑️				
	㉜各授業（体験を含む）の最後やSIH道場の終了時に学生が振り返る時間を設けた	☑️				
総合	①重層したSIH道場プログラムを総合的に見て、平成30年度の授業設計は、学生が到達目標を達成するために、(5.十分であった。4.概ね十分であった。3.ふつ。2.やや不十分であった。1.不十分であった。	5	4・3・2・1	グループ作業における効率化、eポートフォリオ体制の充実を實現し、より高いレベルでの討論や発表につなげた。	より目配りの効くSIH担当教員の増員と、全体の流れの効率化をはかり、到達レベルの向上に向けた。	
	②振り返りの意義や方法について、学生に説明する、またはフィードバックの利用などで理解を促した	☑️				

平成30年度 歯学部 SIH 道場 < 授業詳細表 >

◆「協働力：ワールドカフェ」 4/13 (金) 14:35-17:50

到達目標：他者と協働して1つの課題に取り組むことができる。

Key Points：①ラーニングスキル (協働力) の育成

②自身の経験と考えに基づく意見発表と相手からのフィードバックによる気づき

③振り返りの経験

○事前学習

本体験学習ではグループワークに用いる手法に関する事前資料の内容を理解する。

○授業内容 (180分)：◆レクチャー、●個人ワーク、▲グループワーク

経過時間	内容	注意点・教材
3分	◆ 導入 出席確認、本日の内容の確認 ◆ 第1回目のグループワークの課題説明	
30分	▲グループワーク (第1の課題に題し、各自の考えを話合いながら模造紙に記入していく。)	模造紙、マジック グループの人数は5~6人
2分	◆ 席替え	
30分	◆ 第2回目のグループワークの課題説明 ▲グループワーク (第2の課題に題し、各自の考えを話合いながら模造紙に記入していく。)	模造紙、マジック グループの人数は5~6人
2分	◆ 席替え	
30分	◆ 第3回目のグループワークの課題説明 ▲グループワーク (第3の課題に題し、各自の考えを話合いながら模造紙に記入していく。)	模造紙、マジック グループの人数は5~6人
70分	● 振り返り 授業全体を振り返り、学んだこと、グループで協働作業をすることやプレゼンテーションについて重要な点をまとめ、自己評価を行う。	
5分	まとめ	

○事後学習

振り返り内容をまとめ、eポートフォリオ用授業レポート用紙に記載し、学務係を通じて担当教員に提出する。(教員はコメントをフィードバックする)。

○評価方法・基準 (合格基準)

・授業での取り組み姿勢を評価する (消極的な参加ではなかったか)。

・作成されたレポート内容から、到達目標に沿った学習が確認できたか、評価する。

・eポートフォリオシステムにて教員コメントの確認を行ったか、評価する。

注釈：クラスサイズ：55名程度

◆「体験学習：研究室体験」 7/13 (金)、7/20 (金) 14:35-16:05

到達目標：① 研究現場の雰囲気を知る

② 最新の研究事情を理解する。

③ コミュニケーション力を養うことができる。

Key Points：①学習目標の理解

②実験を補助することで、研究について実感する

○事前学習

本体験学習では事前学習を行わず、授業を進める。

○授業内容 (90分)：◆レクチャー、●個人ワーク、▲グループワーク

経過時間	内容	注意点・教材
5分	◆ 導入 出席確認、本日の内容の確認	
30分	◆ 学生は、各科の担当教員から研究内容について説明を受け、討論する	
180分	● 学生は、各科の担当教員について、研究室において現場を体験する。	
10分	● 振り返り：作業を振り返り、自己評価を行う。	振り返りシートに記載する。
10分	◆ まとめ：授業全体を振り返り、学んだこと、到達目標についての重要な点を学生から導く	eポートフォリオ用授業レポート用紙
	◆ eポートフォリオについての説明、レポート用紙記載の説明、次回の授業の予告等	SIH 道場冊子 (配布済み)

○事後学習

振り返り内容をまとめ、eポートフォリオ用授業レポート用紙に記載し、学務係を通じて担当教員に提出する。(教員はコメントをフィードバックする)。

○評価方法・基準 (合格基準)

・授業での取り組み姿勢を評価する (消極的な参加ではなかったか)。

・作成されたレポート内容から、到達目標に沿った学習が確認できたか、評価する。

・eポートフォリオシステムにて教員コメントの確認を行ったか、評価する。

注釈：クラスサイズ：1~3名程度

◆「体験学習：相互歯磨き学習」 4/20（金）14:35-16:05

到達目標：① 基本的マナーを守ることができる。

- ② コミュニケーション力を養うことができる。
- ③ ホスピタリティ・マインドをもって対応することができる。

Key Points：①到達目標の理解

- ②相互の立場に立った経験と相手からのフィードバックによる気づき
- ③e ポートフォリオシステムによる担当教員コメントへの振り返り

○事前学習

本体験学習では事前に相互歯磨きを行うにあたり大切と思うことをキーワードとして考えてきてもらう（課題資料を事前に配付する）。事前に想像力を喚起したうえで、授業に臨んでもらう。

○授業内容（90分：◆レクチャー、●個人ワーク、▲グループワーク）

経過時間	内容	注意点・教材
5分	◆ 導入 出席確認、本日の内容の確認	名札、ワークシート、必要物品の配付
40分	▲ペア同士で相互歯磨きをする。 (20分程度で術者役側と患者役側の交替を促す)	基本的な説明は行うが、あくまでもお互いの思いやりでポジティブなコミュニケーションの使い方を工夫するように促す。
10分	●個人で振り返り 相互歯磨きを振り返り、ワークシートを仕上げる。	ワークシート
10分	▲ペアでフィードバック：相互歯磨きを振り返り、お互いにどんなことを思っていたのかどんなことを気にしていたのかを相互にフィードバックする。	制限時間を設けて、お互いの気持ちを速慮なく伝えられるような雰囲気を作る。
10分	▲全体に対するフィードバック：人の口を触ることがどんなことか、何を大切に考えないといけないか、各自の考えを発表してもらう。	発表者が偏らないよう配慮する。発言に対して短くコメントする。
5分	◆まとめ：人の口を触ることの意味を再確認する。	
10分	▲後片付け ●授業全体を振り返り、授業レポートを作成させる。	e ポートフォリオ用授業レポート用紙

○事後学習

振り返り内容をまとめ、e ポートフォリオ用授業レポート用紙に記載し、学務係を通じて担当教員に提出する。(教員はコメントをフィードバックする)。

○評価方法・基準（合格基準）

- ・授業での取り組み姿勢を評価する（消極的な参加ではなかったか）。
- ・作成されたレポート内容から、到達目標に沿った学習が確認できたか、評価する。
- ・eポートフォリオシステムにて教員コメントの確認を行ったか、評価する。

注釈：クラスサイズ：55名程度

◆「文章力：アカデミック・ライティング入門／読書レポート」 5/11（金）14:35-17:50

到達目標：

- ① 論理的文章やレポートの作成において、注意すべき点について1つ以上説明することができる。
- ② 論理的に読書レポートを作成することができる。

Key Points：①ラーニングスキル（文章力）の育成

- ②振り返りの経験

○事前学習

「アカデミック・ライティング入門」：授業前に与えられた資料（課題）に対する事前レポートを作成する。

○授業内容（3回の対面授業：◆レクチャー、●個人ワーク、▲グループワーク）

経過時間	内容	注意点・教材
1回目 4/7（木） 60分	◆ 導入「読書レポートについて」 本関連授業の到達目標と授業の概要について説明し、事前学習の課題を与える。	事前学習の課題に関する資料
事前学習	● 「事前レポート」の作成 与えられた資料（課題）に対する事前レポートを作成する。	
2回目 5/13（金） 180分	「アカデミック・ライティング入門」 ◆担当教員は学生から提出された事前レポート内容に関するフィードバックを総括して行う。 ●学生は、重要ポイントを確認し、自身のレポートを授業中に校正して、最終的な「読書レポート」の書き方を学ぶ。	「アカデミック・ライティング入門」授業のハンドアウト
授業外学習	● 「読書レポート」の作成 学生は課題図書の中から一冊を選び、事前に示した「読書レポート」の要件に従って記載して提出する。	課題図書2冊
3回目 30分 7/7（金）	提出された「読書レポート」に対して教員がコメントを記載して返却する。 ●振り返り 学生は読書レポートに対するコメントを確認し、各自の自己評価内容を再度提出する。	読書レポート授業振り返り用紙

◆ 「TBL 入門」 6/22 (金) 14:35-16:05

Key Points : ①チーム基礎型学習 (TBL) の経験
②振り返りの経験

○事前学習

予習資料を学習する。

○授業内容 (90分) : ◆レクチャー、●個人ワーク、▲グループワーク

経過時間	内容	注意点・教材
5分	◆導入 出席確認、本日の内容の確認	
10分	●個人テスト 予習内容に関して個人テストを実施する。	
15分	▲グループテスト 個人テストと同じ内容の試験をグループでディスカッションして解答する。解答はスクラッチカードで行う。	グループ (6~7名)
15分	◆フィードバック グループテストの解答に関して教員がフィードバックする。	
20分	▲グループ課題 臨床で遭遇することの多い症例に関する問題を与える。臨床現場で遭遇することの多い解答がない症例の方が良い。	
15分	◆フィードバック グループ課題に関して教員がフィードバックする。	
5分	●振り返り 授業全体を振り返り、学んだこと、プレゼンテーションについての重要な点をまとめ、自己評価を行う。	
5分	◆まとめ	

○事後学習

振り返り内容をまとめ、e ポートフォリオ用授業レポート用紙に記載し、学務係を通じて担当教員に提出する。(教員はコメントをフィードバックする)。

注釈

- ★*1 テーマに体験学習、または専門分野に関連するものを取り扱う。
- ★クラスサイズ: 40~45名程度

○授業外学習

課題図書2冊の中から1冊を選び、「読書レポート」を規定の要件に従って記載して提出する。
(教員はコメントをフィードバックする)。

○評価方法・基準 (合格基準)

- ・授業での取り組み姿勢を評価する (消極的な参加ではなかったか)。
- ・作成された読書レポート内容から、到達目標に沿った学習が遂行できたか、評価する。
- ・教員コメントの確認および自己評価内容について評価する。

注釈: クラスサイズ: 55名程度

◆ 「PBPL 入門」 6/8 (金) 14:35-16:05

Key Points : ①問題解決型学習 (PBL) の経験 ②振り返りの経験

○事前学習

与えられたテーマ*1について1分間プレゼンテーションの準備を行う。

○授業内容 (90分) : ◆レクチャー、●個人ワーク、▲グループワーク

経過時間	内容	注意点・教材
5分	◆導入 出席確認、本日の内容の確認、グループ分け	グループ (6~7名)
10分	◆臨床症例提示 質問があれば受け付ける。	
35分	▲グループディスカッション 治療に関するディスカッションを行う。	
20分	▲いくつかのグループによるプレゼンテーション グループディスカッションの内容を発表する。	
10分	●振り返り 授業全体を振り返り、学んだこと、プレゼンテーションについての重要な点をまとめ、自己評価を行う。	
5分	◆まとめ 次回の授業の予告、TBL 資料配布	

○事後学習

振り返り内容をまとめ、e ポートフォリオ用授業レポート用紙に記載し、学務係を通じて担当教員に提出する。(教員はコメントをフィードバックする)。

注釈

- ★*1 テーマに体験学習、または専門分野に関連するものを取り扱う。
- ★クラスサイズ: 40~45名程度

○評価方法・基準（合格基準）
 1日目～3日目のチュートリアル授業における評価は各チャーターが態度、積極性、学習意欲等について評価する。4日目の発表は各チャーターがグループブック評価表を用いて、内容の構成、姿勢、質疑応答について評価する。シナリオ作成者はフィードバックを行う。

注釈：クラスサイズ：口腔保健学科 15名
 歯科衛生士概論授業において実施

◆「体験学習：歯科診療体験」 2年前期 4/13-7/20

- 到達目標：①大学病院の歯科医師の仕事を知る。
 ②自己主導型学習（アクティブラーニング）を実践する。
 ③歯科医としての基本的マナーを守る。
 ④信頼関係を築くためにコミュニケーションスキルを実践する。
 ⑤ホスピタリティ・マインドをもって他者と接する。
 ⑥個人情報保護について説明する。
 ⑦研究室、大学病院における感染防御について説明する。
 ⑧医療中での歯科診療の役割を述べる。

Key Points：①到達目標の理解

- ②相互の立場に立った経験と相手からのフィードバックによる気づき
 ③eポートフォリオシステムによる自己評価と振り返り

○事前学習

本体験学習では、事前に臨床の現場に出るにあたり医療人としてのマナーを考える。また、個人情報保護や感染防御といった臨床の場で基本的に必要な知識を確認する。（課題資料を事前に配付する）。

○授業内容（3回の授業〈第2学年前期〉：◆レクチャー、●個人ワーク、▲グループワーク）

経過時間	内容	注意点・教材
1回目 60分×1 4/13（金）	◆導入「個人情報保護・感染防御について」 基本的な医療人としてのマナーと実習に望む心構えを説明し、個人情報保護や感染防御といった事項について講義を行い、臨床現場体験に備える。	事前学習の課題に関する資料
2回目 60分×1 4/20（金）	▲「歯科診療体験の目標を考える」 歯科診療体験で何を学ぶかかをグループで討議し、グループ毎に実習の目標を設定する。 ●病院のルール、個人情報保護や感染防御といった点について再度確認を行う。	
3回目 180分	「歯科診療体験」 ◆学生は、各診療科の担当教員について、診療室において現場を体験する。 ●学生は臨床現場における自分の振る舞いを振り返	4/27-7/20
授業外学習		

◆「PBL-チュートリアル（口腔保健学科）」

6/1（金）、6/8（金）、6/15（金）、6/22（金）、11:00-12:00

授業概要：将来の歯科衛生士としての自覚と責任を涵養することを目的とした課題について、小人数グループの学生全員が当事者意識をもって討議し、授業の目的を明確にする。話し合ったことを整理し、発表資料としてまとめ、7分程度のプレゼンテーションを行う。

到達目標：提示課題に沿ったグループで討議し、内容について整理して発表することができる。

- Key Points：①設問内容に沿った問題点を抽出する
 ②問題点について討議する
 ③グループで話し合った意見や解決方法をまとめる
 ④グループでの意見を発表する
 ⑤他のグループの意見について評価する

○事前学習

2日目を以降は課題に対する事前学習または発表準備を行う。

○授業内容（各60分：◆レクチャー、●個人ワーク、▲グループワーク）

経過時間	内容	注意点・教材
1日目 10分	◆導入 PBL-チュートリアルとは 本日の授業内容の確認	チュートリアル授業マニュアル 課題シート
10分	▲グループによる作業：シナリオ提示	ホワイトボード
20分	▲問題点（疑問点、論点、キーワード）の抽出	チャーター評価表
10分	▲学習方法の立案	
10分	●自学自習	
2日目 20分	▲グループ内での発表と討議	ホワイトボード
30分	▲問題点の解決、整理	パーソナルコンピュータ チャーター評価表
10分	●個人による作業	
3日目 10分	▲グループ内での発表と討議	ホワイトボード
10分	▲問題点の解決、整理	パーソナルコンピュータ チャーター評価表
40分	▲発表の準備	チャーター評価表
4日目 40分	▲各グループによる発表と全体討議 各グループの発表時間：7分、全体討議：5分	作成USB媒体 パーソナルコンピュータ チャーター評価表
12分	◆シナリオ作成者によるフィードバック	学生ふり返り用レポート用紙
8分	●ふり返り用レポート用紙への記載	

○事後学習

ふり返り内容をまとめ、学生ふり返り用レポート用紙に記載し、担当教員に提出する。

4回目 90分 7120 (金)	<p>るとともに、実際の診療の場を通して、感じたこと、考えたことを、各自まとめ。</p> <p>▲振り返り 学生は、診療体験においての自分の反省・考察等を基に、グループで話し合いを行う。</p>	<p>グループで話し合った内容は、文章にまとめ、e-ポートフォリオに記入。教員はコメントをフイーードバックする</p>
------------------------	---	---

○評価方法・基準 (合格基準)

- ・授業での取り組み姿勢を評価する (消極的な参加ではなかったか)。
- ・e-ポートフォリオシステムにて教員コメントの確認を行ったか、評価する。

注釈：クラスサイズ：歯学科 40 名程度

SIH道場必須項目設計表（概要のみ）

薬学部

	到達目標	評価方法・基準	内容		授業実施枠	
			事前学習	授業		
①	<p>体験学習</p> <p>早期体験学習として講演等を聴講し、自分の将来の進路や方向性を、大学における学習と関連させて説明することができる。</p>	<p>全講演の出席と受講態度を評価する。</p>	<p>反転授業コンテンツ「SIH道場とは」を視聴する。 「チーム医療入門」WSテーマに関する資料を閲覧する。</p>	<p>SIH道場 ・講演「薬局で働く」「働くってなに」 ・講演「薬害について、B型肝炎について」 ・「薬学の粗を学ぶ～ころざし～」 チーム医療入門</p>	<p>③ 学習の振り返り</p> <p>学んだことをチーム医療入門でのプロダクト作成に反映させる。 e-ポートフォリオで教員による評価を確認する。</p>	<p>SIH道場、チーム医療入門の中で実施</p>
	<p>文章力</p> <p>自分自身の考えを論理的に表現することができる。</p>	<p>ルーブリック評価表を用いる。</p>	<p>文章力の反転授業コンテンツを視聴する。</p>	<p>チーム医療入門 ・学んだこと、今後の学習に関する 目標についてレポートを作成する。</p>	<p>学んだことをレポートで提出する。 e-ポートフォリオで教員による評価を確認する。</p>	<p>チーム医療入門の中で実施</p>
②	<p>プレゼン力</p> <p>効果的なプレゼンテーションを行うためのツールを用いて説明することができる。 他の班のプレゼンテーションを聞いて討議に参加することができる。</p>	<p>ルーブリック評価表を用いる。</p>	<p>プレゼン力の反転授業コンテンツを視聴する。</p>	<p>チーム医療入門 ・プロダクトをもとに各班の発表と討議を行なう。</p>	<p>学んだことをリフレクションシートに記載する。 e-ポートフォリオで教員による評価を確認する。</p>	<p>チーム医療入門の中で実施</p>
	<p>協働力</p> <p>WSを能動的に進めることができる。 WSに積極的に参加することができる。 他学部学生とコミュニケーションを取ることができる。 他学部学生と協働してプロダクトを作成することができる。</p>	<p>ルーブリック評価表を用いる。</p>	<p>協働力の反転授業コンテンツを視聴する。</p>	<p>チーム医療入門 ・講演内容を参考にしてWSテーマについて班単位でWSを行い、プロダクトを作成する。</p>	<p>学んだことをリフレクションシートに記載する。 e-ポートフォリオで教員による評価を確認する。</p>	<p>チーム医療入門の中で実施</p>

8. 薬学部

SIH道場 プログラム設計評価シート

薬学部 薬学科・創製薬科学科

※学生のeポートフォリオを参考に記述してください。

要素	項目	チェック	学生の学修効果・成果	改善したい点	次年度に向けた対応	
早期体験	①設計した到達目標を学生は達成することができた	(はい)どち5ともいいえ 設計していい	薬学科は「薬局で働く」、創製薬科学科は「働くってなに？」と異なる講演を同時並行で敬愛した。また全国薬客接客者団体連絡協議会(薬客連)講師2名と非団体の「薬客について」と「B型肺炎について」の講演をおよび、映画「薬学の祖を学ぶ〜こころさ〜」を視聴した。これらの学修を通じて、薬剤師や創製薬研究者としての具体的なイメージをおよび、薬物の内包する「薬」と「毒」の両性を理解した。	昨年度までは学科共通として「薬局で働く」のみを全員が聴講していた。これは当該講演が薬剤師の先生によるものであるため、本年度は将来薬剤師として働く可能性のある薬学科の学生のみが聴講した。しかしながら薬学科の学生も製薬企業で働く可能性もあるため、「働くってなに？」に関する授業も薬学科の希望者にも聞かせたのも良いかもしれない。	本年度が、薬学科と創製薬科学科の初めての分離入試だった。今年度の対応を教務委員会などで振り返りなどを今後行い、改善点があれば修正して行きたいと考えている。	
	②設計した内容は、専門分野の学修に対して学生を動機づけるという点で効果的だった	(はい)どち5ともいいえ 設計していい	薬学科は「薬局で働く」、創製薬科学科は「働くってなに？」と異なる講演を同時並行で敬愛した。また全国薬客接客者団体連絡協議会(薬客連)講師2名と非団体の「薬客について」と「B型肺炎について」の講演をおよび、映画「薬学の祖を学ぶ〜こころさ〜」を視聴した。これらの学修を通じて、薬剤師や創製薬研究者としての具体的なイメージをおよび、薬物の内包する「薬」と「毒」の両性を理解した。	文章として良く書けていないとしても、どうしても表面的な感想文の域を出ていないレポートが多く、振り返り教員もそれを指摘している。また読字読字や舌足らずな表現などが散見している。	事前に良く説明することや、例えば「良く書いてある悪い例」などを解説するなどでお応えすること、声を出して読むことなどを、振り返り教員が指摘している。なので、学生全体に還元したい。	
	③学生に課した事前学習は、学生の体験学習を意義あるものにするために効果的だった	(はい)どち5ともいいえ 設計していい	薬学科は「薬局で働く」、創製薬科学科は「働くってなに？」と異なる講演を同時並行で敬愛した。また全国薬客接客者団体連絡協議会(薬客連)講師2名と非団体の「薬客について」と「B型肺炎について」の講演をおよび、映画「薬学の祖を学ぶ〜こころさ〜」を視聴した。これらの学修を通じて、薬剤師や創製薬研究者としての具体的なイメージをおよび、薬物の内包する「薬」と「毒」の両性を理解した。	チーム医薬入門の振り返りレポートから判断して、ほぼ全員の文章力のスキルがレベルアップしている。また、目標を達成している合格点を越えることから、目標は達成されていると考える。また文章力の評価観点として、①主眼の根拠付け、②校正の明瞭さ、③文章表現の適切さについて、すべて優れていたと評価された割合は、薬学科は48.8% (20/41) であり、創製薬科学科は39.5% (15/38) であった。	文章として良く書けていないとしても、どうしても表面的な感想文の域を出ていないレポートが多く、振り返り教員もそれを指摘している。また読字読字や舌足らずな表現などが散見している。	事前に良く説明することや、例えば「良く書いてある悪い例」などを解説するなどでお応えすること、声を出して読むことなどを、振り返り教員が指摘している。なので、学生全体に還元したい。
ラーニングスキル	④設計した到達目標を学生は達成することができた	(はい)どち5ともいいえ 設計していい	チームとして作業を行った全72班には、概ね11名の薬学部学生の参加が認められるが、医療薬学共同で行われたチーム医薬入門のため、薬学部の学生のみでの結果を抽出できない。そのため班に対する評価ではあるが、プレゼンテーション力の評価観点として、①内容の構成、②姿勢、③視覚資料、④理解しやすさの4つの観点について、すべて優れていたと評価された割合は、81.9% (59/72) であり、目標は達成されていると考える。	レポートなどから読み取ると、「医療チームの場合には医師が中心になることが多い」と考えられていることが多いが、これは現状を考えると仕方ないところかもしれない。しかしながらチームの中で自分の意見や考えを自然に「提言できる」ように促したい。	プロダクトのプレゼンテーションスキルに関しては、1年生のこの時期のみで改善させるのは無理がましいと考える。しかしながらチームのなかで意見交換前にお互いの自分自身に関する紹介やプロダクト作成中の発言や意見交換などは、積極的に伝える様子を促して行きたいとは考えている。しかし、チーム医薬のようない授業で、「プレゼン出来る自分」を知るだけでも1年生での本授業の目的を達したと考えると良いのではないかと考える。	プロダクトのプレゼンテーションスキルに関しては、1年生のこの時期のみで改善させるのは無理がましいと考える。しかしながらチームのなかで意見交換前にお互いの自分自身に関する紹介やプロダクト作成中の発言や意見交換などは、積極的に伝える様子を促して行きたいとは考えている。しかし、チーム医薬のようない授業で、「プレゼン出来る自分」を知るだけでも1年生での本授業の目的を達したと考えると良いのではないかと考える。
ラーニングスキル	⑤設計した到達目標を学生は達成することができた	(はい)どち5ともいいえ 設計していい	チームとして作業を行った全72班には、概ね11名の薬学部学生の参加が認められるが、医療薬学共同で行われたチーム医薬入門のため、薬学部の学生のみでの結果を抽出できない。そのため班に対する評価ではあるが、協働力の評価観点として、①基本的なルール、②話す・聞く、③アイデアの発想と取組の3つの観点について、すべて優れていたと評価された割合は、81.9% (59/72) であり、目標は達成されていると考える。	本年度のチーム医薬において創製薬科学科の学生の何人かは「将来は新薬の研究を志望している」という考えが、チーム医薬の現場に直接かかわることはないと、チーム医薬の現場に参加していないが、むしろ思う」などの意見が出た。それらの学生が本プログラムに積極的に参加していないが、むしろ思う」などの意見が出た。それらの学生が本プログラムに積極的に参加していないが、むしろ思う」などの意見が出た。それらの学生が本プログラムに積極的に参加していないが、むしろ思う」などの意見が出た。	チーム医薬の現場に直接かかわることはないと、チーム医薬の現場に参加していないが、むしろ思う」などの意見が出た。それらの学生が本プログラムに積極的に参加していないが、むしろ思う」などの意見が出た。それらの学生が本プログラムに積極的に参加していないが、むしろ思う」などの意見が出た。	チーム医薬の現場に直接かかわることはないと、チーム医薬の現場に参加していないが、むしろ思う」などの意見が出た。それらの学生が本プログラムに積極的に参加していないが、むしろ思う」などの意見が出た。それらの学生が本プログラムに積極的に参加していないが、むしろ思う」などの意見が出た。
協働力	⑥設計した到達目標を学生は達成することができた	(はい)どち5ともいいえ 設計していい	チームとして作業を行った全72班には、概ね11名の薬学部学生の参加が認められるが、医療薬学共同で行われたチーム医薬入門のため、薬学部の学生のみでの結果を抽出できない。そのため班に対する評価ではあるが、協働力の評価観点として、①基本的なルール、②話す・聞く、③アイデアの発想と取組の3つの観点について、すべて優れていたと評価された割合は、81.9% (59/72) であり、目標は達成されていると考える。	本年度のチーム医薬において創製薬科学科の学生の何人かは「将来は新薬の研究を志望している」という考えが、チーム医薬の現場に直接かかわることはないと、チーム医薬の現場に参加していないが、むしろ思う」などの意見が出た。それらの学生が本プログラムに積極的に参加していないが、むしろ思う」などの意見が出た。それらの学生が本プログラムに積極的に参加していないが、むしろ思う」などの意見が出た。	チーム医薬の現場に直接かかわることはないと、チーム医薬の現場に参加していないが、むしろ思う」などの意見が出た。それらの学生が本プログラムに積極的に参加していないが、むしろ思う」などの意見が出た。それらの学生が本プログラムに積極的に参加していないが、むしろ思う」などの意見が出た。	チーム医薬の現場に直接かかわることはないと、チーム医薬の現場に参加していないが、むしろ思う」などの意見が出た。それらの学生が本プログラムに積極的に参加していないが、むしろ思う」などの意見が出た。それらの学生が本プログラムに積極的に参加していないが、むしろ思う」などの意見が出た。
振り返り	⑦学生の評価は、ルーブリック等で基準を明確にして行った	(はい)どち5ともいいえ 設計していい	振り返りレポートの提出により、一連のSIH道場授業全体の把握と検証ができ、またそれに対する教員の評価やコメントを学生にフィードバックできたことと考える。	学生と全く同様に、チーム医薬の振り返りに関する教員の温度差や考え方の違いによりコンセンサスが得られなかった印象がある。また、振り返りが毎年変わることや、振り返りの評価は2年に1度は当分の間、ターゲットを何年か良いのか解らないのか、ターゲットは何をすれば良いのか(前回担当時に何をしたらか)を良く解っていること(前担当時に何をしたらか)を良く解っていること	左記理由で評価者の印への参加を、コーディネーターに何回依頼しても評価者の参加率が低いのは、良いアイデアがないものだろうか。それこそチーム医薬開催して、コンセンサスや評価法の統一を試みるのはどうだろうか(恐らくプログラムの立上げ時には試行したとは思いますが)。	左記理由で評価者の印への参加を、コーディネーターに何回依頼しても評価者の参加率が低いのは、良いアイデアがないものだろうか。それこそチーム医薬開催して、コンセンサスや評価法の統一を試みるのはどうだろうか(恐らくプログラムの立上げ時には試行したとは思いますが)。
	⑧振り返りの意義や方法について、学生に説明する、またはテキストの利用などで理解を促した	(はい)どち5ともいいえ 設計していい	振り返りレポートの提出により、一連のSIH道場授業全体の把握と検証ができ、またそれに対する教員の評価やコメントを学生にフィードバックできたことと考える。	1年生に、このプログラムの「意図すること」を理解させることは可能かもしれない。しかしながら学生それぞれに異なる理解があるかもしれない。また、難しいところがあるかもしれないと感じた。また、難しいところは「コミュニケーションの難しさ」を記載していたが、その多くは「フィードバック」の「難しさ」を指している場合が多いとの印象を持つた。	今年度から始まるパフォーミングマナー科目のように、学年が上がるにつれて毎年開催される同様のプログラムが必要かもしれない。しかしながら、これらから考えるこのプログラムの中で設定するのは難しいと感じる。各教員が自分の授業の中でアクティビティやアクティビティの取組を工夫することによって、また「コミュニケーション」の定義や分類(種類)を、プログラムの最初に理解させる方が良いのではないかと感じた。	今年度から始まるパフォーミングマナー科目のように、学年が上がるにつれて毎年開催される同様のプログラムが必要かもしれない。しかしながら、これらから考えるこのプログラムの中で設定するのは難しいと感じる。各教員が自分の授業の中でアクティビティやアクティビティの取組を工夫することによって、また「コミュニケーション」の定義や分類(種類)を、プログラムの最初に理解させる方が良いのではないかと感じた。
	⑨各授業(体験を含む)の最後やSIH道場の終了時に学生が振り返る時間を設けた	(はい)どち5ともいいえ 設計していい	振り返りレポートの提出により、一連のSIH道場授業全体の把握と検証ができ、またそれに対する教員の評価やコメントを学生にフィードバックできたことと考える。	チーム医薬の実施後の評価について、薬学部学生はワークショップ「そう思う」の問いに対して「全くそう思う」と、「そう思う」の問いに対して6.5%から8.8%と、他学部・他学科の学生と比べて必要かとの問いに対しては、実施前の76%から92%へと上昇している。このことからも本プログラムの効果は、全体としてポジティブな印象を得たという印象のもと修了したと考える。	1年生に、このプログラムの「意図すること」を理解させることは可能かもしれない。しかしながら学生それぞれに異なる理解があるかもしれない。また、難しいところがあるかもしれないと感じた。また、難しいところは「コミュニケーションの難しさ」を記載していたが、その多くは「フィードバック」の「難しさ」を指している場合が多いとの印象を持つた。	今年度から始まるパフォーミングマナー科目のように、学年が上がるにつれて毎年開催される同様のプログラムが必要かもしれない。しかしながら、これらから考えるこのプログラムの中で設定するのは難しいと感じる。各教員が自分の授業の中でアクティビティやアクティビティの取組を工夫することによって、また「コミュニケーション」の定義や分類(種類)を、プログラムの最初に理解させる方が良いのではないかと感じた。
総合		5(4)・2・1				

※その他、他の授業との接続・発展内容・授業運営等の課題がございましたらお書きください。

平成30年度 薬学部 SIH 道場 < 授業詳細表 >

■ 目的

- 1) 徳島大学の新生が大学教育の意義を理解するとともに、自身の専門分野における先端研究を早期に体験することで、研究者・医療人としてのプロ意識を早期に構築する。
- 2) 学習の基本となる文章作成法、プレゼンテーション方法論、自己評価法を学び、それらの実践を通して大学教育に能動的に参加できる知識、技能、態度を身につける。
- 3) 医療現場で働く各専門職種を目指す学生が相互理解し、将来、ともに円滑なチーム医療を行える基盤を形成する動機付けを行う。
- 4) 医療人を目指す学生として何をすべきか、今後の学生生活で何を学び、修得していくべきかを、他学部、他学科の学生と共に考え、お互いから学ぶことを通して、チーム医療の重要性を認識する。

■ 到達目標

チーム医療の基盤を形成することができる

- (1) ノンテクニカルスキル（コミュニケーション力）を育成することができる。
- (2) 班員の意見をまとめて理論的に説明することができる。
- (3) チーム医療入門（畿本地区合同ワークショップ）に積極的に参加し、他学部学生とコミュニケーションを取りながら、協力してプロダクトを作成できる協働力を養うことができる。
- (4) 将来の進路や方向性について考察し、大学における学習と関連させて説明することができる。
- (5) レポートの作成において、注意すべき点について説明することができる。
- (6) 効果的なプレゼンテーションを行うための基本的な手法・ツール等を使うことができる。
- (7) 学習の振り返りや気づきを基に、今後の学修計画を立てることができる。

■ 成績評価

「チーム医療入門振り返りレポート」「ラーニングスキル・ルーブリック評価表」「プレゼンテーションプロダクト」をもとに評価する。

- 「チーム医療入門振り返りレポート」
チーム医療入門で学んだこと、今後の学習の目標について、A4 用紙一枚（1000 字程度）にまとめる。
- 「ラーニングスキル・ルーブリック評価表」
ラーニングスキル＜協働力＞ルーブリック評価表及び、ラーニングスキル＜プレゼンテーション力＞ルーブリック評価表については、チーム医療入門 WS でチューターから評価を受ける。
ラーニングスキル＜文章力＞ルーブリック評価表については、担当教員より評価を受ける。
- 「プレゼンテーションプロダクト」
チーム医療入門 WS で他学部学生と協働して作成する。

【合格基準】

以下の評価基準のうち、「必須」と書いてある項目をすべて満たすこと。

- ・体験学習について、すべて出席すること。（必須）
- ・「チーム医療入門振り返りレポート」について、指定項目が全て記載されていること。（必須）
- ・作成したプレゼンテーションプロダクトが添付されていること。（必須）
- ・「自分がポスター発表をしている様子」の動画へのリンクが付与されていること。（任意）

- ・その他、レポートに必要なと思う内容。（任意）

■ 授業内容概要

早期体験学習として先輩の講演等を聴講する。また、チーム医療入門に参加し、他学部学生と協働してプレゼンテーションコンコンテンツを作成し、発表、討議する。

平成30年4月 3日（火） 10:35～10:50 SIH 道場説明

平成30年4月 5日（木） 8:40～ 9:40 講演「薬局で働く」「働くってなに？」

13:00～15:00 講演「薬害について、B型肝炎について」

平成30年4月11日（水） 8:30～10:45 「薬学の祖を学ぶ ～こころざし～」

平成30年9月28日（金） 13:00～17:00 チーム医療入門ワークショップ

■ SIH 道場終了後に担当教員が行うこと

- 1) 担当クラスの学生が提出した「チーム医療入門振り返りレポート」「ラーニングスキル・ルーブリック評価表」「プレゼンテーションプロダクト」が合格基準を満たしているか確認する。
 - ・不合格者には「再提出要求」を出す。
 - ・合格者については、大学入門講座の単位を認定する。
- 2) 「SIH 道場実施報告書」の提出
 - ・所定の様式に沿って作成・提出する。（様式は、Word 版、e ポートフォリオ版の2つがある）
 - ・提出先は e ポートフォリオシステムとする。
- 3) 学生の振り返りに対して、フィードバックする。

■ SIH 道場終了後にコーディネーターが行うこと

- ・授業担当教員の「SIH 道場実施報告書」の提出状況のチェック。未提出者への催促。

＜体験学習（SIH 道場，チーム医療入門）＞

○事前学習

- ・ビデオコンテンツ「SIH 道場とは」を視聴する。

○授業内容

日 時	経過 時間	内 容	備 考
4月3日(火) 10:35 ～10:50	15分	オープニング 出席確認、薬学部 SIH 道場説明	藤野 (授業設計コーディネーター)
4月5日(木) 8:40 ～9:40	60分	講演「薬局で働く」(薬学科) 講演「働くってなに？」(創製薬科学科)	薬学部非常勤講師
13:00 ～15:00	120分	講演「薬害について、B型肝炎について」 (薬学全般)	薬被連講師 B 肝訴訟原告・弁護士講師
4月11日(水) 8:30 ～8:45	15分	薬学の祖を学ぶへこころざし～導入 長井長義簡易説明，ミニテスト	教務委員
8:45 ～10:45	120分	薬学の祖を学ぶへこころざし～ (創薬系)	教務委員
9月28日(金) 13:00 ～17:00	240分	チーム医療入門（蔵本地区合同ワークシ ョップ）	チーム医療入門チューター

○事後学習

1. それぞれの体験学習について，感想・学んだこと等をまとめる。
2. 自分の将来の進路や方向性について考察し，大学における学習と関連づけ，まとめる。

＜ラーニングスキル（チーム医療入門ワークショップ）＞

○事前学修

1. 動画視聴：医療安全におけるノンテクニカルスキルの重要性（約15分）
2. 補助資料確認：動画内容理解を深めるための資料
3. KJ法：ワークショップで利用するKJ法の進め方

○授業内容（当日スケジュール）

- 12:20 受付
- 13:00 オープニングリマーク
- 13:10 基調講演 「地域包括ケアシステムを担う」
講師 白山靖彦 先生（医歯薬学研部 地域医療福祉学分野 教授）
- 14:10 オリエンテーション
- 14:20 ワーク会場へ移動
- 14:30 ワークシヨップ開始
- 16:00 成果発表
- 16:40 「SIH道場アンケート」記入など
- 17:00 終了・片付け

○事後学修

1. 「チーム医療入門振り返りレポート」の作成
2. 評価表による教員からのフィードバック

SIH道場必須項目設計表 (概要のみ)

理工学部・理工学科・社会基盤デザインコース

9. 理工学部・理工学科・社会基盤デザインコース

	到達目標	評価方法・基準	内容		授業実施枠	
			事前学習	授業		
①	社会基盤に関する興味関心を喚起し、学習・研究に対する動機づけを行う。	・レポートの作成と提出	合宿研修に参加すること	<ul style="list-style-type: none"> 各分野の概要の説明 現場見学 社会基盤に関する個別テーマを設け、能動的に調査し、結果をポスターにまとめ、プレゼンテーションを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> レポート作成とそれに基づく議論 ポスター作成・発表とそれに基づく議論 	SIH道場の授業枠内で実施
	基礎調査のレポートを作成する	・提出物をルーブリックを用いて評価する	反転授業ビデオコンテンツ「文章力」の4つの動画を視聴	<ul style="list-style-type: none"> 基礎調査についてレポートを作成。 レポートについて、ルーブリックを用いた評価 	<ul style="list-style-type: none"> 教員は提出されたレポートに対してコメントし議論を行うことで、学生へフィードバックする。 	SIH道場の授業枠内で実施
②	効果的なプレゼンテーションを行うことができる	・プレゼンテーションをルーブリック評価を用いて評価する	反転授業ビデオコンテンツ「プレゼンテーション力」の3つの動画を視聴	<ul style="list-style-type: none"> 個別テーマをまとめたコンテンツ（ポスター）について、プレゼンテーションならびに教員との質疑を行う。 プレゼンテーションについて、ルーブリックを用いた評価 	<ul style="list-style-type: none"> STEM演習の最終発表会において教員と学生のディスカッションを実施し振り返りとする。 作成したポスターをコース事務室に保管し、いつまでも振り返られるようにする。 	SIH道場の授業枠内で実施
	他者と協同して1つの課題に取り組むことができる	上記と同じ	反転授業ビデオコンテンツ「協働性」の3つの動画を視聴	<ul style="list-style-type: none"> 社会基盤に関する個別テーマについてグループ内で意見交換し、ポスター作成を協働で行う。 	<ul style="list-style-type: none"> STEM演習の中でまとめた議論を行い、振り返りを実施する。 	SIH道場の授業枠内で実施

SIH道場 プログラム設計評価シート

理工学部 理工学科 社会基礎デザインコース

※学生のレポートフォーマット、成果物、教員のレポートフォーマットを参考に記述してください。

要素	項目	チェック	学生の学修効果・成果	改善したい点	次年度に向けた対応
早期体験	① 設計した到達目標を学生は達成することができた	<input checked="" type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> どちらでもない <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/> 設計していない	アンケートにおいて9割以上の学生が専門分野に対する興味が深まったと答えており（ことども当てもどちからかと言えはまるるの合計）、一定の学修成果があったとみられる。	STEM教育との連携の強化。	担当者の選出を慎重に行う。
	② 設計した内容は、専門分野の学修に対して学生を動機づけるという点で効果的だった	<input checked="" type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> どちらでもない <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/> 設計していない			
	③ 学生に課した事前学習は、学生の体験学習を意義あるものにするために効果的だった	<input checked="" type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> どちらでもない <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/> 課していない			
ラーニングスキル 文章力	④ 設計した到達目標を学生は達成することができた	<input checked="" type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> どちらでもない <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/> 設計していない	アンケートにおいて9割の学生がレポート等の学術的文章を書く際に必要な準備やルールを理解したと答えており（ことども当てもどちからかと言えはまるるの合計）、一定の学修成果があったとみられる。	SIH道場総括者による全体の把握が困難。	全体像の把握について検討する。
	⑤ 設計したアクティビティ・ラーニング型授業は、学生の学修にとって効果的であった	<input checked="" type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> どちらでもない <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/> 設計していない			
	⑥ 学生に課した授業外学修（事前、または事後）は、学生の学修にとって効果的であった	<input checked="" type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> どちらでもない <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/> 課していない			
ラーニングスキル プレゼン力	⑦ 学生の評価は、ルーブリック等で基準を明確にして行った	<input checked="" type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> どちらでもない <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/> 設計していない			
	⑧ 設計した到達目標を学生は達成することができた	<input checked="" type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> どちらでもない <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/> 設計していない	小グループで調査した後、ポスター発表を行っており、その評価から一定のプレゼン力の向上が見られた。	学修の振り返りが不十分である点。	学修の振り返りを効果的に進めるよう工夫する。
	⑨ 設計したアクティビティ・ラーニング型授業は、学生の学修にとって効果的であった	<input checked="" type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> どちらでもない <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/> 設計していない			
ラーニングスキル 協働力	⑩ 学生に課した授業外学修（事前、または事後）は、学生の学修にとって効果的であった	<input checked="" type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> どちらでもない <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/> 課していない			
	⑪ 学生の評価は、ルーブリック等で基準を明確にして行った	<input checked="" type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> どちらでもない <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/> 設計していない			
	⑫ 設計した到達目標を学生は達成することができた	<input checked="" type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> どちらでもない <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/> 設計していない	小グループで調査した後、ポスター発表を行っており、その活動から協働力の向上が見られた。	SIH道場総括者による全体の把握が困難。	全体像の把握について検討する。
振り返り	⑬ 振り返りの意義や方法について、学生に説明する、またはテキストの利用などで理解を促した	<input checked="" type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> どちらでもない <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/> 設計していない			
	⑭ 各授業（体験を含む）の最後やSIH道場の終了時に学生が振り返る時間を設けた	<input checked="" type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> どちらでもない <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/> 設計していない	昨年度の取り組みにおいて、振り返りが不十分であったことが課題であったため、今年度は授業担当教員へ振り返りの実施の周知を心がけた。アンケートにおいて9割の学生が学修（体験）を振り返ることの重要性を理解したと答えており（ことども当てもどちからかと言えはまるるの合計）、一定の学修成果があったとみられる。	SIH道場総括者による全体の把握が困難。	全体像の把握について検討する。
	⑮ 学生が振り返った内容について教員がフィードバックを行った	<input checked="" type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> どちらでもない <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/> 設計していない			
総合	⑯ 実施したSIH道場プログラムを総合的に見て、平成30年度の授業設計は、学生が到達目標を達成するために、(5.十分であった。4.概ね十分であった。3.ふつう。2.やや不十分であった。1.不十分であった)。	5 (4) 3・2・1	現時点で、レポート作成、小グループ調査、ポスター発表の一連の学修により、設計した到達目標はほぼ達成している。	SIH道場総括者による全体の把握が困難。	全体像の把握について検討する。

※その他、他の授業の接続・発展内容・授業運営等の課題が明らかになりましたらお書きください。

平成30年度 理工学部理工学科社会基盤デザインコース SIH道場 ＜授業詳細表＞

◆目的：徳島大学の新生が大学における学習について、理解するとともに、社会基盤に関する興味関心を喚起し、学習・研究に対する動機づけを行う。また、学習の基本となる文章の書き方、プレゼンテーションの仕方、振り返りの仕方を学び、それらを実践することで、大学における能動的な学習の基本となる知識、技能、態度を身につける。

◆到達目標：

- (1) 社会基盤に関する概要を理解する。
- (2) 能動的な学習の基本となる知識、技能、態度を身に付ける。

◆成績評価：以下の合格基準3点を確認することによって単位を認定する。

【SIH道場の合格基準】

以下の評価基準のうち、「必須」と書いてある項目をすべて満たすこと。

- ・合宿研修に参加したこと（止むを得ず参加できない場合は、別途レポートを課す）。（必須）
 - ・STEM演習の中で、文章力、プレゼン力、協働力の反転授業を体験したこと（Moodleを用いたアタイプ・ラーニングを行ったこと）。（必須）
 - ・ポスターを作成・発表し、複数教員と振り返りを行うこと。（必須）
- *アクティビティ・ラーニングの評価はグループブリック（別紙①）により行う。

【合宿研修】

合宿研修は、体験学習の事前学習に位置づけられており、STEM演習の準備となる。

【STEM演習】

- ・4から5人のグループ単位で社会基盤に関する個別テーマを設け、能動的に調査し、結果をポスターにまとめ、プレゼンテーションを行う。
- ・全ての目標・実施に対応。
- ・STEM演習の詳細は別紙②参考のこと。

◆授業内容（90分）×8回+体験学習（詳細は次ページ）

＜大まかな流れ＞

体験学習を中心に、将来の仕事について考える。

- 1回目 SIH道場・合宿研修の趣旨説明
- 2～8回目 社会基盤施設の現状調査・見学
その他 STEM演習を通じた、アクティビティ・ラーニングの実施

◆8回目の授業後（SIH道場終了後）に担当教員が行うこと

- 1) 「SIH道場実施報告書」の提出

- ・所定の様式に沿って作成・提出する。（様式は、Word版、eポートフォリオ版の2つがある）
- ・提出先はeポートフォリオシステム上とする。

2) 他の担当教員の「SIH道場実施報告書」の閲覧と相互コメント

- ◆STEM演習担当教員が行うこと
- ・反転授業の指導
- ・グループブリックを活用した評価
- ・ポスター作成を通じた振り返り
- ◆8回目の授業後（SIH道場終了後）にコーディネーターが行うこと
- ・授業担当教員の「SIH道場実施報告書」の提出状況のチェック、未提出者への催促。

【1回目】

日時：平成30年4月6日（金）15：45～17：25 場所：K402

○授業内容（90分）：◆レクチャー、●個人ワーク、▲グループワーク

時間	内容	注意点・教材
5分	◆オープニング SIH道場・合宿研修・STEM演習の説明	授業内容ではなく、合格基準を説明する。
120分	◆教員からの社会基盤の関する概要の説明 ・大規模な施設・構造物あるいは建築物などのデザインにおいて大切なこと・配慮すべきこと説明 ・質疑応答 ◆現場研修の概要、訪問先の説明 ・訪問先の見どころ、見学のポイントの説明	・SIH道場・合宿研修・STEM演習の関係が理解されること ・教材の説明 ・見学場所の理解を深めること
5分	◆クロージング 次回の確認	

【2・3・4・5・6・7・8回目 現場見学の実施】

日時：平成30年4月7日（土）9：00～19：00、8日（日）8：40～12：30

見学場所：長安ロダム、太龍寺

○授業内容（約半日）：◆レクチャー、●個人ワーク、▲グループワーク

時間	内容	注意点・教材
10分	◆オープニング 教員の自己紹介、出席確認、現場見学での注意点について説明	現場見学での注意点について理解を促す。
4/7 終日, 4/8 午前	●現場見学 学生は気づいたことをメモしながら現場見学を行う。	
5分	◆クロージング 点呼および諸連絡	

【その他】

STEM 演習を通じたアクティブ・ラーニングの体験

*本コースにおける SIH 道場・合宿研修・STEM 演習の連携教育の考え方は別紙③に示す。

SIH道場必須項目設計表（概要のみ）

理工学部理工学科機械科学コース

10. 理工学部理工学科機械科学コース

	到達目標	評価方法・基準	内容		授業実施枠
			事前学習	授業	
① 体験学習	<p>1. 社会生活の中で機械工学が果たしている役割の一端を理解する。</p> <p>2. もの作りの基本を理解する。</p> <p>3. プレゼンテーションの方法を修得する。</p>	<p>実習への取り組み態度を30点、レポートの提出状況と内容を70点として評価する。</p>	<p>実習手順書を事前に確認し、内容を理解してから実習に臨むように指導する。</p>	<p>安全についての考え方をまず取り上げ、工作機械類を使用したもの作り、データーエンジンとサーボモーターの分解・組立・運転を実習するとともに、性能試験や材料試験を行い、これから学ぶ機械工学・技術の具現方法の一部を体験する。</p>	<p>機械工学専門科目「機械科学実験1」の中で実施</p>
文章力	<p>自らが果たした役割、反省点などを客観的に振り返る文章を書くことができる。</p>	<p>レポートの文章を評価する。</p>		<p>集中研修時に理論的な文章の書き方に関する指導を行う。</p>	<p>SIH道場「集中研修」の枠内で実施</p>
② プレゼンカ	<p>自らの主張を理論的に分かりやすく相手に伝えることができる。</p>	<p>レポートでの発表技術を評価する。</p>		<p>大学での事前説明時にディベートの方法や効果的なプレゼン法について指導を行う。</p>	<p>各ディベート終了後にディベートの内容について教員がコメントして学生にフィードバックする。</p>
協働力	<p>同じグループの学生と協働して準備作業を行うことができる。</p>	<p>レポートの記述内容及び実際のディベート準備作業を評価する。</p>	<p>大学での事前説明時にグループ内での役割を決めさせ、資料収集等の事前準備を行わせる。</p>	<p>集中研修時にグループ作業を行わせ、立論・反論の組み立てを共同で行わせる。</p>	<p>各ディベート時に立論・反論の組み立てについて教員が逐次コメントして学生にフィードバックする。</p>

SIH道場プログラム設計評価シート

理工学部 理工学科 機械科学コース専攻

※学生のレポート・ポートフォリオ、成果物、教員のeポートフォリオを参考にして記述してください。

要素	項目	チェック	学生の学修成果・成果	改善したい点	次年度に向けた対応
早期体験	①設計した到達目標を学生は達成することができた	<input type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> どちらともいえない <input type="checkbox"/> いい <input type="checkbox"/> 設計していない	機械加工、エンジン等の分解・組立・運転、材料試験等の実習およびレポートの作成・指導を通じて、目標とした「社会生活の中で機械工学が果たしている役割の一端を理解する」及び「もの作りの基本を理解する」を達成できたものと考えている。	SIH道場科目「機械科学実験1」において、安全教育レポートの提出期限を厳守する指導を徹底しており、その効果は現れている。「レポートの書き方」における前習課題と卒業後に何をしたいかを明確に持っている学生が2割程度いる一方で、無計画でこれから考えるという学生が2割程度存在している現状が明らかとなった。したがって、早い段階で将来の人生設計図が描けるような継続的指導が必要と思われる。	本年度の内容を同条件下で継続して行い、教年をかけて学修効果の有無について検討を行う。さらに、「レポートの書き方」の演習課題で明らかにした学生の将来設計の情報をアドバイザーへ連絡し、指導のツールとして利用できるようにする。本年度は「飛ぶノート」を利用して振り返りを実施させるとともに「飛ぶノート」の利用率が2枚までという制限のため利用できなかつた。
	②設計した内容は、専門分野の学修に対して学生を動機づける点で効果的だった	<input type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> どちらともいえない <input type="checkbox"/> いい <input type="checkbox"/> 設計していない	資料を用いながら論理的な文章の書き方に関する指導を行い、研修を含めた大学入門講座全体の振り返りも学生に配布した。また、評価基準としてルーブリックも学生に配布した。その結果、ほとんどの学生が注意点や評価点を意識した文章の作成を行った。また、内容についても到達目標である「自らが見出した役割、反響点などを客観的に振り返り返ってきた。昨年度は5人で担当していたルーブリック評価を3人に減らすこととした。	徳島大学工学部導入テキスト『学びの技』はじめの一歩』が理工学部新入生にも配布されているものと思われ、そこに記載されているレポートの書き方が熟読されるよう指導したが、配布されていないことがオリエンテーション終了後に判明した。その後、「機械科学実験1」の最初の授業でコピーを配布することでも対応した。「アクティビティ・ラーニング入門」に記載された内容より理工学部に適した内容となっているので、理工学部学生にはこちらの方が理解しやすいと思われる。	徳島大学工学部導入テキスト『学びの技』はじめの一歩』の原簿が旧工学部のホームページ(http://www.tokushima-u.ac.jp/e/campus/counseling/)に掲載されているので、オリエンテーションで行う「レポートの書き方」でこちらを見るように指導する。
ラーニングスキル 文章力	③学生の評価は、ルーブリック等で基準を明確にして行った	<input type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> どちらともいえない <input type="checkbox"/> いい <input type="checkbox"/> 設計していない	オリエンテーション初日にダイアログの班分け、ダイアログの方法・評価基準及びテーマの説明を行った。オリエンテーション2日目の集中研修の時間内でダイアログを行なった。昨年度は、1回目・2回目ともに同じテーマで対戦チームを変えてダイアログを行なったが、2回目は意見も出尽くし精神的に疲れたとの意見があったので、本年度はテーマ用意した。ダイアログは昨年よりも盛り上がりがあった。	構造的に参加する学生と消極的な学生が見られる。消極的な学生でも自主的に参加を促す何らかの工夫が必要と思われる。また、本コースは1学年あたり100人を超える学生が在籍するため、個人個人に十分なブレゼンテーションの機会と時間を確保することは難しい現状である。	本年度の内容を同条件下で継続して行い、教年をかけて学修効果の有無について検討を行う。
	④学生の評価は、ルーブリック等で基準を明確にして行った	<input type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> どちらともいえない <input type="checkbox"/> いい <input type="checkbox"/> 設計していない	意見の集約や論理整理等のダイアログの準備を通じて、到達目標である協働作業の重要性を学生に体験させることができた。また、事後の自己評価から他人との意見のすり合わせが重要であることを多くの学生が認識していた。したがって、一定の効果があったと考えられる。	構造的に参加する学生と消極的な学生が見られる。消極的な学生でも自主的に参加を促す何らかの工夫が必要と思われる。	本年度の内容を同条件下で継続して行い、教年をかけて学修効果の有無について検討を行う。
ラーニングスキル プレゼン力	⑤設計した到達目標を学生は達成することができた	<input type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> どちらともいえない <input type="checkbox"/> いい <input type="checkbox"/> 設計していない	意見の集約や論理整理等のダイアログの準備を通じて、到達目標である協働作業の重要性を学生に体験させることができた。また、事後の自己評価から他人との意見のすり合わせが重要であることを多くの学生が認識していた。したがって、一定の効果があったと考えられる。	構造的に参加する学生と消極的な学生が見られる。消極的な学生でも自主的に参加を促す何らかの工夫が必要と思われる。	本年度の内容を同条件下で継続して行い、教年をかけて学修効果の有無について検討を行う。
	⑥設計したアクティビティ・ラーニング型授業は、学生の学修にとって効果的であった	<input type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> どちらともいえない <input type="checkbox"/> いい <input type="checkbox"/> 設計していない	レポートの作成・評価やダイアログ後の講評を通じて振り返りを行った。ただし、振り返りは習熟化が重要であるため、専門課程まで学年が進んだ時点で振り返りの習慣の有無及び成績で学修効果の有無を判断する他ない。そのため、現時点では「レポートの書き方」の課題として学生生活の過ごし方について設計させた。全てのレポートを評価することともに将来設計に関するアドバイスを記載して学生に返却した。	振り返りの意義や方法についての説明時間を確保する必要はあるが、現状では非常にタイトなスケジュールでオリエンテーションが実施されている。そのため、オリエンテーションの時間配分を見直し、不必要と思われる行事を削減する必要がある。	本年度の内容を同条件下で継続して行い、教年をかけて学修効果の有無について検討を行う。
ラーニングスキル 協働力	⑦各授業（体験を含む）の最後やSIH道場の終了時に学生が振り返る時間を設けた	<input type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> どちらともいえない <input type="checkbox"/> いい <input type="checkbox"/> 設計していない	レポートの作成・評価やダイアログ後の講評を通じて振り返りを行った。ただし、振り返りは習熟化が重要であるため、専門課程まで学年が進んだ時点で振り返りの習慣の有無及び成績で学修効果の有無を判断する他ない。そのため、現時点では「レポートの書き方」の課題として学生生活の過ごし方について設計させた。全てのレポートを評価することともに将来設計に関するアドバイスを記載して学生に返却した。	振り返りの意義や方法についての説明時間を確保する必要はあるが、現状では非常にタイトなスケジュールでオリエンテーションが実施されている。そのため、オリエンテーションの時間配分を見直し、不必要と思われる行事を削減する必要がある。	本年度の内容を同条件下で継続して行い、教年をかけて学修効果の有無について検討を行う。
	⑧学生が振り返った内容について教員がフィードバックを行った	<input type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> どちらともいえない <input type="checkbox"/> いい <input type="checkbox"/> 設計していない	平成30年度の授業設計は、学生が到達目標を達成するためにおおむね十分であったと言える。	昨年度の改善点をクリアできていないため、昨年度同様の改善点を挙げる。 ・ルーブリックの再設計 ・ダイアログ事前準備時間の確保 ・体験学習レベルの再検討	・ルーブリックの再設計 ・オリエンテーション日程の再検討 ・ダイアログ事前準備時間の確保 ・体験学習レベルの再検討
総合	⑨実施したSIH道場プログラムを総合的に見て、平成30年度の授業設計は、学生が到達目標を達成するために、(5.十分であった。4.概ね十分であった。3.ふつ。2.やや不十分であった。1.不十分であった。 ※その他、他の授業との接続・発展内容・授業運営等の課題が明らかになった。	5 <input type="checkbox"/> 3 <input type="checkbox"/> 2 <input type="checkbox"/> 1			

平成30年度 理工学部理工学科機械科学コース SIH 道場 <授業詳細表>

◆目的：徳島大学の新入生が大学における学習について、理解するとともに、自身の専門分野における先端研究の体験を通して、興味関心を喚起し、徳島大学における学習・研究に対する動機づけを行う。また、学習の基本となる文章の書き方、プレゼンテーションの仕方、振り返りの仕方を学び、それらを実践することで、大学における能動的な学習の基本となる知識、技能、態度を身につける。

◆到達目標：

(1) 自身の専門分野における先端研究（現場）と大学における学習について、関連させて説明することができる。

- ・ 社会生活の中で機械工学が果たしている役割の一端を理解する。
- ・ もの作りの基本を理解する。
- ・ プレゼンテーションの方法を修得する。

(2-1) 論理的文章の作成・レポートの作成において、注意すべき点について1つ以上説明することができる。

・ デイベートや実習において自らが果たした役割、反省点などを客観的に振り返る文章を書くことができる。

(2-2) 効果的なプレゼンテーションを行うことができる。

・ 事実に基づいて自らの主張を論理的に分かりやすく相手に伝えることができる。

(2-3) 他者と協同して1つの課題に取り組むことができる。

・ デイベートや実習で同じグループの学生と協働して準備作業を行うことができる。

(3) 自身の学習活動を振り返る習慣を身につけることができる。

・ ポートフォリオ等を利用して、振り返りをするすることができる

◆成績評価：「SIH 道場最終レポート」を以下の合格基準をもとに評価する。

【SIH 道場最終レポートの内容】

以下の1)～4)を含む「SIH 道場最終レポート」を作成すること。レポートは手書きで作成する。

- 1) ポスター（協働力の目標に対応）
 - ・ 体験学習の成果を、期日までにチームで1枚のポスターにまとめて写真を撮る。
 - ・ ルーブリックの「協働力」に該当するすべての項目について、自己評価する。
- 2) ポスター発表（ブレゼンカ力の目標に対応）
 - ・ 1)で作成したポスターをつかって、グループ以外のメンバーにチームの成果を説明する。
 - ・ ルーブリックの「ブレゼンカ」に該当するすべての項目について、自己評価する。
- 3) 体験学習個人レポート（文章力の目標に対応）
 - ・ 体験学習で学びたいと考えていたこと（事前）、実際に学んだこと（事後）、今後の目標の3点についてA4判1枚程度のレポートを作成する。
 - ・ 配付したルーブリックの「文章力」に該当するすべての項目について、自己評価する。
- 4) SIH 道場での収穫

【SIH 道場レポートの合格基準】

以下の評価基準のうち、「必須」と書いてある項目をすべて満たすこと。

- ・ レポートに「ポスターの写真」が添付されていること。(必須)
- ・ レポートの「自分がポスター発表をしている様子」の動画へのリンクが付与されていること(任意)
- ・ レポートに「体験学習個人レポート」が添付されていること。(必須)
- ・ 「自己評価」と「チームメンバーからの評価（平均点）」が記入された「協働力」「ブレゼンカ」「文章力」のルーブリックが添付されていること。(必須)
- ・ 上記ルーブリックの「協働力」「ブレゼンカ」「文章力」それぞれの総合点が○以上であること。(必須)
- ・ SIH 道場の収穫を1つ以上挙げて、説明すること。収穫が全くない場合は、その理由とどうすれば収穫が得られそうかを書くこと。(必須)
- ・ その他、レポートに必要なと思う内容(任意)

◆授業内容（集中研修＋機械科学実験1）

<授業スケジュール>

実施日時	内容
4月7日(土) 10:00～17:00	SIH 道場の説明・授業の進め方・グループによるデイベート(協働力・ブレゼンテーション力)・文章の書き方(文章力)
前期・機械科学実験1	体験学習及び振り返り(文章力・協働力)

◆最終回の授業後（SIH 道場終了後）に担当教員が行うこと

- 1) 担当クラスの学生が提出した「SIH 道場最終レポート」の添削
 - ・ 不合格者には「再提出要求」を出す。
 - ・ 合格者には点数をつける。(100点満点)
 - 2) 「SIH 道場実施報告書」の提出
 - ・ 所定の様式に沿って作成・提出する。(様式は、Word版、eポートフォリオ版の2つがある)
 - ・ 提出先はeポートフォリオシステム上とする。
 - 3) 他の担当教員の「SIH 道場実施報告書」の閲覧と相互コメント
- ◆最終回の授業後（SIH 道場終了後）にコーディネーターが行うこと
- ・ 授業担当教員の「SIH 道場実施報告書」の提出状況のチェック。未提出者への催促。

【4月7日】

○事前学習

1. デイバートに関する情報・資料収集

○授業内容 (集中講義：◆レクチャー、●個人ワーク、▲グループワーク)

10：00 ●▲デイバート (詳細は次ページ)

11：45 交流会 昼食

12：50 全体セミナー①

◆レポートの書き方入門

◆卒業後の進路・就職について

◆充実した学生生活を送るために

14：20-14：35 休憩

14：35 全体セミナー②

◆カルト、悪質商法、薬物に関する基礎知識

◆大学の学習方法

◆パソコンの利用方法など

○事後学習

1. 添削されたレポートが返却されるので、各人はそれを見てレポートを修正・再提出。

◆新入生日帰り研修 デイバート入門

1. 概要

新入生合宿研修の懇談時間を用いて「デイバート入門」を行う。学生は当日までに資料を熟読し、デイバートのテーマに関するデータ収集を行っておくこと。今回は、各自、肯定・否定・両者の両意見を箇条書きでまとめておくこと。**デイバート立論に必要なデータ収集を行っていない学生には「SIH 連携」の単位を修定せず、別途小論文の執筆等の特別課題を設定する。**

2. 進め方 (時系列)

2.1 デイバートの概略説明 (オリエンテーション時)

大学入門講座の時間に「デイバートとは何か」について説明し、デイバートのテーマについて紹介する。

2.2 デイバートの準備 (全学生：オリエンテーション期間中)

与えられたテーマに基づいて、「肯定側」、「否定側」、「両方」の立論を行うためのデータ収集を、合宿研修当日までに行う。3 チームに分かれて事前準備を行う。A と B がチーム1で対戦し、負けた方がチーム2でC チームと対戦する。

A チーム：チーム1「肯定側」、チーム2「肯定・否定好きな方」

B チーム：チーム1「否定側」、チーム2「肯定・否定好きな方」

C チーム：チーム2「肯定」、「否定」両方を準備(負けたチームがどちらを選択するか分からないため)

2.3 デイバートの実施 (集中研修時)

4. デイバート

4.1 デイバートとは

デイバートの特徴は、つぎの3点に集約される。

①集会や議会等の公共的(public)な議論を行う場において、何らかの論点、課題について、

②対立する複数の発言者によって議論がなされ、

③多くの場合、議論の採否が議論を聞いていた第三者による投票によって判定される。

ことから、そもそもデイバートというものが、一定の場面—公共的な意志決定—で行われるものであることが分かる。また、第三者を納得させるという論述ゲームとも言える。そのため、ゲームを成立させるためには幾つかの気をつけなければならない観点がある。

4.2 デイバートに必要な技術や能力とは

デイバートに必要な(デイバートによって身に付く)能力・技術は、主に以下の4点とされている。

(1) 理解力

議論の大前提として、論題の背景を理解すること、相手の発言内容、意図を理解することが必要である。理解力には、相手の主張を適切に聞き取るリスニング能力、それをメタに取る技術なども必要となる。

(2) 分析力(批判的思考力)

まず、相手の主張内容を吟味して、その論証が十分な根拠を有しているか等を客観的・批判的に分析する能力が必要である。さらに、相手の主張と自らの主張との一致点と相違点を明確にし、相違点がなぜ生まれるのかを分析し、自らの主張を正当化できる能力、また、これらの論理展開を可能とする知識を得るための調査能力も必要となる。

(3) 構成力

相手の論証が十分な根拠を有しているか、双方の主張の相違点と自らの主張の優位性をわかりやすく伝えるためには、自らの発言内容をわかりやすく、説得力ある構成をする能力が必要となる。構成力には、議論の組み立て方、並べ方、表現の選択、時間配分等を適切に行う能力も含まれる。

(4) 伝達力

どんなに優れた構成でも、早口で棒読みしたり、相手の理解を確かめもせずに一方的にしゃべったりすると、その内容を関係者に伝えることはできない。関係者の判断を求める立場上、発言者は、自らの考えを関係者全てに効率よく判りやすく伝達するプレゼンテーション能力が求められる。

4.3 理想的なデイバートを行うために

(1) 議論内容と人格(発言者の属性)の分離

デイバートで正しい理性的な判断を導くには、発言者の「人格」や社会的地位、年齢等の「属性」に頼った議論(例:「こどもが偉そうなのをいうな」、「大学教授が言うのだからそうだろう」)ではなく、「発言内容」「論拠」による判断が大事である。「誰が」ではなく、「何を」議論したのかを問う。

人格や属性に関する議論は、適切な結論を導き出すのに全く役立たないばかりか、感情的な対立を生み、合理的な判断ができなくなる原因にもなる。デイバートに限らず、どのような議論形態においても避けな

ければならない。

(2) 信念や思い込みによる事実誤認や偏向等の排除

公共的な問題に対しては多数の不特定第三者が関係するので、ディベートでは人格と議論の内容を分離し、客観的・論理的な根拠に基づいて議論を展開し、その根拠が覆されれば主張を撤回する論理性・客観性をトレーニングする。信念は人格を構成する大事な要素であるが、客観的な根拠や論理的な考え方によらない信念や思い込みに基づく議論は、事実認識を偏らせたり、感情的なやり取りを誘発したりして、適切な判断の障害となる。

4.4 ディベート進行表

1. (3分) 全体説明、および、進行およびルールの確認
2. (10分) 【作戦タイム】各グループで、各自収集したデータをどの様に使うか、どの様な順番で発表するか、立論のシナリオを検討する。
 3. (5分) 肯定側チーム立論（全員が分担）
 4. (3分) 否定側からの反対質問
 5. (5分) 否定側チーム立論（全員が分担）
 6. (3分) 肯定側からの反対質問
 7. (10分) 【作戦タイム】両チームの立論、反対質問を受け、どの様に自分たちの議論を補強するのかについて検討する。
 8. (4分) 否定側の最終弁論立論（代表者）
 9. (4分) 肯定側の最終弁論立論（代表者）
 10. (3分) 【判決・コメント】
5. 平成30年度のディベートのテーマ
テーマ1. 「学生アルバイトは是か否か」
テーマ2. 「Twitter や Instagram などの SNS は是か否か」

SIH道場必須項目設計表（概要のみ）

理工学部理工学科応用化学システムコース

1 1. 理工学部理工学科応用化学システムコース

	到達目標	評価方法・基準	内容		授業実施枠
			事前学習	授業	
① 体験学習	話題となっている科学技術あるいは社会的に重要な技術などについて理解し、大学での学習内容との関連を説明できる。	出席状況、参加した教員との対話ができていること。	高校卒業までの経験	研究者である大学教員の研究を知る。各自の興味ある科学技術が、大学での学習内容とどのように関連するかを調査する。	SIH道場 (研修旅行)
文章力	大学4年間で取り組みたいことを文章で表現できる。	論理的、科学的な思考力で書けていること。	moodle上の自習ビデオを閲覧する。テキスト「アクティブラーニング入門」の記載内容を理解する。	各自の興味ある科学技術を論理的かつ科学的に整合性のある文章で表現する。	SIH道場
② プレゼン力	クラスメートの前で自己紹介ができる。	誠実に分かりやすく説明できていること。	moodle上の自習ビデオを閲覧する。テキスト「アクティブラーニング入門」の記載内容を理解する。	自己紹介を行う。その際、各自の興味ある科学技術を口頭で論理立てて説明する。	SIH道場
協働力	研修旅行にて協働で清掃活動など活動を行うことができる。	グループメンバーを思いやり活動に対して積極的な貢献ができていること。	moodle上の自習ビデオを閲覧する。テキスト「アクティブラーニング入門」の記載内容を理解する。	研修旅行にて清掃活動や地引き網などを行う。積極性を持って活動に参加する。	SIH道場 (研修旅行)
				③ 学習の振り返り ルーブリック評価表で自己評価する。自己評価に対して教員がコメントを記入する。	

SIH道場プログラム設計評価シート

理工学部 理工学科 応用化学システムコース

※学生のレポート・ポートフォリオ、成果物、教員のレポート・ポートフォリオを参考にして記入してください。

11.理工学部理工学科応用化学システムコース

要素	項目	チェック	学生の学修効果・成果	改善したい点	次年度に向けた対応
早期体験	① 設計した到達目標を学生は達成することができた	はい/どちらでもない/いいえ 説明していない	該当しない	該当しない	該当しない
	② 設計した内容は、専門分野の学修に対して学生を動機づけるという点で効果的だった	はい/どちらでもない/いいえ 説明していない			
	③ 学生に課した事前学習は、学生の体験学習を意義あるものにするために効果的だった	はい/どちらでもない/いいえ 説明していない			
ラーニングスキル 文章力	④ 設計した到達目標を学生は達成することができた	①はい/②どちらでもない/③いいえ 説明していない	興味を持ったテーマに関する学習した結果について、意図した構造を持った文章で伝えるための訓練ができた。	特になし	本年度と同様に実施する
	⑤ 設計したアクテブ・ラーニング型授業は、学生の学修にとって効果的であった	①はい/②どちらでもない/③いいえ 説明していない			
	⑥ 学生に課した授業外学修（事前、または事後）は、学生の学修にとって効果的であった	①はい/②どちらでもない/③いいえ 説明していない			
ラーニングスキル プレゼン力	⑦ 学生の評価は、ルーブリック等で基準を明確に行っていた	①はい/②どちらでもない/③いいえ			
	⑧ 設計した到達目標を学生は達成することができた	①はい/②どちらでもない/③いいえ 説明していない	自ら資料調査をして研究した内容を、パワーポイント・スライドを使って、他の人たちに伝える訓練ができた。	特になし	本年度と同様に実施する
	⑨ 設計したアクテブ・ラーニング型授業は、学生の学修にとって効果的であった	①はい/②どちらでもない/③いいえ 説明していない			
ラーニングスキル 協働能力	⑩ 学生に課した授業外学修（事前、または事後）は、学生の学修にとって効果的であった	①はい/②どちらでもない/③いいえ 説明していない			
	⑪ 学生の評価は、ルーブリック等で基準を明確に行っていた	①はい/②どちらでもない/③いいえ			
	⑫ 設計した到達目標を学生は達成することができた	①はい/②どちらでもない/③いいえ 説明していない	一つの研究テーマに対して、少人数のグループで取り組んだ。各自の負担を決めてリサーチを行い、その結果を持ち寄りまとめて協働力を高める訓練ができた。	特になし	本年度と同様に実施する
振り返り	⑬ 設計したアクテブ・ラーニング型授業は、学生の学修にとって効果的であった	①はい/②どちらでもない/③いいえ 説明していない			
	⑭ 学生の評価は、ルーブリック等で基準を明確に行っていた	①はい/②どちらでもない/③いいえ 説明していない			
	⑮ 振り返りの意義や方法について、学生に説明する、またはテキストの利用などで理解を促した	①はい/②どちらでもない/③いいえ 説明していない	グループ協働を通じて調べた内容を、さらにレポートに文章でまとめる訓練を行い、自分なりに書いた要旨を改善することで振り返りを行うことができた。またそのレポートを教員が読んで学生にコメントを返すフィードバックを行うことにより、再度の振り返りを行うことができた。	特になし	本年度と同様に実施する
総合		564・3・2・1	特になし	特になし	特になし

※その他、他の授業との接続・発展内容・授業運営等の課題があればお知らせください。

平成30年度 理工学部理工学科応用化学システムコース SIH 道場

<授業詳細表>

- ◆目的：徳島大学の新生が大学における学習について、理解するとともに、自身の専門分野における先端研究の体験を通して、興味関心を喚起し、徳島大学における学習・研究に対する動機づけを行う。また、学習の基本となる文章の書き方、プレゼンテーションの仕方、振り返りの仕方を学び、それらを実践することで、大学における能動的な学習の基本となる知識、技能、態度を身につける。

◆到達目標：

- (1) 話題となっている科学技術あるいは社会的に重要な技術などについて理解し、大学での学習内容との関連を説明できる。
- (2) 大学4年間で取り組みたいことを文章で表現できる。
- (3) クラスメートの前で自己紹介できる。
- (4) 研修旅行にて協働で清掃活動など活動を行うことができる。
- (5) 自身の学習活動を振り返る習慣を身につけることができる。

◆成績評価：「SIH 道場最終レポート」を以下の合格基準をもとに評価する。

【SIH 道場最終レポートの内容】

以下の1)～3)を含む「SIH 道場最終レポート」を作成すること。

- 1) 研修旅行における協働作業（協働力、文章力の目標に対応）
 - ・協働作業を行い、その内容および感想を文章で表現する。
 - ・ルーブリックの「協働力」および「文章力」に該当するすべての項目について、自己評価する。
- 2) 自己紹介（プレゼン力の目標に対応）
 - ・自己紹介を行い、興味ある科学技術について説明する。
 - ・ルーブリックの「プレゼン力」に該当するすべての項目について、自己評価する。
- 3) SIH 道場での収穫

【SIH 道場レポートの合格基準】

以下の評価基準のうち、「必須」と書いてある項目をすべて満たすこと。

- ・「自己評価」が記入された「協働力」「プレゼン力」「文章力」のルーブリックが添付されていること。（必須）
- ・研修旅行の内容が適切に表現されていること。（必須）
- ・自己紹介および、興味ある科学技術に対する考えが適切に表現されていること。（必須）
- ・SIH 道場の収穫を1つ以上挙げて、説明すること。（必須）
- ・その他、レポートに必要なと思う内容（任意）

◆授業内容（90分）×5回+体験学習（詳細は次ページ）

<大まかな流れ>

大学で自主的な学ぶ手段を身につけるとともに、将来の仕事について考える。

1. 大学で学ぶとはどういうことかについて考え、学ぶために必要な事柄を理解する。
2. 学習に必要な情報を検索する方法を理解する。
3. 学びのしくみについて説明し、自己学習の重要性を理解する。さらに学習支援室の上手な利用方法を紹介し、これからの4年間の「学びの設計」を考える基盤を作る。
4. 施設見学 常三島キャンパスの主要な施設を実際にまわり、利用方法などを学ぶ。
5. 健康的に学生生活を送るために保健管理センターや、健康管理などについて学ぶ。
6. コミュニケーションの取り方の向上を図り、学生と学生、学生と教員の相互理解を深める。

※各回の詳細は次ページ

◆毎回の授業後に担当教員が行うこと

- ・担当クラスの学生が提出した「振り返りシート」の確認または一言コメント。

◆全ての授業後（SIH 道場終了後）に担当教員が行うこと

- 1) 担当クラスの学生が提出した「SIH 道場最終レポート」の添削
 - ・不合格者には「再提出要求」を出す。
 - ・合格者には点数をつける。(10点満点)
- 2) 「SIH 道場実施報告書」の提出
 - ・所定の様式に沿って作成・提出する。(様式は、Word版、eポートフォリオ版の2つがある)
 - ・提出先はeポートフォリオシステムとする。
- 3) 他の担当教員の「SIH 道場実施報告書」の閲覧と相互コメント

◆全ての授業後（SIH 道場終了後）にコーディネーターが行うこと

- ・授業担当教員の「SIH 道場実施報告書」の提出状況のチェック。未提出者への催促。

【1回目】

○事前学習

テキスト「アクティブラーニング入門」の記載内容を理解する。

○授業内容 (4月3日、90分；◆レクチャー、●個人ワーク、▲グループワーク)

経過時間	内容	注意点・教材
5分	◆オープニング 出席確認、概要説明	
15分	◆レクチャー 本コースの概要の説明を行う (15分)	
15分	◆レクチャー 教員の紹介を行う (15分)	
40分	◆レクチャー 大学で学ぶということについて説明する (40分)	
10分	●振り返り 授業全体を振り返り、一言コメントと自己評価を振り返りシートに書く (5分)	評価視点：自己理解のルーブリック評価
5分	●クロージング 振り返りシート (全員) の提出	

○事後学習

1. 配付資料の復習、不明点の解明。

【2回目】

○事前学習

高校時代に身につけた学習方法、知識。

○授業内容 (4月3日、90分；◆レクチャー、●個人ワーク、▲グループワーク)

経過時間	内容	注意点・教材
5分	◆オープニング 出席確認、概要説明	
30分	◆レクチャー 大学で学ぶ手段 (40分)	
40分	●個人ワーク 高校での学習内容の振り返り (40分)	復習テスト
10分	●振り返り 授業全体を振り返り、一言コメントと自己評価を振り返りシートに書く (5分)	評価視点：自己理解のルーブリック評価
5分	●クロージング 振り返りシート (全員) の提出	

○事後学習

1. 高校で使用した教材を使用し、不明点の解明。

【3回目】

○事前学習

テキスト「アクティブラーニング入門」の記載内容を理解する。

○授業内容 (4月5日、90分；◆レクチャー、●個人ワーク、▲グループワーク)

経過時間	内容	注意点・教材
5分	◆オープニング 出席確認、概要説明	
30分	◆レクチャー 情報機器および情報資源とその使用方法を説明 (40分)	
40分	●個人ワーク 情報機器を実際を利用してみる (15分)	
10分	●振り返り 授業全体を振り返り、一言コメントと自己評価を振り返りシートに書く (5分)	評価視点：自己理解のルーブリック評価
5分	●クロージング 振り返りシート (全員) の提出	

○事後学習

1. 配付資料の復習、不明点の解明。

【4回目】

○事前学習

高校までに身につけた生活習慣

○授業内容 (4月5日、90分；◆レクチャー、●個人ワーク、▲グループワーク)

経過時間	内容	注意点・教材
5分	◆オープニング 出席確認、概要説明	
50分	◆レクチャー 大学での学びで重要となる教養教育院の説明 (50分)	
25分	◆レクチャー 大学生活における健康管理および健康保険センターの説明 (25分)	
5分	●振り返り 授業全体を振り返り、一言コメントと自己評価を振り返りシートに書く (5分)	評価視点：自己理解のルーブリック評価
5分	●クロージング 振り返りシート (全員) の提出	

○事後学習

1. 配付資料。

【体験学習の実施】

- ◆ コース教員とともに研修旅行に参加し、清掃活動・地引き網などの協働作業を行う。学生は教員と懇談し、最先端の科学技術および研究内容について話し合う。
- ◆ 体験学習で学んだこと及び興味ある科学技術についての説明を含む文章を作成し、ループブック（文章力）で自己評価をした上で提出する。

○事後学習

SIH 道場最終レポートの作成と提出。

【5回目】

○事前学習

テキスト「アクティブラーニング入門」の記載内容を理解する。

○授業内容（4月6日、90分：◆レクチャー、●個人ワーク、▲グループワーク）

経過時間	内容	注意点・教材
5分	◆ オープニング 出席確認、概要説明	
70分	▲ グループワーク グループに分かれて大学内を回り、各種施設の場所を確認する（70分）	
10分	● 振り返り 授業全体を振り返り、一言コメントと自己評価を振り返りシートに書く（5分）	評価視点：自己理解のループブック評価
5分	● クロージング 振り返りシート（全員）の提出	

○事後学習

1. 興味ある施設を再訪問し、その内容を詳細に理解する。

SIH道場必須項目設計表 (概要のみ)

理工学部理工学科電気電子システムコース

1 2. 理工学部理工学科電気電子システムコース

	到達目標	評価方法・基準	内容			授業実施枠
			事前学習	授業	③学習の振り返り	
① 体験学習	自身の専門分野における先端研究(現場)と大学における学習について、関連させて説明することができる。	レポートの提出・プレゼンテーションコンテンツの提出		STEM演習において電気電子工学の演習を行う	学んだことをe-ポートフォリオに記入。教員はコメントをフィードバックする。	STEM演習の授業枠内で実施
文章力	論理的な文章の作成・レポートの作成において、注意すべき点について1つ以上説明することができる。	提出物をルーブリック評価表に基づき評価	反転授業コンテンツ<文章力>の視聴・クイズの解答	レポートの書き方についての説明を行う	学んだことをe-ポートフォリオに記入。教員はコメントをフィードバックする	SIH道場の授業枠内で実施
② プレゼンカ	効果的なプレゼンテーションを行うための基本的な手法・ツール等を1つ以上説明することができる。	提出物をルーブリック評価表に基づき評価	反転授業コンテンツ<プレゼン力>の視聴・クイズの解答	STEM演習で実施したテーマについて5人程度の班に分かれてポスター形式でプレゼンテーションを行う	学んだことをe-ポートフォリオに記入。教員はコメントをフィードバックする	SIH道場の授業枠内で実施
協働カ	他者と協同して1つの課題に取り組むことができる	提出物をルーブリック評価表に基づき評価	反転授業コンテンツ<協働力>の視聴・クイズの解答	STEM演習で実施したテーマについて5人程度の班に分かれてポスター形式でプレゼンテーションを行う	学んだことをe-ポートフォリオに記入。教員はコメントをフィードバックする	SIH道場の授業枠内で実施

SIH道場 プログラム設計評価シート

理工学部 理工学科 電気電子システムコース

※学生のeポートフォリオ、成果物、教員のeポートフォリオを参考にして記述してください。

要素	項目	チェック	学生の学修効果・成果	改善したい点	次年度に向けた対応
早期体験	①設計した到達目標を学生は達成することができた	はい() どちらともいえない() いいえ() 設計していない	STEM演習に関する体験という目的は達成できていると思われ、体験学習個人レポートでも、実験や研究への取り組み方を理解できたという意見があった。 見学内容の相互プレゼンテーションという意見がある一方、教員からの詳しい研究室紹介を希望する意見もあった。	入学オリエンテーション時に実施した文章力の講義に対して、プレゼン力と協働力の講義までの期間が長く、SIH道場自体の存在を忘れられていた。卒業後のアンケート結果でも、プレゼン力、協働力に関する意見が少なく、評価が低い。	学修後アンケートを1回ではなく、項目別に行うようにすることで、項目別の隔りの改善が期待できる。ただし、学生に対するアンケート回答の負担が増えないように配慮が必要である。
	②設計した内容は、専門分野の学修に対して学生を動機づけるという点で効果的だった	はい() どちらともいえない() いいえ() 設計していない	STEM演習のレポート(全4回)の作成と添削、再提出を通じ、論理的文章の作成力が身に付いたことが確認できた。また、体験学習個人レポートでも、教員からのレポート添削や講評を通じて実験レポートに求められる内容が理解できたという意見があった。	文章力がSTEM演習のレポート添削が大部分を占めているが、SIH道場と担当者が必ずしも一致していない。そのため、SIH道場として修得した文章力は体験学習個人レポートの内容から間接的に評価するしかない。評価が適切であるか疑問が残る。	レポートの書き方などの既論をSIH道場の講義で実施し、レポート内容の指導にはSTEM演習と連携方式を継続する。可能であれば、STEM演習と連携し、STEM演習の向上を評価する。
	③学生に課した事前学習は、学生の体験学習を意義あるものにするために効果的だった	はい() どちらともいえない() いいえ() 課していない	STEM演習のレポート(全4回)の作成と添削、再提出を通じ、論理的文章の作成力が身に付いたことが確認できた。また、体験学習個人レポートでも、教員からのレポート添削や講評を通じて実験レポートに求められる内容が理解できたという意見があった。	プレゼン発表では多くのコース教員が参加し、評価だけでなくプレゼン内容やシートの構成などの指導をしている。アンケート結果でも、プレゼン内容の改善が求められている。また、発表会の日程調整が直前となり、学生の受講状況のみを考慮して決めたため、担当講義と重なって参加できない教員が複数いた。プレゼン発表の日程を早期に決定し、学生・教員の参加しやすさを改善する必要がある。	教員が参加しやすいうようにプレゼン発表の日程調整を早期に行う。
	④設計した到達目標を学生は達成することができた	はい() どちらともいえない() いいえ() 設計していない	STEM演習のレポート(全4回)の作成と添削、再提出を通じ、論理的文章の作成力が身に付いたことが確認できた。また、体験学習個人レポートでも、教員からのレポート添削や講評を通じて実験レポートに求められる内容が理解できたという意見があった。	プレゼン発表の評価については、発表会の日程調整が直前となり、学生の受講状況のみを考慮して決めたため、担当講義と重なって参加できない教員が複数いた。プレゼン発表の日程を早期に決定し、学生・教員の参加しやすさを改善する必要がある。	研究室見学を継続する場合、本年度よりも日程を早期に配慮するとともに、プレゼン資料作成の期間を十分にとるよう改善する。
	⑤設計したアクティブラーニング型授業は、学生の学修にとって効果的であった	はい() どちらともいえない() いいえ() 設計していない	STEM演習のレポート(全4回)の作成と添削、再提出を通じ、論理的文章の作成力が身に付いたことが確認できた。また、体験学習個人レポートでも、教員からのレポート添削や講評を通じて実験レポートに求められる内容が理解できたという意見があった。	グループごとによるボスターを作成し、相互に研究室見学についての発表を行った。学生アンケートでも、他者との協力や協働性に関する意見が多い。	研究室見学を継続する場合、本年度よりも日程を早期に配慮するとともに、プレゼン資料作成の期間を十分にとるよう改善する。
	⑥学生に課した授業外学修(事前、または事後)は、学生の学修にとって効果的であった	はい() どちらともいえない() いいえ() 課していない	STEM演習のレポート(全4回)の作成と添削、再提出を通じ、論理的文章の作成力が身に付いたことが確認できた。また、体験学習個人レポートでも、教員からのレポート添削や講評を通じて実験レポートに求められる内容が理解できたという意見があった。	グループごとによるボスターを作成し、相互に研究室見学についての発表を行った。学生アンケートでも、他者との協力や協働性に関する意見が多い。	研究室見学を継続する場合、本年度よりも日程を早期に配慮するとともに、プレゼン資料作成の期間を十分にとるよう改善する。
	⑦学生の評価は、ルーブリック等で基準を明確に行っていた	はい() どちらともいえない() いいえ() 課していない	STEM演習のレポート(全4回)の作成と添削、再提出を通じ、論理的文章の作成力が身に付いたことが確認できた。また、体験学習個人レポートでも、教員からのレポート添削や講評を通じて実験レポートに求められる内容が理解できたという意見があった。	グループごとによるボスターを作成し、相互に研究室見学についての発表を行った。学生アンケートでも、他者との協力や協働性に関する意見が多い。	研究室見学を継続する場合、本年度よりも日程を早期に配慮するとともに、プレゼン資料作成の期間を十分にとるよう改善する。
ラーニングスキル	⑧設計した到達目標を学生は達成することができた	はい() どちらともいえない() いいえ() 設計していない	STEM演習のレポート(全4回)の作成と添削、再提出を通じ、論理的文章の作成力が身に付いたことが確認できた。また、体験学習個人レポートでも、教員からのレポート添削や講評を通じて実験レポートに求められる内容が理解できたという意見があった。	研究室見学を継続する場合、本年度よりも日程を早期に配慮するとともに、プレゼン資料作成の期間を十分にとるよう改善する。	研究室見学を継続する場合、本年度よりも日程を早期に配慮するとともに、プレゼン資料作成の期間を十分にとるよう改善する。
文章力	⑨設計したアクティブラーニング型授業は、学生の学修にとって効果的であった	はい() どちらともいえない() いいえ() 設計していない	STEM演習のレポート(全4回)の作成と添削、再提出を通じ、論理的文章の作成力が身に付いたことが確認できた。また、体験学習個人レポートでも、教員からのレポート添削や講評を通じて実験レポートに求められる内容が理解できたという意見があった。	研究室見学を継続する場合、本年度よりも日程を早期に配慮するとともに、プレゼン資料作成の期間を十分にとるよう改善する。	研究室見学を継続する場合、本年度よりも日程を早期に配慮するとともに、プレゼン資料作成の期間を十分にとるよう改善する。
	⑩学生に課した授業外学修(事前、または事後)は、学生の学修にとって効果的であった	はい() どちらともいえない() いいえ() 課していない	STEM演習のレポート(全4回)の作成と添削、再提出を通じ、論理的文章の作成力が身に付いたことが確認できた。また、体験学習個人レポートでも、教員からのレポート添削や講評を通じて実験レポートに求められる内容が理解できたという意見があった。	研究室見学を継続する場合、本年度よりも日程を早期に配慮するとともに、プレゼン資料作成の期間を十分にとるよう改善する。	研究室見学を継続する場合、本年度よりも日程を早期に配慮するとともに、プレゼン資料作成の期間を十分にとるよう改善する。
プレゼン力	⑪学生の評価は、ルーブリック等で基準を明確に行っていた	はい() どちらともいえない() いいえ() 課していない	STEM演習のレポート(全4回)の作成と添削、再提出を通じ、論理的文章の作成力が身に付いたことが確認できた。また、体験学習個人レポートでも、教員からのレポート添削や講評を通じて実験レポートに求められる内容が理解できたという意見があった。	研究室見学を継続する場合、本年度よりも日程を早期に配慮するとともに、プレゼン資料作成の期間を十分にとるよう改善する。	研究室見学を継続する場合、本年度よりも日程を早期に配慮するとともに、プレゼン資料作成の期間を十分にとるよう改善する。
	⑫設計した到達目標を学生は達成することができた	はい() どちらともいえない() いいえ() 設計していない	STEM演習のレポート(全4回)の作成と添削、再提出を通じ、論理的文章の作成力が身に付いたことが確認できた。また、体験学習個人レポートでも、教員からのレポート添削や講評を通じて実験レポートに求められる内容が理解できたという意見があった。	研究室見学を継続する場合、本年度よりも日程を早期に配慮するとともに、プレゼン資料作成の期間を十分にとるよう改善する。	研究室見学を継続する場合、本年度よりも日程を早期に配慮するとともに、プレゼン資料作成の期間を十分にとるよう改善する。
ラーニングスキル	⑬設計したアクティブラーニング型授業は、学生の学修にとって効果的であった	はい() どちらともいえない() いいえ() 設計していない	STEM演習のレポート(全4回)の作成と添削、再提出を通じ、論理的文章の作成力が身に付いたことが確認できた。また、体験学習個人レポートでも、教員からのレポート添削や講評を通じて実験レポートに求められる内容が理解できたという意見があった。	研究室見学を継続する場合、本年度よりも日程を早期に配慮するとともに、プレゼン資料作成の期間を十分にとるよう改善する。	研究室見学を継続する場合、本年度よりも日程を早期に配慮するとともに、プレゼン資料作成の期間を十分にとるよう改善する。
	⑭学生に課した授業外学修(事前、または事後)は、学生の学修にとって効果的であった	はい() どちらともいえない() いいえ() 課していない	STEM演習のレポート(全4回)の作成と添削、再提出を通じ、論理的文章の作成力が身に付いたことが確認できた。また、体験学習個人レポートでも、教員からのレポート添削や講評を通じて実験レポートに求められる内容が理解できたという意見があった。	研究室見学を継続する場合、本年度よりも日程を早期に配慮するとともに、プレゼン資料作成の期間を十分にとるよう改善する。	研究室見学を継続する場合、本年度よりも日程を早期に配慮するとともに、プレゼン資料作成の期間を十分にとるよう改善する。
協働力	⑮学生の評価は、ルーブリック等で基準を明確に行っていた	はい() どちらともいえない() いいえ() 課していない	STEM演習のレポート(全4回)の作成と添削、再提出を通じ、論理的文章の作成力が身に付いたことが確認できた。また、体験学習個人レポートでも、教員からのレポート添削や講評を通じて実験レポートに求められる内容が理解できたという意見があった。	研究室見学を継続する場合、本年度よりも日程を早期に配慮するとともに、プレゼン資料作成の期間を十分にとるよう改善する。	研究室見学を継続する場合、本年度よりも日程を早期に配慮するとともに、プレゼン資料作成の期間を十分にとるよう改善する。
	⑯振り返りの意義や方法について、学生に説明する、またはテキストの利用などで理解を促した	はい() どちらともいえない() いいえ() 設計していない	STEM演習のレポート(全4回)の作成と添削、再提出を通じ、論理的文章の作成力が身に付いたことが確認できた。また、体験学習個人レポートでも、教員からのレポート添削や講評を通じて実験レポートに求められる内容が理解できたという意見があった。	研究室見学を継続する場合、本年度よりも日程を早期に配慮するとともに、プレゼン資料作成の期間を十分にとるよう改善する。	研究室見学を継続する場合、本年度よりも日程を早期に配慮するとともに、プレゼン資料作成の期間を十分にとるよう改善する。
振り返り	⑰各授業(体験を含む)の最後やSIH道場の終了時に学生が振り返る時間を設けた	はい() どちらともいえない() いいえ() 設計していない	STEM演習のレポート(全4回)の作成と添削、再提出を通じ、論理的文章の作成力が身に付いたことが確認できた。また、体験学習個人レポートでも、教員からのレポート添削や講評を通じて実験レポートに求められる内容が理解できたという意見があった。	研究室見学を継続する場合、本年度よりも日程を早期に配慮するとともに、プレゼン資料作成の期間を十分にとるよう改善する。	研究室見学を継続する場合、本年度よりも日程を早期に配慮するとともに、プレゼン資料作成の期間を十分にとるよう改善する。
	⑱学生が振り返った内容について教員がフィードバックを行った	はい() どちらともいえない() いいえ() 課していない	STEM演習のレポート(全4回)の作成と添削、再提出を通じ、論理的文章の作成力が身に付いたことが確認できた。また、体験学習個人レポートでも、教員からのレポート添削や講評を通じて実験レポートに求められる内容が理解できたという意見があった。	研究室見学を継続する場合、本年度よりも日程を早期に配慮するとともに、プレゼン資料作成の期間を十分にとるよう改善する。	研究室見学を継続する場合、本年度よりも日程を早期に配慮するとともに、プレゼン資料作成の期間を十分にとるよう改善する。
総合	⑲実施したSIH道場プログラムを総合的に見て、平成30年度の授業設計は、学生が到達目標を達成するために、(5、10分であった。4.概ね十分であった。3.ふつ。2.やや不十分であった。1.不十分であった。)	5・4③・2・1	STEM演習のレポート(全4回)の作成と添削、再提出を通じ、論理的文章の作成力が身に付いたことが確認できた。また、体験学習個人レポートでも、教員からのレポート添削や講評を通じて実験レポートに求められる内容が理解できたという意見があった。	研究室見学を継続する場合、本年度よりも日程を早期に配慮するとともに、プレゼン資料作成の期間を十分にとるよう改善する。	研究室見学を継続する場合、本年度よりも日程を早期に配慮するとともに、プレゼン資料作成の期間を十分にとるよう改善する。
	※その他、他の授業との接続・発展内容・授業運営等の課題がありましたらお書きください。				

12.理工学部理工学科電気電子システムコース

平成30年度 理工学部理工学電気電子システムコース SIH 道場 ＜授業詳細表＞

◆**目的**：徳島大学の新入生が大学における学習について、理解するとともに、自身の専門分野における先端研究の体験を通して、興味関心を喚起し、徳島大学における学習・研究に対する動機づけを行う。また、学習の基本となる文章の書き方、プレゼンテーションの仕方、振り返りの仕方を学び、それらを実践することで、大学における能動的な学習の基本となる知識、技能、態度を身につける。

◆到達目標：

- (1) 自身の専門分野における先端研究（現場）と大学における学習について、関連させて説明することができる。
- (2-1) 論理的文章の作成・レポートの作成において、注意すべき点について1つ以上説明することができる。
- (2-2) 効果的なプレゼンテーションを行うための基本的な手法・ツール等を1つ以上説明することができる。
- (2-3) 他者と協同して1つの課題に取り組むことができる。
- (3) 自身の学習活動を振り返る習慣を身につけることができる。

◆成績評価：「SIH 道場最終レポート」を以下の合格基準をもとに評価する。

【SIH 道場最終レポートの内容】

以下の1)～4)を含む「SIH 道場最終レポート」を作成すること。レポートは手書きでも構わないが、電子媒体での作成・提出を推奨する。

- 1) ポスター（協働力の目標に対応）
 - ・体験学習の成果を、期日までにチームで1枚のポスターにまとめて写真を撮る。
 - ・ルーブリックの「協働力」に該当するすべての項目について、自己評価する。
- 2) ポスター発表（プレゼン力の目標に対応）
 - ・1)で作成したポスターをつかって、グループ以外のメンバーにチームの成果を説明する。
 - ・ルーブリックの「プレゼン力」に該当するすべての項目について、自己評価する。
- 3) 体験学習個人レポート（文章力の目標に対応）
 - ・体験学習で学びたいと考えていたこと（事前）、実際に学んだこと（事後）、今後の目標の3点についてA4判1枚程度のレポートを作成する。
 - ・ルーブリックの「文章力」に該当するすべての項目について、自己評価する。
- 4) SIH 道場での収穫

【SIH 道場レポートの合格基準】

以下の評価基準のうち、「必須」と書いてある項目をすべて満たすこと。

- ・レポートに「ポスターの写真」が添付されていること。（必須）
- ・レポートの「自分がポスター発表をしている様子」の動画へのリンクが付与されていること（任意）
- ・レポートに「体験学習個人レポート」が添付されていること。（必須）

- ・「自己評価」と「チームメンバーからの評価（平均点）」が記入された「協働力」「プレゼン力」「文章力」のルーブリックが添付されていること。（必須）
- ・上記ルーブリックの「協働力」「プレゼン力」「文章力」それぞれの総合点が○以上であること。（必須）

・SIH 道場の収穫を1つ以上挙げて、説明すること。収穫が全くない場合は、その理由とどうすれば収穫が得られそうかを書くこと。（必須）

・その他、レポートに必要だと思う内容（任意）

◆授業内容（90分・60分）×3回+体験学習（詳細は次ページ） ＜大まかな流れ＞

体験学習を中心に、将来の仕事について考える。

- 1 回目：導入（協働力の育成）
- 2 回目：体験学習の事前学習（文章力の育成）
～専門分野の早期体験（学部が内容を指定）
- 3 回目：体験学習の事後学習（プレゼン力の育成）

※3回は別の日に行うことを想定。同日に行う場合は、事前課題のやり方を調整する必要がある。

※各回の詳細は次ページ

◆毎回の授業後に担当教員が行うこと

- ・担当クラスの学生が提出した「振り返りシート」への一言コメント。

◆3回目の授業後（SIH 道場終了後）に担当教員が行うこと

- 1) 担当クラスの学生が提出した「SIH 道場最終レポート」の添削
 - ・不合格者には「再提出要求」を出す。
 - ・合格者には点数をつける。(100点満点)
- 2) 「SIH 道場実施報告書」の提出
 - ・所定の様式に沿って作成・提出する。
 - ・提出先はeポートフォリオシステム上とする。
- 3) 他の担当教員の「SIH 道場実施報告書」の閲覧と相互コメント

◆3回目の授業後（SIH 道場終了後）にコーディネーターが行うこと

- ・授業担当教員の「SIH 道場実施報告書」の提出状況のチェック。未提出者への催促。

【1回目】4月上旬

○事前学習：なし

○授業内容（90分・60分）：◆レクチャー、●個人ワーク、▲グループワーク

経過時間	内容	注意点・教材
5分	◆オープニング 教員の自己紹介、出席確認、最終課題の確認、今日の課題の確認	授業内容ではなく、最終課題（SIH 最終レポートと合格基準）を説明する。

15分	◆ Moodle 上のビデオコンテンツの使い方、講義の受け方、レポートの書き方等について説明	e ポートフォリオシステムのログイン方法を配布。
15分	▲ グループワークの班分け、グループ内での役割分担	連絡調整係に、グループメンバーと連絡が取れる方法を確保しておくように促す
5分	◆ クロージング グループへの連絡は連絡調整係へ行うことを告知。役割分担シート、振り返りシートの提出	

○事後学習：未視聴のビデオコンテンツを視聴

【2回目】6月上旬

○事前学習：Moodle によるビデオコンテンツ (プレゼン力、協働力、文章力) の視聴

○授業内容 (90分・60分)：◆レクチャー、●個人ワーク、▲グループワーク

経過時間	内容	注意点・教材
5分	◆ オープニング, 出席確認	
70分	◆ プレゼンテーションの説明 ▲ STEM 演習で実施したテーマについて、班に分かれてプレゼンテーションの準備を行う	
5分	◆ クロージング	

○事後学習：自宅において、未視聴のビデオコンテンツを視聴

【3回目】6月中旬

○事前学習：Moodle によるビデオコンテンツ (プレゼン力、協働力、文章力) の視聴

○授業内容 (90分・60分)：◆レクチャー、●個人ワーク、▲グループワーク

経過時間	内容	注意点・教材
5分	◆ オープニング 教員の自己紹介、出席確認、今日の課題の確認	
70分	▲ STEM 演習で実施したテーマについて、班に分かれてプレゼンテーションを行う。	
5分	◆ クロージング ・ 最終課題 (SHI 道場最終レポート) の確認	e ポートフォリオシステムでの最終レポート作成方法を配布。

○事後学習

1. e ポートフォリオシステム上に、SIH 道場最終レポートを提出する。

4. 担当教員は SIH 道場最終レポートにコメントをつけて返却する。

【体験学習の実施】

◆ 前期実施科目の STEM 演習で、基礎的な電気電子の基礎に関する実験を体験させ、レポートを提出させている。ここで理工系のレポートの様式、論理的な文章の書き方等について指導する。また、3回目のプレゼンテーションで取り上げる実験テーマについて学習する。

SIH道場必須項目設計表(概要のみ)

理工学部理工学科情報光システムコース

13. 理工学部理工学科情報光システムコース

	到達目標	評価方法・基準	内容		授業実施枠
			事前学習	授業	
① 体験学習	情報光システムコースにおいて取り組んでいる最先端の研究内容について説明できる。	出席状況とレポートの内容により評価する。	情報系、光系での先端研究について調査しておく。	コース内の研究室を見学し、研究紹介を聴講する。また、配属実習(情報系)のものづくり体験(光系)をする。	「情報光システムセミナー」の中で実施
	論理的な文章の作成・レポートの作成において、注意すべき点について説明することができる。	ルーブリック評価表を用いる。	反転授業ビデオコンテンツ「文章力」の動画を視聴。	レポートの書き方についての講義を行う。ルーブリックを用いたピア評価、ポイント確認。	SIH道場の授業枠内で実施
② プレゼン力	効果的なプレゼンテーションを行うための基本的な手法・ツールについて説明することができる。	ルーブリック評価表を用いる。	反転授業ビデオコンテンツ「プレゼンテーション力」の動画を視聴。	プレゼンテーションスキルについての講義を行う。ルーブリックを用いたピア評価、ポイント確認。	SIH道場の授業枠内で実施
	他者と協同して1つの課題に取り組むことができる。	ルーブリック評価表を用いる。	反転授業ビデオコンテンツ「協働力」の3つの動画を視聴	専門分野のトピックスについてKJ法ワークを実施し、ルーブリックを用いたピア評価を行う。	SIH道場の授業枠内で実施
注意点	学生が授業を通して何が出来るようになるのかについて具体的に明記する。明記の仕方として「〇〇できる」と表現すると良い。		反転授業の形式で設計し、コンテンツを使用することを推奨する。	アクティブ・ラーニング型授業で実施する。	「①体験学習」のよ うに既存の授業で置き換えることも可能 です。

SIH道場プログラム設計評価シート

理工学部 理工学科 情報システムコース

※学生のレポートフォルダ、成果物、教員のレポートフォルダを参考にして記述してください。

要素	項目	チェック	学生の学修効果・成果	改善したい点	次年度に向けた対応
早期体験	①設計した到達目標を学生は達成することができた	<input checked="" type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> どちらともいえない <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/> 設計していない	アンケートでは、73%の学生が、SIH道場の早期体験は専門科目の学習に役立っている」と回答している。また、84%の学生が専門分野への興味関心が高まったと回答しており、一定の効果があったと考えられる。	早期体験をより意義あるものにするために、事前学習を課すことを考えたい。	事前学習を検討する。
	②設計した内容は、専門分野の学修に対して学生を動機づけるという点で効果的だった	<input checked="" type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> どちらともいえない <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/> 設計していない			
	③学生に課した事前学習は、学生の体験学習を意義あるものにするために効果的だった	<input checked="" type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> どちらともいえない <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/> 設計していない			
	④設計した到達目標を学生は達成することができた	<input checked="" type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> どちらともいえない <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/> 設計していない	アンケートでは、75%の学生がSIH道場の「文章・レポートの書き方」が役に立っている」と回答している。自由記述においても、レポートの書き方が身についたという記述が見られた。	特になし	本年度と同様に進める。
ラーニングスキル	⑤設計したアクティブラーニング型授業は、学生の学修にとって効果的であった	<input checked="" type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> どちらともいえない <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/> 設計していない			
文章力	⑥学生に課した授業外学修（事前、または事後）は、学生の学修にとって効果的であった	<input checked="" type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> どちらともいえない <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/> 設計していない			
	⑦学生の評価は、ルーブリック等で基準を明確にして行った	<input checked="" type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> どちらともいえない <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/> 設計していない			
ラーニングスキル	⑧設計した到達目標を学生は達成することができた	<input checked="" type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> どちらともいえない <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/> 設計していない	アンケートでは、77%の学生がSIH道場の「プレゼンテーション」は役に立っている」と回答している。自由記述においても、プレゼン力が身についたという記述が見られた。	アンケートの自由記述において、プレゼンの練習時間を取ってほしいという記述が見られた。スケジュールの都合で練習時間に差があったためだと考えられる。	発表練習の時間も含めた、余裕のあるスケジュールを検討する。
	⑨学生に課した授業外学修（事前、または事後）は、学生の学修にとって効果的であった	<input checked="" type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> どちらともいえない <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/> 設計していない			
プレゼン力	⑩学生の評価は、ルーブリック等で基準を明確にして行った	<input checked="" type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> どちらともいえない <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/> 設計していない			
	⑪設計した到達目標を学生は達成することができた	<input checked="" type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> どちらともいえない <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/> 設計していない	アンケートでは、89%の学生がSIH道場の「他者との協働」は役に立っている」と回答している。自由記述においても、協働力の重要性に気づいた後だったという記述が見られたため、効果があつたと考えられる。	特になし	本年度と同様に進める。
ラーニングスキル	⑫設計したアクティブラーニング型授業は、学生の学修にとって効果的であった	<input checked="" type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> どちらともいえない <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/> 設計していない			
	⑬学生に課した授業外学修（事前、または事後）は、学生の学修にとって効果的であった	<input checked="" type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> どちらともいえない <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/> 設計していない			
協働力	⑭学生の評価は、ルーブリック等で基準を明確にして行った	<input checked="" type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> どちらともいえない <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/> 設計していない			
	⑮振り返りの意義や方法について、学生に説明する、またはテキストの利用などで理解を促した	<input checked="" type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> どちらともいえない <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/> 設計していない	アンケートで「学修（体験）を振り返ることの重要性を理解した」と回答した学生は全体の83%に達し、振り返りの重要性の理解が進んだと考えられる。	一方で、目頃から授業で学習したことを振り返っている」と回答した学生が少なく結果となつていいため、振り返りへの意識向上策を検討したい。	フィードバック方法を検討する。
振り返り	⑯各授業（体験を含む）の最後やSIH道場の終了時に学生が振り返る時間を設けた	<input checked="" type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> どちらともいえない <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/> 設計していない			
	⑰学生が振り返った内容について教員がフィードバックを行った	<input checked="" type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> どちらともいえない <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/> 設計していない			
総合	⑱実施したSIH道場プログラムを総合的に見て、平成30年度の授業設計は、学生が到達目標を達成するために、(5)十分であった、4. 概ね十分であった、3. 十分、2. やや十分であった、1. 不十分であった。 ※その他、他の授業との接続・発展内容・授業運営等の課題が明らかになったら書き込んで下さい。	5 (4) 3・2・1	76%の学生が、SIH道場の教育プログラムが満足できたと回答している。また、アクティブラーニングの重要性を理解したという学生も81%に達した。	アンケートの自由記述において、時間が少ない、増やしてほしいという記述が見られたので、スケジュールに余裕を持たせたい。	余裕のあるスケジュールを検討する。

平成30年度 理工学部理工学科情報光システムコース SIH 道場

<授業詳細表>

- ◆目的：徳島大学の新生が大学における学習について理解するとともに、情報工学、光工学、知能工学分野における先端研究の体験を通して、興味関心を喚起し、徳島大学における学習・研究に対する動機づけを行う。また、学習の基本となる文章の書き方、プレゼンテーションの仕方、振り返りの仕方を学び、それらを実践することで、大学における能動的な学習の基本となる知識、技能、態度を身につける。

◆到達目標：

- (1) 情報光システムコースにおいて取り組んでいる最先端の研究内容について説明することができる。
- (2-1) 論理的文章の作成・レポートの作成において、注意すべき点について説明することができる。
- (2-2) 効果的なプレゼンテーションを行うための基本的な手法・ツール等を説明することができる。
- (2-3) 他者と協同して1つの課題に取り組むことができる。
- (3) 自身の学習活動を振り返る習慣を身につけることができる。

- ◆成績評価：プレゼン内容、最終レポートにより評価する。

【SIH 道場最終レポートの内容】

以下の1)～3)を含む「SIH 道場最終レポート」を作成すること。

- 1) 発表会（プレゼン力、協働力の目標に対応）
 - ・ パワーポイントを用いて作成したスライド（メールまたはUSBで提出）。
 - ・ ルーブリックの「協働力」に該当するすべての項目について自己評価する。
 - ・ ルーブリックの「プレゼン力」に該当するすべての項目について自己評価する。
- 2) 研究室見学レポート（文章力の目標に対応）
 - ・ 研究室見学報告書。
 - ・ ルーブリックの「文章力」に該当するすべての項目について自己評価する。
- 3) SIH 道場での収穫

◆ 授業内容

新入生研修(4/7)で実施するもの
はじめに (SIH 道場の概要)、プレゼンストームリングと KJ 法の講義、チーム作り・ブレインストームリングの実習、グループワークのビデオ視聴、KJ 法の実習(1)

日時・場所	内容
4月11日(水)8:40-10:10 場所：未定	プレゼンテーションスキル講義
4月18日(水)8:40-10:10 場所：未定	KJ 法の実習(2)と KJ 法のまとめ
4月25日(水)8:40-10:10	テクニカルライティングの講義

場所：未定		
5月9日(水)8:40-10:10 場所：未定	発表会	
5月16日(水)8:40-10:10 場所：未定	発表会	
5月23日(水)8:40-10:10 場所：未定	発表会	

- ・ テクニカルライティング、プレゼンテーションスキルでは、事前学習としてビデオ視聴を行う。講義内で、理解度テストを行い、自己採点後に説明を行う。
- ・ プレインストームリングと KJ 法では、事前学習としてビデオ視聴を行う。講義では5-7人のグループに分かれ、グループのメンバーのバックグラウンドやスキル等を紹介した後、リーダーと書記を決める。与えられた大枠テーマ内で具体的なテーマを設定を行い、ブレインストームリングを行う。ブレインストームリングの結果を KJ 法により整理する。得られた結論に対して、プレゼンテーション用のスライドの作成を行い、プレゼンテーションを行う。

体験学習

情報系、光系それぞれで実施する。

<情報系実施内容>

日付	場所 (仮)	内容 (仮)
4/11	K202	情報系ガイダンス
4/18	C10	実験体験 ソフトウェア実験、システム実験の説明・体験する (各30分) 終了後レポート作成 (20分)
4/25	C10	体験配属
5/9	C10	毎週、班ごとに二つの研究室を訪問し、見学・体験する (30分)
5/16	C10	× 2回)
5/23	C10	研究室見学終了後 C10 でレポート作成 (20分)
5/30	C10	
6/6	各研究室	配属実習
6/13	各研究室	班ごとに研究室に配属し、各研究に関連した実験・実習を班別に行う。
6/20	各研究室	
6/27	各研究室	実習で学んだことをテクニカルライティングに沿ってレポート作成する。
7/4	各研究室	
7/11	各研究室	
7/18	各研究室	
7/25	各研究室	

<光系実施内容>

日付	場所 (仮)	内容 (仮)
4/10	K407	光系ガイドダンス
4/17	フロンティア棟 セミナールーム	体験配属
4/24	フロンティア棟 セミナールーム	毎回、班ごとに一つの研究室を訪問し、見学・体験する (60分)
5/8	フロンティア棟 セミナールーム	見学終了後、フロンティア棟セミナールームでレポート作成 (20分)
5/15	フロンティア棟 セミナールーム	
5/22	フロンティア棟 セミナールーム	
5/29	フロンティア棟 セミナールーム	
6/5	K407	感性教育 エゴグラムによる性格診断についての体験授業を行う。
6/12	K407	もの作り体験
6/19	K407	いくつつかの光学現象に注目し、それを用いた器具等の作製や 実験を行う。
6/26	K407	
7/3	K407	
7/10	K407	グループ工作
7/17	K407	もの作り体験が主に個人での工作であるのに対して、グルー プでの実験や光学器の作製を行い、発表を行う。
7/24	K407	発表会

SIH道場必須項目設計表 (概要のみ)

理工学部理工学科応用理数コース

1.4. 理工学部理工学科応用理数コース

	到達目標	評価方法・基準	内容		授業実施枠
			事前学習	授業	
① 体験学習	自分の専門分野における先端研究（現場）を体験し、大学における学習と関連させ、説明することができる。	体験学習の報告会でのプレゼンテーションを教員が評価する。	研究室訪問する以前に、その分野について調べてみる。	応用理数コース教員の研究室を訪問する際の手順やマナー等の指導を行う。	SIH道場の授業実施枠内で実施
文章力	論理的な文章を作成する際に注意すべきことを一つ以上説明することができる。	研究室訪問で得た知識等をまとめたレポートを作成させ、教員が評価する。	反転授業コンテンツ「文章力」の4つの動画を視聴する。	論理的な文章の書き方に関する指導を行う。	SIH道場の授業実施枠内で実施
② プレゼン力	効果的なプレゼンテーションを行うための基本的な手法・ツール等の一つ以上説明することができる。	報告会でのプレゼンテーションを教員が評価する。	反転授業コンテンツ「プレゼンテーション力」の3つの動画を視聴する。	プレゼンテーションを行うにあたっての注意点を指導する。	SIH道場の授業実施枠内で実施
協働力	他者と協働して一つの課題に取り組むことができる。	報告会のための資料作成および報告会でのプレゼンテーションを通してグループ活動について教員が評価する。	反転授業ビデオコンテンツ「協働力」の3つの動画を視聴する。	グループで話し合いを行う際の注意点を指導する。	SIH道場の授業実施枠内で実施
				③ 学習の振り返り	
				学んだことをポートフォリオに記入する。教員はコメントをフィードバックする。	SIH道場の授業実施枠内で実施
				学んだことをポートフォリオに記入する。教員はコメントをフィードバックする。	SIH道場の授業実施枠内で実施
				学んだことをポートフォリオに記入する。教員はコメントをフィードバックする。	SIH道場の授業実施枠内で実施
				学んだことをポートフォリオに記入する。教員はコメントをフィードバックする。	SIH道場の授業実施枠内で実施

SIH道場プログラム設計評価シート

理工学部 理工学科 応用理数コース

※学生のeポートフォリオを参考に記述してください。

要素	項目	チェック	学生の学修効果・成果	改善したい点	次年度に向けた対応	
早期体験	①設計した到達目標を学生は達成することができた	はい(○)から(●)まで 設計していない	学生アンケートの結果にも見られるように、研究室訪問で専門分野に触れることにより、大学における学習に対する意欲が増えたと見られる。また、自分の興味ある分野に行くことで、視野が広がったと感じた分野の研究室に行くことも多かった。	訪問先を考えるブレインストーミングの効果に疑問がある。何か他に良い方法があれば変更したい。研究室訪問の時間を「20分/研究室」として設定したが、時間が足りないと感じた学生が多いため、訪問する研究室の数のバランスを考えながら、時間の見直しもほしい。	現行では、ブレインストーミングを行うしかないが、何か良い方法を見つけ、より効果的な話し合いができるようにしたい。時間設定に関しては、対応していただきたい。	
	②設計した内容は、専門分野の学修に対して学生を動機づけるという点で効果的だった	はい(○)から(●)まで 設計していない	授業の振り返りや研究室訪問ごとの振り返りなど、文章を書く機会を多く設定したこと、じっくりと文章を考える力が付いたと思われる。また、研究室訪問依頼の際に、メールで各教員に問い合わせるよう指導を行うことで、正しい書き方などについて理解することができたとと思われる。	提出された文章の多くに対してチェック作業を行うことができなかった。フィードバックすることでより高い学習成果が得られたと思われる。	すべての文章をチェックすることは負担的に難しいと思われるが、研究室訪問の振り返りシートなどを採択するものは、最初のものだけでもチェックを行うなど、フィードバックの機会を増やすことを検討したい。	
	③学生に課した事前学習は、学生の体験学習を意義あるものにするために効果的だった	はい(○)から(●)まで 課していない	④設計した到達目標を学生は達成することができた	他者に自分の考えを伝えることの大切さと難しさを感じ取り、プレゼンを行うときの注意点について十分な理解ができたと思われる。	準備時間が短かったこと。一度に複数のプレゼンを行ったので、声が入り交じり、聞き取りにくい状況であった。A4用紙2枚によるプレゼンで、資料が小さく見えにくい状況であった。などの意見が学生アンケートに多く寄せられていた。	準備時間に関しては、日程調整などで十分に対応可能と思われるので、検討をしていく。他の改善したい点は、以前から上がっている問題であり、現状では対応が難しいと思われるが、今後も検討していく。
ラーニングスキル 文章力	⑥学生に課した授業外学修(事前、または事後)は、学生の学修にとって効果的であった	はい(○)から(●)まで 課していない	⑤設計したアクテグ/ラーニング型授業は、学生の学修にとって効果的であった	準備の時間が短かったこと。一度に複数のプレゼンを行ったので、声が入り交じり、聞き取りにくい状況であった。A4用紙2枚によるプレゼンで、資料が小さく見えにくい状況であった。などの意見が学生アンケートに多く寄せられていた。	準備時間に関しては、日程調整などで十分に対応可能と思われるので、検討をしていく。他の改善したい点は、以前から上がっている問題であり、現状では対応が難しいと思われるが、今後も検討していく。	
	⑦学生の評価は、ルーブリック等で基準を明確にして行った	はい(○)から(●)まで 課していない	⑥設計した到達目標を学生は達成することができた	他者に自分の考えを伝えることの大切さと難しさを感じ取り、プレゼンを行うときの注意点について十分な理解ができたと思われる。	準備時間が短かったこと。一度に複数のプレゼンを行ったので、声が入り交じり、聞き取りにくい状況であった。A4用紙2枚によるプレゼンで、資料が小さく見えにくい状況であった。などの意見が学生アンケートに多く寄せられていた。	準備時間に関しては、日程調整などで十分に対応可能と思われるので、検討をしていく。他の改善したい点は、以前から上がっている問題であり、現状では対応が難しいと思われるが、今後も検討していく。
	⑧設計した到達目標を学生は達成することができた	はい(○)から(●)まで 設計していない	⑦設計したアクテグ/ラーニング型授業は、学生の学修にとって効果的であった	他者に自分の考えを伝えることの大切さと難しさを感じ取り、プレゼンを行うときの注意点について十分な理解ができたと思われる。	準備時間が短かったこと。一度に複数のプレゼンを行ったので、声が入り交じり、聞き取りにくい状況であった。A4用紙2枚によるプレゼンで、資料が小さく見えにくい状況であった。などの意見が学生アンケートに多く寄せられていた。	準備時間に関しては、日程調整などで十分に対応可能と思われるので、検討をしていく。他の改善したい点は、以前から上がっている問題であり、現状では対応が難しいと思われるが、今後も検討していく。
ラーニングスキル プレゼン力	⑩学生に課した授業外学修(事前、または事後)は、学生の学修にとって効果的であった	はい(○)から(●)まで 課していない	⑧設計した到達目標を学生は達成することができた	他者に自分の考えを伝えることの大切さと難しさを感じ取り、プレゼンを行うときの注意点について十分な理解ができたと思われる。	準備時間が短かったこと。一度に複数のプレゼンを行ったので、声が入り交じり、聞き取りにくい状況であった。A4用紙2枚によるプレゼンで、資料が小さく見えにくい状況であった。などの意見が学生アンケートに多く寄せられていた。	準備時間に関しては、日程調整などで十分に対応可能と思われるので、検討をしていく。他の改善したい点は、以前から上がっている問題であり、現状では対応が難しいと思われるが、今後も検討していく。
	⑪学生の評価は、ルーブリック等で基準を明確にして行った	はい(○)から(●)まで 課していない	⑩設計した到達目標を学生は達成することができた	他者に自分の考えを伝えることの大切さと難しさを感じ取り、プレゼンを行うときの注意点について十分な理解ができたと思われる。	準備時間が短かったこと。一度に複数のプレゼンを行ったので、声が入り交じり、聞き取りにくい状況であった。A4用紙2枚によるプレゼンで、資料が小さく見えにくい状況であった。などの意見が学生アンケートに多く寄せられていた。	準備時間に関しては、日程調整などで十分に対応可能と思われるので、検討をしていく。他の改善したい点は、以前から上がっている問題であり、現状では対応が難しいと思われるが、今後も検討していく。
	⑫設計した到達目標を学生は達成することができた	はい(○)から(●)まで 設計していない	⑪設計したアクテグ/ラーニング型授業は、学生の学修にとって効果的であった	他者に自分の考えを伝えることの大切さと難しさを感じ取り、プレゼンを行うときの注意点について十分な理解ができたと思われる。	準備時間が短かったこと。一度に複数のプレゼンを行ったので、声が入り交じり、聞き取りにくい状況であった。A4用紙2枚によるプレゼンで、資料が小さく見えにくい状況であった。などの意見が学生アンケートに多く寄せられていた。	準備時間に関しては、日程調整などで十分に対応可能と思われるので、検討をしていく。他の改善したい点は、以前から上がっている問題であり、現状では対応が難しいと思われるが、今後も検討していく。
ラーニングスキル 協働力	⑭設計した到達目標を学生は達成することができた	はい(○)から(●)まで 設計していない	⑫設計した到達目標を学生は達成することができた	他者に自分の考えを伝えることの大切さと難しさを感じ取り、プレゼンを行うときの注意点について十分な理解ができたと思われる。	準備時間が短かったこと。一度に複数のプレゼンを行ったので、声が入り交じり、聞き取りにくい状況であった。A4用紙2枚によるプレゼンで、資料が小さく見えにくい状況であった。などの意見が学生アンケートに多く寄せられていた。	準備時間に関しては、日程調整などで十分に対応可能と思われるので、検討をしていく。他の改善したい点は、以前から上がっている問題であり、現状では対応が難しいと思われるが、今後も検討していく。
	⑮設計したアクテグ/ラーニング型授業は、学生の学修にとって効果的であった	はい(○)から(●)まで 設計していない	⑬設計した到達目標を学生は達成することができた	他者に自分の考えを伝えることの大切さと難しさを感じ取り、プレゼンを行うときの注意点について十分な理解ができたと思われる。	準備時間が短かったこと。一度に複数のプレゼンを行ったので、声が入り交じり、聞き取りにくい状況であった。A4用紙2枚によるプレゼンで、資料が小さく見えにくい状況であった。などの意見が学生アンケートに多く寄せられていた。	準備時間に関しては、日程調整などで十分に対応可能と思われるので、検討をしていく。他の改善したい点は、以前から上がっている問題であり、現状では対応が難しいと思われるが、今後も検討していく。
	⑯学生に課した授業外学修(事前、または事後)は、学生の学修にとって効果的であった	はい(○)から(●)まで 課していない	⑭設計した到達目標を学生は達成することができた	他者に自分の考えを伝えることの大切さと難しさを感じ取り、プレゼンを行うときの注意点について十分な理解ができたと思われる。	準備時間が短かったこと。一度に複数のプレゼンを行ったので、声が入り交じり、聞き取りにくい状況であった。A4用紙2枚によるプレゼンで、資料が小さく見えにくい状況であった。などの意見が学生アンケートに多く寄せられていた。	準備時間に関しては、日程調整などで十分に対応可能と思われるので、検討をしていく。他の改善したい点は、以前から上がっている問題であり、現状では対応が難しいと思われるが、今後も検討していく。
振り返り	⑰振り返りの意義や方法について、学生に説明する、またはテキストの利用などで理解を促した	はい(○)から(●)まで 課していない	⑮設計した到達目標を学生は達成することができた	他者に自分の考えを伝えることの大切さと難しさを感じ取り、プレゼンを行うときの注意点について十分な理解ができたと思われる。	準備時間が短かったこと。一度に複数のプレゼンを行ったので、声が入り交じり、聞き取りにくい状況であった。A4用紙2枚によるプレゼンで、資料が小さく見えにくい状況であった。などの意見が学生アンケートに多く寄せられていた。	準備時間に関しては、日程調整などで十分に対応可能と思われるので、検討をしていく。他の改善したい点は、以前から上がっている問題であり、現状では対応が難しいと思われるが、今後も検討していく。
	⑱学生が振り返る時間を設けた	はい(○)から(●)まで 課していない	⑯設計した到達目標を学生は達成することができた	他者に自分の考えを伝えることの大切さと難しさを感じ取り、プレゼンを行うときの注意点について十分な理解ができたと思われる。	準備時間が短かったこと。一度に複数のプレゼンを行ったので、声が入り交じり、聞き取りにくい状況であった。A4用紙2枚によるプレゼンで、資料が小さく見えにくい状況であった。などの意見が学生アンケートに多く寄せられていた。	準備時間に関しては、日程調整などで十分に対応可能と思われるので、検討をしていく。他の改善したい点は、以前から上がっている問題であり、現状では対応が難しいと思われるが、今後も検討していく。
	⑲学生が振り返った内容について教員がフィードバックを行った	はい(○)から(●)まで 課していない	⑰振り返りの意義や方法について、学生に説明する、またはテキストの利用などで理解を促した	他者に自分の考えを伝えることの大切さと難しさを感じ取り、プレゼンを行うときの注意点について十分な理解ができたと思われる。	準備時間が短かったこと。一度に複数のプレゼンを行ったので、声が入り交じり、聞き取りにくい状況であった。A4用紙2枚によるプレゼンで、資料が小さく見えにくい状況であった。などの意見が学生アンケートに多く寄せられていた。	準備時間に関しては、日程調整などで十分に対応可能と思われるので、検討をしていく。他の改善したい点は、以前から上がっている問題であり、現状では対応が難しいと思われるが、今後も検討していく。
総合	⑳実施したSIH道場プログラムを総合的に見て、今年度の授業設計は、学生が到達目標を達成するために、(5.10分であった。4.概ね10分であった。3.5分、2.やや10分であった。1.不十分であった。)	5 (●) 3・2・1	⑱学生が振り返った内容について教員がフィードバックを行った	他者に自分の考えを伝えることの大切さと難しさを感じ取り、プレゼンを行うときの注意点について十分な理解ができたと思われる。	準備時間が短かったこと。一度に複数のプレゼンを行ったので、声が入り交じり、聞き取りにくい状況であった。A4用紙2枚によるプレゼンで、資料が小さく見えにくい状況であった。などの意見が学生アンケートに多く寄せられていた。	準備時間に関しては、日程調整などで十分に対応可能と思われるので、検討をしていく。他の改善したい点は、以前から上がっている問題であり、現状では対応が難しいと思われるが、今後も検討していく。
	※その他、他の授業との接続・発展内容・授業運営等の課題がありましたらお書きください。					

平成30年度 理工学部理工学応用数コース SIH 道場 <授業詳細表>

◆目的：徳島大学の新生が大学における学習について、理解するとともに、自身の専門分野における先端研究の体験を通して、興味関心を喚起し、徳島大学における学習・研究に対する動機づけを行う。また、学習の基本となる文章の書き方、プレゼンテーションの仕方、振り返りの仕方を学び、それらを実践することで、大学における能動的な学習の基本となる知識、技能、態度を身につける。

◆到達目標：

- (1) 自身の専門分野における先端研究（現場）と大学における学習について、関連させて説明することができる。
- (2-1) 論理的文章の作成・レポートの作成において、注意すべき点について1つ以上説明することができる。
- (2-2) 効果的なプレゼンテーションを行うための基本的な手法・ツール等を1つ以上説明することができる。
- (2-3) 他者と協働して1つの課題に取り組むことができる。
- (3) 自身の学習活動を振り返る習慣を身につけることができる。

◆成績評価：「SIH 道場最終レポート」を以下の合格基準をもとに評価する。

【SIH 道場最終レポートの内容】

以下の1)～4)を含む「SIH 道場最終レポート」を作成すること。レポートは手書きでも構わないが、電子媒体での作成・提出を推奨する。

- 1) グループ活動について（協働力の目標に対応）
 - ・「協働力」について学んだことをまとめる。
 - ・グループ活動について振り返り自己評価する。
- 2) 成果発表について（プレゼン力の目標に対応）
 - ・「プレゼン力」について学んだことをまとめる。
 - ・成果発表会での各人の発表および他者の発表を振り返り自己評価する。
- 3) 研究室訪問個人レポート（文章力の目標に対応）
 - ・研究室訪問で学びたいと考えていたこと（事前）、実際に学んだこと（事後）、今回の成果と自身の進路や目標の3点についてレポートを作成する。
- 4) SIH 道場での収穫

【SIH 道場レポートの合格基準】

以下の評価基準のうち、「必須」と書いてある項目をすべて満たすこと。

- ・プレゼンテーション資料が提出されていること。（必須）
- ・SIH 道場最終レポートが提出されていること。（必須）
- ・「自己評価」と「グループメンバーへの評価」が記入された「協働力」「プレゼン力」のグループリックが提出されていること。（必須）

・SIH 道場の収穫を1つ以上挙げて、説明すること。収穫が全くない場合は、その理由とどうすれば収穫が得られそうかを述べること。（必須）

◆授業内容（約90分）×10回（4月5日は2回に分かれている。）

<授業スケジュール>（詳細は次ページ）

回	実施日時	内容	会場	提出
1	4月3日(火) 12:50～14:20	SIH 道場の説明・担当教員の紹介	K501	○
2	4月4日(水) 10:25～11:55	学びの相談について 教養教育院について	創成学習スタジオ	○
3	4月5日(木) 10:25～11:55	履修相談	K501	
4	4月6日(金) 13:45～14:25	図書館の利用方法	創成学習スタジオ	
5	4月12日(木) 12:50～14:20	研究室訪問ガイダンス	総科3号館スタジオ	○
6	4月19日(木) 12:50～14:20	グループによるディスカッション	総科3号館スタジオ	○
7	4月26日(木) 12:50～14:20	グループによる研究室訪問・調整（協働力）	総科3号館スタジオ	○
8	5月10日(木) 12:50～14:20	グループによる研究室訪問（協働力）	総科3号館スタジオ	○
9	5月17日(木) 12:50～14:20	グループによる資料作成（協働力）	総科3号館スタジオ	△
10	5月24日(木) 12:50～14:20	成果発表会（プレゼンテーション力）	総科3号館スタジオ	◇

提出物：○（振り返りシート）、△（ルーブリック評価（協働力））、◇（ルーブリック評価（プレゼン力））と SIH 道場アンケート

- ◆授業後に担当教員が行うこと（毎回ではなく指定された回のみ）
- ・担当クラスの学生が提出した「振り返りシート」と「ルーブリック評価」の回収。
- ◆最終回の授業後（SIH 道場終了後）に担当教員が行うこと
 - 1) 担当クラスの学生が提出した「SIH 道場最終レポート」の添削およびコメント
 - ・不合格者には「再提出要求」を出す。
 - 2) 「SIH 道場実施報告書」の提出
 - ・所定のフォーマットに沿って作成・提出する。（フォーマットは、Word 版、e ポートフォリオ版の2つがある）
- ◆最終回の授業後（SIH 道場終了後）にコーディネーターが行うこと
 - ・授業担当教員の「SIH 道場実施報告書」の提出状況のチェック。未提出者への催促。

【第1回 4月3日（火）12:50~14:20】K601、司会：守安、全担当者参加

事前準備：グループ分け、振り返しシートの準備（約70部）（守安）

目標：SIH道場とは何かを理解する。

○授業内容（90分）：◆レクチャー、●個人ワーク、▲グループワーク

経過時間	内容	注意点・教材
15分	◆オープニング SIH道場の詳細・振り返しシートを配布する。 教員の自己紹介を行う。 最終課題・成績評価について説明する。	各担当教員による自己紹介 授業内容ではなく、最終課題 (SIH 最終レポートと合格基準)を説明する。
40分	◆SIH道場の説明 SIH道場の目的やスケジュールを説明する。事前課題やテキスト、eポートフォリオシステムの使い方、反転授業などを説明する。	SIH道場の目的とスケジュール等の説明（守安） eポートフォリオシステム、moodleの使い方の説明（守安）
20分	▲グループメンバー確認 研究室訪問のグループメンバーの確認を行い、各グループで自己紹介する。	グループと担当教員の顔合わせ
5分	◆クロージング 振り返しシートの記入と提出を行う。	振り返しシートの保管（守安）

○事後学習

SIH道場の概要の理解、配布資料の復習。

【第2回 4月4日（水）10:25~11:55】創生学習スタジオ、学びについて（理工学部学生委員長、教養教育院教員担当）

事前準備：振り返しシートの準備（約70部）（守安）

目標：大学における学びの相談について学ぶ。教養教育院での学びのシステムを学ぶ。

○事前学習

教養教育院の履修の手引を読む。

○授業内容（90分）：◆レクチャー、●個人ワーク、▲グループワーク

経過時間	内容	注意点・教材
40分	◆レクチャー 学びの相談について	出席確認はしない 理工学部学生委員長
50分	◆レクチャー 教養教育院について	齋藤、渡部（教養教育院）

○事後学習

教養教育院の履修の手引および資料の復習。

【第3回 4月5日（木）10:25~11:55】K501 履修相談、教務委員

○事前学習

Web 登録説明会の資料を読む。

○授業内容（90分）：◆レクチャー、●個人ワーク、▲グループワーク

経過時間	内容	注意点・教材
90分	●履修相談	出席確認。 手引、時間割、シラバス

履修登録は午後から。教養教育と理工学部手引、時間割、シラバスの全てを持ってくる。

【第4回 4月6日（金）13:45~14:25】創成学習スタジオ 図書館の利用法

○授業内容（40分）：◆レクチャー、●個人ワーク、▲グループワーク

経過時間	内容	注意点・教材
40分	◆図書館の利用法	

【第5回 4月12日（木）12:50~14:20】総合科学部3号館スタジオ、司会：守安、全担当者参加

事前準備：振り返しシートの準備（約70部）（守安）

目標：研究室訪問の方法について学ぶ。グループでのディスカッション方法を学ぶ。

※研究室訪問の事前指導にあたる

○事前学習

ビデオコンテンツを見る（協働力に関する3つのビデオ教材）

○授業内容（90分）：◆レクチャー、●個人ワーク、▲グループワーク

経過時間	内容	注意点・教材
5分	◆オープニング 出席確認、振り返しシートを配布する。 概要説明を行う。	出席確認は各クラスの担当教員 (協働力のルーブリックの提示 (5月17日への導入))
20分	◆レクチャー 研究室訪問についてのガイダンスを行う。	本日以外での訪問、本日の訪問 についての説明（守安）
20分	◆レクチャー 「協働力」のビデオを見る。	ビデオ視聴後のクイズを実施 (守安)
45分	▲グループ活動 研究室訪問の方針についてディスカッション ・グループとして訪問する4つ程度の希望研究室を決める。 振り返しシートの提出。	模造紙、ペン、ポストイットを配布 (教理で用意) ポストイット、模造紙13枚× 2 振り返しシートの保管（守安）

○事後学習

研究室訪問に際しての依頼メール作成・内容の確認など。

【第6回 4月19日(木) 12:50~14:20】総合科学部3号館スタジオ、司会：守安、全担当者参加

事前準備：振り返しシート(約70部) (守安)

※グループによってはディスカッションを継続

○授業内容 (90分)；◆レクチャー、●個人ワーク、▲グループワーク

経過時間	内容	注意点・教材
5分	◆オープニング 出席確認、授業概要説明、振り返しシートの配布。	出席確認を行う。 14:10に集合を告知する。
75分	▲グループ活動 研究室訪問の方針についてディスカッション ・前回決定できなかったグループは、再度ディスカッションを行い、訪問研究室を決定する。 ・すでに訪問する研究室が決まっている場合、研究室訪問を実施する。	
5分	●振り返り グループでの活動を振り返る。	
5分	◆クロージング 振り返しシートの提出。 次回の授業の予告を行う。	振り返しシートの保管 (守安)

○事後学習

研究室訪問で得た情報をまとめる。

【第7回 4月26日(木) 12:50~14:20】総合科学部3号館スタジオ、司会：守安、全担当者参加

事前準備：振り返しシート(約70部) (守安)

目標：研究室訪問。

○授業内容 (90分)；◆レクチャー、●個人ワーク、▲グループワーク

経過時間	内容	注意点・教材
5分	◆オープニング 出席確認、授業概要説明、振り返しシートの配布。	14:10に集合を告知する。

75分	▲グループ活動 研究室訪問、および訪問研究室の再調整を行う。 ・研究室訪問が決定しているグループは引き続き研究室を訪問する。 ・グループとして希望研究室の訪問ができていない場合、他グループから希望者を募り、別に訪問グループを作って訪問する。 (担当者的アドバースが必要⇒)	できる限り学生全員が希望する分野・研究室を訪問できるように配慮する。 担当者が訪問希望研究室のアドバースを行なう。 (希望学生がいるグループ担当者) ○希望分野・研究内容の抽出 ○他グループの希望者への声掛け。 ○訪問グループの結成 (グループ内での連絡体制決める) ○訪問研究室の推薦
5分	●振り返り グループでの活動を振り返る。	
5分	◆クロージング 振り返しシートの提出。 次回までの課題を発表。	振り返しシートの保管 (守安)

○事後学習

研究室訪問で得た情報をまとめる。

【第8回 5月10日(木) 12:50~14:20】総合科学部3号館スタジオ、司会：守安、全担当者参加

事前準備：振り返しシート(約70部) (守安)

目標：研究室訪問。

○授業内容 (90分)；◆レクチャー、●個人ワーク、▲グループワーク

経過時間	内容	注意点・教材
5分	◆オープニング 出席確認、授業概要説明、振り返しシートの配布。	14:10に集合を告知する。
75分	▲グループ活動 研究室訪問	
5分	●振り返り グループでの活動を振り返る。	
5分	◆クロージング 研究室訪問を終えての振り返しシートの提出。	課題：「プレゼンテーション力」のビデオを見て、クイズに答え

次回までの課題を発表。 振り返りシートの保管 (守安)

○事後学習

研究室訪問で得た情報をまとめる。

【第9回5月17日(木)12:50~14:20】総合科学部3号館スタジオ、司会：守安、全担当者参加

事前準備：協働力のルーブリック (約70部) (守安)

○事前学習

ビデオコンテンツを見る (プレゼンテーション力に関する3つのビデオ教材)

○授業内容 (90分)：◆レクチャー、●個人ワーク、▲グループワーク

経過時間	内容	注意点・教材
5分	◆オープニング 出席確認、授業概要説明、協働力のルーブリック評価を配布。	14:10に集合を告知する。 プレゼンテーションのルーブリックの掲示 (次回への導入)
75分	●▲グループ活動 プレゼンテーション資料作成 (手書き) を行う。 A4版2枚まで	教員は適宜アドバイスを行う。 下書き用紙は特に配布しない。
5分	●振り返り グループ活動を振り返る。	協働力のルーブリック評価
5分	◆クローージング 協働力のルーブリック評価を提出する。 次回の授業の予告等を行う。	ルーブリックの保管 (守安)

○事後学習

プレゼンテーション資料の作成および見直し。

情報科学入門で Word の使用方法を学習し、5月17日に作成した手書きのプレゼンテーション資料を Word で作成する。ただし、必ずしもプレゼンテーション資料は Word で作成しなければならないわけではない。

次のような点からも自身の考え方を整理してみる。

- ・自身の希望研究分野・研究室を訪問し、話を聞いて得た知識や感想。
- ・希望研究分野のイメージが訪問前後でどのように変化したか、しななかったか。
- ・自身の希望する研究方向が訪問前後でどのように変化したか、しななかったか。
- ・今回の成果と自身の希望する研究、進路、目標などとの関連。
- ・希望外の研究室を訪問して新たな発見があったか。
- ・新たに希望する研究分野などが見つかったか。

【第10回5月24日(木)12:50~14:20】総合科学部3号館スタジオ、司会：守安、全担当者

事前準備：プレゼン力のルーブリック (約70部) (守安)

○事前学習

グループでプレゼンテーション資料を完成させ、発表の準備をする。

○授業内容 (90分)：◆レクチャー、●個人ワーク、▲グループワーク

経過時間	内容	注意点・教材
5分	◆オープニング 出席確認、授業概要説明、プレゼンテーション力のルーブリック評価を配布。	
70分	▲、●成果発表 6ヶ所に分かれてグループ毎にホワイトボード上で のポスター発表を同時に実施する。 1 各所には二つのグループを配置し、前半と後半に分かれてそれぞれの班が互いに発表と聴講を行う。 発表は、質疑応答を含め一人5分間とする。 司会はグループの担当教員が行う。	A4版用紙2枚に発表内容をまとめる。 評価視点：プレゼン力のルーブリック評価
10分	●振り返り 成果発表会の振り返り。 アンケートの記入	
5分	◆クローージング 最終課題 (SIH 道場最終レポート) の確認を行う。 終わりの挨拶。 プレゼンテーション力のルーブリック評価を提出する。 アンケートを提出する。	最終レポートは5月31日(木)までに提出 提出先は教養教育院のレポートボックス ルーブリックの保管 (守安)

○事後学習

1. ビデオコンテンツを見る (文章力に関する4つのビデオ教材)
2. SIH 道場最終レポートの作成と提出。

注) SIH 道場最終レポートは【SIH 道場最終レポートの内容】の4項目を書き込み出来るA4版1枚を提出。最終レポート用紙の作成担当は (守安)。前年度担当者に確認が必要。

注) 応用理数コース SIH 道場の moodle でのページの作成依頼担当は (守安)。不要の場合割愛する。
Mahara で代用できる。

平成30年度 SIH道場必須項目設計表(概要のみ)

生物資源産業学部

15.生物資源産業学部

	到達目標	評価方法・基準	内容		授業実施枠
			事前学習	授業	
① 体験学習	自身の専門分野に関連した社会現場と大学における学習について、関連させて説明することができる。	作成レポートの提出	学外研修で体験した社会現場についてインタビューネットを利用して自主的に調べる。	1. 学外研修→研修した内容について調査し、レポートとして文章にまとめる。 2. 学外研修→研修した内容についてプレゼンテーションとKJ法ワークを行う。	SIH道場の授業枠内で実施
	③ 学習の振り返り	学んだことをe-ポートフォリオに記入。教員はコメントをフィードバックする。	SIH道場の授業枠内で実施		
文章力	論理的文章の作成・レポートの作成において、注意すべき点について1つ以上説明することができる。	提出物にルーブリック評価表を用いる	反転授業コンテンツ「レポートの書き方入門」の視聴	体験学習1の内容に対して作成したレポートについて、ルーブリックを用いたピア評価、ポイント確認、ブラッシュアップ	SIH道場の授業枠内で実施
② プレゼンカ	効果的なプレゼンテーションを行うための基本的な手法・ツール等を1つ以上説明することができる。	ルーブリック評価表を用いる	反転授業コンテンツ「効果的なプレゼンテーションの仕方」の視聴	体験学習2の内容に対して作成したプレゼンテーションについて、ルーブリックを用いたピア評価、ポイント確認、ブラッシュアップ	SIH道場の授業枠内で実施
	③ 学習の振り返り	学んだことをe-ポートフォリオに記入。教員はコメントをフィードバックする。	SIH道場の授業枠内で実施		
協働力	他者と協同して1つの課題に取り組むことができる。	ルーブリック評価表を用いる	反転授業コンテンツ「アイデアの発想・収束(KJ法)」の視聴	体験学習2の内容に対してKJ法ワークを実施し、ルーブリックを用いたピア評価を行う。	SIH道場の授業枠内で実施
	③ 学習の振り返り	学んだことをe-ポートフォリオに記入。教員はコメントをフィードバックする。	SIH道場の授業枠内で実施		
注意点	学生が授業を通して何ができるようになるのかについて具体的に明記する。明記の仕方として「〇〇できる」と表現すると良い。		反転授業の形式で設計し、コンテンツを使用することを推奨する。	体験学習1の内容に対して作成したレポートについて、ルーブリックを用いたピア評価、ポイント確認、ブラッシュアップ	「①体験学習」のよりに既存の授業で置き換えることも可能です。

SIH道場プログラム設計評価シート

生物資源産業界学部

※学生のeポートフォリオを参考に記入してください。

要素	項目	チェック	学生の学修効果・成果	改善したい点	次年度に向けた対応
早期体験	①設計した到達目標を学生は達成することができた	<input checked="" type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> どちらともいえない <input type="checkbox"/> 設計していない	前年学外研修を行った企業の都合がつかず、H30年度は、新入生の生物資源産業界各コースとの結び付きを意識できる見学生として、農薬及び農業資材メーカーおよび徳島県工業技術センターを新規の学外研修先とした。早期体験(学外研修)をSIH道場の主軸として据え、ラーニングスキルにおける3つの要素を早期体験に関連づけて実施し、その振り返りを行った。	専門分野に関連した社会現場の学外研修(種苗会社、農薬-農業資材メーカーおよび農試験センターの見学)を通して、専門分野における興味関心の喚起、今後の学習・研究に対する動機づけができた。アンケートでは、参加学生の9割以上から専門分野の関心が高まったとの回答を得た。	学外研修は好評であり、今年度はより理解度を深めるために、実施前に研修場所についての説明を置いた。こちらからの説明だけでなく、学生各自が調べた意欲を上げるため、情報として会社のHPやドキュメントや資料などを配布することがより有効であると思われた。
	②設計した内容は、専門分野の学修に対して学生を動機づけるという点で効果的だった	<input checked="" type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> どちらともいえない <input type="checkbox"/> 設計していない	H29年度と同様に、今年度もSIH道場の終了後に、学外研修を通して、学びたいと考えていたこと(事前)、実際に現場で学んだこと(事後)、今後の目標などについて、SIH道場を総括した課題レポートとして実施した。	SIH道場の終了後、まとめとして「体験学習個人レポート」を各人に課した。学外研修先の事前学習、調査に体験した様々な内容の現場、事後にこの実践した事例を題材としてまとめた。また、事後にまとめた。また、文章作成時における書き方、組み立て方などの基本的な技術などについても学修できたと考えられる。	文章力は、SIH道場実施後に「体験学習個人レポート」としてまとめた文書で評価した。1年生の講義に概論やキャリアパスなどの将来を考える要素の高い講義があるため、そのような講義において文章力を更に発展させるようなテーマを課していくのも良いと思われた。
	③学生に課した事前学習は、学生の体験学習を意義あるものにするために効果的だった	<input checked="" type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> どちらともいえない <input type="checkbox"/> 設計していない	H29年度と同様に、3箇所での体験学習を通して学んだこと、得た点やおおよそ感じたことなどについて、各人が履上に前に立たせて約1、2分間のプレゼンテーションを行った。	学生を3班に分割し、その班内において1名ずつのプレゼンテーションを実施した。聴衆を前に自分の意見を明確に述べることで、他の班の講師や自分が必要であること、また、他者の主張を聞いて自分の意見との類似点、相違点を考えプレゼンテーションとして述べることなどのプレゼンテーションにおける基本項目が修得できた。	今年は、機材のトラブルのため、講義中にビデオコンテンツを利用する時間が十分に取れなかった。コンテンツとして、プレゼン手法の基本的な内容を別資料で作り説明した。結果として、学生に十分に浸透したようであった。次年度にはビデオコンテンツ以外の組み合わせを用いることで、学生の理解度がより深まるかもしれない。
ラーニングスキル	④設計した到達目標を学生は達成することができた	<input checked="" type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> どちらともいえない <input type="checkbox"/> 設計していない	H29年度と同様に、KI法を用いて学外研修の体験学習を今後の学びにどう活かすのか、どう役立てるのかについて、各班ごとにグループ討論を行い、まとめた意見を集約してグループ発表を行った。	3班に分けた班内において、5～6名のグループを作成して、グループ討論を行った。KI法での各人の役割やグループ討論の活発のやりやりの雰囲気作りを事前に細心でもらったため、開始から活発な討議が受け入れられた。討議が進むにつれて自分のアイデアが生まれることを各人が実感できたようである。実際に、班によっては予定時間を超過して自然に入らなくなったため、時間の都合で指導教官がまとめに入るように誘導するよう場面もあった。	今年度は、機材のトラブルのため、講義中にビデオコンテンツを利用する時間が十分に取れなかったため、KI法の基本的な内容を別資料で丁寧に説明した。またKI法で各人が活発な議論を行えるよう、結果的に事前に行える時間がとれたようであった。結果として、学生の十分に浸透したようであった。講義中にビデオコンテンツを利用する時間は、講義中にビデオコンテンツを利用する時間が十分に取れなかったため、KI法の基本的な内容を別資料で丁寧に説明した。またKI法で各人が活発な議論を行えるよう、結果的に事前に行える時間がとれたようであった。結果として、学生の十分に浸透したようであった。
ラーニングスキル	⑤設計したアクティビティ・ラーニング型授業は、学生の学修にとって効果的であった	<input checked="" type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> どちらともいえない <input type="checkbox"/> 設計していない	H29年度と同様に、KI法を用いて学外研修の体験学習を今後の学びにどう活かすのか、どう役立てるのかについて、各班ごとにグループ討論を行い、まとめた意見を集約してグループ発表を行った。	各履修者やアドバイザーなどのやり取りをeポートフォリオシステムである「Mahara」を用いて行った。	昨年年度も評価に述べられていたが、毎年度「Mahara」が変更されたため、「Mahara」の使い方を理解することが十分でないところがある。ラーニンググループなど、なんらかのサポートをいたされたけると助かります。
ラーニングスキル	⑥学生に課した授業外学修(事前、または事後)は、学生の学修にとって効果的であった	<input checked="" type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> どちらともいえない <input type="checkbox"/> 設計していない	H29年度と同様に、KI法を用いて学外研修の体験学習を今後の学びにどう活かすのか、どう役立てるのかについて、各班ごとにグループ討論を行い、まとめた意見を集約してグループ発表を行った。	振り返りについて、最初には使用に慣れないながらも、学生教員共に、最終レポート提出時にはその操作をほぼ理解していた。情報処理の基礎学習にも役立つように思われる。来年度には事前にMaharaの使用をトライアルできる時間があることより有効であると思われる。	昨年年度も評価に述べられていたが、毎年度「Mahara」が変更されたため、「Mahara」の使い方を理解することが十分でないところがある。ラーニンググループなど、なんらかのサポートをいたされたけると助かります。
協働能力	⑦学生に課した授業外学修(事前、または事後)は、学生の学修にとって効果的であった	<input checked="" type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> どちらともいえない <input type="checkbox"/> 設計していない	H29年度と同様に、KI法を用いて学外研修の体験学習を今後の学びにどう活かすのか、どう役立てるのかについて、各班ごとにグループ討論を行い、まとめた意見を集約してグループ発表を行った。	各履修者やアドバイザーなどのやり取りをeポートフォリオシステムである「Mahara」を用いて行った。	昨年年度も評価に述べられていたが、毎年度「Mahara」が変更されたため、「Mahara」の使い方を理解することが十分でないところがある。ラーニンググループなど、なんらかのサポートをいたされたけると助かります。
協働能力	⑧学生に課した授業外学修(事前、または事後)は、学生の学修にとって効果的であった	<input checked="" type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> どちらともいえない <input type="checkbox"/> 設計していない	H29年度と同様に、KI法を用いて学外研修の体験学習を今後の学びにどう活かすのか、どう役立てるのかについて、各班ごとにグループ討論を行い、まとめた意見を集約してグループ発表を行った。	各履修者やアドバイザーなどのやり取りをeポートフォリオシステムである「Mahara」を用いて行った。	昨年年度も評価に述べられていたが、毎年度「Mahara」が変更されたため、「Mahara」の使い方を理解することが十分でないところがある。ラーニンググループなど、なんらかのサポートをいたされたけると助かります。
協働能力	⑨学生に課した授業外学修(事前、または事後)は、学生の学修にとって効果的であった	<input checked="" type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> どちらともいえない <input type="checkbox"/> 設計していない	H29年度と同様に、KI法を用いて学外研修の体験学習を今後の学びにどう活かすのか、どう役立てるのかについて、各班ごとにグループ討論を行い、まとめた意見を集約してグループ発表を行った。	各履修者やアドバイザーなどのやり取りをeポートフォリオシステムである「Mahara」を用いて行った。	昨年年度も評価に述べられていたが、毎年度「Mahara」が変更されたため、「Mahara」の使い方を理解することが十分でないところがある。ラーニンググループなど、なんらかのサポートをいたされたけると助かります。
振り返り	⑩振り返りの意義や方法について、学生に説明する、またはテキストの利用などで理解を促した	<input checked="" type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> どちらともいえない <input type="checkbox"/> 設計していない	H29年度と同様に、KI法を用いて学外研修の体験学習を今後の学びにどう活かすのか、どう役立てるのかについて、各班ごとにグループ討論を行い、まとめた意見を集約してグループ発表を行った。	各履修者やアドバイザーなどのやり取りをeポートフォリオシステムである「Mahara」を用いて行った。	昨年年度も評価に述べられていたが、毎年度「Mahara」が変更されたため、「Mahara」の使い方を理解することが十分でないところがある。ラーニンググループなど、なんらかのサポートをいたされたけると助かります。
振り返り	⑪各授業(体験を含む)の最後にSIH道場の終了時に学生が振り返る時間を設けた	<input checked="" type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> どちらともいえない <input type="checkbox"/> 設計していない	H29年度と同様に、KI法を用いて学外研修の体験学習を今後の学びにどう活かすのか、どう役立てるのかについて、各班ごとにグループ討論を行い、まとめた意見を集約してグループ発表を行った。	各履修者やアドバイザーなどのやり取りをeポートフォリオシステムである「Mahara」を用いて行った。	昨年年度も評価に述べられていたが、毎年度「Mahara」が変更されたため、「Mahara」の使い方を理解することが十分でないところがある。ラーニンググループなど、なんらかのサポートをいたされたけると助かります。
振り返り	⑫学生が振り返った内容について教員がフィードバックを行った	<input checked="" type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> どちらともいえない <input type="checkbox"/> 設計していない	H29年度と同様に、KI法を用いて学外研修の体験学習を今後の学びにどう活かすのか、どう役立てるのかについて、各班ごとにグループ討論を行い、まとめた意見を集約してグループ発表を行った。	各履修者やアドバイザーなどのやり取りをeポートフォリオシステムである「Mahara」を用いて行った。	昨年年度も評価に述べられていたが、毎年度「Mahara」が変更されたため、「Mahara」の使い方を理解することが十分でないところがある。ラーニンググループなど、なんらかのサポートをいたされたけると助かります。
総合	⑬実施したSIH道場プログラムを総合的に見て、今年度の授業設計は、学生が到達目標を達成するために、(5、10分であった、4、概ね十分であった、3、ふつ、2、やや十分であった、1、十分であった)。	5 4 3 2 1	⑬実施したSIH道場プログラムを総合的に見て、今年度の授業設計は、学生が到達目標を達成するために、(5、10分であった、4、概ね十分であった、3、ふつ、2、やや十分であった、1、十分であった)。	⑬実施したSIH道場プログラムを総合的に見て、今年度の授業設計は、学生が到達目標を達成するために、(5、10分であった、4、概ね十分であった、3、ふつ、2、やや十分であった、1、十分であった)。	⑬実施したSIH道場プログラムを総合的に見て、今年度の授業設計は、学生が到達目標を達成するために、(5、10分であった、4、概ね十分であった、3、ふつ、2、やや十分であった、1、十分であった)。
	※その他、他の授業の授業・実施内容・授業運営等の課題が取りまじらさず書きください。				

平成30年度 生物資源産業学部 SIH 道場 < 授業詳細表 >

◆ 目的：

生物資源産業学部の新入生に対する教育と研究に関する導入教育を行う。大学における学習の意義を理解し、自身の専門分野に関連した社会現場の学外研修（県立工業技術センター、農業・肥料製造メーカーおよび種苗企業の見学）を通して、専門分野における興味関心を喚起し、生物資源産業学部の学習・研究に対する動機づけを行う。また、大学における学習・研究に対して学生が能動的に取り組むことができるように、能動的学習の基盤となる学習技術（文章力、プレゼンテーション力、協働力、振り返り力）習得のため、レポート作成、個人・グループ単位でのプレゼンテーションおよびKJ法を用いたワークショップを実施する。

◆ 到達目標：

- (1) 自身の専門分野に関連がある社会現場と大学における学習について、関連させて説明することができる。
- (2-1) 論理的文章の作成・レポートの作成において、注意すべき点について1つ以上説明することができる。
- (2-1) 効果的なプレゼンテーションを行うための基本的な手法・ツール等を1つ以上説明することができる。
- (2-3) 他者と協同して1つの課題に取り組むことができる。
- (3) 自身の学習活動を振り返る習慣を身につけることができる。

◆ 成績評価：

- 以下の各項目について合格基準をもとに評価する。
- 1) 体験学習プレゼンテーション（プレゼン力の目標に対応）
 - ・学外研修の体験学習を通して学んだこと、得たことおよび感じたことなどについて発表を行う。
 - ・評価は、担当教員がルーブリック評価表（「プレゼン力」）で採点する。
 - 2) 体験学習ポスター発表（協働力の目標に対応）
 - ・学外研修の体験学習を今後の学びにどう活かすのか、どう役立てるのかについてグループで議論し意見を集約して発表を行う。
 - ・評価は、担当教員がルーブリック評価表（「協働力」）で採点する。
 - 3) 体験学習個人レポート（文章力の目標に対応）
 - ・学外研修の体験学習で学びたいと考えていたこと（事前）、実際に現場で学んだこと（事後）、今後の目標などについてA4判1枚程度（約1000字）のレポートを作成する。
 - ・評価は、担当教員がレポート内容をルーブリック評価表（「文章力」）で採点する。

【SIH 道場の合格基準】

以下の評価基準についての必須項目をすべて満たしていること。

- ・「体験学習プレゼンテーション」を行っていること。
- ・「体験学習ポスター発表」に参画し、討論および発表を行っていること。
- ・「体験学習個人レポート」を提出していること。

◆ 授業内容（90分）×4回+体験学習（詳細は次ページ）

< 大まかな流れ >

学外研修を中心に実施し、専門分野についての理解を深める。

- 1 回目：導入（SIH 道場関連資料の使用方法的の会得）
- 2 回目：反転授業（ビデオコンテンツ）による事前学習
～専門分野の早期体験（学外研修：醸造企業、製菓企業および種苗企業の見学）
- 3 回目：学外研修の事後学習（個人プレゼンテーション；プレゼン力の育成）
- 4 回目：学外研修の事後学習（KJ法とポスター発表；協働力の育成）

終了後：学外研修の課題提出（個人レポート作成；文章力の育成）

※3回目と4回目は同じ日に行う。

※各回の詳細は次ページ

◆ 毎回の授業後に担当教員が行うこと

- ・eポートフォリオシステムを利用し、担当クラスの学生が提出した「振り返りシート」への一言コメント。コメントは、学外研修終了時、個人プレゼン終了時、ポスター発表終了時、課題レポート終了時の計4回。

◆ 4回目の授業後（SIH 道場終了後）に担当教員が行うこと

- 1) 担当クラスの学生が提出した「SIH 道場最終レポート（体験学習個人レポート）」の添削
 - ・不合格者には「再提出要求」を出す。
 - ・合格者は「認定」の評価をつける。
- 2) 「SIH 道場実施報告書」の提出
 - ・eポートフォリオ版の書式に沿って作成し、eポートフォリオシステム上に提出する。
- 3) 他の担当教員の「SIH 道場実施報告書」の閲覧と相互コメント

◆ 4回目の授業後（SIH 道場終了後）にコーディネーターが行うこと

- ・授業担当教員の「SIH 道場実施報告書」の提出状況のチェック。未提出者への催促。

【1 回目】（4月3日（火）8:40～10:10）

○ 導入、学外研修の事前学習

SIH 道場についての内容説明、情報機器と情報資源の使用法説明、Moodle上のビデオコンテンツ（SIH 道場とは、eポートフォリオ Mahara の使い方、プレゼンテーション力、協働力）の視聴。「SIH 道場とは」と「eポートフォリオ Mahara の使い方」は必須。

○ 事後学習

学外研修実施場所（施設・研究所・企業）の事前調査、学外研修で学びたいと思うこと、などについて事前に考えておくよう連絡する。自宅から未視聴のビデオコンテンツを視聴。

【2 回目】（4月3日（火）10:25～11:55）

○ 学外研修の事前学習

情報機器の操作および関連する情報の登録、ビデオコンテンツ（プレゼンテーション力、協働力、文章

力)を見る。「プレゼンテーション力」と「協働力」は必須。「文章力」は必須。「文章力」は必須。「文章力」は必須。課題レポートの作成前までにしておくように連絡する。

○事後学習

学外研修実施場所 (施設・研究所・企業) の事前調査、学外研修で学びたいと思うこと、などについて事前に考えておくように連絡する。自宅から未視聴のビデオコンテンツを視聴。

【学外研修の実施】

○学外研修内容 (4月4日 (水) 8:40~17:00)

研修場所：徳島県立工業技術センター
 有限会社 竹内園芸
 OAT アグリオ株式会社
 あすたむらんど徳島 (昼食場所)

学部定員を約35名弱ずつ3班(1, 2, 3)に分割し、バスで各施設を見学および体験
 学生は気づいたことをメモしながら学外研修を行う。

研修行程計画表 (統括責任者：刑部敬史、副責任者：櫻谷英治)

- 1班 (担当：浜野龍夫、宮脇克行)
 工学部発 → 工技センター → 昼食 → OAT アグリオ → 竹内園芸 → 工学部着
- 2班 (担当：山本 圭、阪本鷹行)
 工学部発 → OAT アグリオ → 昼食 → 竹内園芸 → 工技センター → 工学部着
- 3班 (担当：友安俊文、白井昭博)
 工学部発 → 竹内園芸 → 昼食 → 工技センター → OAT アグリオ → 工学部着

○事後学習

学生はeポートフォリオシステム上に、振り返りレポートを提出。担当教員は振り返りレポートにコメントを付けて返却する。

【3回目】(4月5日 (木) 8:40~10:10)

学外研修と同じ班に分かれ、3教室にて実施。班内の各個人がビデオコンテンツ (プレゼン力) を参考にして、体験学習を通して学んだことや感じたことなどについて班全員の前で1名ずつ1~2分間のプレゼンを行う。各班の担当教員がルーブリック評価表により採点する。

○授業内容 (90分)：◆レクチャー、●個人ワーク、▲グループワーク)

経過時間	内容	注意点
5分	◆オープニング (内容説明)	
25分	●プレゼンテーション内容の検討	下書き用紙に記載
65分	●プレゼンテーション (1~2分間)	プレゼン力のルーブリック評価
5分	◆クロージング (総評)	

○事後学習

学生はeポートフォリオシステム上に、振り返りレポートを提出。担当教員は振り返りレポートにコメントを付けて返却する。

【4回目】(4月5日 (木) 10:25~11:55)

学外研修と同じ班に分かれ、3教室にて実施。班内を4~5名ずつの7~8班に分けて、ビデオコンテンツ (協働力) を参考にして、体験学習を今後の学びにどう活かすのかについてKJ法による集団討議を行う。討議結果についてのポスターを製作し、各班の代表者が議論内容をまとめて2~3分間で発表する。各班の担当教員がルーブリック評価表により採点する。

○授業内容 (90分)：◆レクチャー、●個人ワーク、▲グループワーク)

経過時間	内容	注意点
5分	◆オープニング (KJ法の説明)	
15分	●カードの作成	各自最低3~4枚に記入
15分	▲カードの島作りと自由討論	同意見、異意見の分類
15分	▲カードの島のまとめと名称付け	意見間の関連性チェック
10分	▲発表のためのまとめ	発表者の決定
25分	▲発表 (2~3分+若干の討論)	協働力のルーブリック評価
5分	◆クロージング (総評) 体験学習個人レポートの作成と提出について	レポート締切日等の諸連絡

○事後学習

学生はeポートフォリオシステム上に、振り返りレポートを提出。担当教員は振り返りレポートにコメントを付けて返却する。

【SIH 道場終了後の課題】

学生はeポートフォリオシステム上に、SIH道場を総括した内容の課題レポート (体験学習個人レポート) を締切日までに提出。担当教員は課題レポートにコメントを付けて返却する。

SIH道場必須項目設計表（概要のみ）

医歯薬学研究部医療教育開発センター

16. 医歯薬学研究部医療教育開発センター

	到達目標	評価方法・基準	内容		授業実施枠
			事前学習	授業	
① 体験学習	医療現場で活躍している専門家の講演を聴講し、グループワークを通して自分自身を振り返り、今後の自分の学習のあり方について説明することができる。	他学部・学科学生との合同ワークショップでのグループワークのパフォーマンスについて班毎にルーブリック評価を行い、振り返りレポートで個別に評価する。	ワークショップ ワークショップテーマに関連した資料を閲覧する。	ワークショップのテーマに沿った専門家の講演を聴講する。他学部・学科学生と合同でグループワークを行い、テーマについてのプロダクトを作成する。	SIH道場「チーム医療入門」平成30年9月28日13:00-17:00
	③ 学習の振り返り				
② 文章力	今後の自分の学習のあり方についてレポートにまとめることができる。	振り返りレポートで評価する。	反転授業ビデオ コンテンツ「文章力」の動画を視聴。	ワークショップ終了後に今回のテーマについて自分の意見を振り返りレポートとしてまとめ、提出する。	SIH道場「チーム医療入門」平成30年9月28日13:00-17:00
② プレゼンカ	グループで討議した結果を他のグループにプレゼンテーションできる。	代表者の発表をルーブリック評価表を用いて評価する。（班全体の評価とする）。	反転授業ビデオ コンテンツ「プレゼンテーション」の動画を視聴	3～4班合同でプロダクトをもとに各班の発表と討議を行う。	SIH道場「チーム医療入門」平成30年9月28日13:00-17:00
② 協働カ	他者と協力して、テーマについて討議（意見交換）し、プロダクトを作成できる。	ルーブリック評価表を用いて評価する（班全体の評価とする）。	反転授業ビデオ コンテンツ「協働カ」の動画やKJ法の動画を視聴する。	班単位でKJ法を用いてワークショップテーマについてのプロダクトを作成する。	SIH道場「チーム医療入門」平成30年9月28日13:00-17:00

SIH道場プログラム設計評価シート

医歯薬学研究部医療教育開発センター

※学生のeポートフォリオ、成果物、eポートフォリオを参考にして記述してください。

要素	項目	チェック	学生の学修効果・成果	改善したい点	次年度に向けた対応
早期体験	①設計した到達目標を学生は達成することができた	<input checked="" type="checkbox"/> どちらともいえない 設計していない	概ね効果ができていると考えている。	学生アンケートの自由記載を確認すると、基調講演の意義や目的を十分に理解していない学生がいた。基調講演の意義、目的の学生への伝達方法を改善する余地がある。	基調講演の目的、意義を事前学習の説明に追加する。また、基調講演前のオリエンテーションで説明を追加する。
	②設計した内容は、専門分野の学修に対して学生を動機づけるという点で効果的だった	<input checked="" type="checkbox"/> どちらともいえない 設計していない			
	③学生に課した事前学習は、学生の体験学習を意義あるものにするために効果的だった	<input checked="" type="checkbox"/> どちらともいえない 設計していない			
ラーニングスキル 文章力	④設計した到達目標を学生は達成することができた	<input checked="" type="checkbox"/> どちらともいえない 設計していない	概ね効果ができていると考えている。	特に無い。	変更は予定していない。
	⑤設計したアクティビティ・ラーニング型授業は、学生の学修にとって効果的であった	<input checked="" type="checkbox"/> どちらともいえない 設計していない			
	⑥学生に課した授業外学修（事前、または事後）は、学生の学修にとって効果的であった	<input checked="" type="checkbox"/> どちらともいえない 設計していない			
ラーニングスキル プレゼン力	⑦学生の評価は、ルーブリック等で基準を明確にして行った	<input checked="" type="checkbox"/> どちらともいえない 設計していない	概ね効果ができていると考えている。	特に無い。	変更は予定していない。
	⑧設計した到達目標を学生は達成することができた	<input checked="" type="checkbox"/> どちらともいえない 設計していない			
	⑨設計したアクティビティ・ラーニング型授業は、学生の学修にとって効果的であった	<input checked="" type="checkbox"/> どちらともいえない 設計していない			
ラーニングスキル 協働力	⑩学生に課した授業外学修（事前、または事後）は、学生の学修にとって効果的であった	<input checked="" type="checkbox"/> どちらともいえない 設計していない	概ね効果ができていると考えている。	特に無い。	変更は予定していない。
	⑪学生の評価は、ルーブリック等で基準を明確にして行った	<input checked="" type="checkbox"/> どちらともいえない 設計していない			
	⑫設計した到達目標を学生は達成することができた	<input checked="" type="checkbox"/> どちらともいえない 設計していない			
振り返り	⑬振り返りの意義や方法について、学生に説明する、またはテキストの利用などで理解を促した	<input checked="" type="checkbox"/> どちらともいえない 設計していない	概ね効果ができていると考えている。	特に無い。	変更は予定していない。
	⑭授業（体験を含む）の最後やSIH道場の終了時に学生が振り返る時間を設けた	<input checked="" type="checkbox"/> どちらともいえない 設計していない			
	⑮学生が振り返った内容について教員がフィードバックを行った	<input checked="" type="checkbox"/> どちらともいえない 設計していない			
総合	⑯実施したSIH道場プログラムを総合的に見て、平成30年度の授業設計は、学生が到達目標を達成するために、(5.十分であった。4.概ね十分であった。3.ふつ。2.やや不十分であった。1.不十分であった)。 ※その他、他の授業の経験・発展内容・授業運営等の課題があり、私たちが改善してください。	5 4 3 2 1	チーム医療入門は、将来チーム医療を体験するため、準備教育の第一段階として位置づけられる。医・歯・薬学部と多様な背景の400名を越える学生が参加するため、本ワークショップの意義が全ての学生に十分伝わっておらず改善の余地がある。	本年と同様に医・歯・薬学部合同で行う予定である。中学年、高学年で、より実践的なチーム医療実習が実質化しつつあることを伝え、本ワークショップが、将来の実習と関連していることをより協働したい。	

平成30年度 医療教育開発センター SIH 道場 <授業詳細表>

◆目的：

- 1) 医療人として各専門職種を目指す学生が、将来、円滑なチーム医療を実践するための基盤形成として必要な相互理解をはかる。
- 2) 医療人を目指す学生として、今後の学生生活で何を学び、習得していくべきかを、他学部、他学科の学生と共に考え、お互いから学ぶことを通して、医療人としてのプロフェッショナルナリズムの醸成をはかる。

◆到達目標：

- 1) 他者と協力して、テーマについて討議（意見交換）し、プロダクトを作成できる。
- 2) 「テーマ（未定）」について討議することができる。
- 3) 今、自分達ができること、今後の学習のあり方について討議することができる。
- 4) グループで討議した結果をほかのグループにプレゼンテーションできる。

◆成績評価：

以下の1)～3)に基づいて、グループワークにおける協働力およびプレゼンテーションシナリオのグループ評価、振り返りレポートによる文章力のグループ評価を行う。

- 1) チーム医療入門ワークショップへの参加
医療現場で活躍している専門家の講演を聴講した後に、他学部・学科学生との混合グループで協働してテーマに沿ってプロダクトを作成する。さらにして、そのプロダクトについてグループ間でプレゼンテーションと討議を行う。

- 2) 「リフレクションシート」の作成

チーム医療入門ワークショップへの参加について、自らを振り返り、今後の学習について考える。

- 3) 「振り返りレポート」の作成

「チーム医療入門」に参加して、学生自身が学んだこと、また今後の学習に関する目標について、A4用紙1枚（約1000文字）にまとめる。

【SIH 道場レポートの合格基準】

以下の3つの評価基準をすべて満たすこと。

- 1) チーム医療入門ワークショップに参加すること。
- 2) リフレクションシートを提出すること。
- 3) グループワークにおける協働力とプレゼンテーションシナリオのグループ評価で合格すること。
- 4) 振り返りレポートを提出し、そのグループ評価で合格すること。

* ループ評価での合格基準は、各観点での評価尺度で(c)がひとつまでとする。

◆ワークショップ概要

開催日時：平成30年9月28日 13:00～17:00

会場：(予定)大塚講堂(1F 大ホール、2F 小ホール)、保健学科0棟、総合研究棟

対象：蔵本地区（医学部、歯学部、薬学部）1年生 約400名

方法：社会福祉領域に造詣の深い白山靖彦先生（徳島大学大学院医歯薬学研究所地域医療福祉学分野教授）の講演「地域包括ケアシステムを担う」を聴講し、講演を介して学修する。それに続いてテーマ「未定」に沿ってグループワーク（ディスカッション）を行い、プロダクト作成・発表・討議する。

タイムスケジュール：

12:30 受付

13:00 全体オリエンテーション

- ・挨拶 徳島大学大学院医歯薬学研究所 未定

- ・ワークショップ・スケジュール説明

13:20 講演「地域包括ケアシステムを担う」

講師：白山靖彦先生（徳島大学大学院医歯薬学研究所地域医療福祉学分野教授）

14:20 各ワーキング会場へ移動

14:30 グループワーク開始

- ・アイスブレイキング（自己紹介）
- ・役割（司会、時計、発表）分担を学生で決める。
- ・ワークショップ作業開始：KJ法により、模造紙1枚にプロダクトを作成。

16:00 小グループ発表

- ・1会場3班でグループ発表（発表5分＋質疑3分）
- ・全体討論5分（学生が司会）
- ・チャーターのコメント、振り返り・フィードバックを行う

16:45 まとめ

- ・学生はSIH道場アンケート記入

- ・チャーターはアンケート記入

17:00 学生作業終了 解散

17:10 チャーター反省会（スキルスラボ5、6）

- *チャーターはチャーターングポートフォリオ入力（10月6日まで）

事前学習

- 1) KJ法：ワークショップで利用するKJ法の進め方
- 2) 白山靖彦先生から推薦の資料について閲覧する。

事後学習

- 1) 振り返りレポートの作成・提出
- 2) eポートフォリオシステムで、ループ評価（協働力、プレゼン力）の確認。

平成30年度 SIH 道場振り返りシンポジウム実施報告

1) 開催趣旨

各学部・学科での「SIH 道場～アクティブ・ラーニング入門～」を振り返り、取組内容および成果と課題を共有し、次年度のプログラム改善に繋げる。

2) 実施概要

日時：平成30年11月16日（金）16:30～19:00（16:00 受付開始）

場所：常三島キャンパス 総合科学部地域連携プラザ2階地域連携大ホール(けやきホール)

参加対象：大学、短大、高等専門学校、高等学校の教職員及び学生

【平成30年度 SIH 道場～アクティブ・ラーニング入門振り返りシンポジウムポスター】

文部科学省大学教育再生加速プログラム (AP)
テーマ1～アクティブ・ラーニング～

平成30年度 SIH道場振り返り シンポジウム

STRIKE WHILE THE IRON IS HOT. 鉄は熱いうちに打て

徳島大学における各学部・学科（コース）でのSIH道場を振り返り、
成果と課題を共有し、次年度の改善に繋げるためのシンポジウムを開催します。



大学教育再生加速プログラム

日時：平成30年11月16日（金）16:30-19:00

場所：徳島大学 常三島キャンパス
総合科学部地域連携プラザ2階 地域連携大ホール(けやきホール)

対象：大学、短期大学、高等専門学校、高等学校の教員及び学生

プログラム：

16:30-16:35	開会の挨拶	高石 喜久 / 理事・副学長（教育担当） AP実施専門委員会 委員長
16:35-16:55	平成30年度SIH道場総括	塩川 奈々美 / 総合教育センター
16:55-17:15	授業設計コネクターによる 授業実践報告	日下 一也 / 理工学部理工学科（機械科学） 藤野 裕道 / 薬学部薬学科・創製薬科学科
17:15-17:35	ディスカッション（1）	上田 勇仁 / 総合教育センター
17:35-18:05	ポスター発表	各学部・学科（コース）担当者
18:05-18:20	SIH道場受講生からの報告	徳島大学 学生 / SIH道場評価・改善WG
18:20-18:45	ディスカッション（2）	上田 勇仁 / 総合教育センター
18:45-18:55	外部評価委員からのコメント	桑折 範彦 / 徳島大学名誉教授
18:55-19:00	閉会の挨拶	川野卓二 / 総合教育センター AP実施専門委員会 副委員長

徳島大学
TOKUSHIMA UNIVERSITY

【問い合わせ先】
徳島大学学務部教育支援課教育企画室
所在地：〒770-8501 徳島県徳島市新蔵町2丁目24番地
電話：088-656-7679（内線：81-7114）
メール：kykikakuk@tokushima-u.ac.jp

【主催】徳島大学 大学教育再生加速プログラム実施専門委員会
徳島大学 大学教育再生加速プログラムの詳細については大学ウェブサイトをご覧ください。 <http://www.tokushima-u.ac.jp/campus/education/acceleration.html>

3) 開催報告

最初に、高石喜久理事・副学長（大学教育再生加速プログラム実施専門委員会委員長）が開会の挨拶を行った。次に「平成 30 年度 SIH 道場の総括」として、塩川奈々美特任助教が、大学教育に対する社会のニーズの変化、SIH 道場の目的および平成 30 年度の各プログラムの取組み概要について紹介すると共に、平成 30 年度の学生アンケート結果について全国の学生の傾向と比較する形で説明を行った。続いて、「SIH 道場授業設計コーディネーターによる実施報告」として、藤野裕道教授（薬学部）と日下一也講師（理工学部（機械科学））が報告を行い（詳細については、資料の報告スライドを参照）、その後「ディスカッション(1)」には塩川奈々美特任助教、藤野裕道教授、日下一也講師が登壇し、上田勇仁助教の司会のもと、初年次の学生に求められる汎用的能力の在り方や、SIH 道場の今後の大学教育の中での位置付けについてディスカッションを展開した。

また、「ポスター発表」として、各 15 プログラムの担当者と医療教育開発センターの担当者がそれぞれの SIH 道場の取組について報告を行い、参加者の質問に答えた。

「SIH 道場受講生からの報告」においては、SIH 道場評価・改善ワーキンググループの学生委員の 22 名がステージ前に立ち、「役立った点」と「改善点」を指摘する形で全学部学科の学生委員が意見を述べた。

SIH 道場が役に立った点としては、以下が挙げられた。

- 担当教員の研究内容の体験が今後の学習内容を先取りすることができた。
- 研究室訪問や機械設備に触れることは、学ぶ内容を実感する事ができた。
- 教員によるレポートの書き方、添削、フィードバックがあった。
- 動画視聴後のクイズは面白く、知識確認の上でも役に立った。また動画の視聴内容に関するレポートがあっても良かった。
- ジグゾー法により全員発表する機会が持てた。

SIH 道場の改善点としては、以下が挙げられた。

- SIH 道場が 1 週間で完了するため、事前・事後の間が短かった。
- ビデオ教材でプレゼンの方法を学習し、グループ全員が発表した。発表方法やその内容に関する教員からのフィードバックがほしかった。
- SIH 道場は入学式時期の 4 月初めに 2 回だけの実施だった。もう少し時間をかけてほしい。
- 研究室の訪問は学生番号で振り分けずにある程度希望をとってほしい。
- 入学前に SIH 道場が実施されたため、c アカウントの入手が間に合わず、ビデオ教材の活用など、一部取組に支障が出た。

「ディスカッション(2)」には、総合教育センター教育改革推進部門の上田勇仁助教が司会を務め、パネリストとして、教養教育院より宮崎隆義教養教育院長（大学教育再生加速プ

プログラム実施専門委員会副委員長)、授業設計コーディネーターより藤野裕道教授、総合教育センターより塩川奈々美特任助教、SIH 道場評価・改善ワーキンググループ学生委員より代表者として本学学生の前川恭平君、出羽暉君、増田花鈴さんが登壇し、ディスカッションおよび質疑応答を行った。

本シンポジウムには、学内教職員、学生および外部評価委員の 94 名が参加し、今年度の SIH 道場の課題を踏まえ、次年度に向けた改善点を考えるための機会となった。

4) ディスカッションのまとめ

ディスカッションは、シンポジウムで共有されてきた SIH 道場の実施報告やアンケート結果、学生からの意見などを踏まえて、さまざまな立場の参加者間で議論を行い、次年度以降のプログラム改善に繋げることが目的である。登壇者は、教養教育院より宮崎隆義教養教育院長（大学教育再生加速プログラム実施専門委員会副委員長）、授業設計コーディネーターより薬学部藤野裕道先生、各プログラムの実施支援の立場より総合教育センター教育改革推進部門の塩川奈々美特任助教、受講者の立場より医学部保健学科（検査技術科学専攻）の前川恭平君、理工学部理工学科（情報光システムコース）の出羽暉君、増田花鈴さんの 6 名であり、司会は総合教育センター教育改革推進部門の上田助教が務めた。

「ディスカッション(2)」では、フロアからの質問を受ける形で議論が展開され、主に 4 つのテーマが議題となった。

まず、SIH 道場の運営側に向けた議題として、「SIH 道場やアクティブ・ラーニングで何を身に付けようとしているのか。」「SIH 道場の中で新たな学修方法として様々な教材が提供されているが、教員の活用率や、学生の反応はどういう状況なのか。」などの質問が上がった。学内教員によって寄せられた「SIH 道場やアクティブ・ラーニングで何を身に付けようとしているのか。」という質問については、「SIH 道場で専門性を高めることが難しい」という意見も述べられており、これに対して塩川特任助教により「SIH 道場は、学生たちが今後学修する上で必要となる学修方法、態度など、そういった“素地”を養う機会と考えるべき」という回答が得られた。さらに上田助教によって「主体的な学びをどう身に付けさせるか、育成するか、という評価は現時点で難しい。一単位必修の SIH 道場内で行われることにこだわらず、カリキュラム、他科目との連動を視野に議論されるべき」であるとの見解が示された。また、学内教員からの「SIH 道場の中で新たな学修方法として様々な教材が提供されているが、教員の活用率や、学生の反応はどういう状況なのか。」という質問については、学生たちの感想が求められた。登壇学生三名からは、使用感について利便性を認める一方で、複数のシステムが存在することに戸惑いを示し、シンプルな形に統一してほしいとする意見が述べられた。また塩川特任助教によって ICT を活用する教育者らの感想も情報提供され、ICT の普及率は高くはないものの、利用者からの評価の高さや徐々に浸透している実情

があることが共有された。

次に、登壇した学生たちに向けて「SIH 道場を終えて、大学入学後半年間で、大学での学修にどのような目標を持ったのか。」「企業が求める人材に必要な能力として「コミュニケーション能力」が最も高い支持を得ていたが、学生たちが思い描くコミュニケーション能力とは何か。SIH 道場でそれは身についたのか。」という質問がなされた。

まず一つ目の「SIH 道場を終えて、大学入学後半年間で、大学での学修にどのような目標を持ったのか。」という質問について、理工学部（情報光）の増田さんは「人のために何かを作り出す仕事がしたいと思い、理系の道に進んだ。大学では自由な選択ができることを活かし、自分の成長を目指した勉強を続けている。」と答えた。同じく理工学部（情報光）の出葉君は「大学での教育を受けて、プログラミングや数学に興味を湧いた。カリキュラム上、『勉強しなければならない科目』も多いが、基本的には自分の興味関心に基づく学びに取り組んでいる。」とした。さらに医学部保健学科（検査）の前川君は、高校時代から研究に興味があったと言い、「所属（医学部保健学科（検査））の性質上、学ぶ目的は何かと問われれば『国家試験に合格するため』と言わざるを得ないが、それまでの勉強の中でしょうらいてきな研究テーマを見つけていきたいと考えて学んでいる。」と述べた。

二つ目の「企業が求める人材に必要な能力として「コミュニケーション能力」が最も高い支持を得ていたが、学生たちが思い描くコミュニケーション能力とは何か。SIH 道場でそれは身についたのか。」という質問については、登壇学生三名の間で「仕事を円滑に行うために自分の考えを適切に伝えられる能力」という点で共通していた。これらの考えに対し、質問者は「そのコミュニケーション能力育成について、SIH 道場で達成できたのか」と投げかけ、理工学部（情報光）の増田さんは「大学に入るまで（コミュニケーションは）苦手な部類だったが、それがある程度改善したという意味では達成することができたと思う。」と回答した。ただし、これは増田さん個人が改善に向けた目的意識を持っていたためであるとして「受講生全員がこの目的を達成できたとは思わない」と補足した。

これらの議論の内容を受けて、宮崎教養教育院長によって「教養教育院で SIH 道場に期待すること、初年次教育を担う教養教育院が今後展開していくこと」に関する意見が述べられた。まず、「教養教育」という考え方は、「大学での初年次にとどまらず生涯かけて行うものである」と言い、学生はその学びへのモチベーションを維持するために「各学部学科のカリキュラムについて、カリキュラムマップやナンバリングなどを活用しながら、自分の目標とするところにどのように歩んでいくかを考える必要がある」と指摘した。さらに、大学卒業後の受け皿である企業が、新入社員について「語学・教養・専門を身に付けるべき」と考えていることに触れ、「専門性を身に付けることは前提であるが、その力を支え、発展させていくための支えとなるのが教養であり、語学である」とし、学生たちに「知らないことを知る学びに力を入れて主体的に取り組んでもらいたい」と思いを述べた。その上で、教育現場では、近年、アクティブ・ラーニングを意識した授業が実施されており、「教員側からの知識伝達にも様々な工夫がなされるようになってきた」とされ、「この状況に学生による主体

的な学びが加われば効果的なアクティブ・ラーニングが展開されるだろう」とまとめられた。

今後の SIH 道場を運用していく上で、学生たちの学びが一単位の枠組みに収まらなければならぬということではなく、他科目へ繋がり、その学び・学ぶ姿勢が将来的な学修の深化へと続くよう、全学的な連携を図る必要性が示唆された形である。継続的かつ発展可能な SIH 道場の運用を目指し、教員、学生双方との議論を重ねていく必要があるだろう。

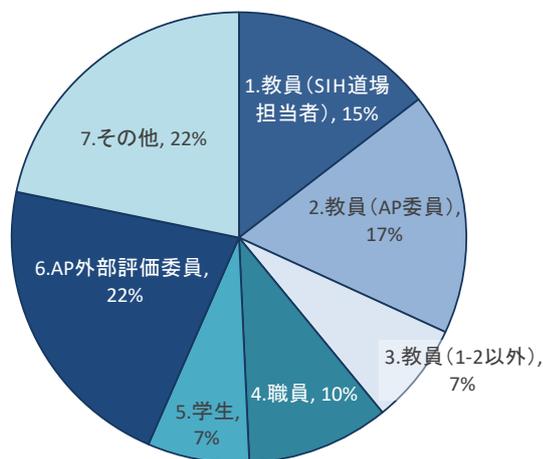
5) 平成 30 年度 SIH 道場振り返りシンポジウム 参加者アンケート集計結果

開催日時：平成 30 年 11 月 16 日（金）16:30～19:00

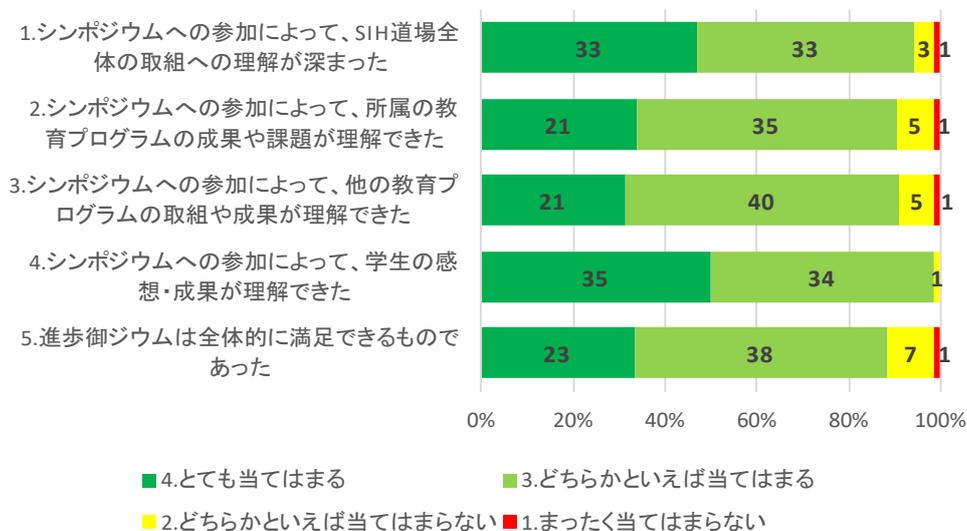
参加者数：94 名（うち運営スタッフ 10 名）

アンケート回答者数：69 名（回収率：73.4%）

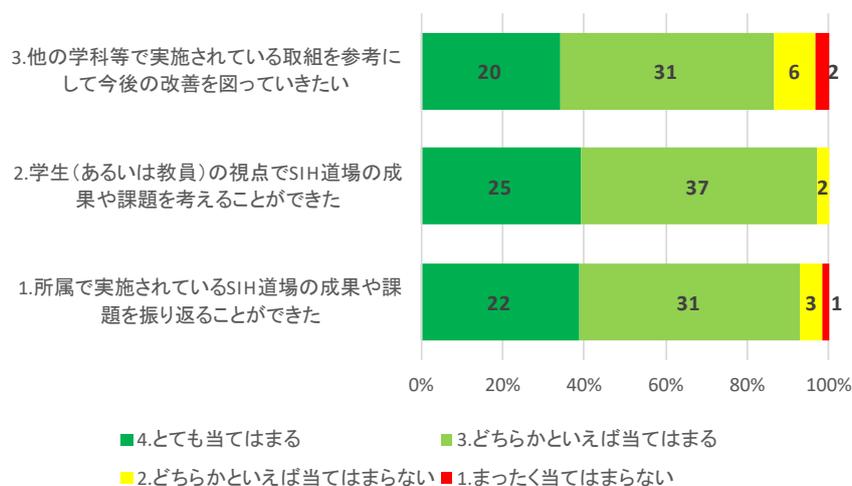
問 1. 回答者の所属について



問 2. 振り返りシンポジウムについて



問 3. 振り返りシンポジウムに参加した感想



問 4. 参加してよかった点、今後の改善点（自由記述）

- 他コースで何をしているのかを詳しく知れて良かった。
- 他の学部について知れて良かった
- SIH 道場を主導した担当者に対し、受付で「飛び入りですか？」って声は、失礼極まりない。礼を尽くして召待せよ。
- 前に並んで感想を述べていた学生の中に、総科の学生がいないので残念だった。
- なるべく多くの学生が参加できる日時にしていただきたいと思いました。
- 前で立って学生が発表したのですが、改善点やリクエストが 1 つしか言えなかったことが少し残念でした。担当の先生へは伝えたので良いのかもかもしれませんが制限をかけなくても良かったのでは、と思いました。
- 文章力のトレーニングをどう行っていくのが最大の課題とわかりました。
- 受講生の意見が聞けた事が良かった。
- 他学部がどんなことをしているのかを知ることができ、来年の 1 年生のために改善点を自分の口から発言できたこと。時間をもっと短くした方が学生も参加しやすいと思った。
- シンポジウムそのものはほかの学部の SIH のやっていることなどを知ることができたので、大変良かったと思います。正直なところ、SIH 道場の本当の目的というのは曖昧だったのですが、今更ながらはっきりと理解できたので、良かったと思います。
- 所属のコースの SIH 道場の内容に全く満足できていない。他の学部・学科・コースで学生が体験できている内容が自コースのプログラムに組み込まれていないのは、どのような経緯でプログラムの完成に至ったのかを知る機会があると良いと感じた。
- 教員の苦労や他学部との違いを知ることができた。
- 自分の学部の SIH 道場のねらいだけでなく、大学側のねらいが分かった。大学側の意

図が詳しく聞けてよかった。

- 他学科の取組等がよくわかった。また代表学生による意見により学生目線での受取り方がよく理解できた。
- 学生からの感想から自分たちの計画した授業に対して具体的な良かったことや改善した方が良い点が見い出せたことが参加の利点である。
- 教員への負担を軽減できる具体的方策がもったとききたかった。
- 他コースの仕組みがよく分かった。考えさせられた。
- 学生の意見が興味深かった。学生の思いは分かったが、一方で「サービスを受ける側」という意識がかなり強い印象を受けた。(良い悪いではなく。)
- アクティブ・ラーニングという、教育の対応が学生をほめる方向に片より過ぎているのではないか？教員と学生がディベートするようなものが良いかもしれない。
- 他学部における取り組み方や運営方法がよく理解できました。学外研修の評判は良かったのですが、事前学習の時間があまり取れなかったので、動機づくりの機会をしっかりと持ちたいと思いました。
- 他学部の実施状況、学生の口からの感想がきけることができてよかった。
- ポスター発表は昨年の方が分かりやすかった。
- 学生の考えや意見が分かり、今回のシンポジウムに参加して良かったと思います。
- SIH 道場の取り組み、振り返り、大変勉強になりました。有難うございました。
- ポスターセッションの発表ですが、学生も発表者に加えられてみては？
- 席が少し狭いように感じました。すみません。
- 各学部の事情に合わせた設計となっていますが、どれぐらい幅があるのか(学部学科によって)教えていただきたいと思います。本学の全学共通科目の参考にさせていただきたいと思います。
- お招きいただき有難うございました。学生さんを含め率直なご意見を数多くうかがうことができ、大変参考になりました。
- シンポジウムの進行方法が良かったと思います。
- SIH 道場のときのみ、という感じが強くあるように思った。学部学科によって取り組めないかもしれないが通年で行えるようなプログラムも考えていくべきだと思う。また、次年度には今年度の経験者がいるので、どう役立っているか話す機会をもってはどうか。
- アンケートは学外用には別に作った方が良かったのでは。
- パネル発表の際、偶数の時パネルの前に立っていたが説明してくれる人が来なかった。ひょっとすると女子学生とずっと喋っていた方がパネリストだったのかもしれないが、聴衆にむけた説明をしてくれることは終になく、目を見てもにらまれたただけだったので、奇数のパネルを見て回ることになった。役割をきちんと周知しておいた方がよいと思います。

- ポスター発表者がいなかったり、だれか分からない。
- ポスターがまとめ「すぎた」表だったので具体的な内容が分からなかった。口頭発表のように写真や具体的な日付、日程、内容のレポートを示してほしいです。
- 本学でのシンポジウムの開催に向け、参考になった。
- 徳島大学の取組が分かって良かったです。
- 実施関係者が集まることは重要だと思われる。ポスターの時間はもっと長くても良いと思われます。
- 普通では聞けない先生方の意見が聞けた点。我々が SIH 道場で学んだことの裏側で、何をして何を改善しなければいけないのかを直接聞けた。
- 貴学の AP 内容を実状含めてお聞きでき、ありがたかったです。
- 他学部の先生方が、真面目に取り組んでいることがよく理解できた。
- 放射の学生さんが欠席したため、改善するために必要な学生の生の声が聞けなかったのが残念です。
- アクティブ・ラーニングについて触れられることが少なく残念であった。
- ポスターの字が小さいのでもう少し大きく見やすくしていただければ。
- 「満足だった」ことが「成果があった」ということで議論が進んでいる点が気になった。
- 他大学の内容を理解できた。効果の評価ではないでしょうか。
- 大学での取り組みが知れた点が良かった
- アクティブ・ラーニングそのものをテーマに含めては良いのでは？「SIH 振り返り」＋「そもそものアクティブ・ラーニング」
- 自分の専攻の先生から直接話を聞いてみて、自分が疑問に思っていたこと、問題だと思っていたことを先生も感じていらっしやったということが分かってよかったと思います。来年以降に改善されればと思います。
- 意見をあらかじめ纏めればもっとしっかり述べられたと感じました。

問 5. 所属の SIH 道場を体験しての感想及び意見（自由記述）

- 研究室訪問で学生の先輩から話を聞きたい。
- 入学して初期に自分たちが何を学んでいくのかや、学ばなければいけないことについて知る機会だったのでとても役に立つ取り組みだと思った。
- 授業の関係で遅れてすみませんでした。参加したかいがありました。
- 反転授業や Mahara を普及するには ICT のサポートが必要（個人的にも相談できるワンストップ窓口の設置）
- 薬学部としては、他の蔵本の学部 비해「体験」というものよりも「講演」が多かったので、もっと研究室の研究内容などをさわりの部分だけでもやってみる時間を取ってもよいのかなと思いました。

- 安井先生とはお話しさせて頂きましたが、SIH 道場は本当に楽しかったです。そして、看護師さん方からの話は今とても役に立っていると思います。単位も必要なものが変わりますし、1年の内から助産師に関わるイベント？に参加できるなどもあるので、4月のうちに漠然と未来を考えられることは本当に良かったです。また、国際に目を向けている生徒も出てきているので SIH に導入しても良いのではと考えています。国際看護は選択科目でしたので…。他にも多くお話しさせて頂きましたが全体を通し本当に今の勉強に役立っていると感じている方が多いと感じています。次の1年生にも同じように感じて欲しいので改善やリクエストの御検討よろしく申し上げます。乱文で失礼致しました。
- SIH 道場が目的としていることがはっきりと認識できていない人が多かったのではないかと感じた。SIH 道場を実施していく教員の方々の理解を全体に広めることにもう少し尽力頂ければと感じた。長期的にプログラムを実施してほしいと感じた。(例：前期と後期の初めまでとして、前期には週2回等くり返す期間を短めに設定し、だんだん期間をあけて後期の最初に確認の1回を行う形で終了できると、成長に合わせて”つき離す”ことも可能ではないかと考える。
- 今後もぜひ続けていただきたい。
- シンポジウムに参加できてよかったです。
- 1年時だけで終わるので単発的な要素となってしまう。2年時3年時も何らかの形で意識づけするような仕組みを学科内に構築していく必要があると思いました。
- 消極的な教員へのアプローチ(アクティブ・ラーニング参加、SIH 道場への積極的参加)を行う仕かけを実施委員会には検討していただきたい。
- 教員全体でとりくむのに1年ごとにかわるのは逆に途中でとぎれることにもなり逆効果であるように感じました。
- やはりインセンティブの設置を考えて頂きたい。私は科研で教育プロジェクトを行って、先生方に研究室体験の実施をお願いしています。その際、先生方にはいくらかの予算を使っただけです。
- 「SIH 道場」は大変に良い取り組みだと思います。ただこれを次の段階へつなげる方策が何かあれば(例えば、高学年で学習能力を高める専門的講義の導入など)と思いました。
- 最終的な独り立ちをどうやってやるかは永遠のテーマですかね。つきはなす時が問題ですね。
- 色々と勉強になったと思います。
- SIH 道場の取組と、教育課程、単位、時間数との関係について理解が出来ておりません。
- 協働の考え方が参考になった。
- やはり「レポートの書き方」を大学で全く習っていないので、大学生の命ともいえる「レポートの書き方教室」は絶対になくしてはいけません。

- 学生は、これまでにない体験ができるので、また、クラス内で友達もできるし、良いプログラムと思います。学生を移動させるための予算、また講師を呼ぶための旅費等サポートしてほしい。
- 放射は、「短期研究室体験」を主な体験内容としていますが、その成果については3年後の卒業研究の配属生にこのプログラムが、体験学生にとって、どれだけの価値があったか確認してみたいと思います。
- アクティブ・ラーニングの一番の目的は能動的に動ける人をつくることだと思うのですが、先生も生徒も受動的な意見が多かった。アクティブ・ラーニングと体験学習の違いを分かっていないのではと…。
- 重要な取り組みと思います。
- カリキュラム全体への反映。
- 大学院のススメ、チーム医療入門など、自分の力になったと思えるプログラムがほとんどでした。プログラムのより細かい部分が改善されるとより満足のいくものになると思います。
- 大学生としての意識を学びました。

資料①

平成30年度 SIH道場 ～アクティブ・ラーニング入門～

総括

徳島大学総合教育センター
教育改革推進部門 特任助教
塩川 奈々美

総括の概要

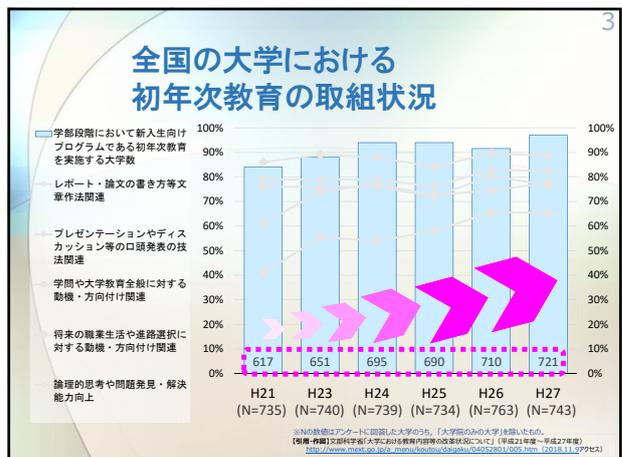
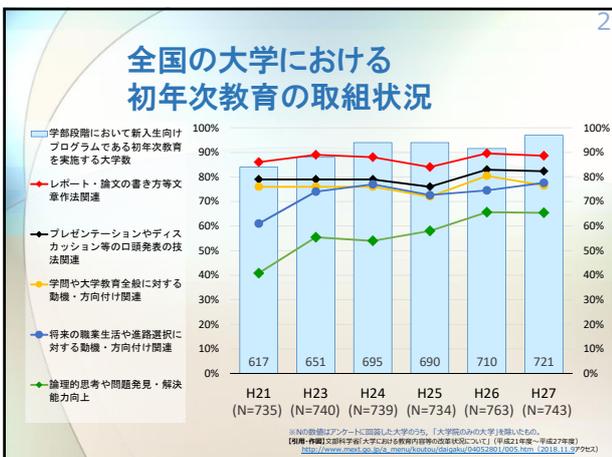
- ・初年次教育の在り方
 - ・初年次教育の位置づけ
 - ・全国の大学における初年次教育の取組状況
 - ・企業の求める人材
 - ・初年次教育の在り方
- ・SIH道場の概要
- ・平成30年度の取組
 - ・SIH道場 受講前・受講後アンケート調査結果
 - ・SIH道場 受講後アンケート調査結果
- ・今後の取組

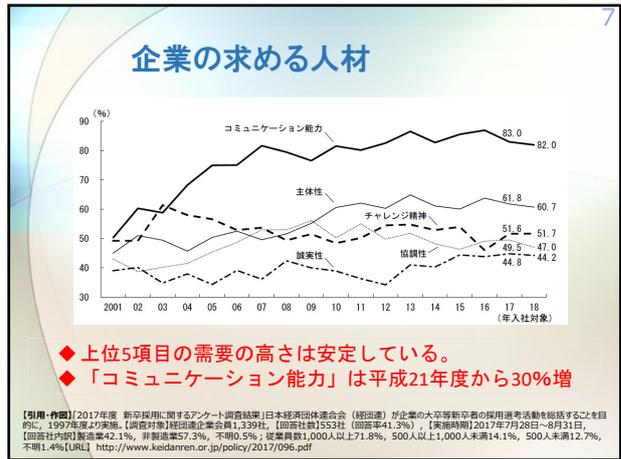
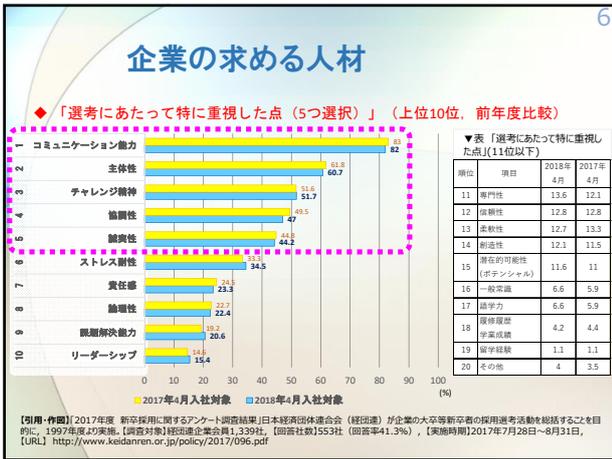
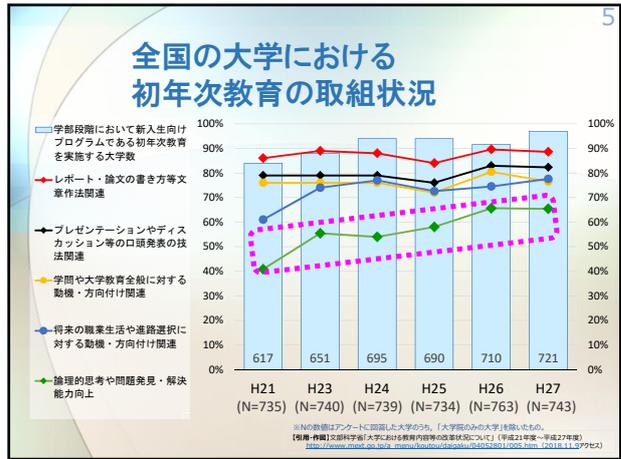
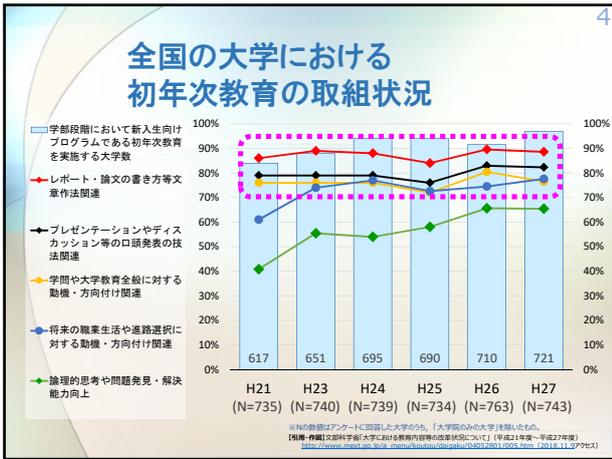
初年次教育の在り方

初年次教育の位置付け

1

- ・「初年次教育は、高等学校で身に付けるべき基礎学力の単なる補習とは一線を画すべきであり、高等学校教育から大学における学修に移行するに当たって、**大学における本格的な学修への導入、より能動的な学修に必要な方法の習得等を目的とするもの**として捉えるべき」（高大接続答申(2014), p.21)
- ・初年次教育
 - ・高等学校から大学への円滑な移行を図り、大学での学問的・社会的な諸条件を成功させるべく、主として**大学新生を対象に作られた総合的教育プログラム**。高等学校までに習得しておくべき基礎学力の補完を目的とする補習教育とは異なり、新生に最初に提供されることが強く意識されたもの。（文部科学省2017）





初年次教育の在り方

- 大学における本格的な学修への導入、より能動的な学修に必要な方法の習得等を目的とするものとして位置付けられ、大学での学問的・社会的な諸条件を成功させるべく、主として大学新入生を対象に作られた総合的教育プログラム。
- 新卒採用者に「コミュニケーション能力」「主体性」「チャレンジ精神」「協調性」「誠実性」が重視される社会
 ⇒大卒程度の専門的な知識・技能・能力は前提
 企業の人材育成方針に適應できる人物

これから始まる大学での学修に備え、4年後に社会で求められる人材に育つための素地を養う機会

SIH道場の概要

SIH道場の概要

平成26年度「大学教育再生加速プログラム」選定取組

本事業は、「鉄は熱いうちに打て」(SIH: Strike while the Iron is Hot)の精神に則り、「SIH道場～アクティブ・ラーニング入門」を初年度に導入し、厚紙授業、グループワーク、学修ポートフォリオ、専門領域専門体等によるリフレクションを基盤としたアクティブ・ラーニングの体験を通して、学生と教員が共に学び、成長することで、アクティブ・ラーニングを学生と教員に浸透させていく取組である。

学生の課題

- 初年度学習と目指す専門性との関連付けができていない
- 大学での学習に不可欠なラーニングスキルが不十分
- 高等学校において能動的な学習を実践できていない

教員の課題

- アクティブ・ラーニングが形式だけにとどまり、効果が出ない
- 新しい教育方法が分からない
- 自らの授業を取り返り、改善を検討する機会を作れない

学生と教員が共に成長

Strike while the iron is hot.「鉄は熱いうちに打て」

SIH道場～アクティブ・ラーニング入門～

ラーニング/ティーチングスキルを向上

学生(能動的に学ぶ)

- 専門領域専門体による学習の動機づけ
- 文藝力・プレゼン力・協働力を積極的に発揮
- 能動的な学習力の基礎固め

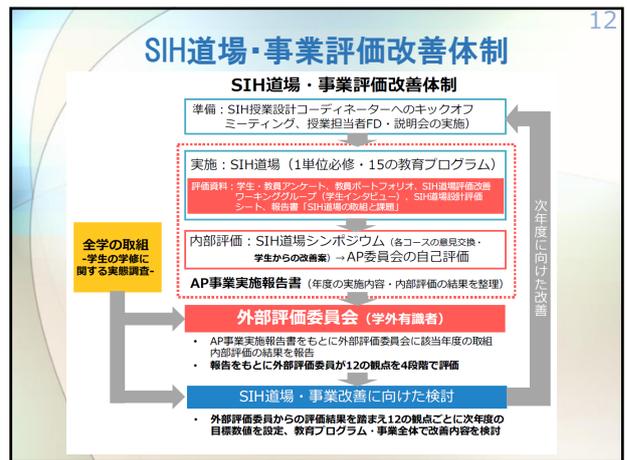
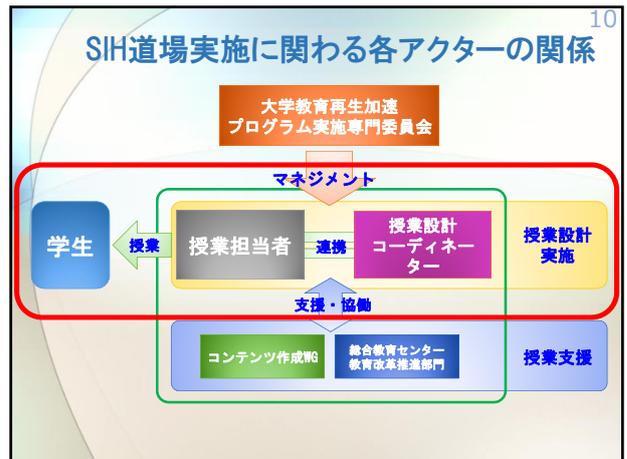
教員(新教育方法を学ぶ)

- 実践を通じてアクティブ・ラーニングを体験
- ルーブリック評価、反転授業等の活用
- 教習経験を振り返る機会

◆本事業を実施することにより、学生のラーニングスキル、教員のティーチングスキルが向上し、学生は能動的に学習し、教員は能動的に教育改善に取り組むことで、これまでの教育改善を増加した専門科目におけるアクティブ・ラーニング授業をより実質化することができる。

◆事業実施により、学生、教員の双方が実践を通して能動的な学習のスキルを習得し、eポートフォリオの活用や教員がSIH道場及びその10年に関わることで、大学全体にアクティブ・ラーニングを浸透させることができる。

	26年度	28年度(目標)	30年度(目標)
アクティブ・ラーニングを受講する学生の割合	100%	100%	100%
アクティブ・ラーニングを導入した授業科目数の割合	47%	65.2%	80%
アクティブ・ラーニングを行う専任教員の割合	52%	69.7%	77%



平成30年度の取組

平成30年度 SIH道場の取組

		プレゼン力	協働力	振り返り
総合学部	総合社会科学部	大塚美術鑑賞学 ・体験学習レポートの作成	「SIH道場(学友コミュニケーション)」 ・体験発表ゼミナールにおいて共同でプレゼン作成・発表	ラボ外へ教員がコメントし、学生が振り返りを行う
	医学部	診療現場体験 -部活WS 在籍の講義の授業 (チーム医療入門)	振り返りWS終了後に振り返りWS WS終了後に出発直前に振り返りWS 先着からのメッセージ	振り返りWS終了後に振り返りWS WS終了後に出発直前に振り返りWS 先着からのメッセージ
医学部	保健学科(看護)	現場や研究施設の体験	体験学習レポート作成	現場や研究施設での体験 体験学習レポート作成
	保健学科(放射)	先着からのメッセージ	レポートを書きながら振り返り	先着からのメッセージ レポートを書きながら振り返り
歯学部	歯学科	先着からのメッセージ	レポートを書きながら振り返り	先着からのメッセージ レポートを書きながら振り返り
	口腔保健学科	先着からのメッセージ	レポートを書きながら振り返り	先着からのメッセージ レポートを書きながら振り返り
薬学部	薬学科	先着からのメッセージ	レポートを書きながら振り返り	先着からのメッセージ レポートを書きながら振り返り
	創薬薬科学科	先着からのメッセージ	レポートを書きながら振り返り	先着からのメッセージ レポートを書きながら振り返り
工学部	社会基盤デザイン	現場や研究室訪問	体験学習レポート作成	現場や研究室訪問 体験学習レポート作成
	機械科学	機械基礎実習での体験	体験学習レポート作成	機械基礎実習での体験 体験学習レポート作成
理工学部	応用化学システム	「応用化学」講義活動 調査・実験	教員が設定したテーマで、グループで発表要領を作成・発表	「応用化学」講義活動 調査・実験 教員が設定したテーマで、グループで発表要領を作成・発表
	電気電子システム	「STEM実習(電気電子実習)」 -研究発表	体験学習レポート作成	「STEM実習(電気電子実習)」 -研究発表 体験学習レポート作成
理工学部	情報光システム	「情報光」実習体験 -研究発表	体験学習レポート作成	「情報光」実習体験 -研究発表 体験学習レポート作成
	応用理数	「応用理数」実習体験 -研究発表	体験学習レポート作成	「応用理数」実習体験 -研究発表 体験学習レポート作成
生物資源産業学部	応用生命科学	社会現場の学外研修	体験学習レポート作成	社会現場の学外研修 体験学習レポート作成
	生物生産システム	社会現場の学外研修	体験学習レポート作成	社会現場の学外研修 体験学習レポート作成

学部	学科	SIH道場 総合評価
総合科学部	総合社会科学科	4
	医学科	4
	医科保健学科	4
医学部	保健学科(看護)	5
	保健学科(放射)	5
	保健学科(検査)	4
	歯学科	5
薬学部	薬学科	4
	創薬薬科学科	4
理工学部	社会基礎デザイン	4
	機械科学	4
	応用化学システム	4
	電気電子システム	3
	情報光システム	4
	応用理数	4
生物資源産業学部	応用生命科学科	4
	生物生産システム	4

14

平成30年度 SIH道場の取組

- ◆ **SIH道場 受講前アンケートの導入**
全国の大学生（1年生～4年生）を対象とした調査との比較
 - ベッセ教育総合研究所（2016）「第3回 大学生の学習・生活実態調査報告書」の調査項目を利用
 - SIH道場の受講前後における学生の意識変化について検証
- ◆ **SIH道場 パフォーマンス科目の設置**
 - （外部評価委員）機会を大学側が多く、科目で長期にわたって提供するべきである。道場の学修が初年次にとどまらず、高学年次まで継続するようにプログラムされる必要がある。（高野透委員長総評）
 - SIH道場の専門科目への波及効果の検証するため、2～3年生が受講生となる科目を「SIH道場パフォーマンス科目」として各プログラムに設置
⇒SIH道場で学んだ内容が高学年次でどのように活かせるのか着目
- ◆ **大学IRコンソーシアムの調査**
 - 全学的な汎用的能力の修得状況を把握
 - 調査期間：平成30年11月1日～11月30日（現在実施中）

15

SIH道場 受講前・受講後アンケート調査結果

大学の授業に対する意識

◆ 「答えのない問題について、自分なりの解を探索する学びが重要」と考えつつ、基礎的な内容を中心に従来型の講義形式授業を望む意見が多い。
⇒徳島大学の新生は基礎から着実に学びたい堅実な志向性
=大学教育を経験する起点的段階

16

SIH道場 受講前・受講後アンケート調査結果

進路選択に対する意識

- ◆ 大学の授業を通じて将来やりたいことを見つけていきたいとする学生が過半数以上
- ◆ 将来的な進路決定についても大学の支援を期待。
⇒SIH道場受講後、「将来やりたいことを決めて授業を受ける方がよい」とする学生が増加。
新生の時期の授業や早期体験を工夫することによりその後の学修への動機づけに繋げることができる。

17

SIH道場 受講後アンケート調査結果

SIH道場の満足度 87%

Cf.平成27年度：83%、平成28年度：85%、平成29年度：84%

SIH道場に満足した学生 (N=838)	SIH道場に不満足だった学生 (N=126)
① 目標を明確にして学修した	① 目標を明確にして学修した
② 体験学習で専門分野に対する興味関心が高まった	② 体験学習で専門分野に対する興味関心が高まった
③ 事前的大まかなの基本を把握した	③ 事前の大まかなの基本を把握した
④ 効果的なプレゼンテーション方法を把握した	④ 効果的なプレゼンテーション方法を把握した
⑤ 修得する際の留意点を把握した	⑤ 修得する際の留意点を把握した
⑥ 関係者の理解の基幹が良かった	⑥ 関係者の理解の基幹が良かった
⑦ 学修を振り返りることの重要性を把握した	⑦ 学修を振り返りることの重要性を把握した
⑧ 課題内で学修を行った	⑧ 課題内で学修を行った
⑨ 他学科の学修の重要性を把握した	⑨ 他学科の学修の重要性を把握した

18

平成30年度 SIH道場の取組

- ◆ 新生は毎年変わる中、高い満足度を記録。
⇒SIH道場実施体制の全体的な成熟
- ◆ 体制の全体的な成熟は各プログラムにおける授業設計コーディネーターの支援と対応力にも支えられている。
⇒徐々に構築されてきた全学的な協力体制
⇒授業担当者のパフォーマンスの向上
- ◆ 一方、
 - 毎年担当者が変わることによる運用上の課題（引継ぎ、負担感）
 - SIH道場の学修効果（実質化）の検証

19

今後の取組

今後の取組～平成31年度に向けて～

- ・平成31年度に向けた取組と課題
 - ・平成31年度 = AP事業最終年度
 - ・SIH道場パフォーマンス科目との連携
 - 「振り返り共通課題」における記述内容の分析
 - ・SIH道場の学修成果の検証
 - 評価者の視点からSIH道場の効果を調査
 - ・各プログラムに設置された「SIH道場～アクティブ・ラーニング入門～」の今後の継続的な運用の在り方

参考文献

- ・一般社団法人 日本経済団体連合会（2017）「2017年度 新卒採用に関するアンケート調査結果」
<http://www.keidanren.or.jp/policy/index09b.html>
 (2018.11.9アクセス)
- ・中央教育審議会（2014）『新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について（答申）（中教審第177号）』
- ・文部科学省（2009-2017）「大学における教育内容等の改革状況について」
http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/005.htm
 (2018.11.9アクセス)
- ・山田礼子（2012）「大学の機能分化と初年次教育：新入生像をてがかりに」『日本労働研究雑誌』54（12）、pp.31-43、労働政策研究・研修機構

資料

徳島大学における アクティブ・ラーニングの定義

教員による一方向的な知識伝達とは異なり、課題演習、質疑応答、振り返り、グループワーク、ディスカッション、プレゼンテーション等を取り入れることにより、**学生自らが考え抜くことを教員が促し、学生の能動的な学習を促進させる双方向の教授・学修のこと。**

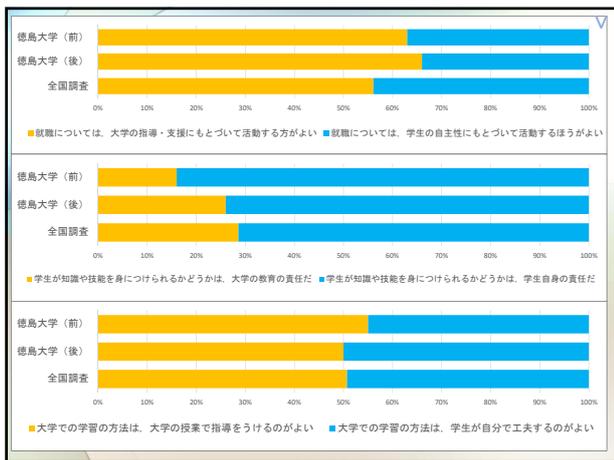
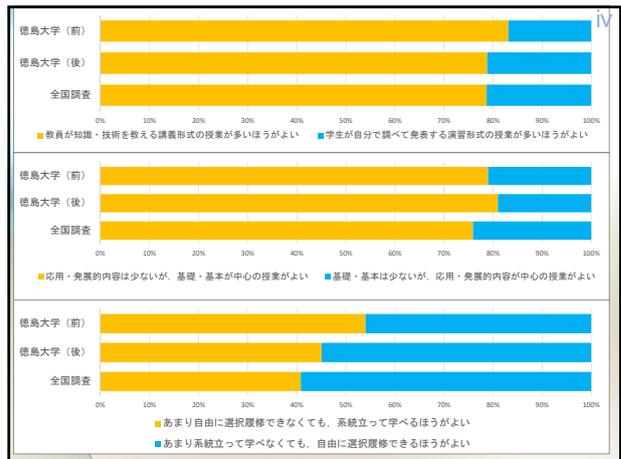
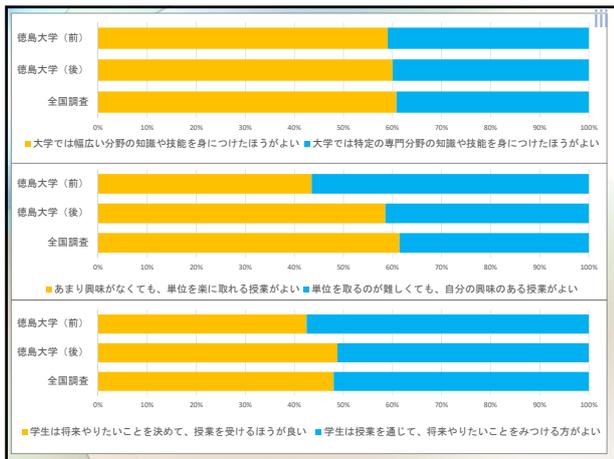
徳島大学における アクティブ・ラーニングの定義

◆専任教員が教育力向上を目的とした研修（FD）に参加した割合の経年変化

年度	(A)教員数	(B)FD参加者数（実数）	FD参加率(B)/(A)
平成25年度	701	351	50%
平成26年度	668	389	58%
平成27年度	691	582	84%
平成28年度	667	602	90%
平成29年度	666	602	90%

◆アクティブ・ラーニングを導入した授業科目数の割合の経年変化

年度	(A)総科目数	(B)AL 導入科目数	AL導入の割合(%) (B)/(A)
平成25年度	1,552	731	47%
平成26年度	1,609	811	50%
平成27年度	1,600	933	58%
平成28年度	1,692	1,103	65%
平成29年度	2,900	2,073	72%



SIH道場 理工学部理工学科 機械科学コースの取組み

社会産業理工学研究部
機械科学系 講師
日下 一也

SIH道場設定科目

- 4月3日(火)新入生オリエンテーション
ディベートに関する説明
レポートのルーブリック評価に関する説明
- 4月7日(土)新入生集中研修
ディベートの実施
レポートの書き方指導
- 前期必修科目 機械科学実験1

新入生集中研修 (Debate)

4月7日(土)10:00~11:45

A~Hグループ 8会場にて実施
1グループ 学生14~15名
各グループに教員3~4名

各グループ A, B, C 3班に分かれてディベート対戦
1班 学生4~5名
4月3日に班分け発表 → 7日までに資料準備

新入生集中研修 (Debate)

昨年度まで

同じテーマ「**学生生活にアルバイトは必要か否か?**」
で対戦チームを変えて2回実施

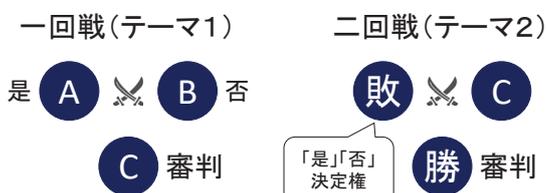
事後アンケート 2回戦目は盛り上がらない



新入生集中研修 (Debate)

本年度

テーマ1:「TwitterやInstagramなどのSNSは
学生生活に必要か否か?」
テーマ2:「学生生活にアルバイトは必要か否か?」



新入生集中研修 (Debate)



新入生集中研修 (レポートの書き方指導)

4月7日(土)13:50~14:20

守るべき5つのルール

- ① 期限を守る!
- ② 体裁を守る!
- ③ 表紙をつける
- ④ 自分で書く(盗作と引用)
- ⑤ 常体(である調)を使う

練習課題: 今年1年間の計画

卒業後の目標を明確にし、そのために今年1年何をするか

振り返り

本年度から
実施

計画 MAHARA飛ぶノートを用いて、評価したレポートとルーブリック採点表を返却
レポート表紙右肩にスペースを空けさせ、後からTAを使って学籍番号マークシートを貼付



ページ数2枚以内という制限

表紙とルーブリック評価表で2枚となり、実質使えないことが判明

コメントと評価を記載し、学生に返却

機械科学実験1(体験学習)

- NCプログラミング
- MC加工
- 旋削加工(引張試験片の製作)
- ひずみ測定
- 溶接実習
- ディーゼルエンジンの分解・組立・運転
- 数値シミュレーション
- 鋼の引張試験

NCプログラミングとMC加工

- 1週目 プログラム作成
- 2週目 MC加工



製作するアルミニウムマグネット



NCプログラミングとMC加工

1週目
プログラム作成

2週目
マシニング加工

完成

旋削加工

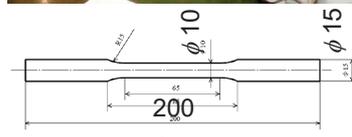


図 2.4 引張試験片



溶接実習



2枚の鋼板の接合

ディーゼルエンジンの分解・組立・運転

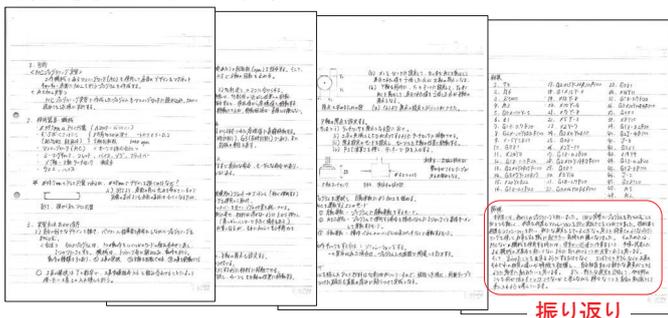


エンジンの諸元
 形式：4行程サイクルディーゼル機関
 排気量(行程容積)：296cm³
 定格出力：6PS
 機関回転数：1800rpm
 使用燃料：軽油
 燃焼方式：直接噴射方式
 冷却方式：強制空冷方式

レポート評価 NCプログラミング・MC加工

課題設定

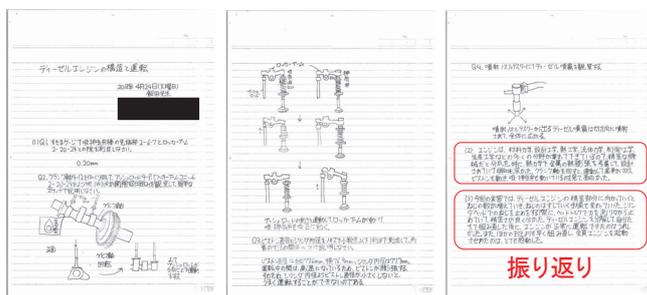
当日の実習内容を振り返りながら注意が必要だった点や手順の意味などを自分の意見や感想とともに記述しなさい。



レポート評価 エンジンの分解・組立

課題設定

- (1) 上記の各問題(Q1~4)の観察・測定結果をまとめなさい。
- (2) 「エンジンと機械工学の関係」を考えて実習の感想を簡単に述べてください。
- (3) この実習で発見、あるいは感動したことを簡単に述べてください



まとめ

- 徹底的な安全教育指導
- 1年前期に機械工作に触れることで、機械工学を学ぶ動機づけに
- 1週 or 2週のテーマごとにレポート作成をすることでレポート作成能力の向上
- 新入生集中研修(ディベート)および機械科学実験1でグループ活動を実施

課題

機械科学コースは昼間110名、夜間主10名のため、一人ひとりの十分な発表機会が設けられない

資料③

平成30年度
SIH道場振り返り
シンポジウム

2018年11月16日

授業設計コーディネーターによる 授業実践報告

薬学科・創製薬科学科（薬学部）編

藤野 裕道

薬学部 SIH 道場について

○薬学部SIH道場とは
1) 徳島大学の新入生が大学教育の意義を理解するとともに、自身の専門分野における先端研究を早期に体験することで、研究者・医療人としてのプロ意識を早期に構築する。
2) 学習の基本となる文章作成法、プレゼンテーション方法論、自己評価法を学び、それらの実践を通して大学教育に能動的に参加できる知識、技能、態度を身につける。
3) 医療現場で働く各専門職種を目指す学生が相互理解し、将来、ともに円滑なチーム医療を行える基盤を形成する動機付けを行う。
4) 医療人を目指す学生として何をすべきか、今後の学生生活で何を学び、修得していくべきかを、他学部、他学科の学生と共に考え、お互いから学ぶことを通じて、チーム医療の重要性を認識する。

○薬学部SIH道場とは

- 1) 徳島大学の新入生が大学教育の意義を理解するとともに、自身の専門分野における先端研究を早期に体験することで、研究者・医療人としてのプロ意識を早期に構築する。
- 2) 学習の基本となる文章作成法、プレゼンテーション方法論、自己評価法を学び、それらの実践を通して大学教育に能動的に参加できる知識、技能、態度を身につける。
- 3) 医療現場で働く各専門職種を目指す学生が相互理解し、将来、ともに円滑なチーム医療を行える基盤を形成する動機付けを行う。
- 4) 医療人を目指す学生として何をすべきか、今後の学生生活で何を学び、修得していくべきかを、他学部、他学科の学生と共に考え、お互いから学ぶことを通じて、チーム医療の重要性を認識する。

以上、4項目を目的に実施される講義です。

- (1) チーム医療の基盤を形成することができる
- (2) ノンテクニカルスキル（コミュニケーション力）を育成することができる。
- (3) 班員の意見をまとめて理論的に説明することができる。
- (4) チーム医療入門（蔵本地区合同ワークショップ）に積極的に参加し、他学部学生とコミュニケーションを取りながら、協力してプロダクトを作成できる協働力を養うことができる。
- (5) 将来の進路や方向性について考察し、大学における学習と関連させて説明することができる。
- (6) レポートの作成において、注意すべき点について説明することができる。
- (7) 効果的なプレゼンテーションを行うための基本的な手法・ツール等を使うことができる。
- (8) 学習の振り返りや気づきを基に、今後の学習計画を立てることができる。

<体験学習（SIH道場、チーム医療入門）> 藤野 裕道

○事前学習
・ビデオコンテンツ「SIH道場とは」を視聴する。

到達目標（4）将来の進路や方向性について考察し、大学における学習と関連させて説明することができる

4月3日（火）	10:35	15分	オープニング	藤野
---------	-------	-----	--------	----

到達目標

- (1) チーム医療の基盤を形成することができる
- (2) ノンテクニカルスキル（コミュニケーション力）を育成することができる。
- (3) 班員の意見をまとめて理論的に説明することができる。
- (4) チーム医療入門（蔵本地区合同ワークショップ）に積極的に参加し、他学部学生とコミュニケーションを取りながら、協力してプロダクトを作成できる協働力を養うことができる。
- (5) 将来の進路や方向性について考察し、大学における学習と関連させて説明することができる。
- (6) レポートの作成において、注意すべき点について説明することができる。
- (7) 効果的なプレゼンテーションを行うための基本的な手法・ツール等を使うことができる。
- (8) 学習の振り返りや気づきを基に、今後の学習計画を立てることができる。

到達目標（3）チーム医療入門（蔵本地区合同ワークショップ）に積極的に参加し、他学部学生とのコミュニケーションを取りながら、協力してプロダクトを作成できる協働力を養うことができる

創製薬科学科（4年制コース）への講演

「働くってなに？～多様でフラット化した世界へ羽ばたく君と考える～」

講師：鳥取桂氏：本学薬学部卒業生、元大塚製薬執行役員、現在「薬友会」会長

聴講学生からのコメント

一つの薬の開発について、開発にかかる時間、コストなどが知れて良かった

担当教員からのコメント

「悪魔から貴方の命10年と引き替えに取引するとしたら、いくらのお金と交換するか」

これからの自分の価値は大きいということ、その価値を高めるために自身がこれからどうするか。個々の学生が自分の将来ビジョンを意識し、これから学生生活をどのように過ごすかを意識する機会になったように思います。大学に入学したばかりの後輩への鳥取氏のメッセージが込められたお話しだったと思います

薬学科（6年制コース）1年生への講演

「薬局で働く」

講師：藤本千枝子氏：鈴鈴薬局（徳島市）薬剤師

聴講学生からのコメント

薬剤師になった後も勉強を続けることも大切だと思う
別の場所や別の機会に同じ様な話を聞いたことがある

担当教員からのコメント

薬局薬剤師とは調剤して患者さんに服薬指導するというのが主な仕事だというイメージがあったようですが、実際には在宅医療、フィジカルアセスメント、健康相談など幅広い仕事があることを早期のうちに知ることができ、これから始まる大学での学習に対して意欲が高まったようでした

薬学科・創製薬科学科1年生への講演

（および医学部・歯学部学生 計432名）

「薬害肝炎はなぜおきたのか」

講師：武田せい子氏：肝炎訴訟大阪原告団長

「B型肝炎患者の現状について」

講師：有川哲雄氏：徳島肝炎の会
講師：河野雄介氏：全国B型肝炎訴訟大阪弁護団

聴講学生からのコメント

薬学科：昔の薬に関する制度や管理は杜撰だと思った
改めて自分が将来なろうとしている薬剤師の責任の重さを痛感した
創製薬：申し訳ないが、こういうヒトがいたからこそ薬の開発が進んだのかも
知らないと思った

担当教員からのコメント

被害者の具体的な声は、教科書や本にある記述からは読み取れない、痛みや苦しみをリアルに表現しており、聴講した学生達は自分たちが医療にすでに携わっている（携わってしまった）ことを実感できたのではないかと思います

薬学科・創製薬科学科1年生への講演

「薬学の祖を学ぶ～こころざし～」
2011年制作 徳島大学長井長義映像評価実行委員会/
NHKエンタープライズなど制作DVD上映 (108分)

長井長義とは

長井 長義 (ながい ながよし)
1845年7月24日 (弘化2年6月20日) ~ 1929年 (昭和4年) 2月10日は日本の薬学者。エフェドリンの発見者、日本薬学会初代会頭で日本の近代薬学の開祖。阿波国名東郡常三島村 (徳島市中常三島町2丁目) 出身。

徳島大学薬学部は、日本薬学界の祖でエフェドリンの発見者として世界的に著名な長井長義博士の進言により大正11年 博士の郷里徳島の徳島高等工業学校応用化学科に新規な薬の創製 (創薬) を目的として設立された製薬化学部を発祥とし昭和26年に徳島大学工学部より分離独立した



徳島にはフラスコを持った志士がいた・・・

薬学科・創製薬科学科1年生への講演

「薬学の祖を学ぶ～こころざし～」
2011年制作 徳島大学長井長義映像評価実行委員会/
NHKエンタープライズなど制作DVD上映 (108分)

聴講学生からのコメント

薬学科: 名前しか知らなかったが、具体化したイメージが掴めた
創製薬: 徳島大学関係者にすごいヒトがいることが解った

担当教員からのコメント

日本薬学の創始者であり薬学の祖である長井先生の実体験を映画という形で見ることは薬学を志して大学に入った学生の皆さんにとって、改めて薬学への志を強く持つきっかけになったこと、と思います

日時	2018年9月29日 (金)	13:00-17:00
場所	徳島大学 徳島キャンパス	大講堂
受付	村: 大講堂入り口	
申込	徳島大学 薬学部 薬学科	

チーム医療入門 2018年9月29日 (金)

<WSのテーマ> 『地域包括ケアの実現のために 私たちが身につけることは?』

<WSの目的> 皆で協働して異なる立場や様々な観点から意見交換し、プロダクトを作成、プレゼンテーションを行う。

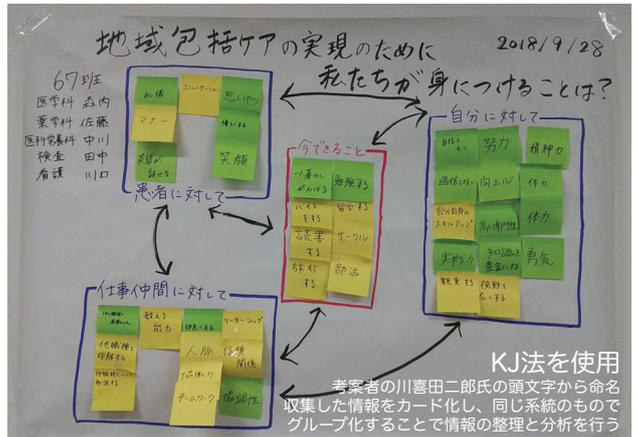
<到達目標> 1) 他者と協力して、ひとつのテーマについて討議 (意見交換) し、プロダクトを作成できる。
2) 「地域包括ケアシステム」について討議することができる。
3) 今後の自分の学習のあり方について討議することができる。
4) グループで討議した結果をほかのグループにプレゼンテーションできる。

<スケジュール>
12:20 受付 (自分の座席を確認して着席。) 12:50までに着席してください。
13:00 オープニングリマーク
13:20 基調講演「地域包括ケアシステムを組もう」 講師 白山靖彦先生 (徳島大学大学院医歯薬学研究所 地域医療福祉学分野 教授)
14:20 ワークショップ *携帯をマナーモードにして積極的に参加しましょう。
17:00 終了 *皆で後片付けをお願いします。

プロダクトを作成できる
協働力を養うことができる



協働作業風景



プレゼンテーション風景



2018年度
入学1年生：
個別入試で、
最初から
学科別に入学

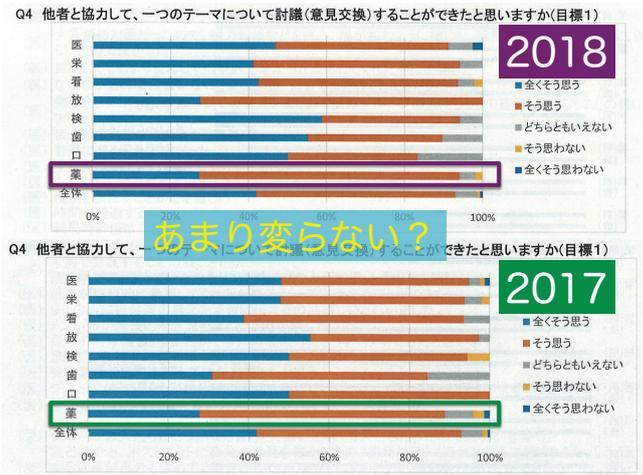
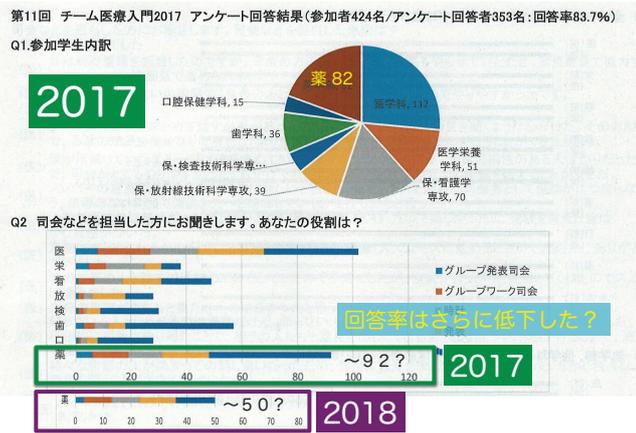
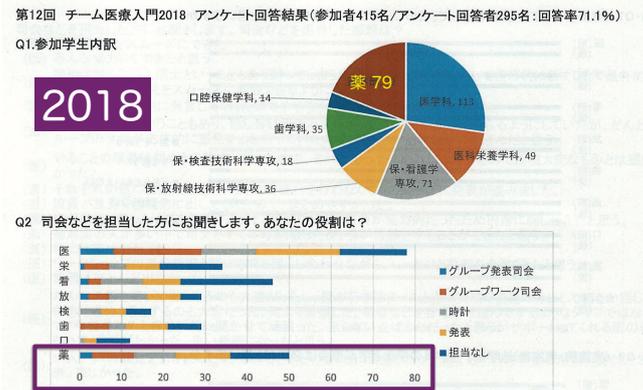
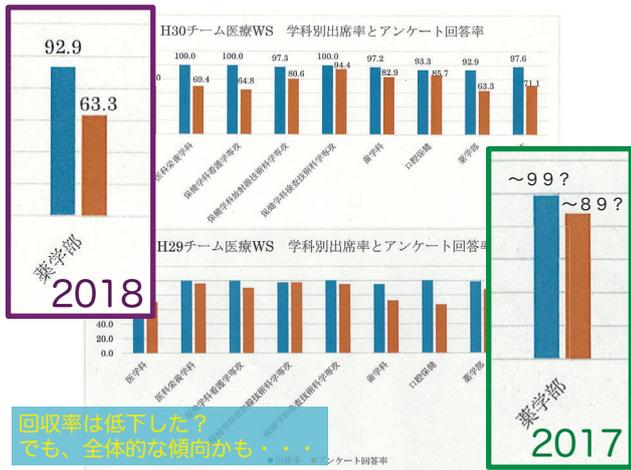
2017年度
入学2年生：
一括入試で
3年時に学科
決定後配属

VS

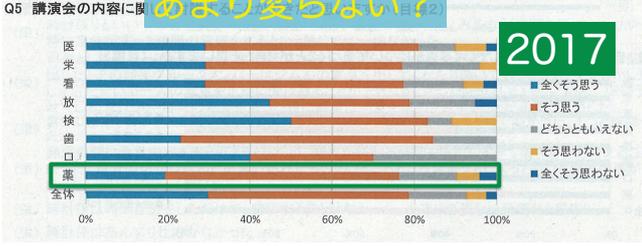
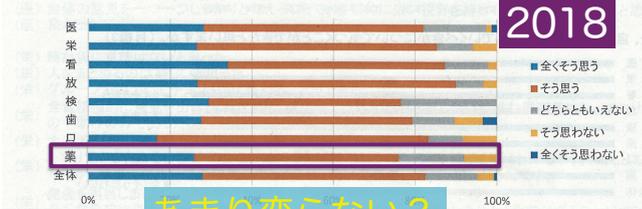
2018年度テーマ：
地域包括ケア実現のために
私たちが身につけることは？
2018年9月29日（金）
13時～17時

2017年度テーマ：
なぜ、国際医療教育を
するのか？
2017年9月28日（金）
13時～17時

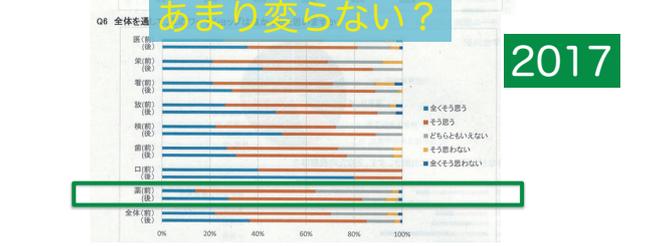
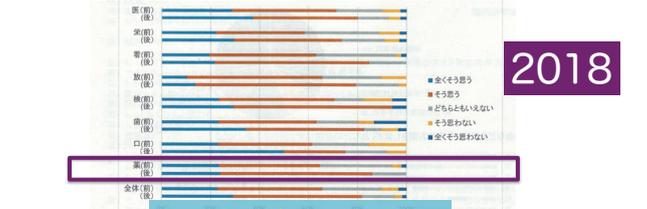
2017年度と2018年度入学学生の
チーム医療への関心・反応は異なるのか？



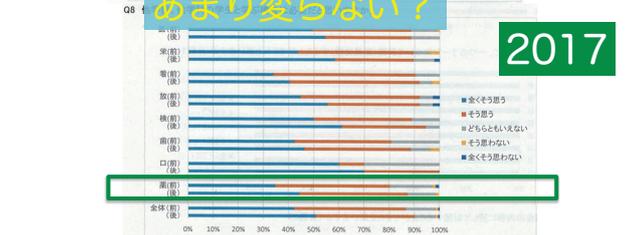
Q5 講演会の内容に関して討議することができたと思いますか(目標2)



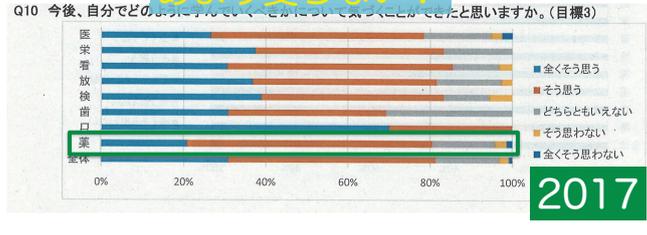
Q6・Q7 (実施前・実施後)全体を通して、このワークショップは良かったと思いますか。



Q8・Q9 (実施前・実施後)他学部、他学科の学生と学ぶ機会が必要だと思いますか。



Q10 今後、自分でどのように学んでいくべきかについて気づくことができたと思いますか。(目標3)



司会などを担当した感想は？ 2018

- (業) みんながちゃんと話し合ってくれたからスムーズに進められた
- (業) 全員が意見を出し合えて良かった
- (業) 初対面の人に話を振ったり、意見を引き出すのが難しかった。
- (業) 緊張した
- (業) 普段から、物事を話す際には中心にたつて話を進められるように司会などの役割をやらせてもらっているため、いつも通り順調に進められたと感じた。
- (業) 思っていた以上に難しく、うまく進行することができませんでした。
- (業) グループの人たちが自主的に話してくれたので楽しかった。
- (業) 司会の人と一緒にみんなをまとめるように頑張ることができたと思う。時間も気にながら話し合いをするのは少し大変だった。
- (業) グループの一員それぞれがきちんと意見を出してくれたので、やりやすかった。
- (業) タイマーを渡されたので時間管理をきっちりできた。
- (業) 話をまとめるのは難しかったがやりがいがあった
- (業) 他学科の人の集まりだったため、共通の話題を振ろうと意識したが難しかった。
- (業) 発表を聞く人が3グループだけだったので緊張せずに話すことが出来た。
- (業) 違う学部の全然知らない人の前で発表する機会はなかなかなかったので緊張した。
- (業) いい経験になりました

15回答

司会などを担当した感想は？ 2017

- (業) あまり上手く発表できなかった。
- (業) いつもと違う顔ぶれに発表するのは緊張があった
- (業) グループ内で会話、意見が少なかったので、グループの意見をまとめるのが難しかった。
- (業) 今までに薬学部で行った発表とは違って、真面目な感じで行う発表だったのでやりやすかった。
- (業) 話しやすいばかりで、進めやすかった。楽しかった。プレゼンの司会は緊張したが、思っていたより意見を出してくれたので、進めやすかった。
- (業) 発言力のある人がいたので、非常にやりやすかった。
- (業) 今までで司会をした経験がなく、結局、司会としての役割を果たすことができず、無念でした。
- (業) 司会が話者を振り回しても積極的に話し合いができたので、あまり役目が出なかったように感じた。
- (業) 発表が終わったあとの気を効かせたコメントなどは、なかなかできないと思った
- (業) 同じグループの学生がやりたくなさそうだったので、
- (業) 今回のような発表はあまり得意ではないから 部活動で、会議の司会を行っており、慣れているから
- (業) あまり中心的に仕切るタイプではないのでできなかったが、いい経験になったと思う
- (業) 中学高校でワークショップはよくやってはいたが、普段話したことのないメンバーで話し合いをするのはとても難しい
- (業) のが慣れ以上に緊張があったが、それ以上に慣れたこと(司会)に慣れていたから
- (業) スムーズに進行するようだったが、発言がなかなか出られなかったが、いい経験ができた
- (業) 一歩大冒険で発表の経験がなかったが、発表ができたことは立派な進歩だと感じた
- (業) 司会が話者を振り回しても積極的に話し合いができたので、あまり役目が出なかったように感じた
- (業) 今までは発表の準備など、発表の準備ができていたので、発表の準備ができていないのは、少し緊張していた
- (業) 初対面の人をまとめるのは難しかったが、発表もなんとか形にすることができたのでよかった。普段司会などはわたしは時計をしていますが、実際の所みんな各自でしっかりと時間なども意識しながら意見を出していたのでほとんど問題はなかった。司会の方の進行がとてもよかったです。とても助かりました。
- (業) 楽しかった。
- (業) スムーズにでき、よかった
- (業) 緊張しい発表ではなかったが、少しラフにできたのでよかった。大学に入り発表の機会が多かったので勝手に発表することができた。
- (業) グループで話し合いながら進められたのでスムーズに進めることができた。
- (業) 発表前にもっとよく構成を練っておけばよかったと後悔している。
- (業) 前に立って発表するのは緊張した。言わないといけないことは言うように気をつけた。

25回答

アンケート結果から伺える全般的な傾向は
2017年度の学生も2018年度の学生も
それ程大きく変わっていないようだ

では変わったのは何か？

アンケートの回収率や回答率？

2018 < 2017

振り返りレポートから幾つかの意見を
ピックアップしてみた

そこで見えて来たものは・・・

創製薬科学科の医療人としての意識の違いか？

薬学科（6年制コース）1年生の見解

・今回班のメンバーとして出会った人たちは今後関連した職に就くかもしれません

・薬剤師であれば、言うまでもなく調剤薬局での職務はいたって一般的であるが当然薬局に他職種の医療人がいるとは考えにくいので、場合どうチーム医療を実現させていくのか

・必要とされる**薬剤師になる**ために社会情勢をニュースや論文で自主的に得ていくように心がけていこうと思う

・今まで通りに**薬剤師としての職務を全うできるように薬のスペシャリストになる**べき学習また実習していくとともに、通常**チーム医療で連携**を行っていく**職種の理解を深めていく**

・ただ漠然と**薬剤師になる**と思えば国家資格をとって適当に仕事をこなしているだけでも**薬剤師になれる**が、地域包括システムのことを考えるとそれではいけないと思った

・薬学についてだけでなく、医療全般の知識や一般教養を身に付けておく必要がある

・医療チームの場合医師が中心になることが多い。良きフォロワーとしてリーダーやチームを支えていける**薬剤師になりたい**。そのためにも、薬学について学び自分の専門性を高めていきたい

もしアンケートなどを回答しない学生が薬学科だったら・・・

評価者：感想の羅列で論理性に欠ける

評価者：学んだことについては明確ではないように思います

評価者：医療人を目指す自覚をもって今後の「学修」に積極的に取り組んで下さい

レポート：ワープロか手書きか？

2018年度入学1年生
ワープロ：50、手書き：28
(ワープロ 63.3%)

2017年度入学2年生
ワープロ：57、手書き：23
(ワープロ 71.3%)

2018年度 薬学科
ワープロ：23、手書き：18
(ワープロ 56.1%)

2018年度 創製薬科学科
ワープロ：27、手書き：11
(ワープロ 71.1%)

手書きの方が内容が適当という学生と、ワープロの方が手抜きが出来るという学生の両方見解がある・・・

もし手書きの方が適当の場合：
薬学科の方が適当に書いて、アンケートも出さない？？

創製薬科学科（4年制コース）の見解

・私は研究者になり新薬を開発したいという夢を持っているため将来**地域包括ケアシステム**に関することは**ない**かもしれません

・私は**将来研究者**になろうと考えているので**チーム医療に参加することは**ないと思います

・今回は“医療人になる私”の視点からなので全く初めての思考であった

・私は**創製薬科学科**であり、将来は**新薬の研究者**を志望しているため**将来チーム医療の現場に直接かかわることは**ないと思う

・私は創製薬科学科で、将来は研究職に就きたいため今回のグループの中では一番患者さんとの接点が少なく**直接患者さんに何かをすることはほとんど**ないと思います

・私は創製薬科学科の学生なので**将来実際に患者と向き合うことは**少ないかもしれない

・自分は創製薬科学科（4年制）の為、**薬剤師には**ならないので**チーム医療は**あまり関係がないのではないかと考えてきた

・ケアマネジャーとして働く母から何度もこれからの地域医療を憂いた話を聞いていたにも関わらず、私は**創製薬科学科**に入学していたため**全く興味を**今までもって**いなかった**

・私は創製薬科学科のため**薬剤師になることが**できず、**直接医療の現場**にかかわることはないので、**今回発表した内容は、私にとって無駄だったと思う**

2年生の見解

(まだ進路が薬学科か創製薬科学科に進学するのか未定)

・私は卒業後に**薬剤師**になって病院で働き、**チーム医療**に関ってみたいと思っていたので、このワークショップは意味のあるものになった

・将来私は**薬剤師**として何か**国際医療協力**をすることができたらいいと思う

・医療従事者として忘れてはいけないのは、どんな人でも命さえあれば助ける義務があるということだと思います

・これからの学習において、医療関係者を目指す者としての視点だけでなく、特に患者さんやその家族等の外部の人の視点からも考えられるように努力していきたい

・人の命を救うためにできることを探し、積極的に行動する人々を見て、自分も医療従事者としてこの姿勢を忘れてはならないと感じた

・将来病院などで働くことになったら自分の知識だけでは対処できない事態が起こるかもしれない

・将来、**薬剤師**として、**患者によりよい医療を提供**できる医療チームの一員となれるように、今は必死に勉強に励んでいこうと思う

もしアンケートなどを回答しない学生が創製薬科だったら・・・

学生：私は**創製薬科学科**のため**薬剤師になることが**できず、**直接医療の現場**にかかわることはないので、**今回発表した内容は、私にとって無駄だったと思う**

興味が無いから、アンケートも出さない？？

チーム医療をSIHに組み込むことの見直しが必要か？

創製でも興味を持つテーマ、あるいは**創製薬科学科**が参画する動機付けをする必要があるか？
(創製薬科学科が担うロールを設定するとか)

役立った点 【薬学部】

他者とのコミュニケーションをとることの重要性を改めて認識できた点。
 ワークショップのやり方がよくわかった。
 名前の通り、入学してすぐに行われるので、これからの大学生活や社会に出たときに参考になる点が多々あった点。
 沢山出た意見をまとめる方法。
 自分で考える力が大切だということが分かった。
 プレゼンテーションをする力が身についた点。

SIH道場では、もっと学科に関連した体験を行える方が良い。

改善した方がよい。
 人数が多かったので、何もなくてもいい人が出てしまったのが問題点だと思う。
 発表者が限られる。
 議題が、議論するには少し難しかったように思う点。

医療の現場に就かない人にとっては必要なか疑問である。

自分の見聞から得た情報は、医学や薬学の助けになるので、医療現場の勉強が何となく進んでいく感じがする。

創製薬科学科への対応。

創製薬科学科への対応は、SIH道場でも、活用する機会を多く取りたいと思う。また、活用する機会を多く取りたいと思う。
 班ごとに、はなしあう時間見知りかいて欲しい。
 チーム医療の授業は、1回だけでなく複数回行う方がより深い議論を行えると思った。
 もっと他の学部と習得されるプログラムを増やして欲しい。
 文書力。
 チーム医療入門の事前学習で、インターネットのページのどこを見たら良いかという点に詳しく。

とは言え大多数は意義を感じていると思われる

SIH道場パフォーマンス科目について

2018年度は2年生を対象とした薬理学実習をあてる予定

2年生約80人をA、Bの2つのグループ分け2回行う
 各グループ約40名を、さらに3~8人程度のチームに分け
 それぞれ4つの実験を行う実習（主に3年生がチューターとして指導）



3年生への質問：
 1年生の時に受けたSIH道場の授業は、今回の実習説明でのプレゼンテーションに役立ちましたか？



2年生への薬理学実習
 (まだ進路が薬学科が創製薬科学科に進学するのか未定)

実施期間 Bグループ：2018年11月22日~12月7日
 Aグループ：2018年12月11日~12月20日

これまでのSIH道場での到達目標
 到達目標 (1) ノンテクニカルスキル (コミュニケーション力) を育成することができる
 到達目標 (2) 班員の意見をまとめて理論的に説明することができる

SIHパフォーマンス科目の到達目標 (1)
 ノンテクニカルスキル (コミュニケーション力) を用い役割分担を決め、テクニカルスキルを必要とする実験の遂行後、班員の意見をまとめて論理的に説明することができる

2年生への薬理学実習
 (まだ進路が薬学科が創製薬科学科に進学するのか未定)

実施期間 Bグループ：2018年11月22日~12月7日
 Aグループ：2018年12月11日~12月20日

これまでのSIH道場での到達目標
 到達目標 (5) レポートの作成において、注意すべき点について説明することができる
 到達目標 (6) 効果的なプレゼンテーションを行うための基本的な手法・ツール等を使用することができる
 到達目標 (7) 学習の振り返りや気づきを基に、今後の学修計画を立てることができる

SIHパフォーマンス科目の到達目標 (2)
 学習の振り返りや気づきを基に、基本的な手法・ツール等を使いレポートの作成ができる

2年生への薬理学実習
 (まだ進路が薬学科が創製薬科学科に進学するのか未定)

実施期間 Bグループ：2018年11月22日~12月7日
 Aグループ：2018年12月11日~12月20日

実習レポート課題の最後に以下について振り返ってもらおう

SIHパフォーマンス科目の到達目標 (1)
 学習の振り返りや気づきを基に、基本的な手法・ツール等を使いレポートの作成ができる

SIHパフォーマンス科目の到達目標 (2)
 ノンテクニカルスキル (コミュニケーション力) を用い役割分担を決め、テクニカルスキルを必要とする実験の遂行後、班員の意見をまとめて論理的に説明することができる

書かれた内容なども、院生コーディネーター (M1 堀田城太郎) にまとめてもらう

SIHパフォーマンス科目の到達目標（1）

ノンテクニカルスキル（コミュニケーション力）を用い
役割分担を決め、テクニカルスキルを必要とする実験の
遂行後、班員の意見をまとめ論理的に説明することができる

同じグループの学生と話し合って役割分担などを決め、課題の実験を
遂行し、実験結果について皆と意見をまとめることができましたか？

はい・どちらともいえない・いいえ

その理由を簡単に記入して下さい：

SIHパフォーマンス科目の到達目標（2）

学習の振り返りや気づきを基に、基本的な手法・ツール等を
使いレポートの作成ができる

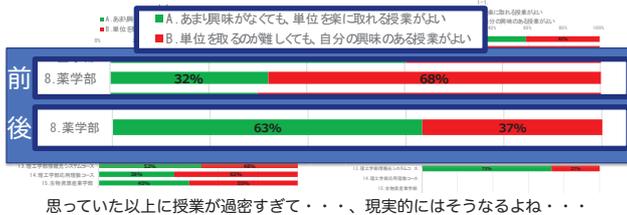
学習の振り返りや気づきを基に、基本的な手法・ツール等を使い
レポートの作成ができましたか？

はい・どちらともいえない・いいえ

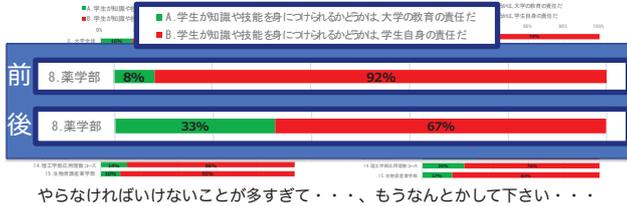
その理由を簡単に記入して下さい：

*なお本発表における抽出・解析・考察などは藤野本人の
一方的で個人的な考えであることを御了承下さい

問1. 大学教育について、あなたは次にあげるA、Bのどちらの考え方に近いですか？



御清聴有り難う御座いました



3. SIH 道場の成果と課題

3-1. 学生・教員対象 SIH 道場アンケート結果

1) SIH 道場の成果検証

大学教育再生加速プログラム事業全体としては、各部局からの委員で構成される AP 実施専門委員会（委員長は教育担当理事）が事業計画に基づき運営を統括し事業を推進している。SIH 道場については、プログラム改善につなげるための評価指標を策定し、これに沿ってアンケート調査等の効果検証を行っている。SIH 道場において学生は、①専門分野の早期体験により学修や研究への意欲を高め、②ラーニングスキル（文章力・プレゼンテーション力・協働力）の修得により大学での学びの基礎固めを行い、③学修の振り返りにより主体的に計画を立て学び続ける習慣を身につける。他方教員にとって SIH 道場は OJT 型の FD としての機能を持ち、①アクティブ・ラーニングの実質化、②反転授業、ルーブリックによる評価法の修得、③教育経験の省察を行うなどのティーチングスキルをつける場となる。

SIH 道場では、「学生と教員が共に学び合う」ため、SIH 道場の成果検証においては、学生と教員がそれぞれの目標に到達したかを把握することが必要となる。そのため、各学部の SIH 道場の終了後には学生および教員対象のアンケートをそれぞれ実施してきた。平成 30 年度からは、これら「受講後」の学生・教員アンケートに加えて、SIH 道場の受講前に実施する「受講前」学生アンケートを導入し、SIH 道場の受講前後で学生の大学の学びに対する意識がどのように変化するかを検証できる体制をとった。さらに、調査項目にはこれまでの調査項目に加え、ベネッセ教育総合研究所が 2008 年・2012 年・2016 年に実施した「大学生の学習・生活実態調査」に共通する項目を採用したことにより、全国の大学生と徳島大学の新生の特徴について比較検討することが可能となった。

これらのアンケートの結果については、SIH 道場の実施支援を担当している総合教育センター教育改革推進部門が集計およびとりまとめを行い、結果を各プログラムに返却している。これらの結果や学生の学修成果を踏まえて、各プログラムの SIH 道場授業設計コーディネーターは、「プログラム設計評価シート」のフォーマットに従い、必須項目の到達度チェックをするとともに、学生の学修成果や改善点、次年度に向けた対応を記述する。次年度の授業設計コーディネーターは、これに基づきプログラム改善を行うことができる。

2) SIH 道場学生アンケート結果概要

平成 30 年度のアンケート回答者数は以下の通りである。

【受講前】 1,344 名中 1,179 名 (88%)

【受講後】 1,344 名中 964 名 (72%)

平成 29 年度までは「受講後」における学生アンケートのみを実施しているため、ここでは昨年度と今年度の共通項目の結果について比較を行いたい。

平成 30 年度の SIH 道場受講を経て、SIH 道場の意義理解やこれに基づく学修の在り方変容に関する学生の意識（調査項目 1-2~1-8）¹は、前年度と比較しても 1%前後の差のみみられるのみで、その割合に大きな違いは見られなかった。そのような中、「1-9.自ら考え抜く能動的学修（アクティブ・ラーニング）の重要性を理解した」「1-10.SIH 道場の教育プログラムは全体的に満足できるものであった」の 2 項目に関しては、前者が 89%から 92%、後者が 84%から 87%へと肯定的意見が増加している。数値的に前年度から大きな変化が見られなかった調査項目（1-1~1-8）を含め、SIH 道場やアクティブ・ラーニングの意義理解と学修への取り組みについて、学生たちの肯定的な意見は全体的に 8 割から 9 割程度の高い割合を占めていることから、SIH 道場の取組は広く認められているものと読み取ることができる。

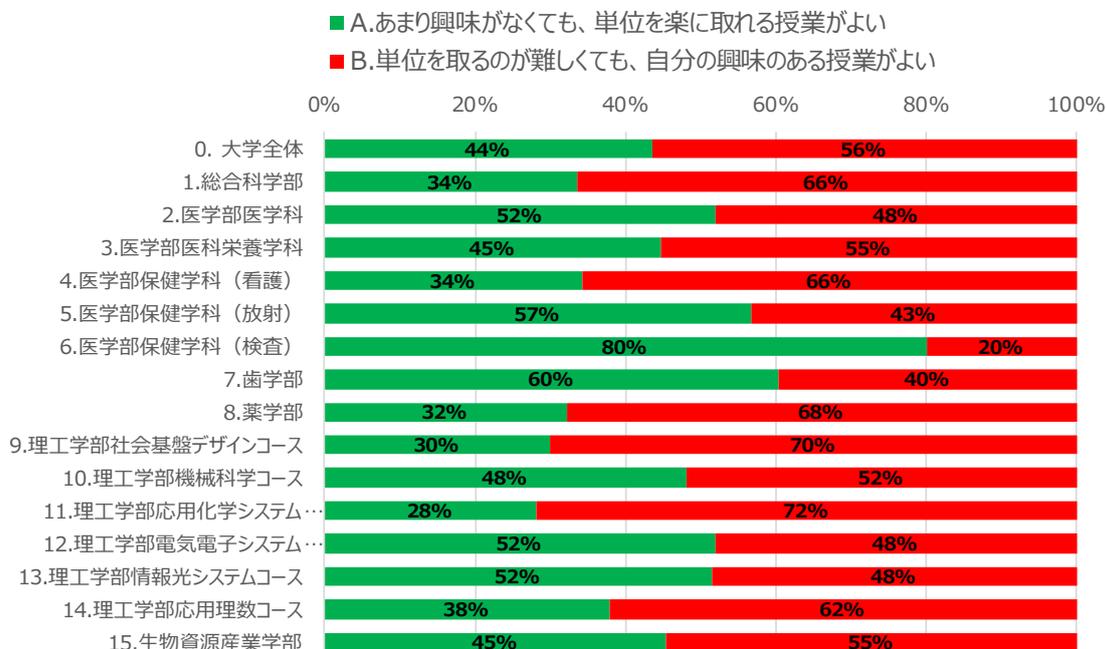
また、SIH 道場プログラム全体を評価する「2-6.SIH 道場のプログラムは全体的に大学での学修において役に立っている」という項目に置いて、「役に立つ」とする意見は前年度の 83%から 73%へと 10%低下しており、ポジティブに評価する意見は少ないという結果が得られた。その一方で、SIH 道場で学んだ「体験学習」「プレゼンテーション」「他者との協働」については、学生たちの他の授業や専門科目での役立ちを実感しているとする意見が前年度に比べ 2%~4%増加している。これらの結果から、学生たちは SIH 道場という科目としてよりも、その中でどういった学びが得られたかという点について個別的に評価していることがわかる。SIH 道場を通じて、学生がその後の大学生活での学修に繋がる学びを得ることが重要であり、SIH 道場の授業内容を検討する際には、学生たちのこうした傾向を確認し、授業デザインに反映していくことが肝要である。

¹ 「1-2.体験学習で専門分野に対する興味関心が高まった」「1-3.レポート等の学術的文章を書く際に必要な準備や基本的なルールを理解した」「1-4.プレゼンテーションを効果的に行うために必要な準備・姿勢・資料を理解した」「1-5.1つの課題に対して、他者と協力して取り組む際の留意点を理解した」「1-6.課題等の評価の基準がわかった」「1-7.学修（体験）を振り返ることの重要性を理解した」「1-8.授業外（事前または事後）において学修を行った」

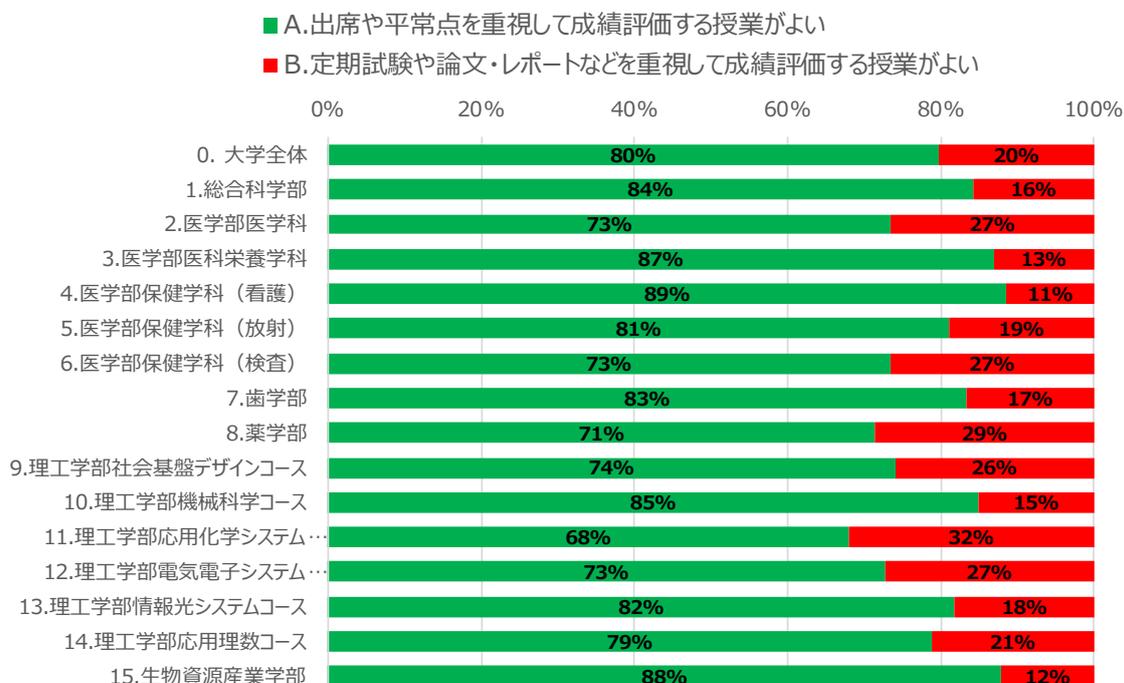
【受講前】学生アンケート

問1. 大学教育について、あなたは次にあげるA、Bのどちらの考え方に近いですか？

1-1.

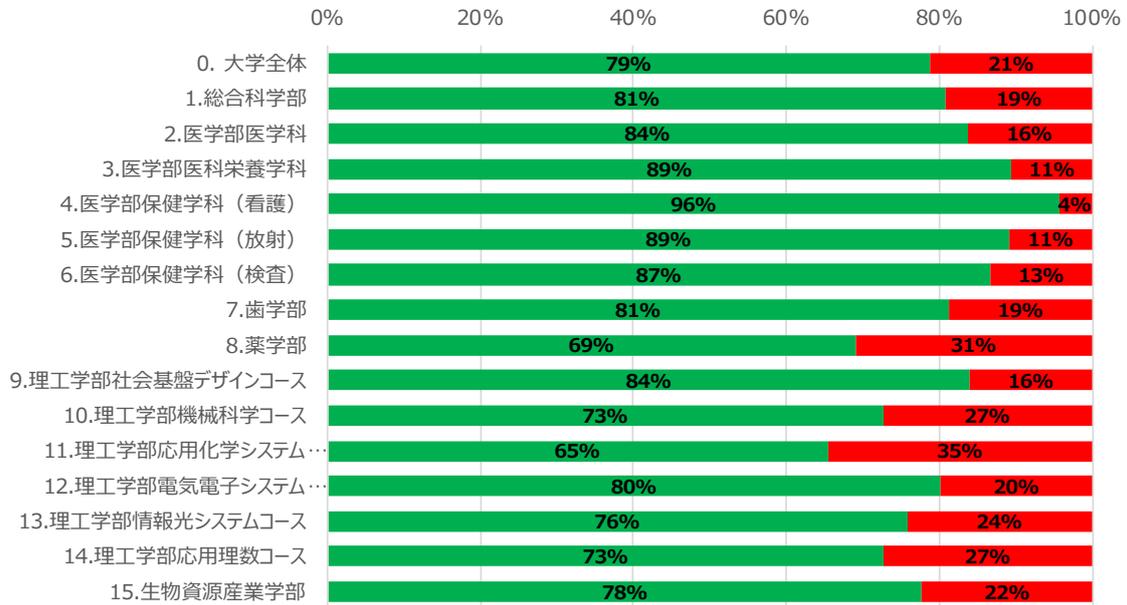


1-2.



1-3.

- A. 応用・発展的内容は少ないが、基礎・基本が中心の授業がよい
- B. 基礎・基本は少ないが、応用・発展的内容の授業がよい

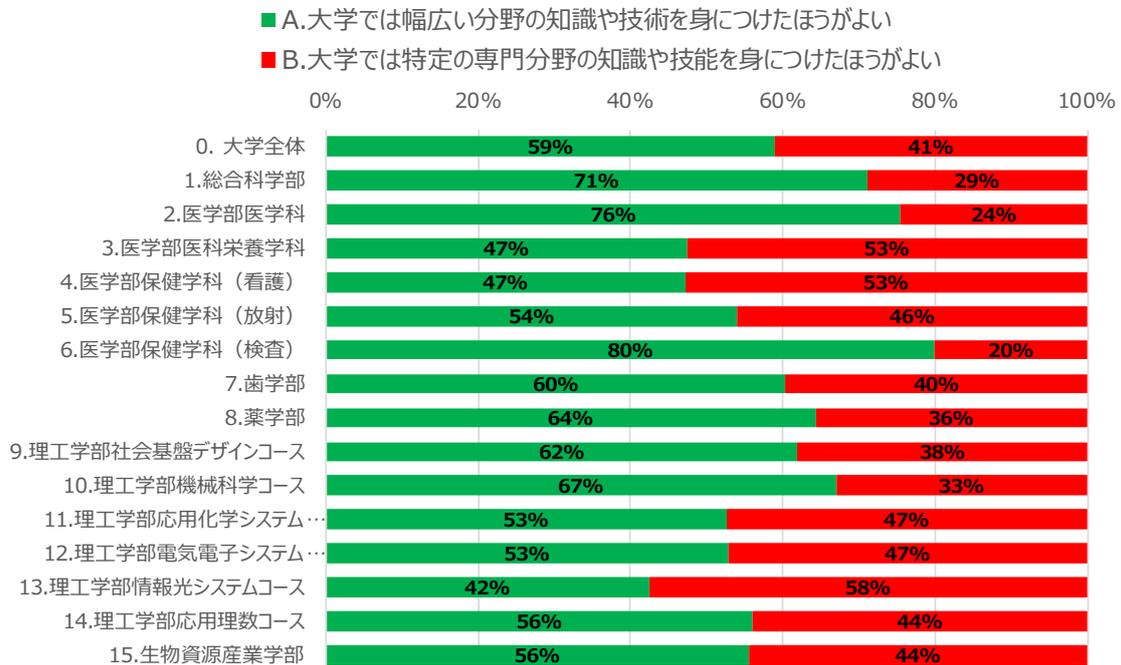


1-4.

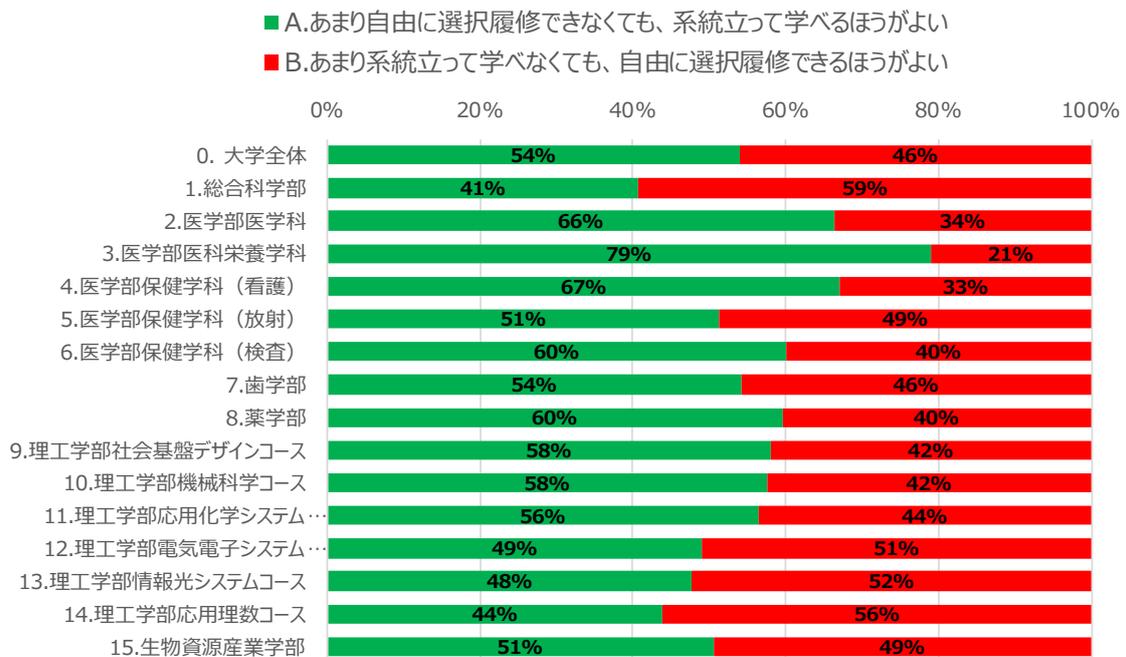
- A. 教員が知識・技術を教える講義形式の授業が多いほうがよい
- B. 学生が自分で調べて発表する演習形式の授業が多いほうがよい



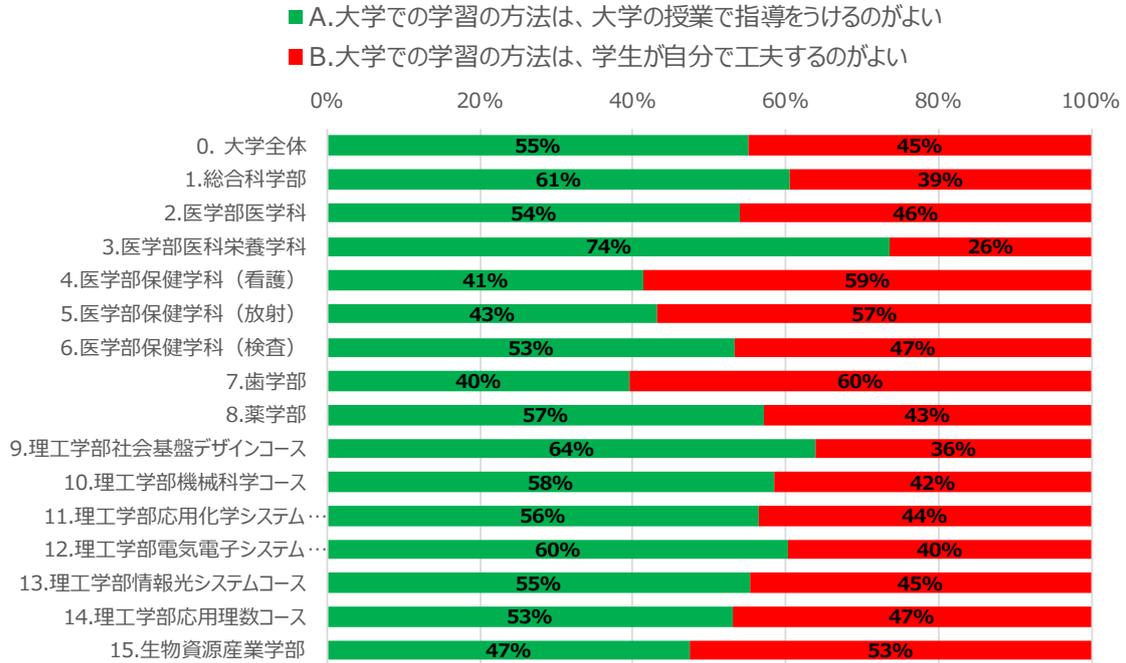
1-5.



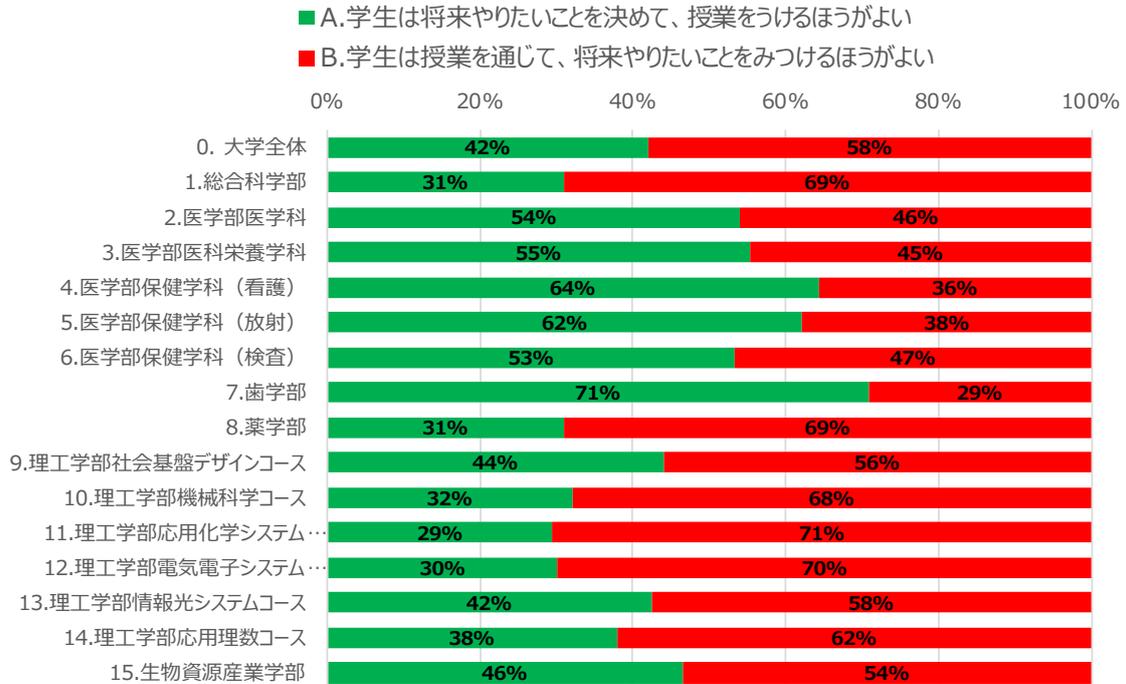
1-6.



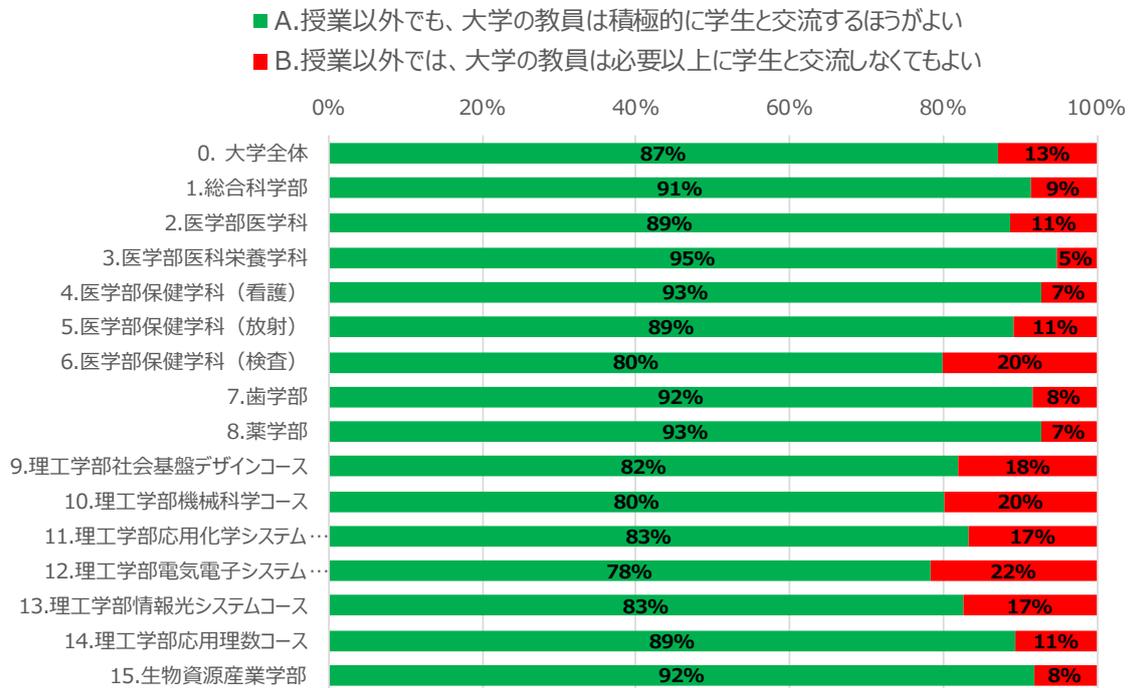
1-7.



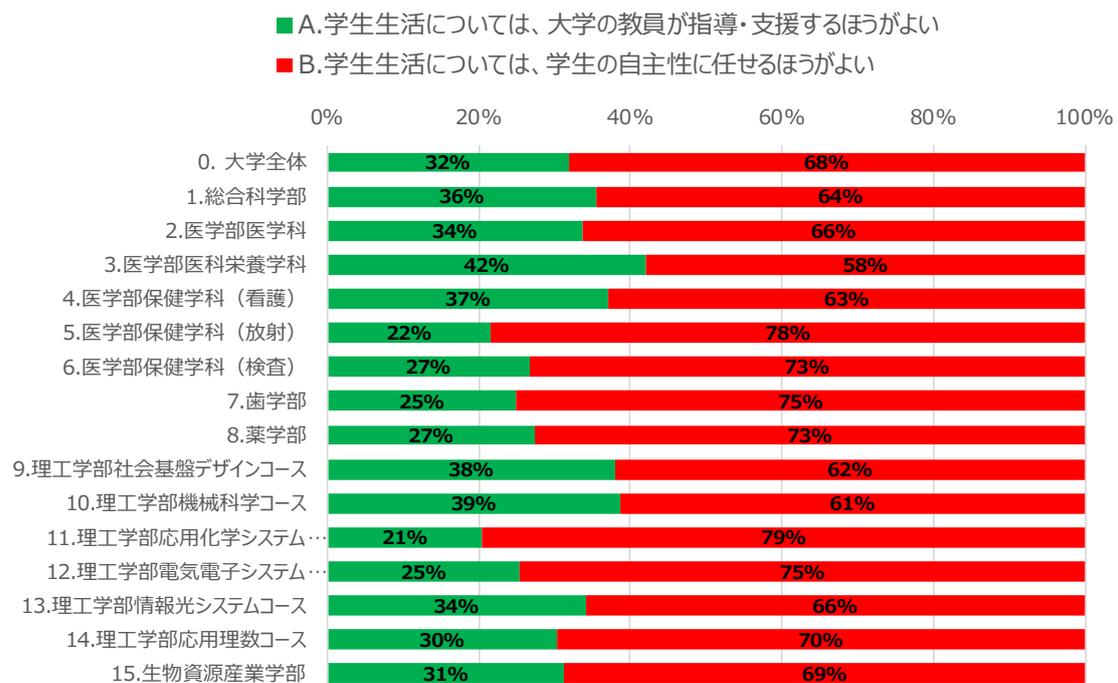
1-8.



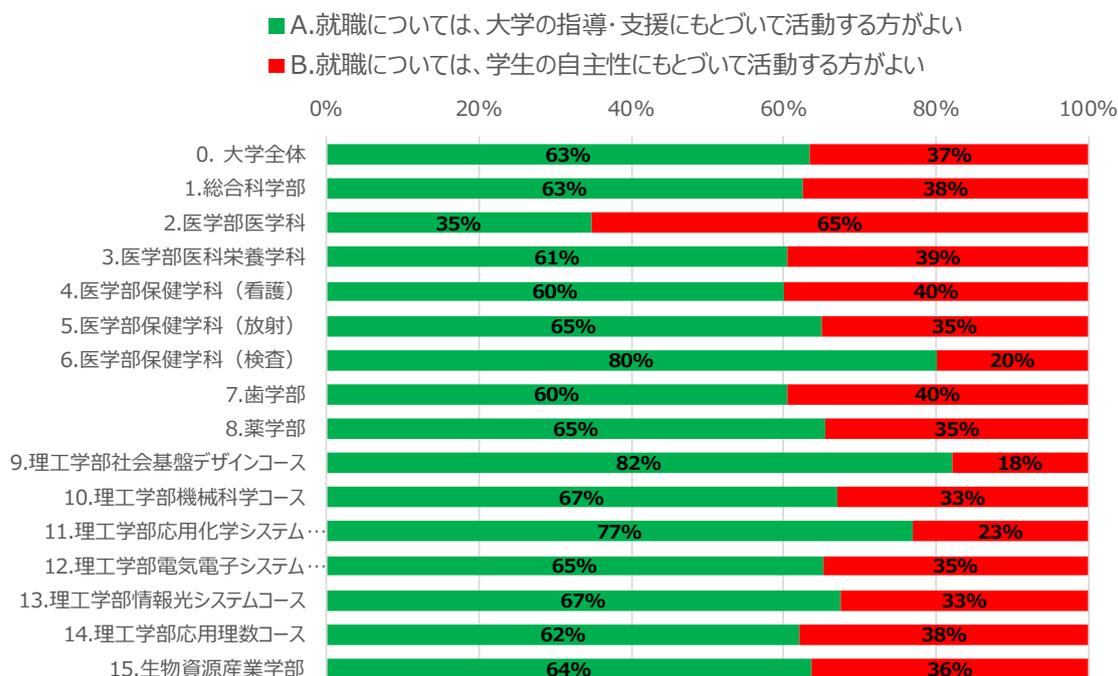
1-9.



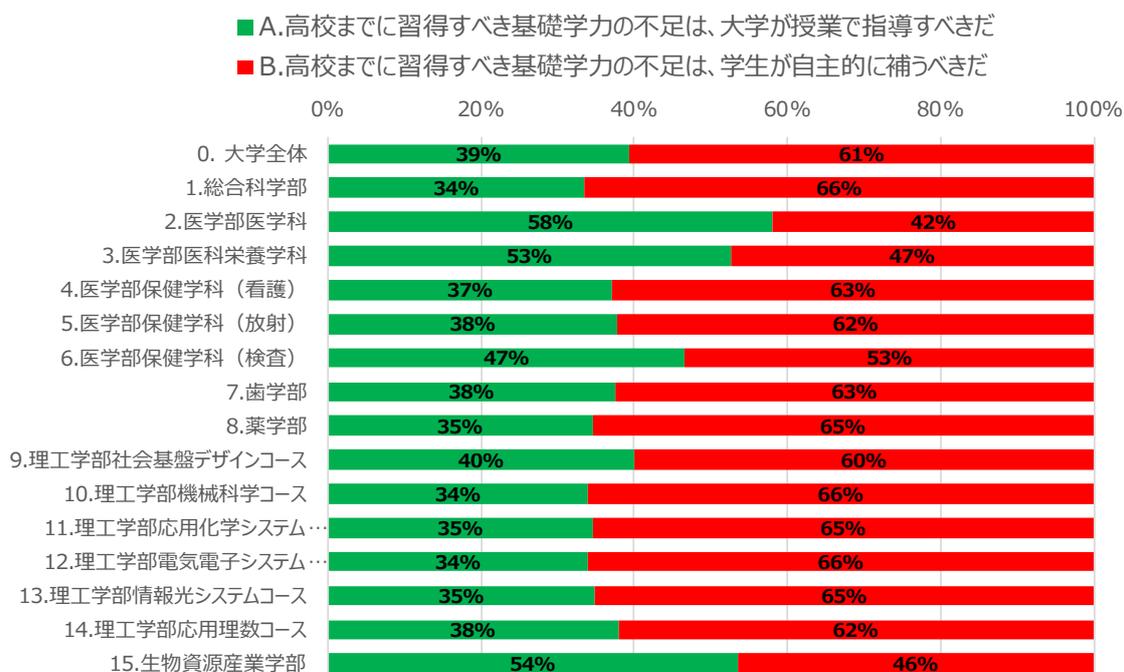
1-10.



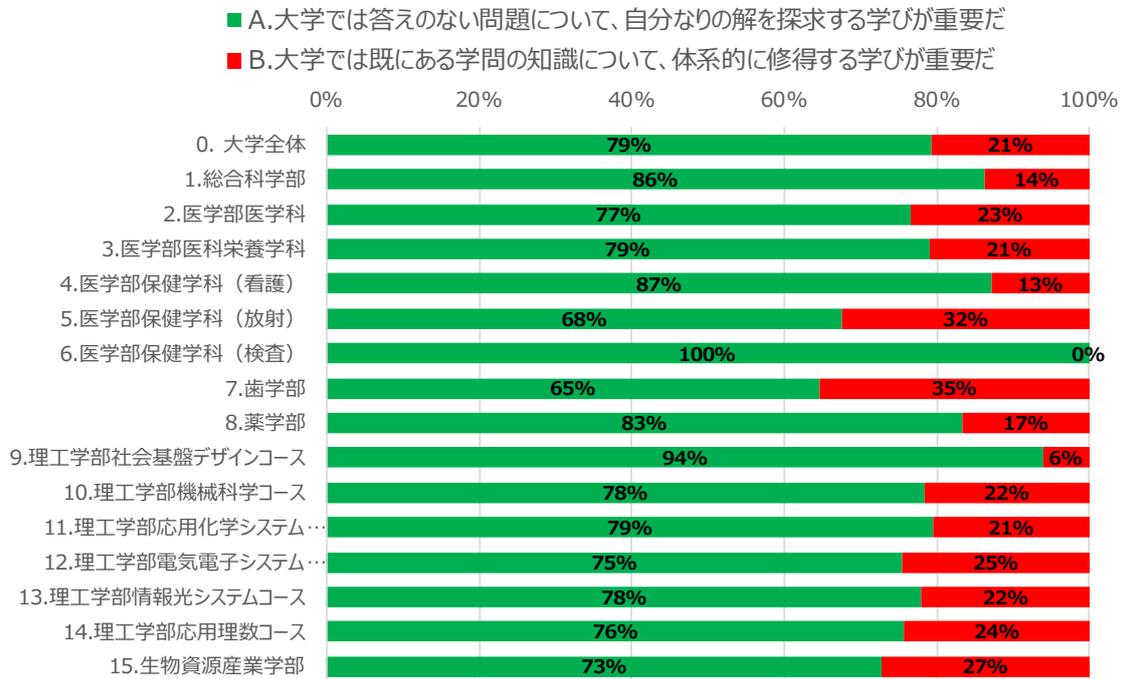
1-11.



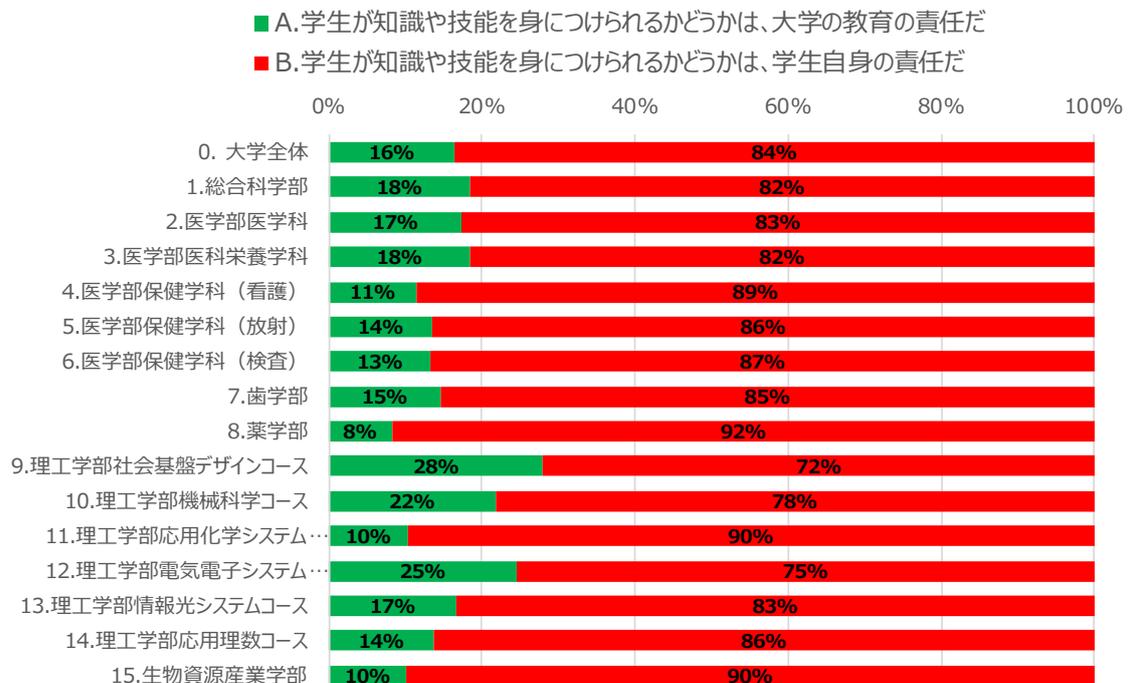
1-12.



1-13.

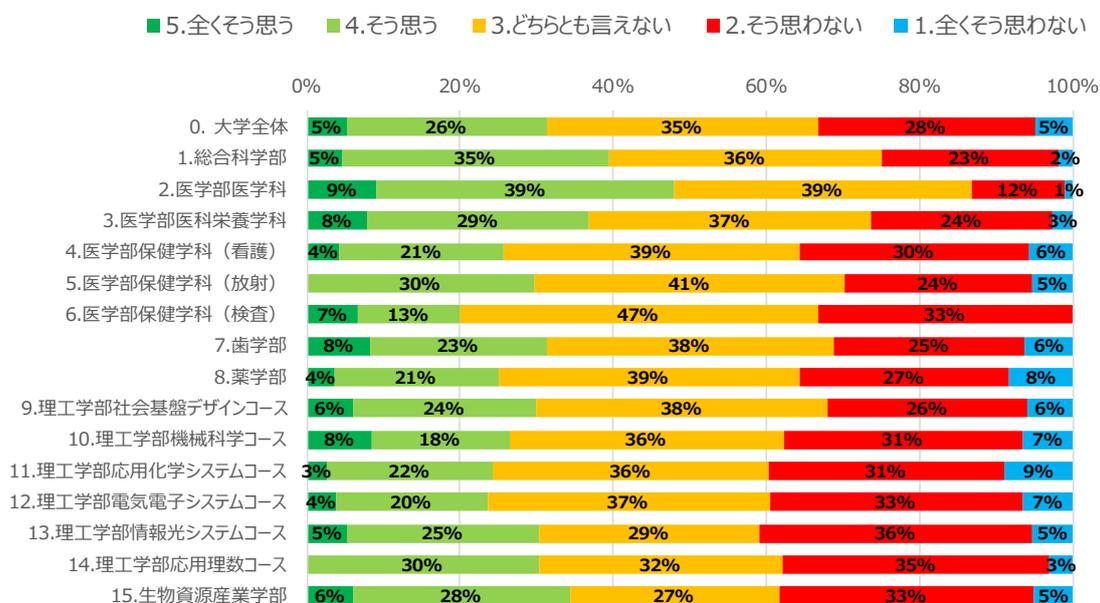


1-14.

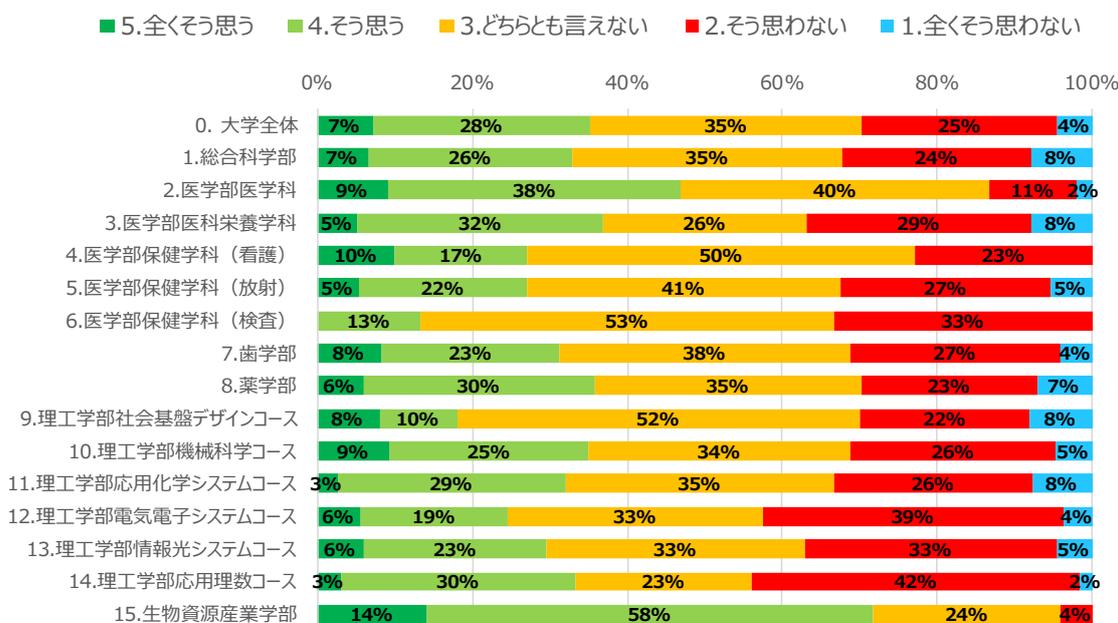


問 2. 自身の学習について、当てはまる項目を「5. 全くそう思う」～「1. 全くそう思わない」のうち当てはまるものを1つ選んで下さい。

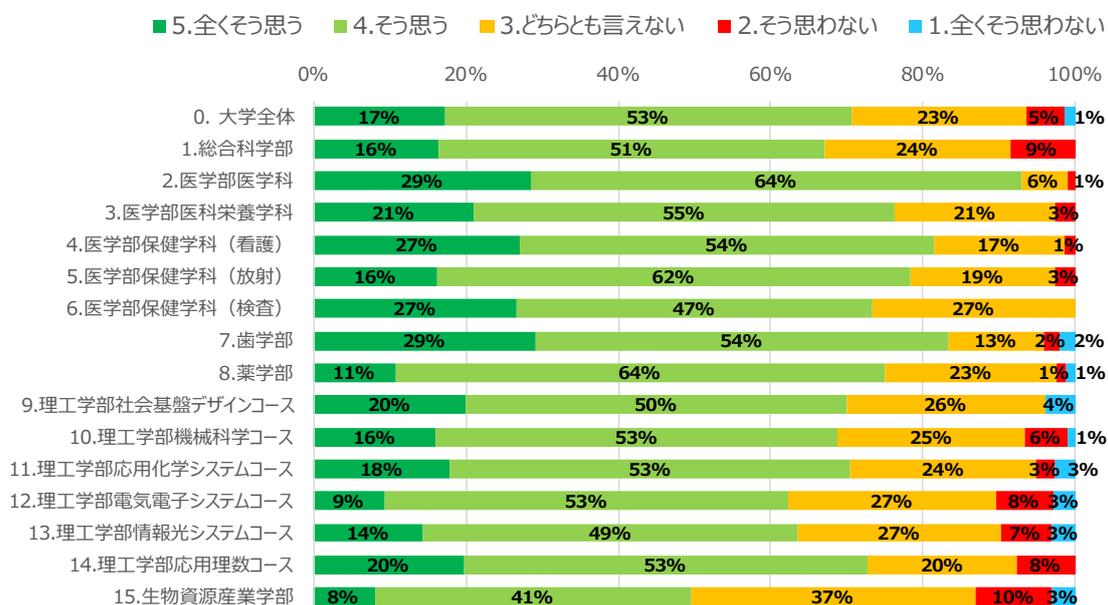
2-1. 自分の考えを文書による表現で、効果的に相手に伝えることができる。



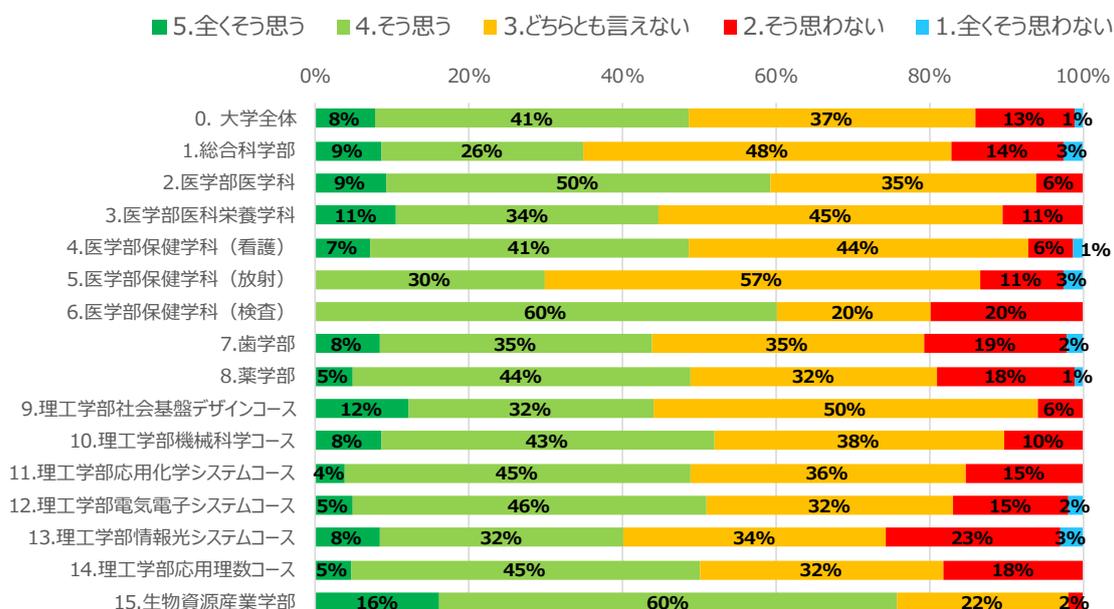
2-2. 自分の考えを口頭による説明や資料を用いて、効果的に相手に伝えることができる。



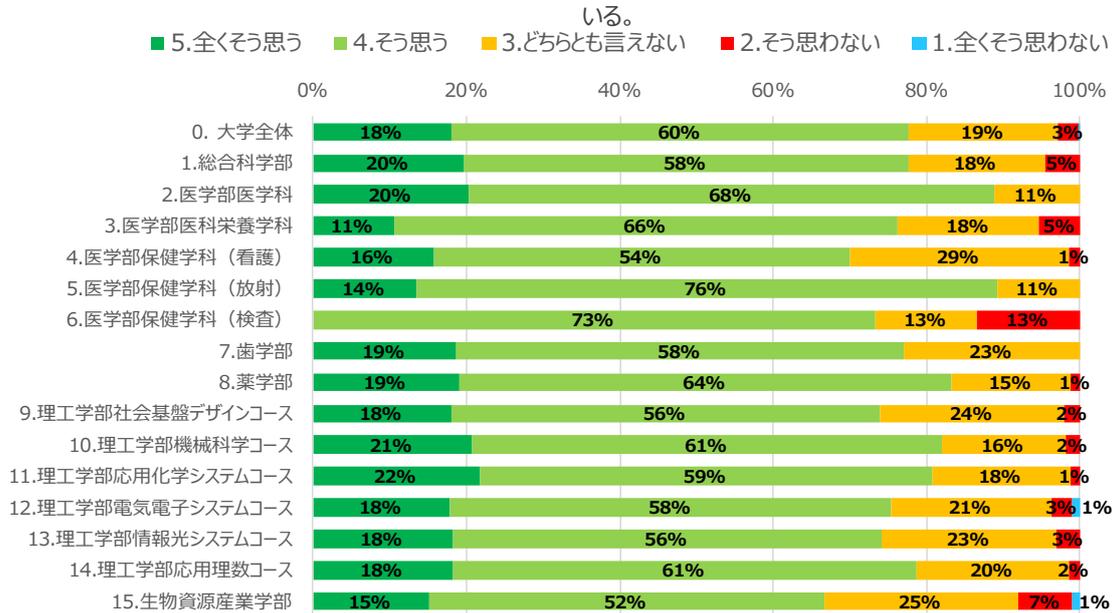
2-3. 1つの課題に対して、他者と協力して取り組むことができる。



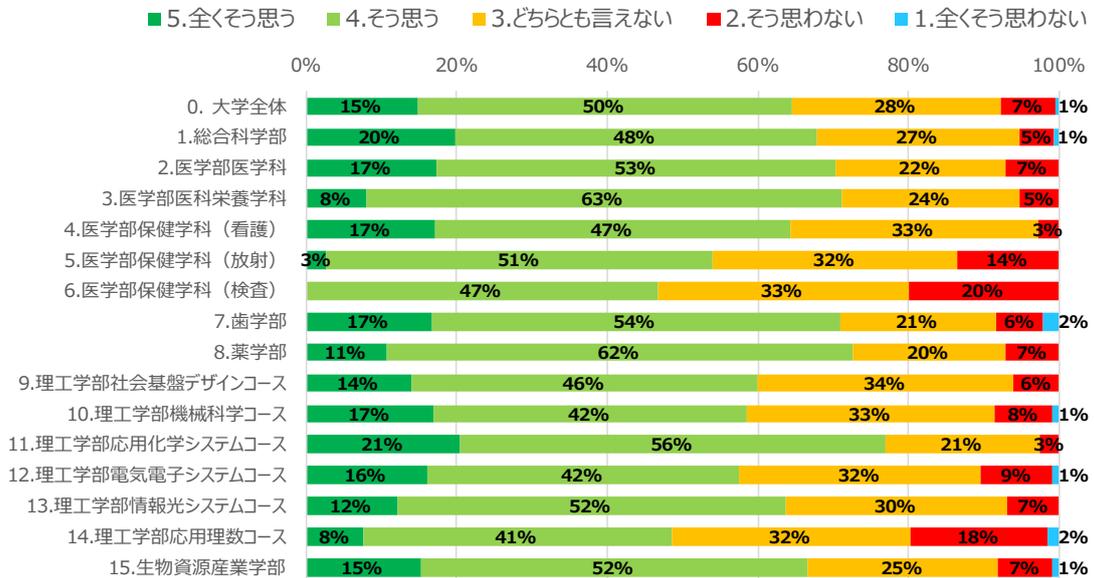
2-4. 日常的に自身の学修内容等を振り返り、改善点を見出し向上を図っている。



2-5. 授業内容の意味を理解しようとするとき、自分がすでに知っていることと結びつけて考えて



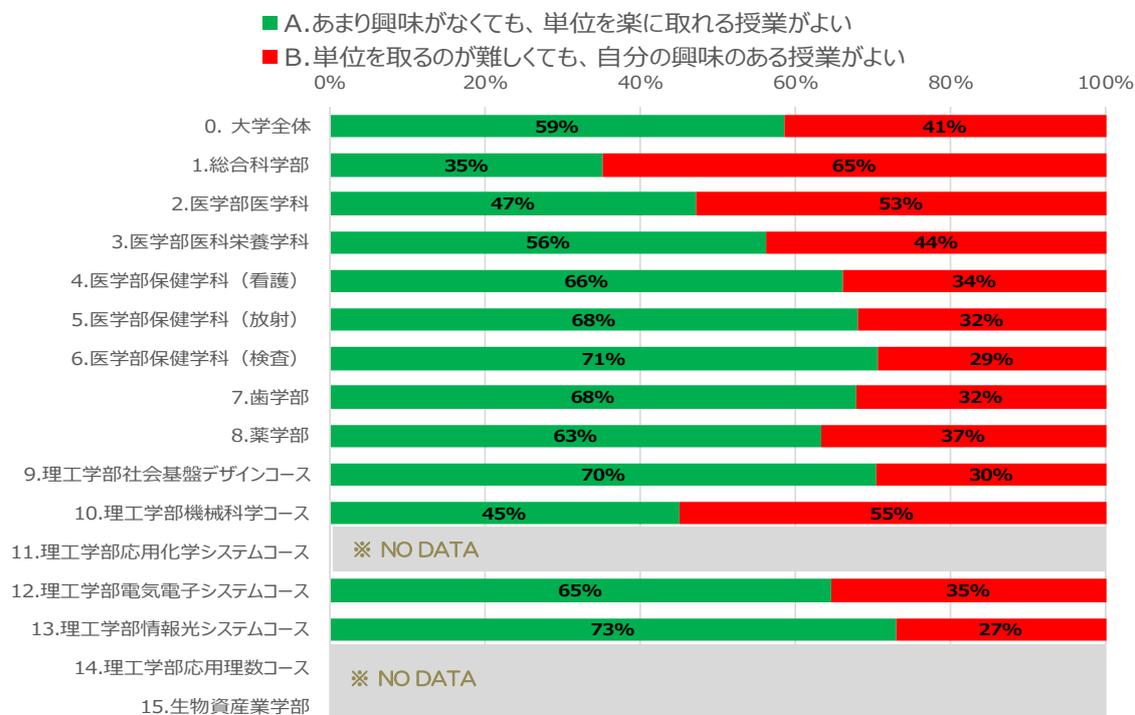
2-6. 授業で学ぶ新しい考えを理解するとき、それらを現実生活と関連付けている。



【受講後】学生アンケート

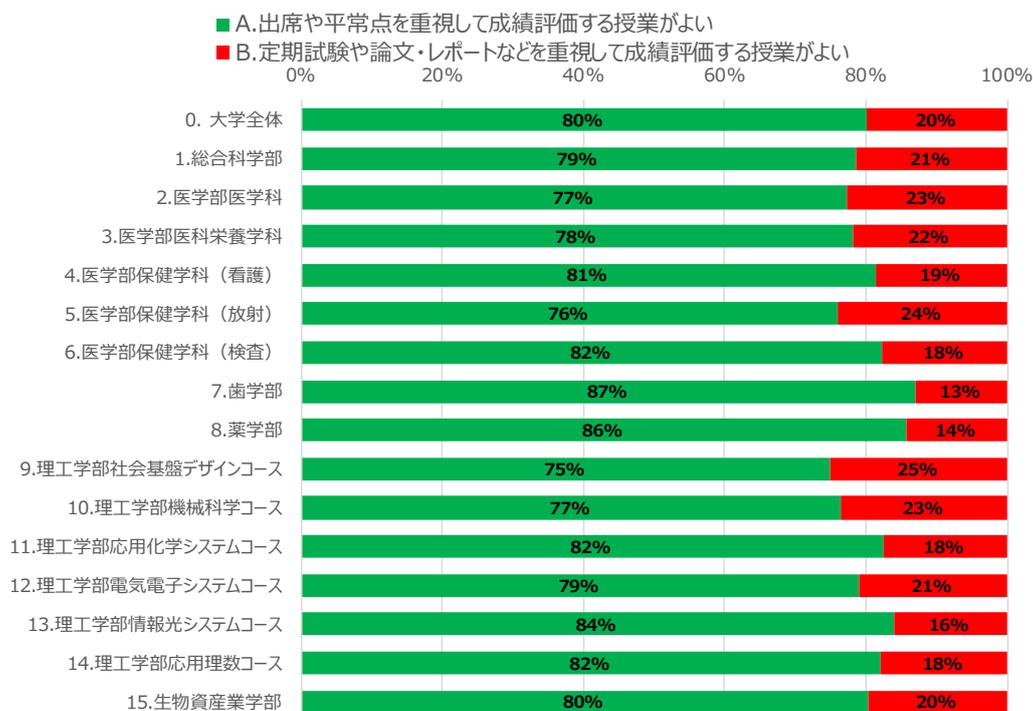
問1. 大学教育について、あなたは次にあげるA、Bのどちらの考え方に近いですか？

1-1.

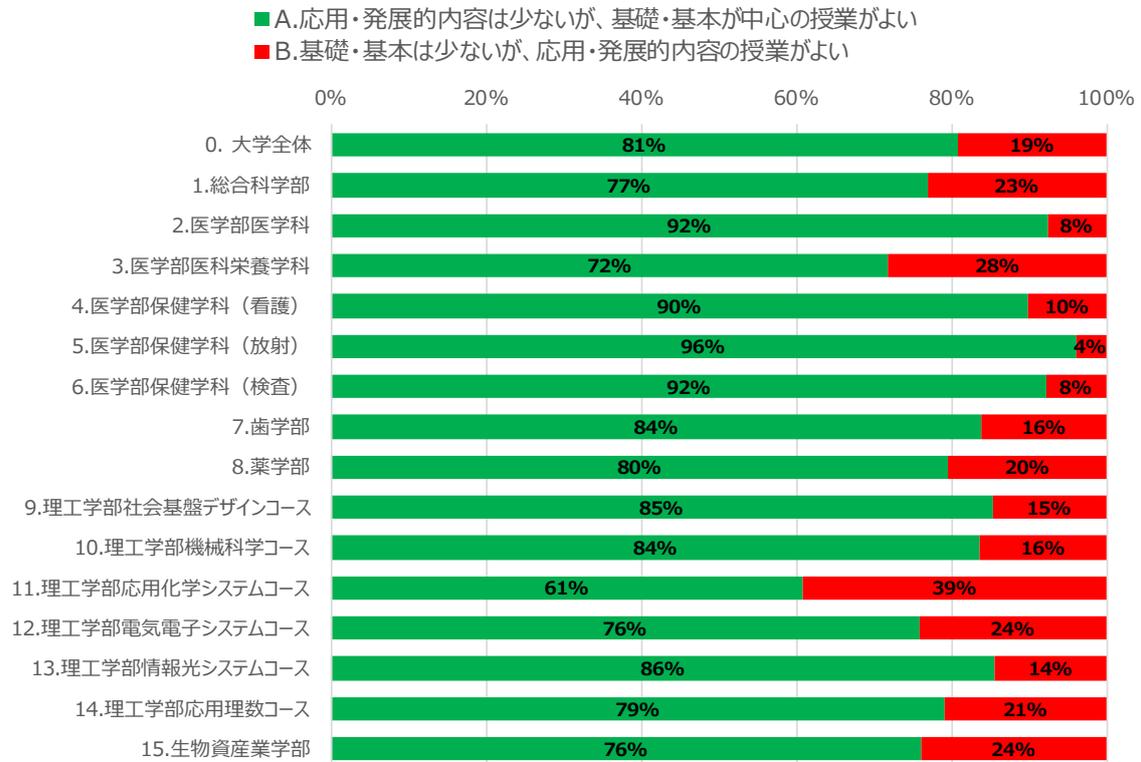


※理工学部応用化学コース、理工学部応用理数コース、生物資源産業学部はシステムエラーによりデータ無し。

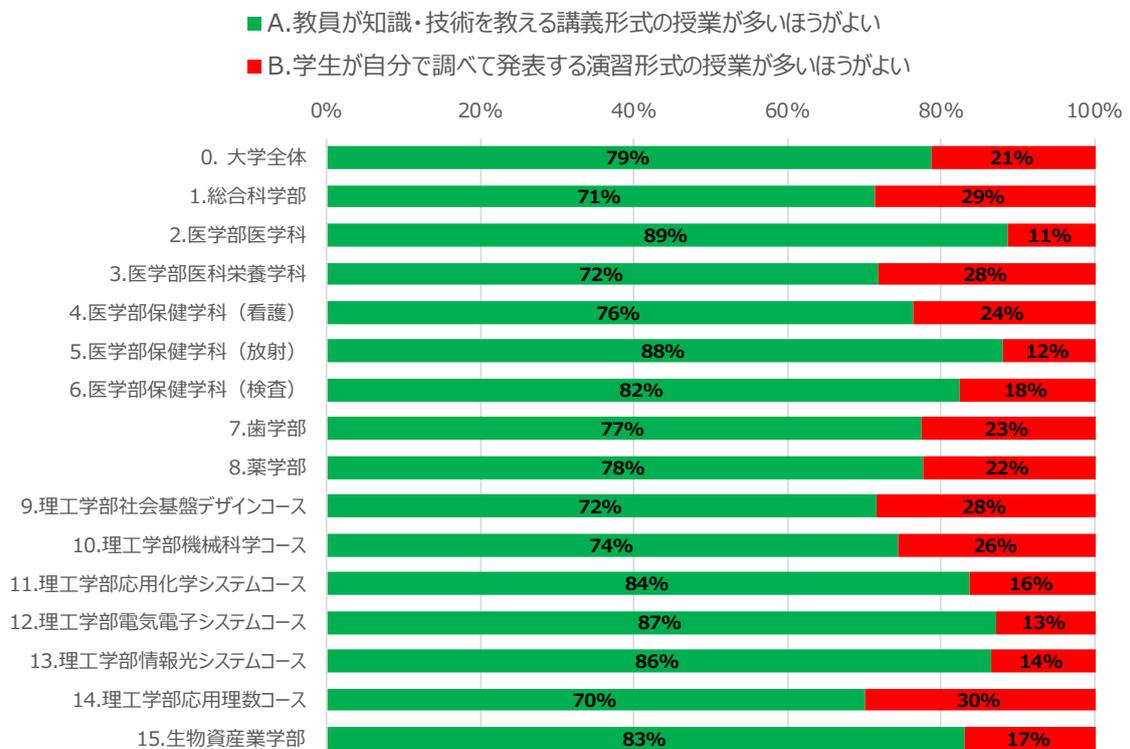
1-2.



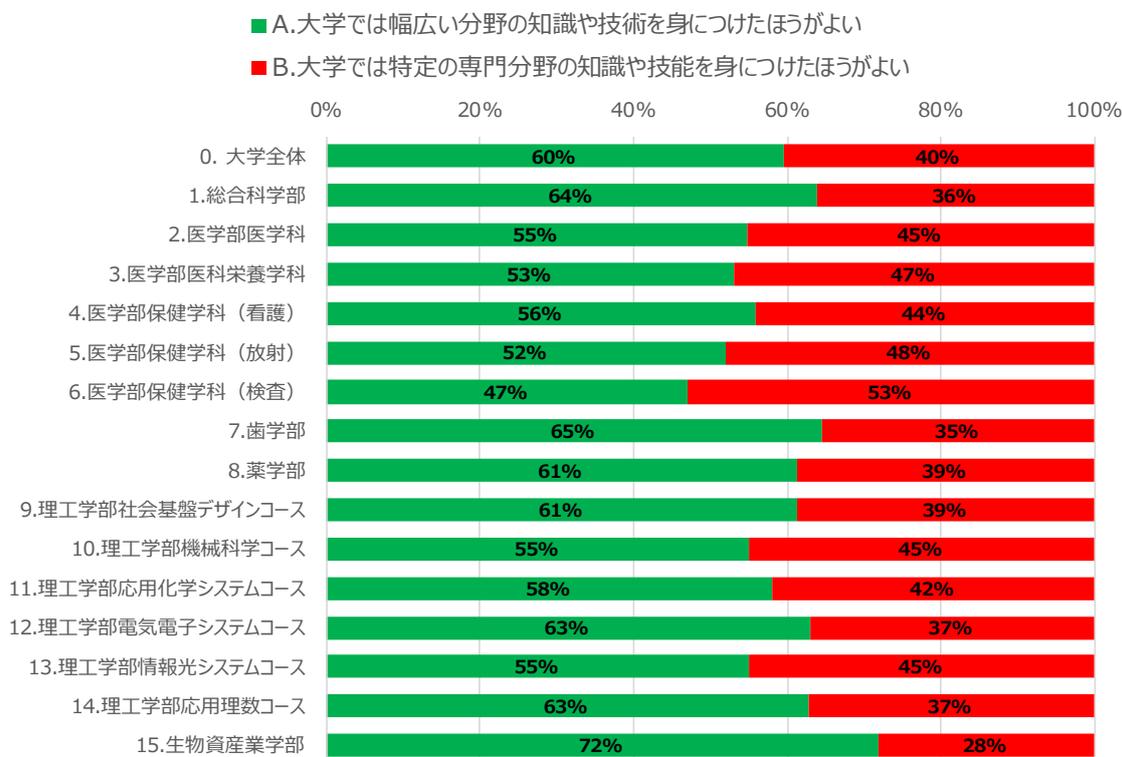
1-3.



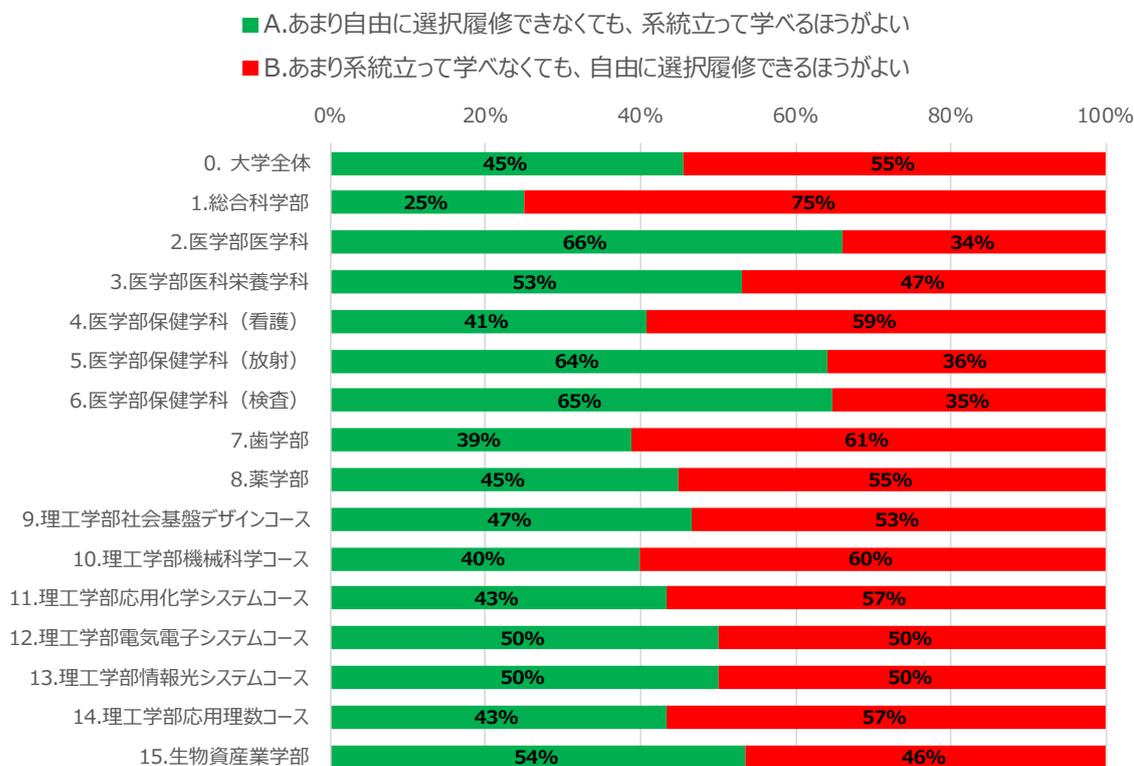
1-4.



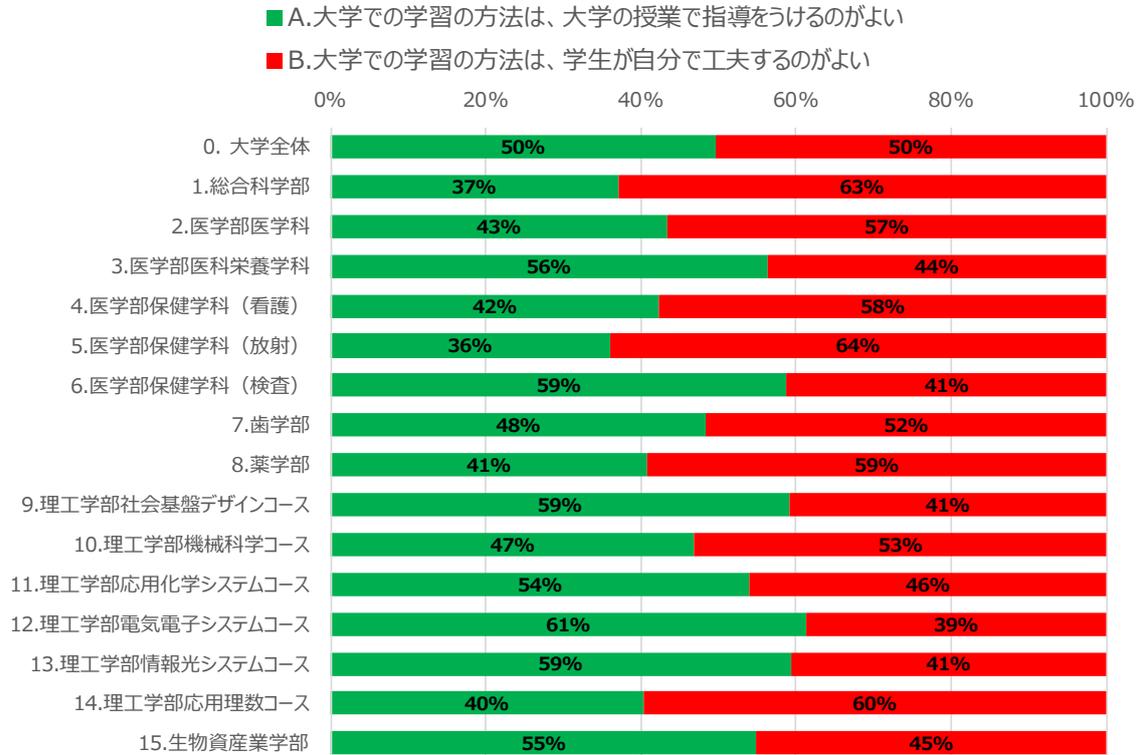
1-5.



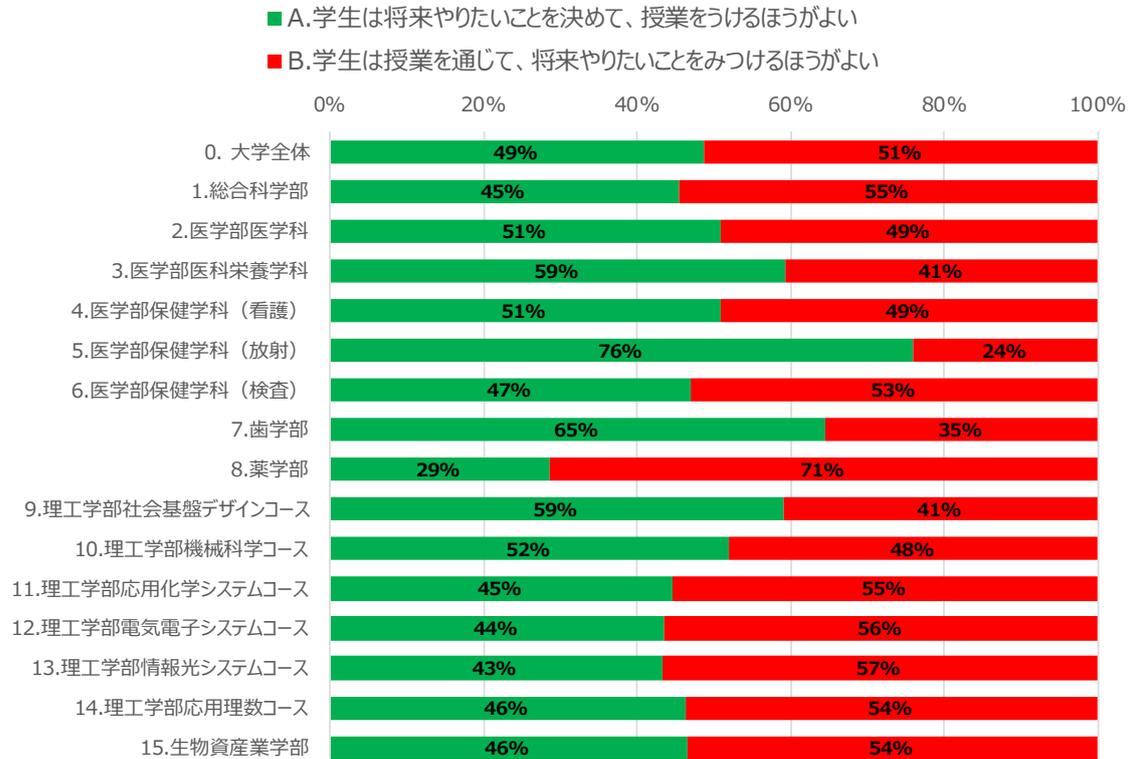
1-6.



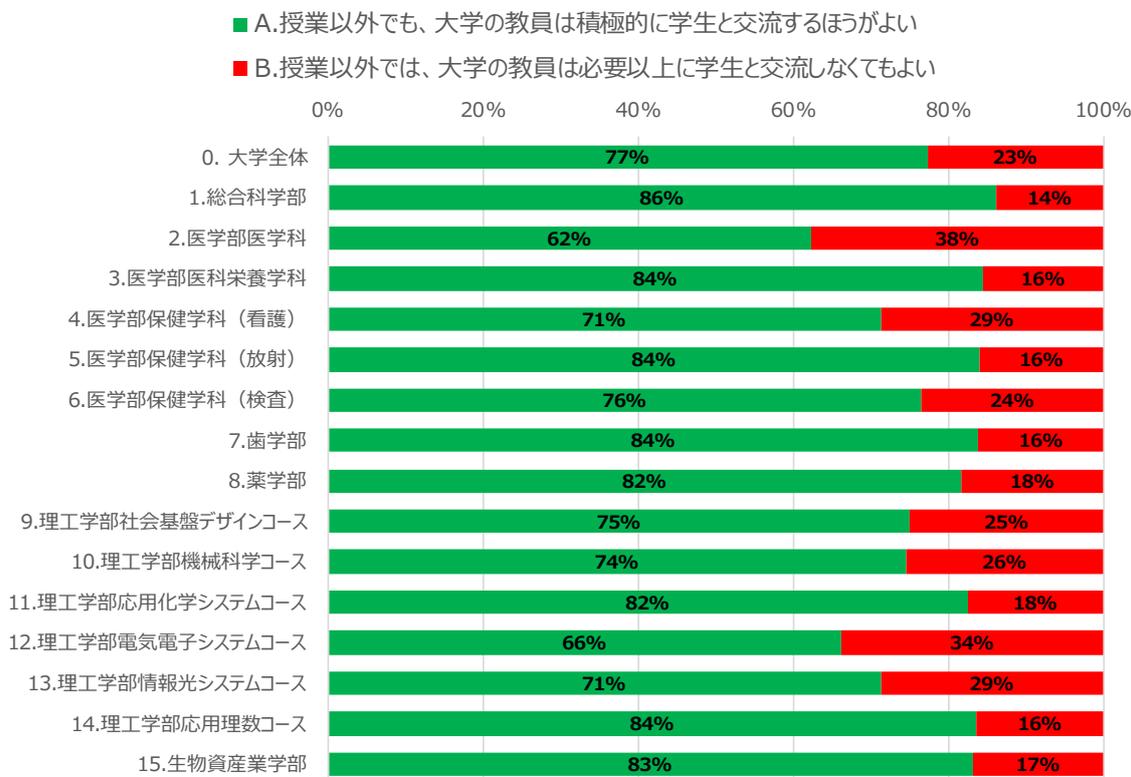
1-7.



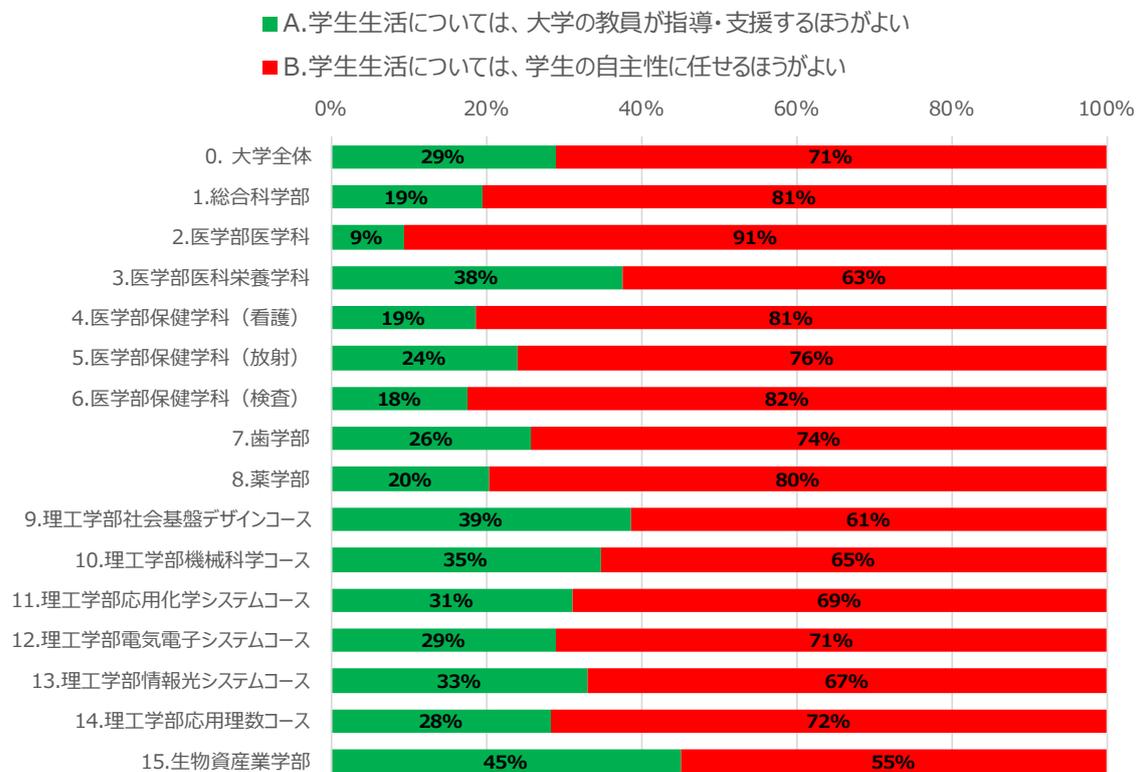
1-8.



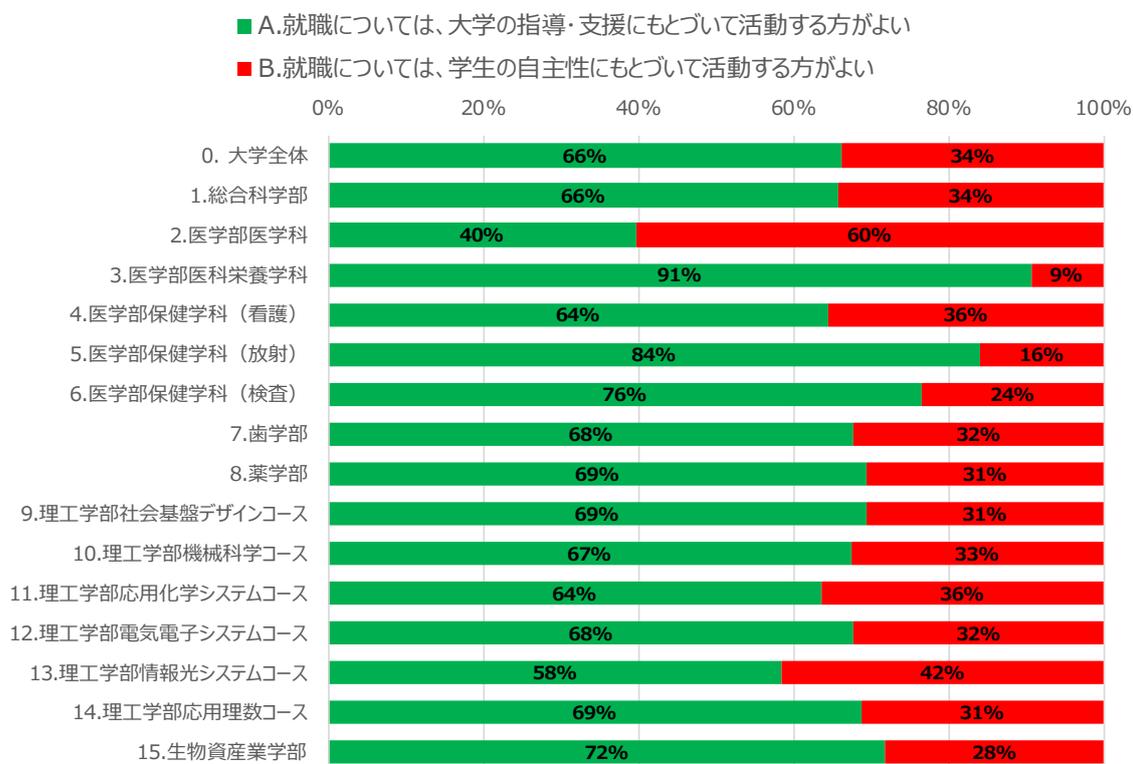
1-9.



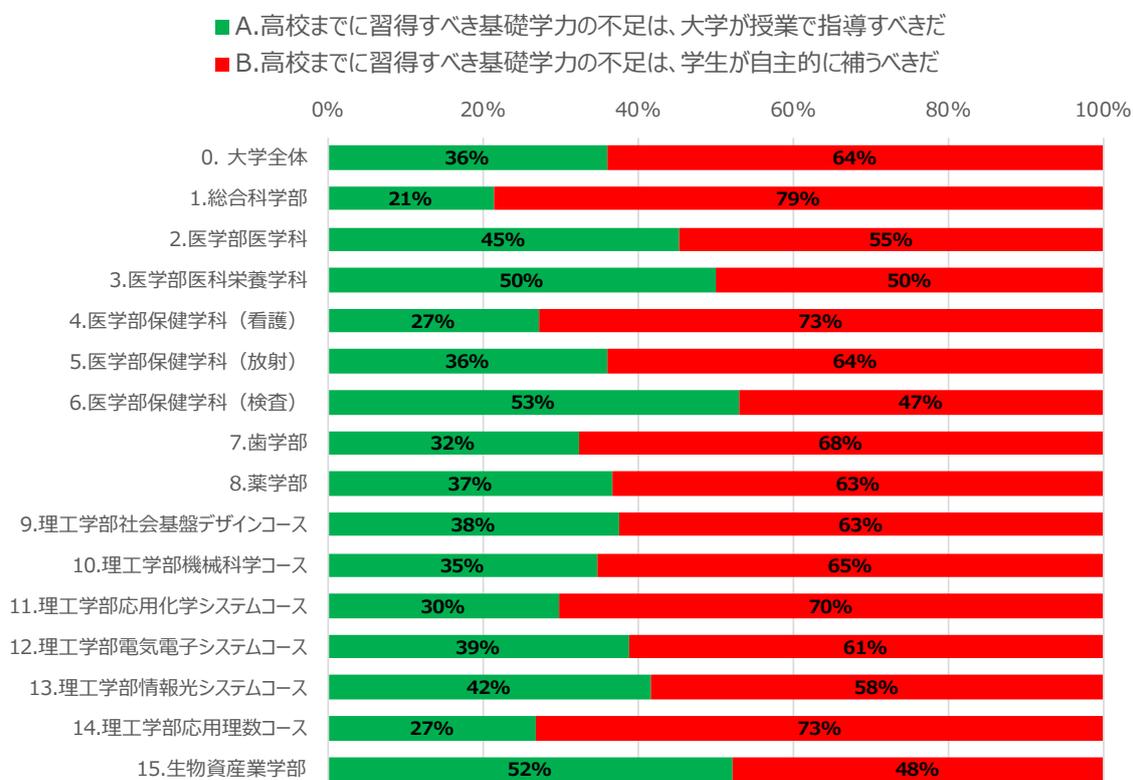
1-10.



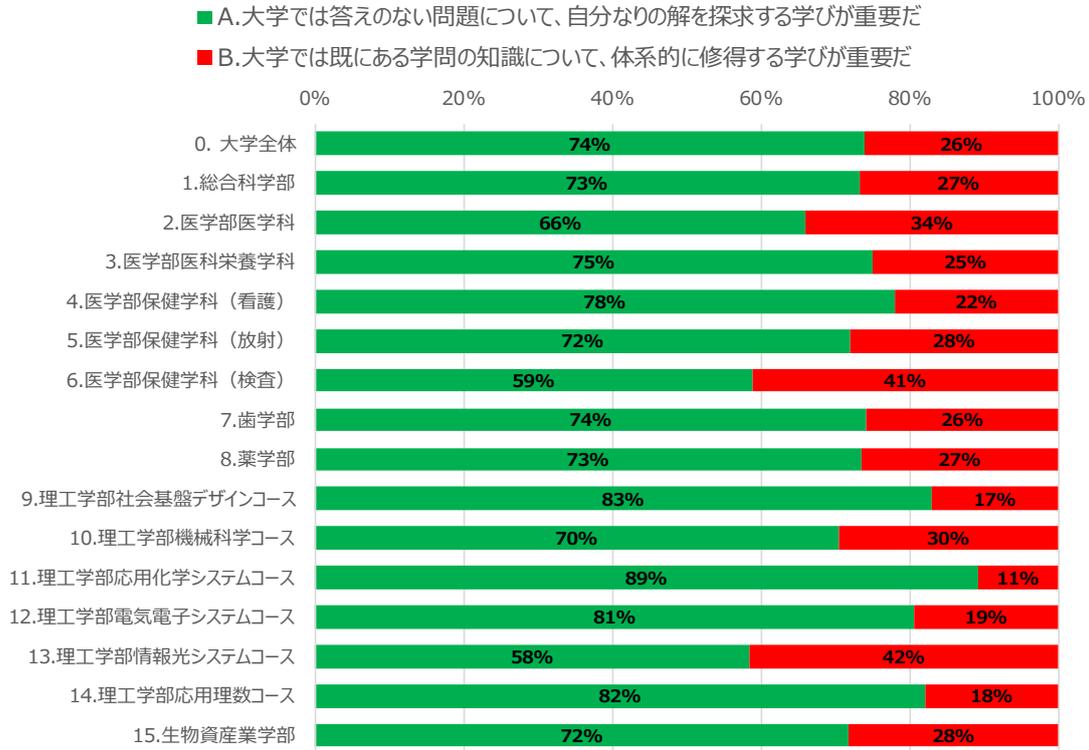
1-11.



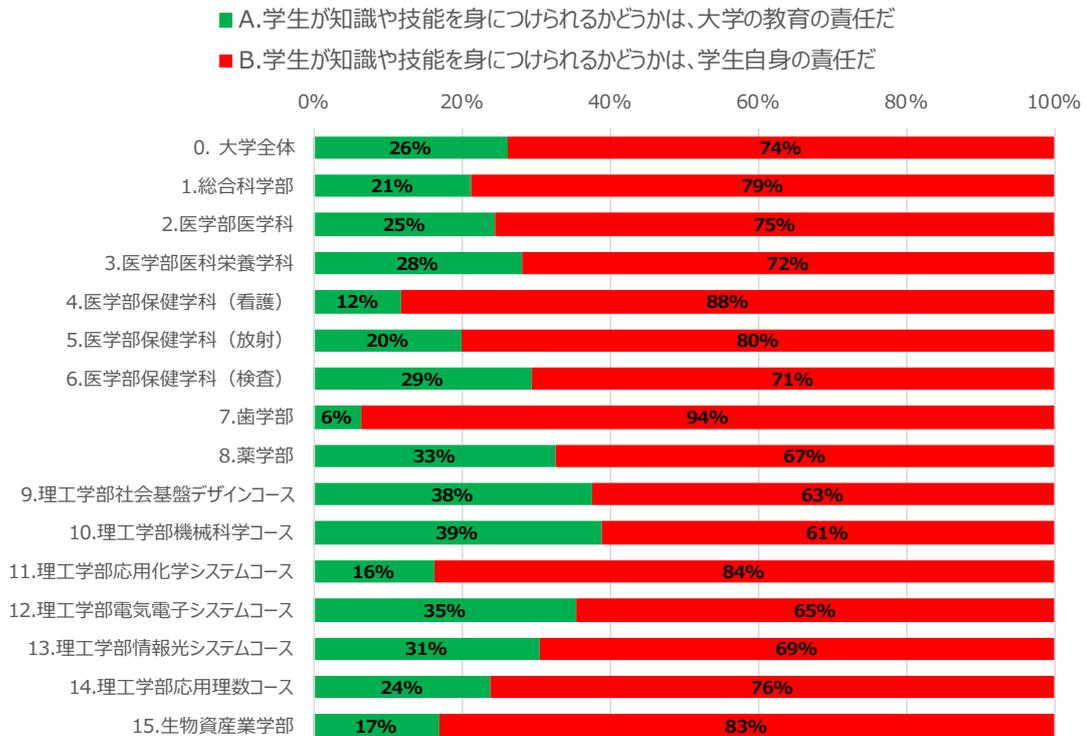
1-12.



1-13.

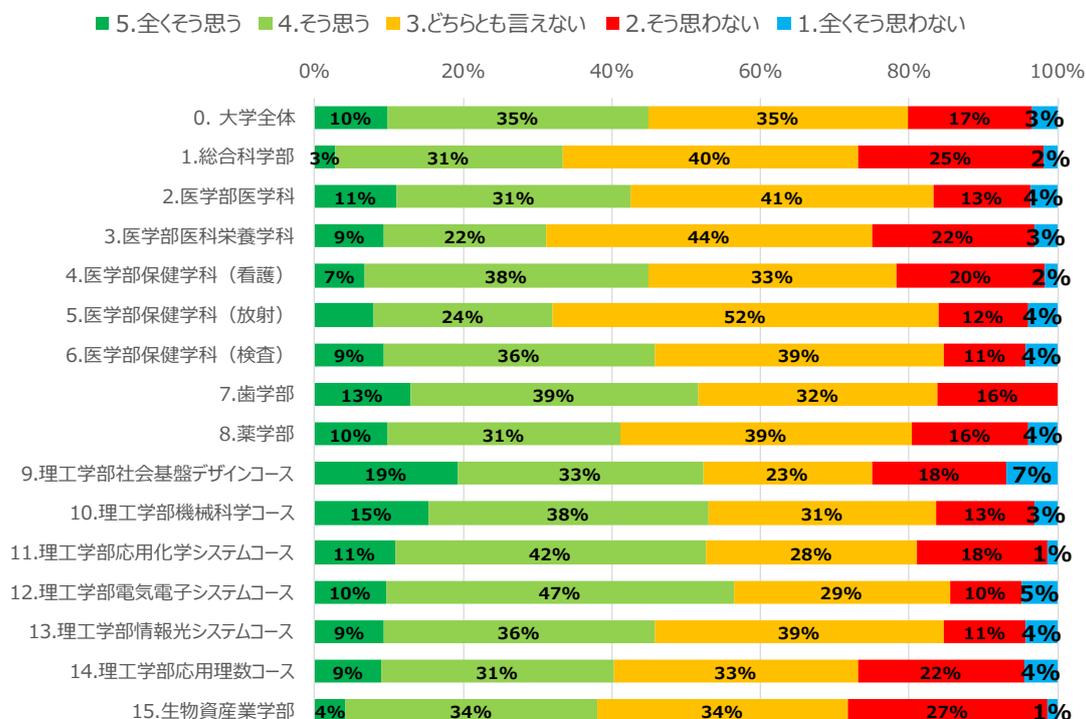


1-14.

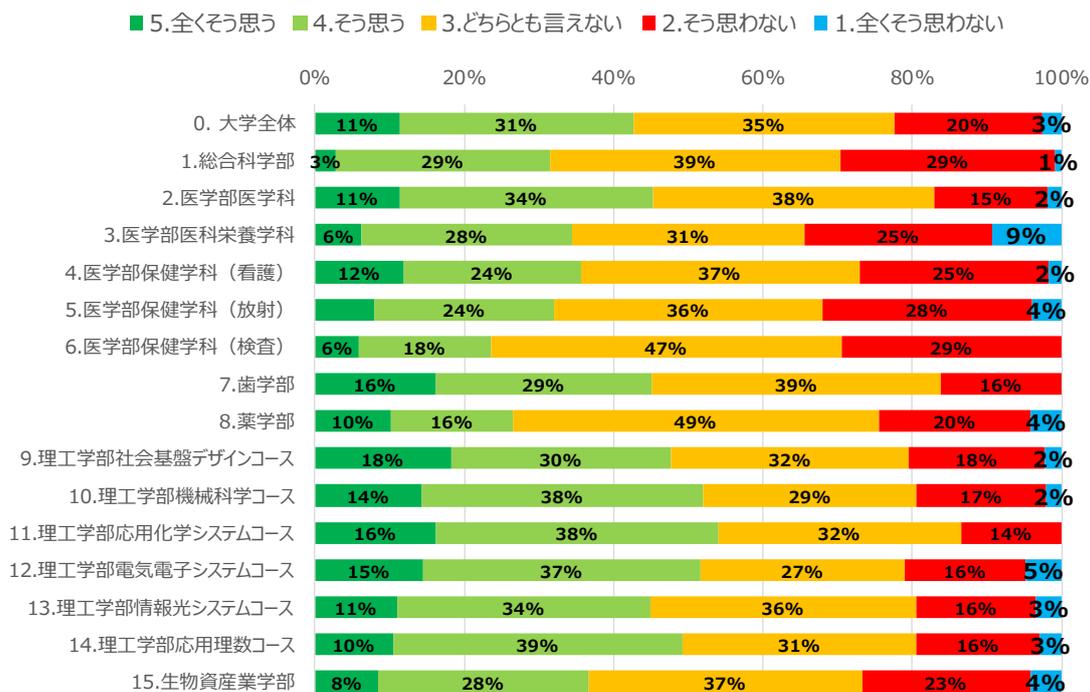


問 2. 自身の学習について、当てはまる項目を「5. 全くそう思う」～「1. 全くそう思わない」のうち当てはまるものを1つ選んで下さい。

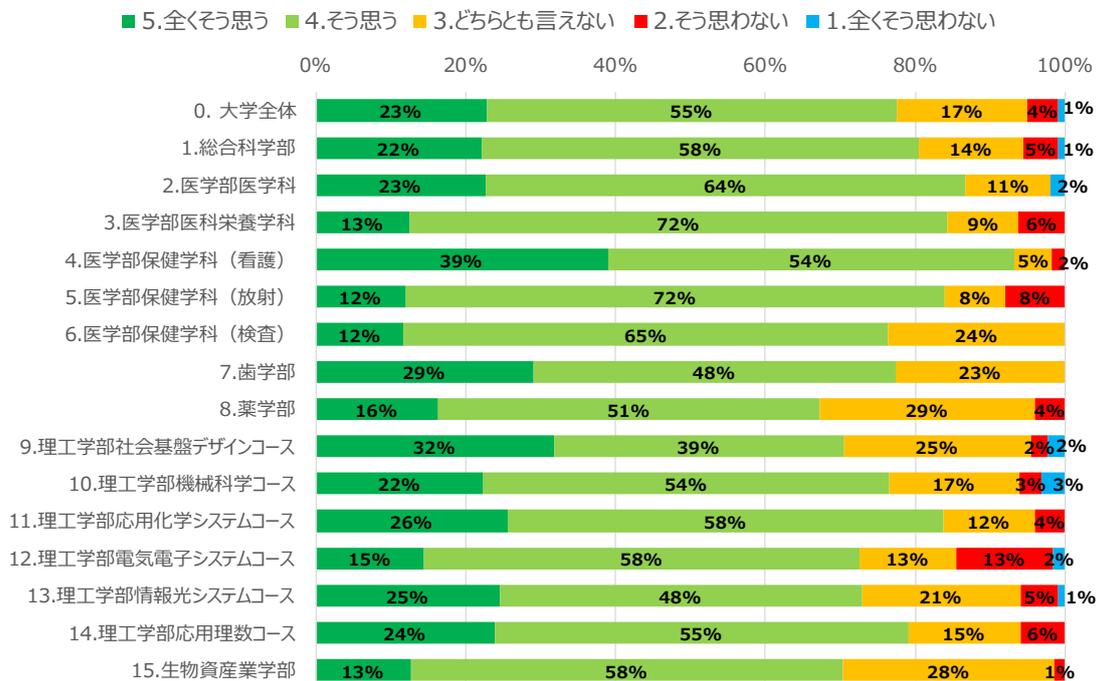
2-1. 自分の考えを文書による表現で、効果的に相手に伝えることができる



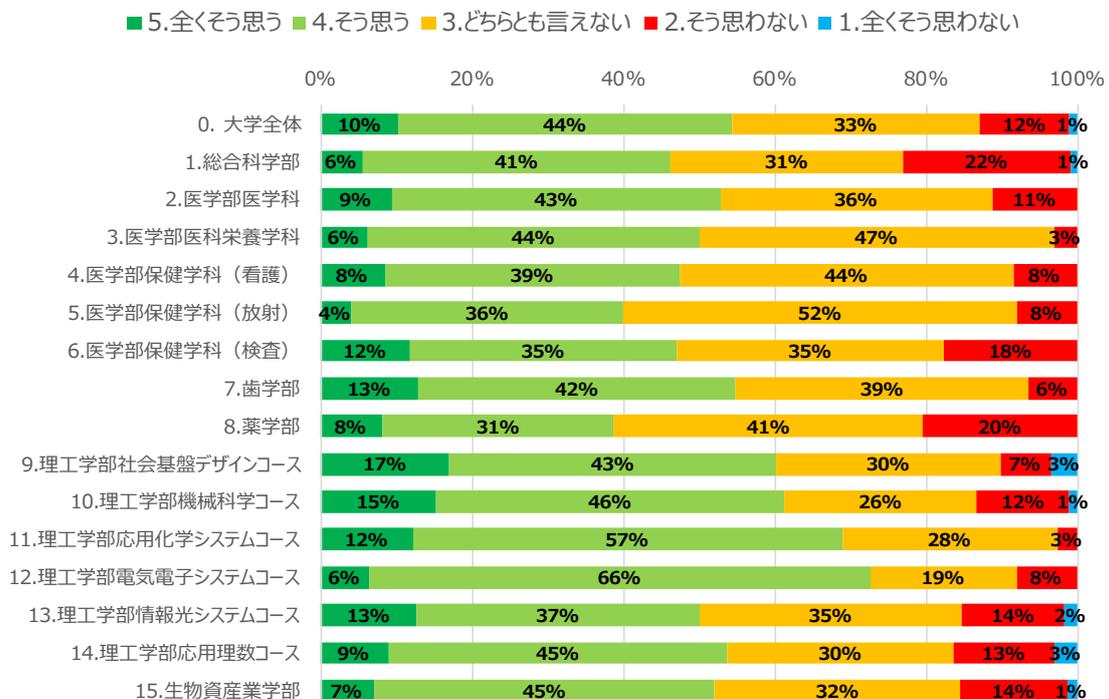
2-2. 自分の考えを口頭による説明や資料を用いて、効果的に相手に伝えることができる



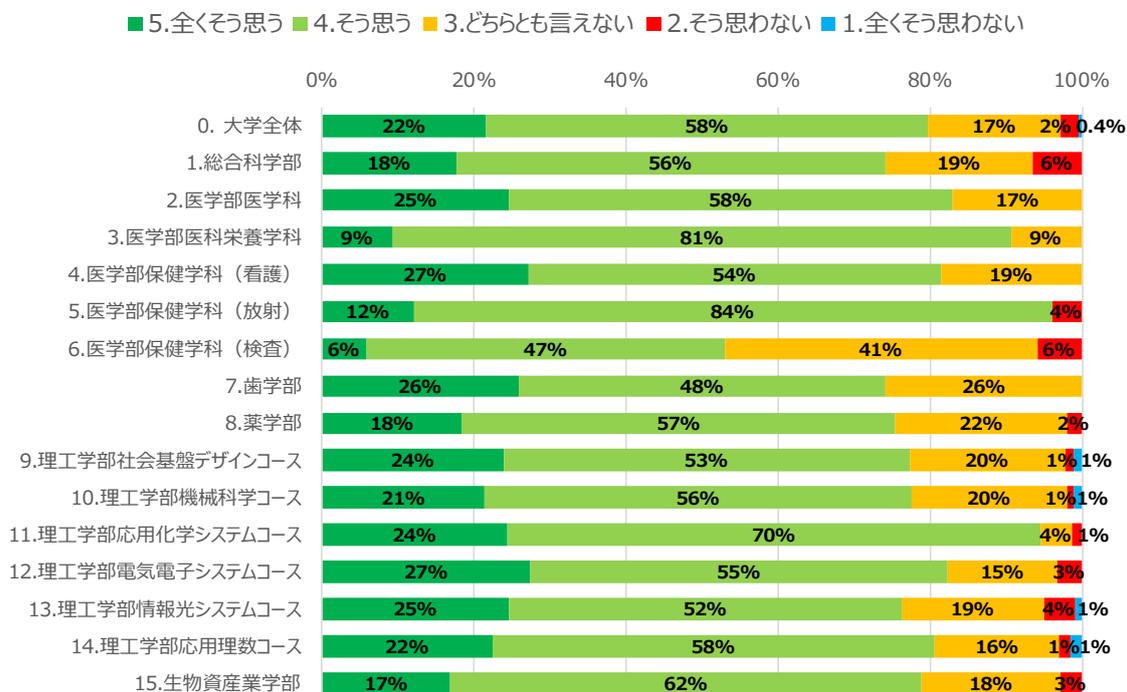
2-3. 1つの課題に対して、他者と協力して取り組むことができる



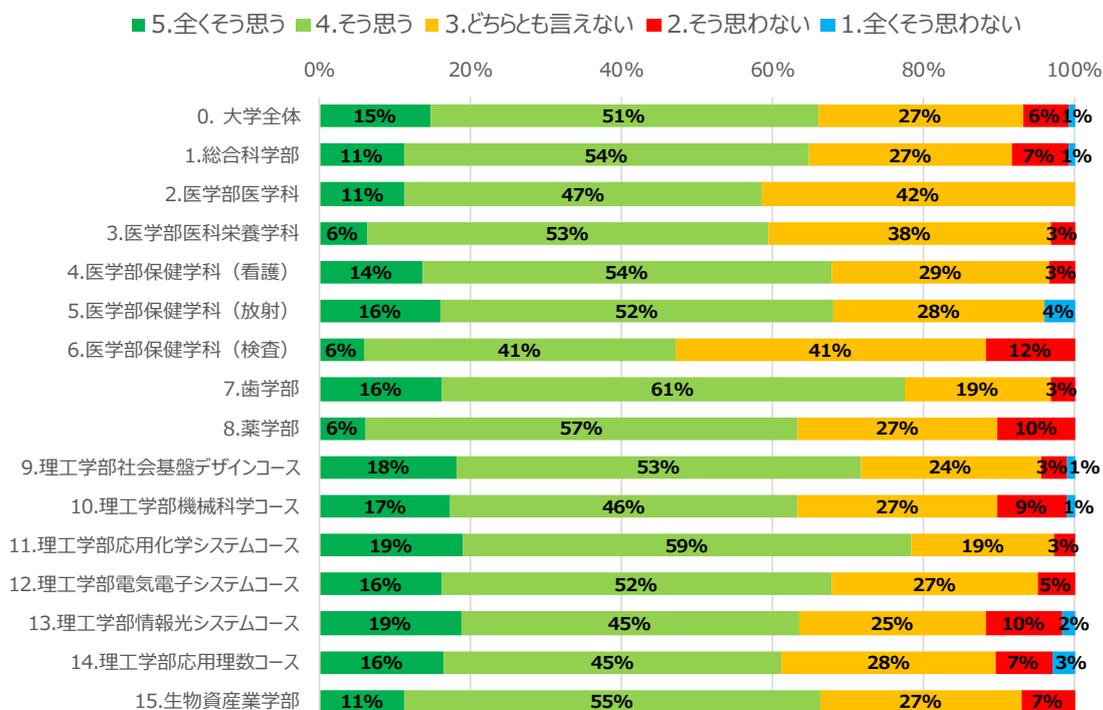
2-4. 日常的に自身の学修内容等を振り返り、改善点を見出し向上を図っている



2-5. 授業内容の意味を理解しようするとき、自分がすでに知っていることと結びつけて考えている

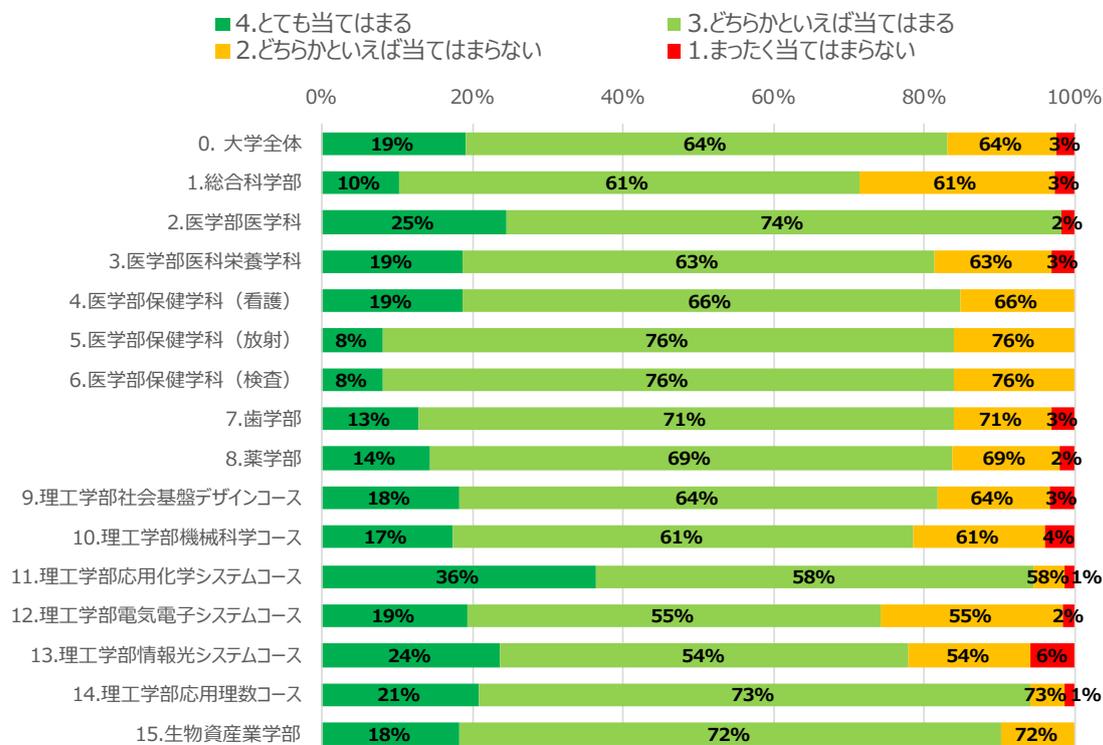


2-6. 授業で学ぶ新しい考えを理解するとき、それらを現実生活と関連付けている

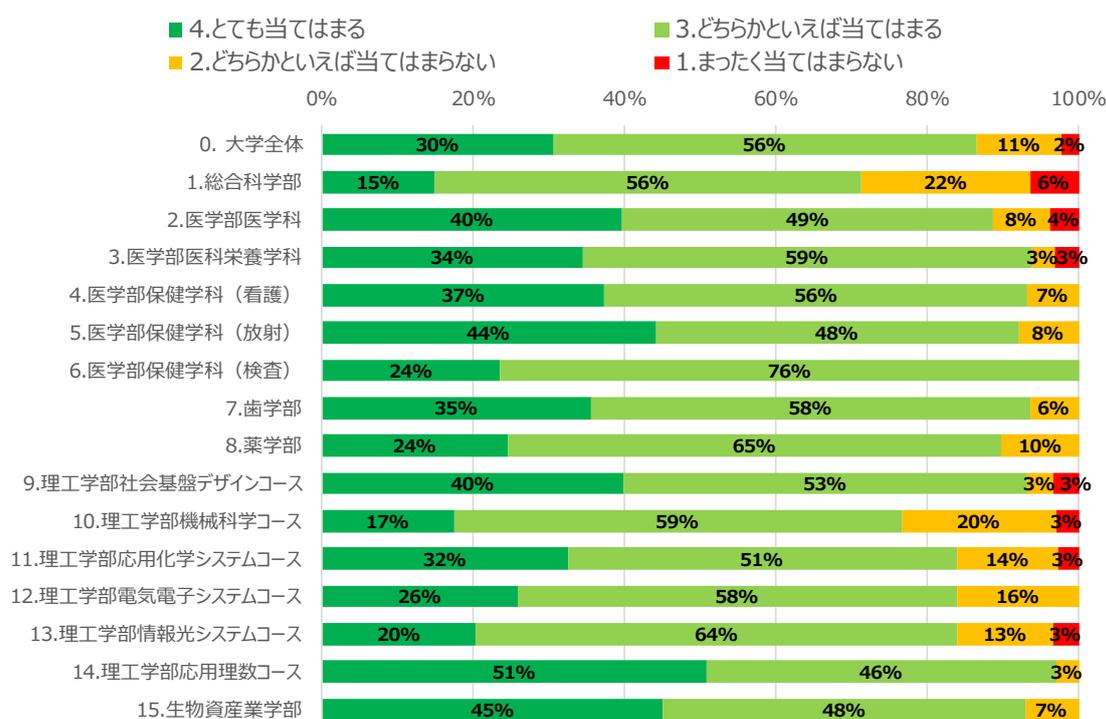


問 3. SIH 道場のプログラムについて、「4. とても当てはまる」～「1. まったく当てはまらない」のうち当てはまるものを1つ選んでください。

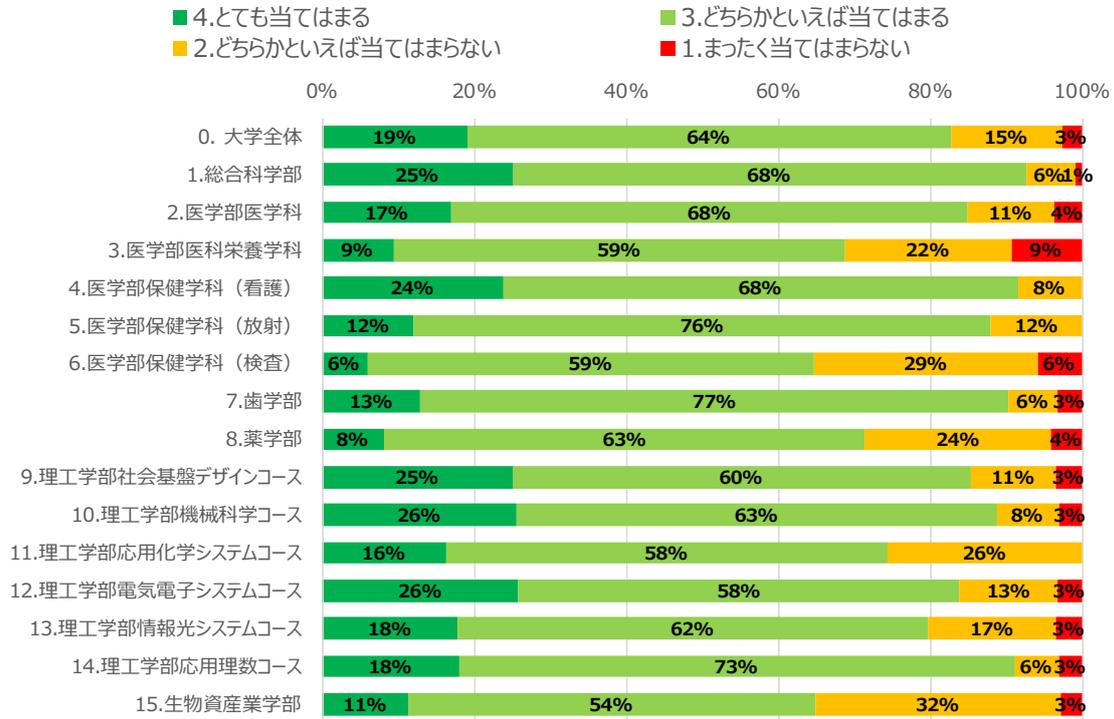
① SIH道場の目標を理解して学修を行った



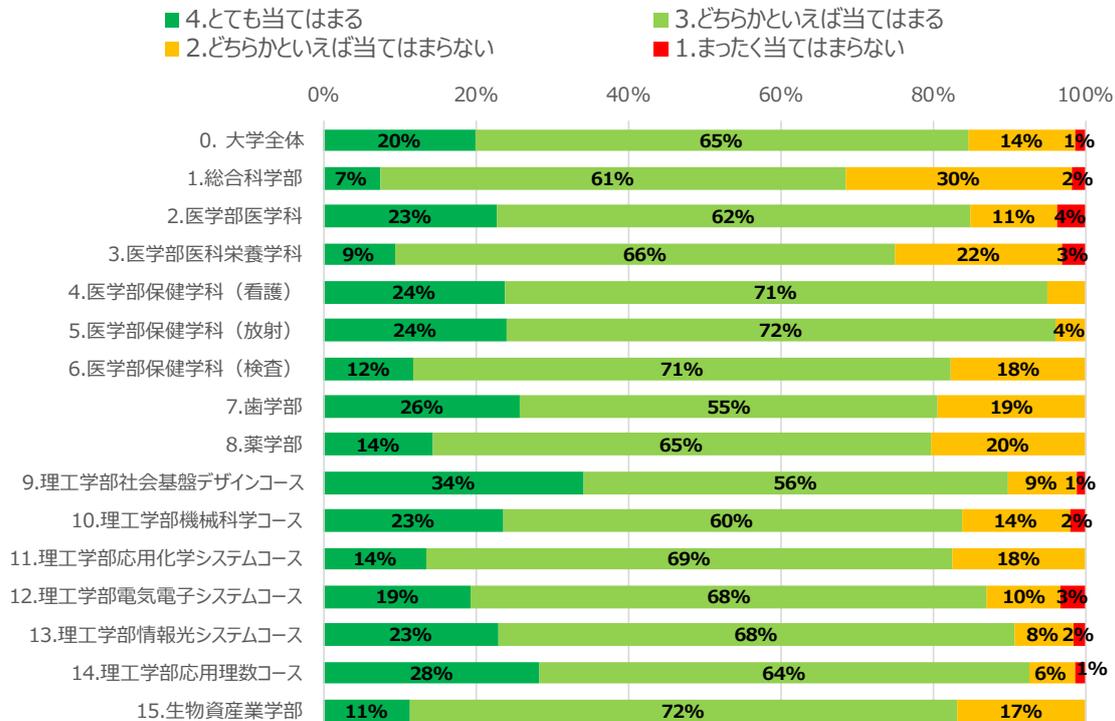
② 体験学習で専門分野(学科での学修・研究)に対する興味関心が高まった



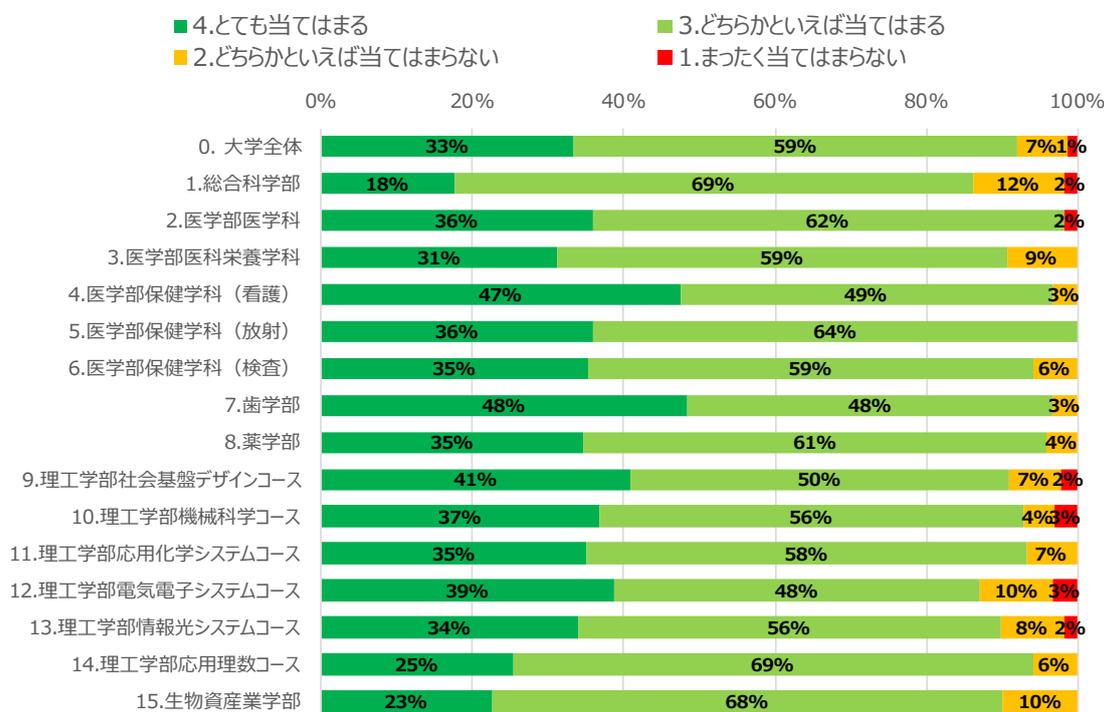
③レポート等の学術的文章を書く際に必要な準備や基本的なルールを理解した



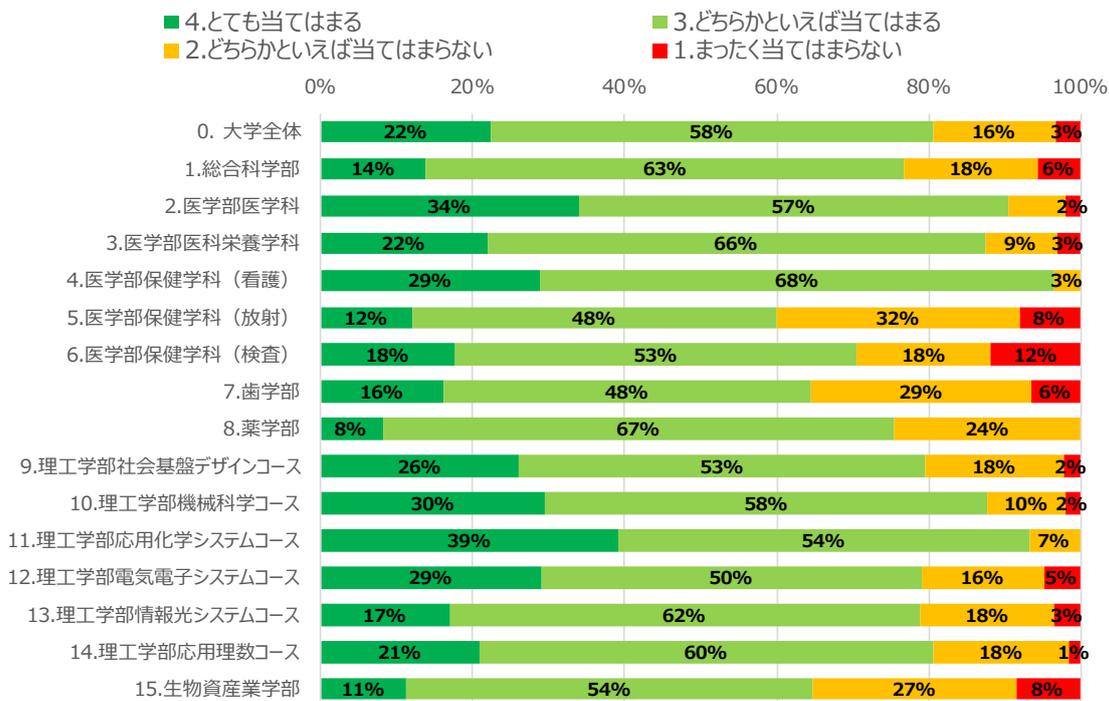
④プレゼンテーションを効果的に行うために必要な準備・姿勢・資料を理解した



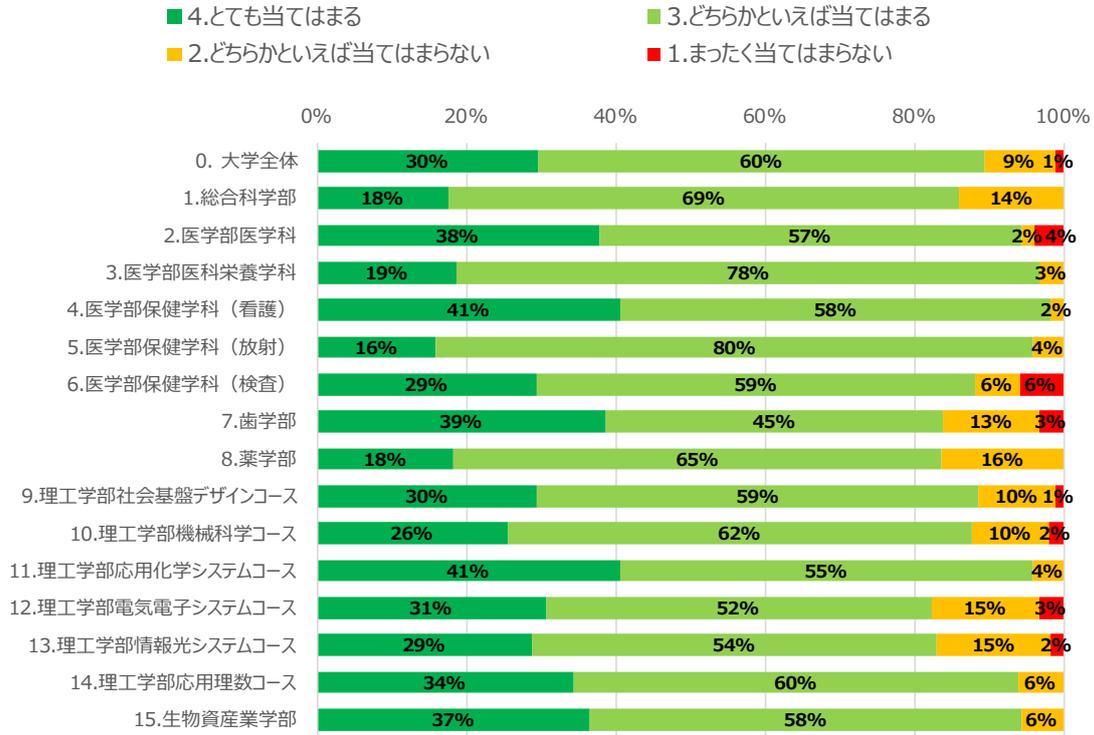
⑤1つの課題に対して、他者と協力して取り組む際の留意点を理解した



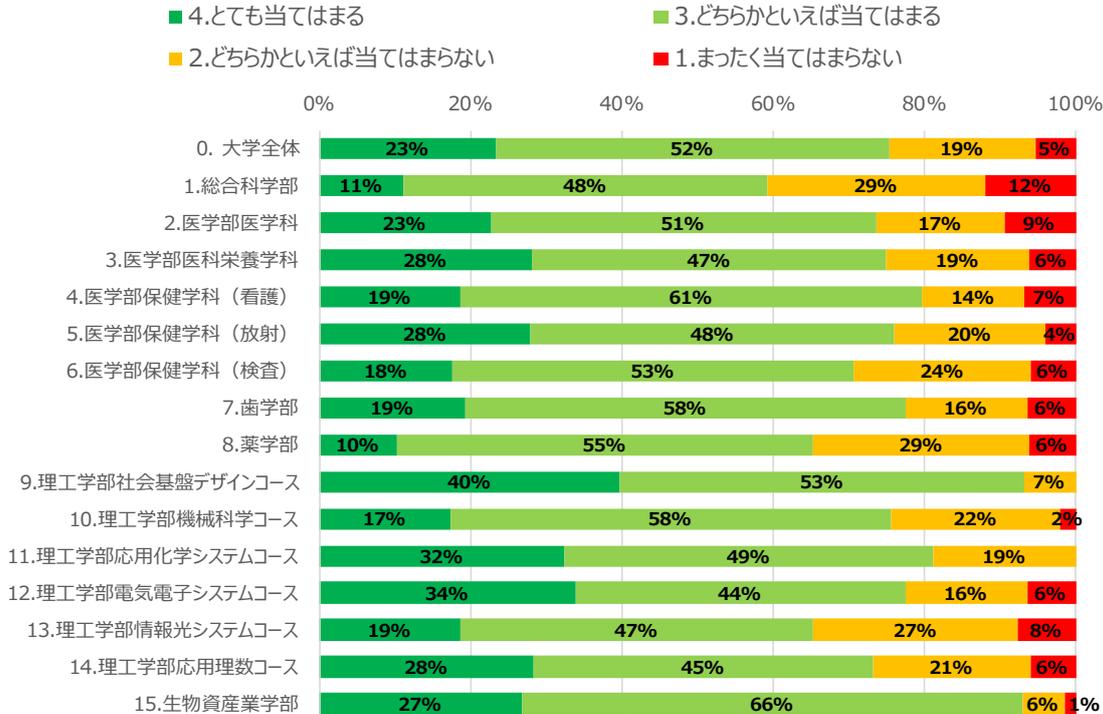
⑥課題等の評価の基準がわかった(ルーブリック・チェックリストなどが示されていた)



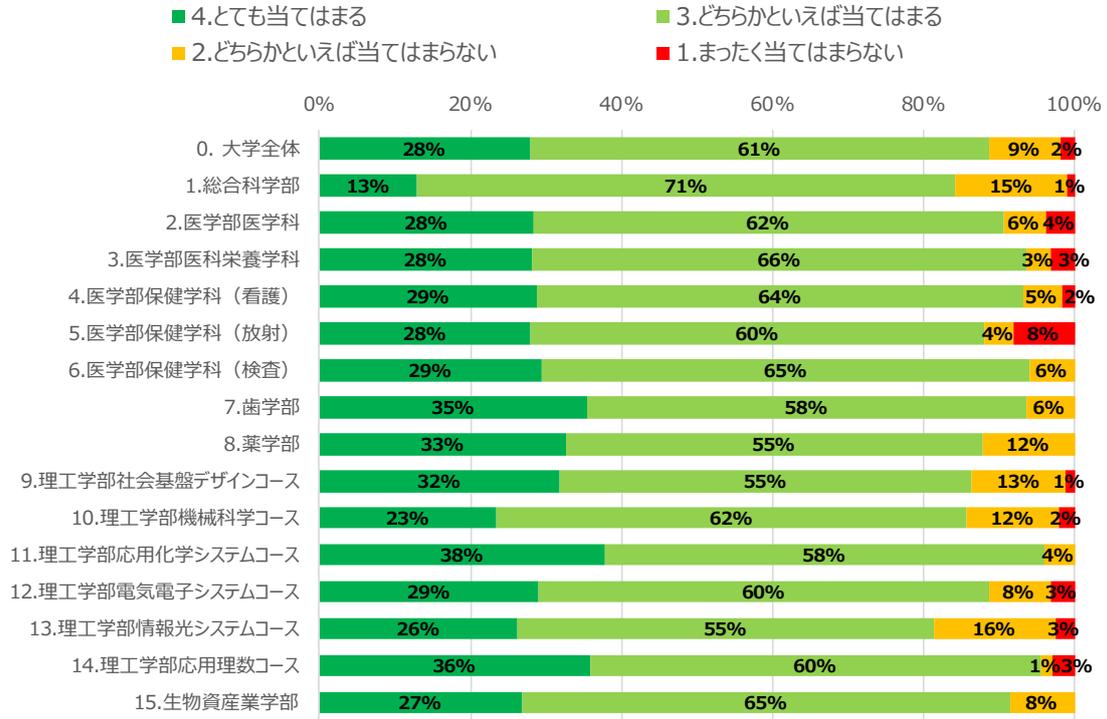
⑦学修(体験)を振り返ることの重要性を理解した



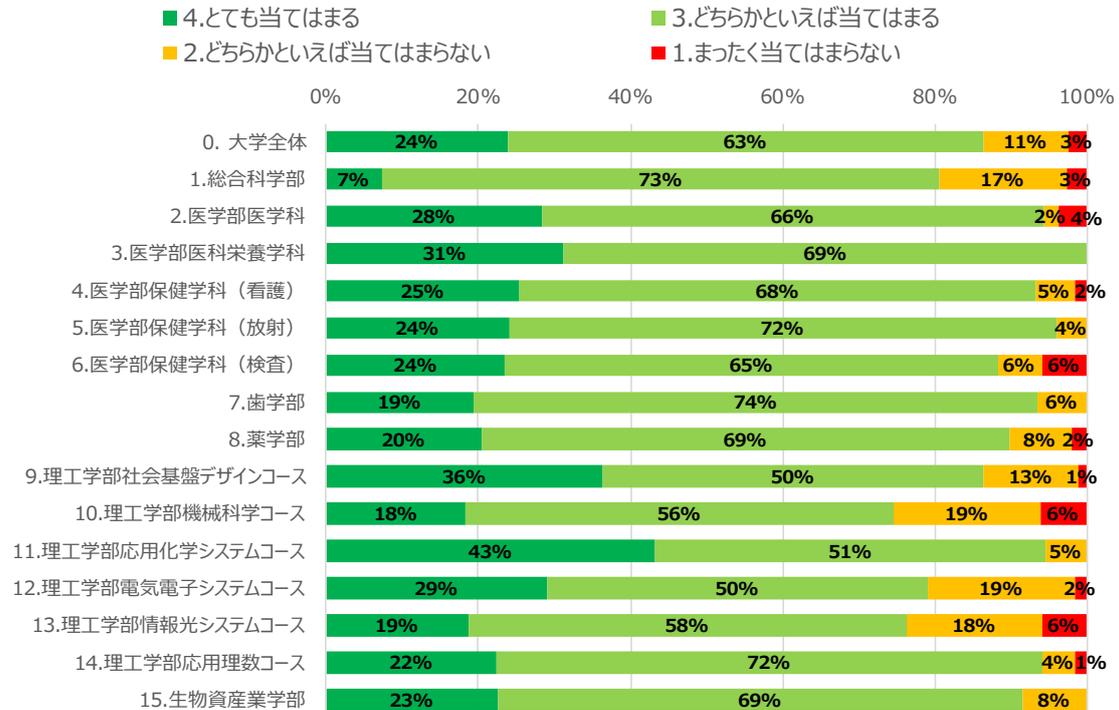
⑧授業外(事前または、事後)において学修を行った



⑨ 自ら考え抜く能動的学修(アクティブ・ラーニング)の重要性を理解した

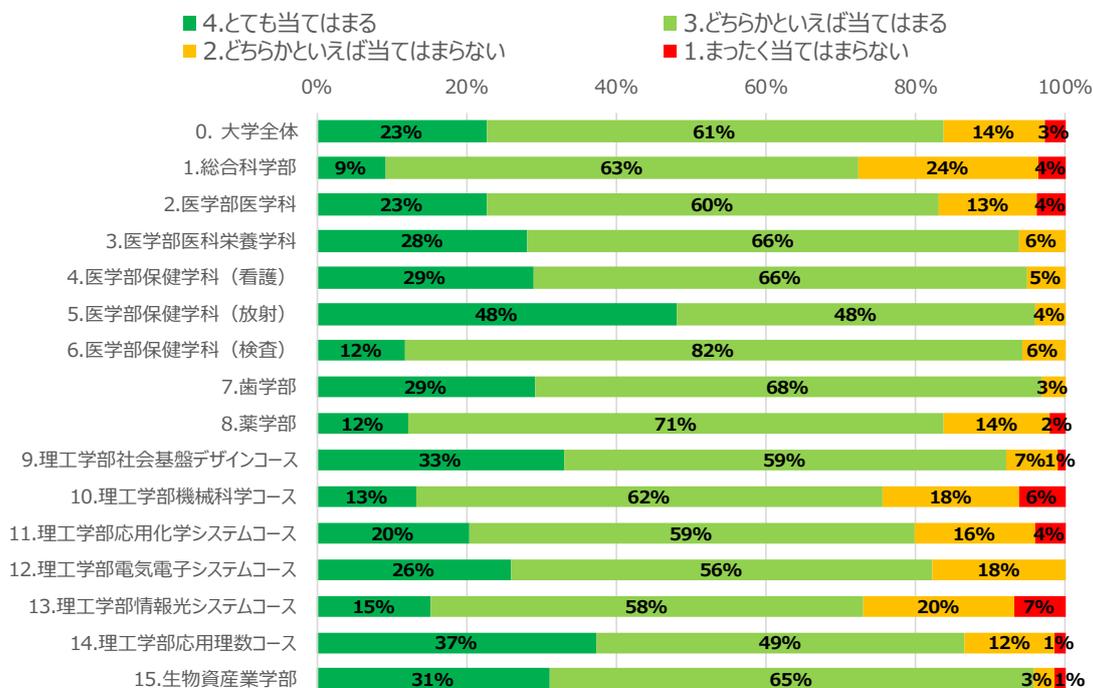


⑩ SIH道場のプログラムは全体的に満足できるものであった

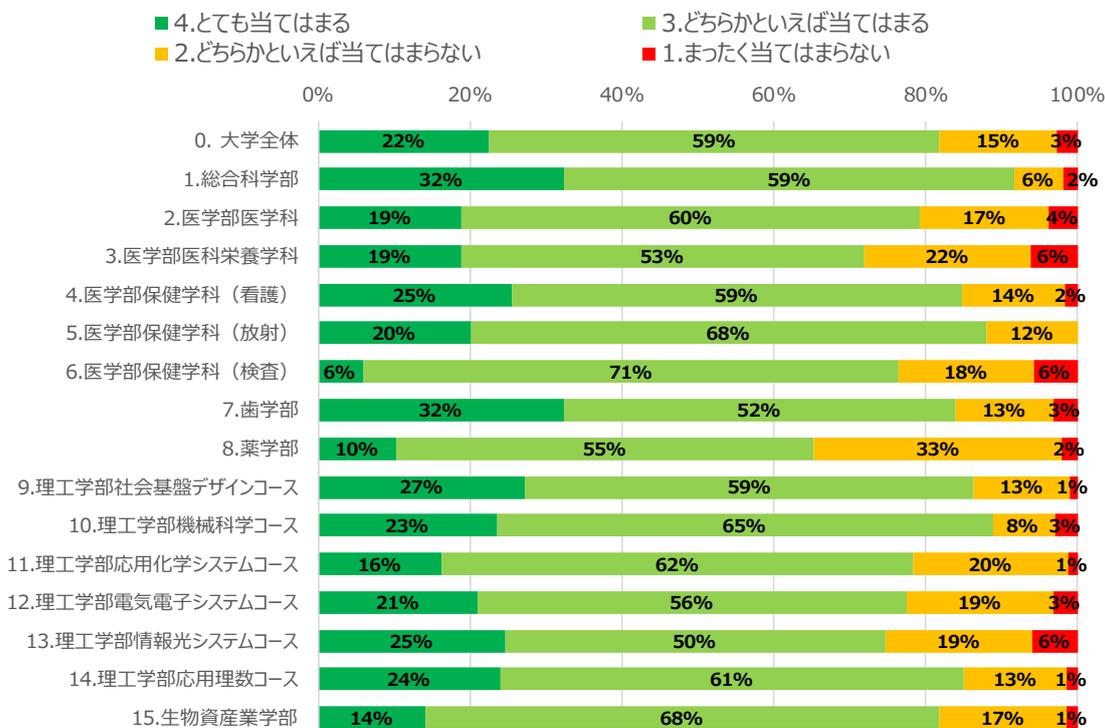


問 4. SIH 道場を受講したことによって、SIH 道場以外の授業への影響・あなたの取り組み方について、「4. とても当てはまる」～「1. まったく当てはまらない」のうち当てはまるものを1つ選んで下さい。

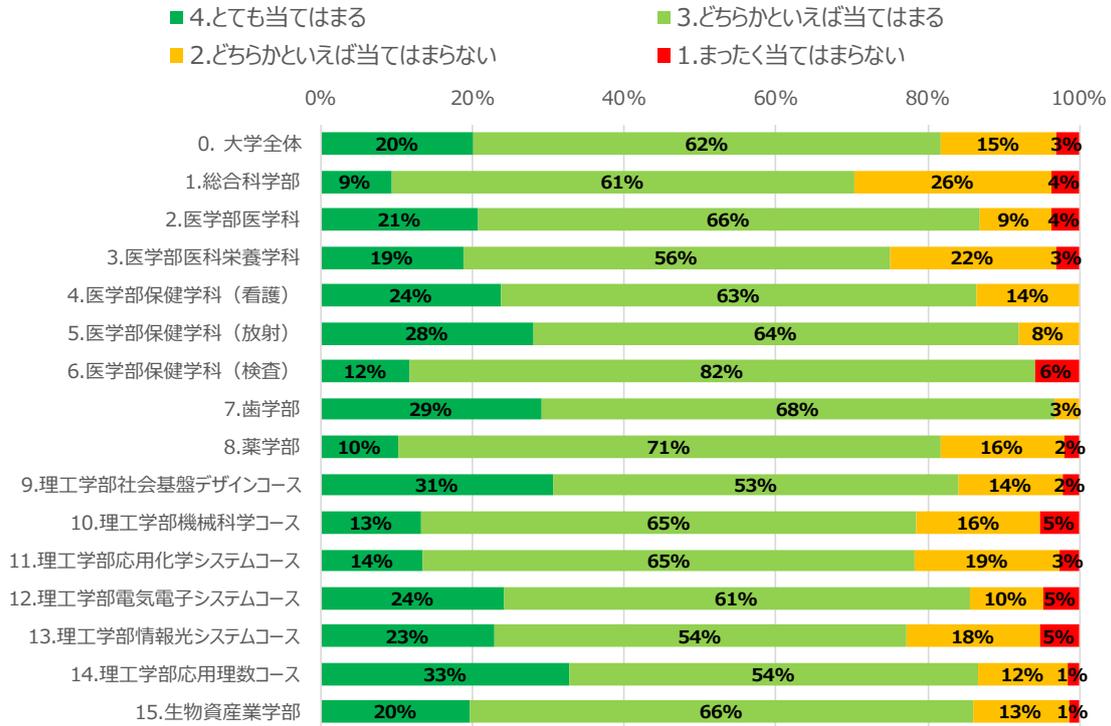
① SIH道場の「体験学習」は専門科目の学修において役に立っている



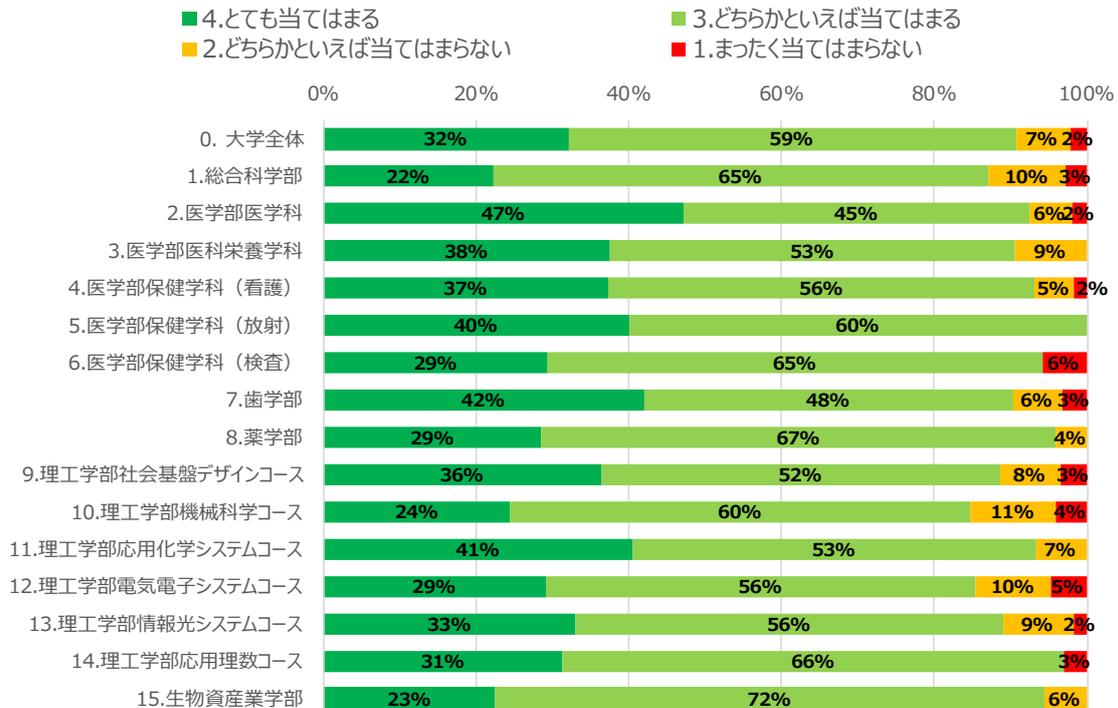
② SIH道場で学修した「文章・レポートの書き方」は役に立っている



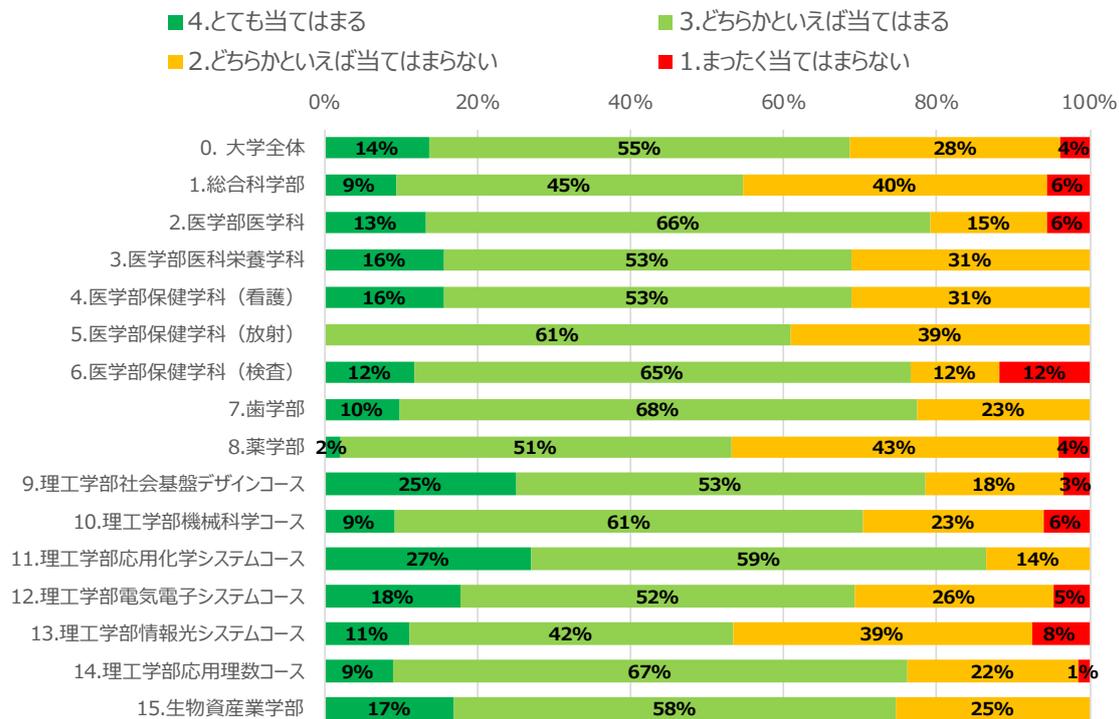
③SIH道場で学修した「プレゼンテーション」は役に立っている



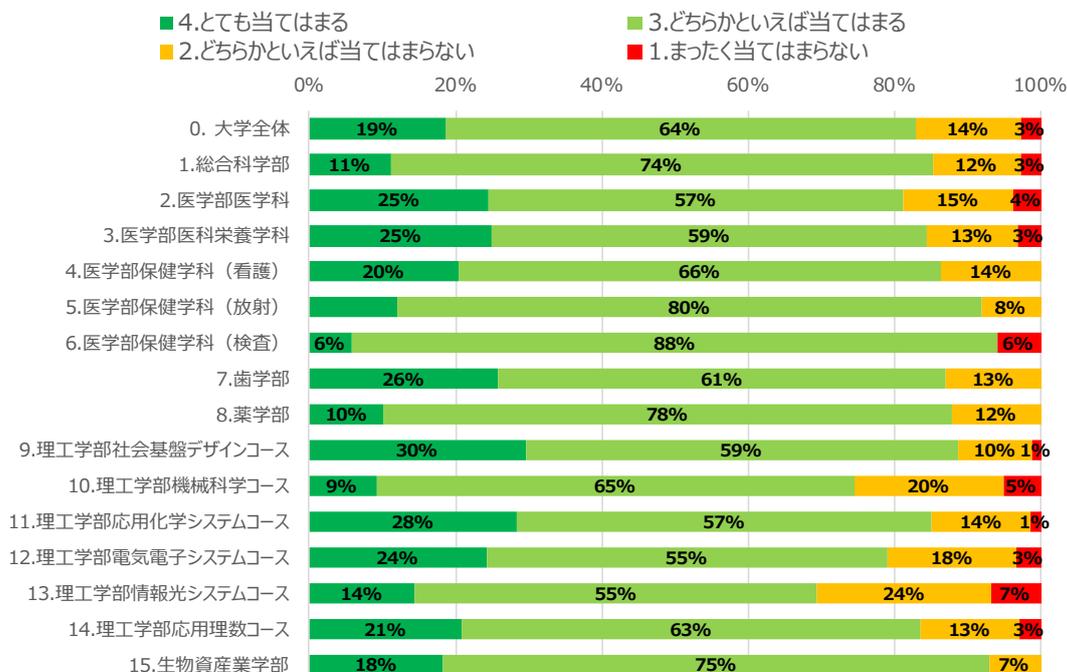
④SIH道場で学修した「他者との協働」は役に立っている



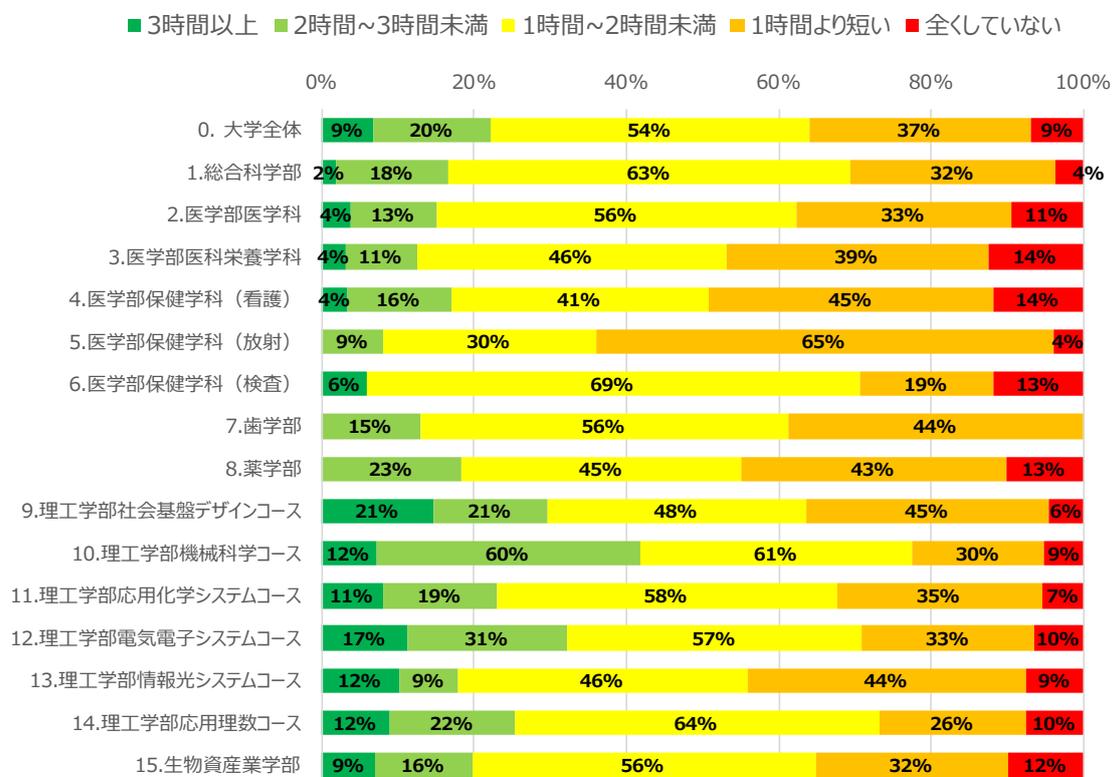
⑤日頃から授業で学修したことについて振り返りを行っている



⑥SIH道場のプログラムは全体的に大学での学修において役に立っている



問 5. 1日平均するとどれくらい授業時間外に学習を行っていますか。当てはまるものを1つ選んで下さい。



問 6. SIH 道場のプログラムについて、大学での学修を始める上で役に立った点と改善点があればお書き下さい。

①役立った点

【総合科学部】

- ・ 幅広い知識が学べた。
- ・ 知識が身についた。
- ・ レポートの書き方について。
- ・ コピペと言わないレポートの書き方。
- ・ レポートの学術的な書き方を学んだ。
- ・ 今後の学ぶ内容の見通しを立てることができた。
- ・ レポートの書き方などがよく分かった。
- ・ オリエンテーションで行う SIH 道場のおかげで、友人ができたり他人とのコミュニケーションをとる機会ができた。
- ・ レポートの書き方や引用の仕方。
- ・ 自分の将来の計画をより具体的に考えることができた。
- ・ 宿題をやめることに意味を見出せない。
- ・ レポートの書き方、出典の表記の仕方
- ・ 大学生活について、やるべきことが分かった。
- ・ レポートの書き方。
- ・ レポートの書き方。
- ・ 論文・レポートの書き方。
- ・ 高校までと違って大学では自主性のある学習をしなければいけない点。
- ・ 学校でなれると違う点で良かった。
- ・ 基本的な知識を身につけられた。
- ・ レポートの書き方。
- ・ 基本的なレポートの書き方。
- ・ レポートの書き方。
- ・ レポートの書き方。
- ・ レポートの書き方は役に立った。
- ・ 履修登録のやり方。
- ・ 大学の基本的な学習について教わったこと。
- ・ レポートの書き方などが役に立った。
- ・ 協力。
- ・ レポートの書き方。
- ・ レポートの書き方の基本を理解できたこと。
- ・ レポートの書き方を学ぶことができた点。
- ・ レポートの書き方。
- ・ レポートの書き方が分かった。
- ・ レポートの書き方を初歩の段階から教えてもらえた点。
- ・ レポートの書き方を学ぶことができた。最初のレポートと今のレポートとは全く違うのでレポート書き方講座があつて非常に良かった。
- ・ レポートを書くときの引用の仕方。
- ・ レポートの書き方が分かった点。
- ・ 課題評価の基準やレポートの書き方など学修を始める前に基礎的なことを学べて、実際に役に立っている。
- ・ 大学は高校と異なりレポートを書く機会が多く、SIHで基本的なレポートの書き方を学べた。
- ・ レポートの書き方、参考文献の利用。

- ・ 大塚国際美術館に行けたこと。
- ・ レポートの書き方や、留学制度、社会的観点を身につけられた。
- ・ 総合科学部がどのような学部であり、これから何を目的として学業に励んでいくべきかが理解できた。
- ・ こういうことをこれから始めるんだなどお話し感覚で出来たところが良かった。
- ・ レポートの書き方についての説明が大変参考になった。
- ・ レポートの書き方や正しい引用の仕方が身についた点。
- ・ レポートの書き方。
- ・ レポートの書き方を学ぶことができた。
- ・ なにをレポートに書き、まとめるのか、レポートの書き方、授業の取り組み姿勢のあり方。
- ・ レポートの書き方。
- ・ 広く知識をつけることができた。
- ・ レポートの書き方 (特に引用のやり方) が分かって良かった。
- ・ レポートの書き方講座。
- ・ レポートの書き方。
- ・ レポートの書き方を知れた。
- ・ レポートの書き方。
- ・ レポートの書き方。
- ・ レポートの書き方。
- ・ 入学前に心構えができた点。
- ・ レポートの書き方、資料の読み取り方。
- ・ レポートの書き方を 1 から丁寧に教えて頂けた点。特に、本やインターネットの情報引用する場面の注意点が分かりやすかった。
- ・ レポートの書き方入門は参考になった。
- ・ レポートの書き方を最初に教わったので良かった。
- ・ レポートの書き方。
- ・ レポートの書き方を細かく説明してくれたのが良かった。
- ・ 客観的な物事の見方が分かった。
- ・ 大学で学ぶ心構えを教わった。
- ・ レポートの書き方。
- ・ 大学で学修するうえでの基本的な考え方を学べた点。
- ・ レポートの書き方を理解できた。
- ・ レポートの書き方が以前よりは理解出来たので良かった。
- ・ 大学生になって初めてレポートを書くので、レポートの書き方の講座は資料の参考のやり方やレポートではどの様に書けば良いのかなどが知ることができた。大変役に立った。
- ・ レポートの基本的な書き方が分かった。
- ・ レポートの書き方。
- ・ レポートの書き方がよく分かった。読書レポートで本を読む機会が与えられた。
- ・ 調べる習慣がついたのが良かった。
- ・ 基礎から学べたこと。
- ・ 引用の仕方やレポートの書き方を学べ、毎回の短いレポートで学んだことを実践できた点。
- ・ 色々なお話を聞けたことが役に立った点。
- ・ これからの大学生活がイメージしやすかった。
- ・ レポートの書き方が分かったこと。
- ・ レポートの書き方講座。
- ・ 今まで自分たちが書いてきた感想文と大学におけるレポートの違いについて知ることができた。
- ・ レポートの書き方を教えていただいたのは、非常に役立っている。
- ・ レポートの書き方、特に引用の仕方を身につけることができた。
- ・ レポートの書き方。
- ・ 論文やレポートの書き方を学べたこと。

- ・ 大学で学んでいく心得を学ぶことができたので、その後の学習に対する姿勢について学べた点。
 - ・ ●●先生の説明が全体的にわかりやすかったし、面白かった点。
 - ・ レポートの書き方を習ったこと。先生の資料の使い方を学んだこと。
 - ・ レポートの書き方。大学生として必要なことを学べた点。
 - ・ レポートの書き方が分かった。
 - ・ コピペといわれないレポートの書き方のコツが分かった。
 - ・ 特に無し。
- 【生物資源産業界学部】**
- ・ 企業の営業を直接見学することができ、将来の仕事に役立つと思う。
 - ・ 進路を真剣に考えることができた。
 - ・ 大いに学べる事があった。
 - ・ 大学生活を送る上で不安が減ったこと。
 - ・ 様々な企業をまわって、とても勉強になった。まだまだ知らないことが多いので、頑張りたいと思つた。
 - ・ 実物を見ることができたこと、実用的な研究を見学できたこと、コースに進んだときにどんなことを研究するのか具体的に分かったこと。
 - ・ プレゼンの姿勢等今後役に立つことを学べた点。
 - ・ 自分の進路について参考になる。
 - ・ 今後の学習意欲が増えたこと。
 - ・ 自ら知る大切さを知った。
 - ・ 専門的な知識を得る楽しさが分かった。
 - ・ 実際に現場を見学できたこと。
 - ・ コミュニ力。
 - ・ プレゼンテーションについての説明が個人プレゼンをやるにあたって役立った。
 - ・ 今までの価値観が変わった。
 - ・ 企業に研修に行くことで、これからの勉強内容に興味を持てた。
 - ・ 知らない事を知れた。
 - ・ 学外研修により少しは研究について学べた。
 - ・ 班と協力して知識を深めることの重要性や、プレゼン、レポートのまとめ方などが分かった。
 - ・ 自分の意見だけでなく人の意見も聞くことで視野が広がった。
 - ・ kJ法などを実践できた。
 - ・ 専門分野に取り組みモチベーションがあがった。
 - ・ 事前学習。
 - ・ 今後の進路の参考になった。
 - ・ 班の子と話す機会があったこと、プレゼンテーションにより他の子の意見が聞けたこと。
 - ・ レポートの書き方。
 - ・ 視野を広げられた。
 - ・ グループ学習の重要性。
 - ・ 徳島の地域の情報が分かる。
 - ・ プレゼンテーションの仕方を学ぶことができ、今後の大学生活に役立てていきたいと思つた。
 - ・ 表現の仕方。
 - ・ プレゼン研修の反省点を自分なりに振り返ることができたこと。
 - ・ 人前で発表すること。
 - ・ レポートやプレゼンテーションなどを具体的にどうすれば良いかを理解することができた。
 - ・ 主体的な大切さが分かったし、少し身についた気がする。
 - ・ 積極的に参加すること。
 - ・ これからであろうプレゼンテーション等の進め方を知ったのは役に立った。
 - ・ 自分の考えをまとめるだけでなく、仲間と協力しながらプレゼンテーションの取り組み方を学べた。
 - ・ 新しい知識を得ることができた。

- ・ 自分の興味のある分野とそれ以外の分野を結びつけることが大切だということを知ることができた。
 - ・ プレゼンの方法。
 - ・ 自分一人ではまだできないことを、今後出来るように指導して貰えたと思う。レポート作成や実際の現場を見ることなど。
 - ・ 学外研修に関する予習や振り返りの仕方、また、その大切さがよく分かった。
 - ・ 徳島県の企業さんがどういった取り組みを行っているか知れた点。
 - ・ 自分の改善点が見つかった。
 - ・ 大学で学ぶ事の説明や、課外活動の説明があった点。
 - ・ 自分がやりたいと思う研究について大まかな目標を立てることができた。
 - ・ どういった取り組み方をすれば良いのかよく分かった。
 - ・ 自分の知識が不十分だと自覚できた。抜き木などの技術に興味を持てるようになった。また、始まったばかりでそんなには書けないが今の段階では授業の後に復習をするようにする。
 - ・ 今後専門として学ぶことを探すのに役立つと思う。
 - ・ 実際の現場を見ることができた。
 - ・ 大学の講義イメージ。
 - ・ 体験学習が将来の夢を考える上で役に立っている。
 - ・ 振り返りをちゃんとやる事の重要性。
 - ・ プレゼンテーションがどんな感じか分かった。
 - ・ 話し合いは重要であると分かった点。
 - ・ 特に無し。
- 【理工学部・応用化学】**
- ・ 情報セキュリティの知識。
 - ・ 友達ができた。
 - ・ 皆と協力して物事に取り組める点。
 - ・ 全部。
 - ・ 団結すること。
 - ・ 地引き網。
 - ・ 友達作り。
 - ・ 履修登録をする際に立った。
 - ・ プレゼンテーション能力やコミュニケーション能力の改善がみられた。
 - ・ 授業寝たらすぐにおいてかれるから寝ない。
 - ・ 大学生活での大事な点を学べた。
 - ・ 話せる人ができた。
 - ・ 協力する仲間ができた。
 - ・ 他者と協力する力。
 - ・ 履修の取り方が分かった。
 - ・ 履修の取り方が分かった。
 - ・ 全部。
 - ・ やり方が分かった。
 - ・ 履修方法の紹介などが分かりやすかつた。
 - ・ 人と交流することで友好関係を築けた。
 - ・ 大学の仕組み、過ごし方を多少学べたこと。
 - ・ レポートなどの基本的なことを学ぶことができた。
 - ・ 大学のシステム。
 - ・ 周りの人たちと協力すること。
 - ・ まだ、特に感じない。
 - ・ 人と協力することができた。
 - ・ 大学生として留年しないための留意点。

- ・ 概要が分かった。
- ・ 協調性が高まった。
- ・ 予習復習は大切。
- ・ 協力することの大切さ、大学の仕組みなどの理解など。
- ・ 履修登録の指導。
- ・ 友達と交流できるよい機会になった。コースの特色も理解できた。
- ・ 他者との協力、積極的な行動を身につけることが大切だと知れた。
- ・ 友達がたくさんできた、積極性が高まった。
- ・ 楽しかった。
- ・ 履修で気をつけたいということが分かった。
- ・ いろんな人と交流することができた。
- ・ 授業科目の履修の仕方がよく分かった。
- ・ 協力作業の必要性を感じることができた。
- ・ 大学に関する間違っていた知識を就学前に改めることができた。
- ・ やり方が分かった。
- ・ 勉強をするための礎を築くことができ、人とのふれあいの場もあったので良かった。
- ・ 知り合いが増えた。
- ・ 仲間と絆を深めた。
- ・ 大学についてある程度学べた。
- ・ 大学生活の取り組み方を学べた。また、友好を深めることもできた。
- ・ 全て教材として物があり自分で理解できる点。
- ・ 人と協力する点。
- ・ 仲間との協力。
- ・ 友好が深まった。
- ・ 地引き網。
- ・ 友達づくり。
- ・ 友人が増えたという点。
- ・ 自ら行動して、他者との協力が大切だと改めて感じた。
- ・ クラスメイトとの友好を深めることができた。
- ・ いろいろ学べる良い機会だった。
- ・ 友達と協力して学ぶ楽しみが分かった。
- ・ 携帯のバックアップの注意点をしとくべき。
- ・ 履修登録の説明が分かりやすかった。
- ・ 友達ができた。
- ・ 履修登録の仕方について教えてもらったこと。
- ・ 大学での学びかたと大学生活のことがよく分かった。
- ・ 施設のことについてよく分かった。
- ・ 特に無し。

【理工学部・応用理数】

- ・ 役に立った。
- ・ プレゼン力がついた。
- ・ パソコンの利用。
- ・ レポートの書き方を学べた。
- ・ プレゼンの仕方を学んだ。
- ・ とこれから先どういう研究をする可能性があるかを知れたのは良かった。大学に来て初めての発表だったのよい経験になった。
- ・ グループワーク。
- ・ 研究室訪問。
- ・ 研究室がどんなことをしているか分かった。
- ・ 予習や質問内容の吟味、発表時の参照レポートの書き方等。

- ・ レポート作成要領やプレゼン力の基礎。
- ・ 普段、人前でプレゼンテーションをする機会があまりないので、こういう機会があって良かった。
- ・ プレゼンテーション。
- ・ 専門の先生たちの話を詳しく聞いた。
- ・ グループ活動という点が良かった。
- ・ メールの書き方が勉強になった。また調べた内容について踏み込んで自分から考えることで知識の充実ができたことが分かった点。
- ・ 研究室訪問。
- ・ 様々な事に興味を持った点。
- ・ 興味のある分野の研究室を訪問できたこと。
- ・ プレゼンテーションの練習にもなった。
- ・ 研究室訪問は将来、コースを決めるときに役立つと思う。
- ・ やりにくい事に今までは避けることが多かったが、積極的に少しはできたかなと思う。
- ・ レポートの書き方が分かった。
- ・ 先生の研究室について調べて疑問に思ったことを見つけて、質問を簡潔にまとめたりする力がついた点。
- ・ 発表するときには気をつける点などの基本的なことを学べた。
- ・ グループの人たちとの協調性を身につけられた。
- ・ プレゼンテーションの機会。
- ・ 自分が学びたいものを明確にできた。
- ・ ひとりで勉強し続けることも大事だけど、皆と知識を共有することも大事だと思った。
- ・ 研究室訪問で、目標が明確に定まった。
- ・ 色々な分野を知ることができた。
- ・ 自分で図書館で知らない知識を調べられるようになった。
- ・ プレゼンテーション。
- ・ プレゼンなど。
- ・ プレゼン能力が思ったと思う。
- ・ コミュニケーション能力の向上。
- ・ 実際の研究室に行けたこと。
- ・ 研究室の内容を知れた。
- ・ 研究室の雰囲気。
- ・ グループ活動を通して助け合える相手ができた。
- ・ プレゼンについての点。
- ・ 大学での研究についてはほとんど知らなかったもので今回の研究室訪問を通して良かった。
- ・ 発表の仕方。
- ・ 行きたい研究室の研究風景を見られて良かった。
- ・ 知らない人と喋れるようになった。
- ・ プレゼンの書き方。
- ・ パソコンの使い方が身についた。
- ・ 興味が深まった。
- ・ レポートの書き方とプレゼンの改善点が分かった。
- ・ メールのやり取り。
- ・ 自分でまとめて、発表する点。
- ・ レポートの書き方。
- ・ プレゼンテーションで教授から質問をされて足りないことが分かった点。
- ・ 研究室でどんなことをしているのかが分かった点でそこはとも良かった。
- ・ 研究室訪問ができて、新しい先生に会えたのが良かった。
- ・ レポートの書き方、著作権について少し理解できた。
- ・ 偶然とした興味、関心を引き出す良いきっかけとなった。
- ・ 実際に教授の研究室を訪問し、教授の研究を知る事が出来た点。

- ・研究室が近く感じるようになった。
- ・先生方がどのような研究をしているかについて知れた。
- ・班員との中を深められたこと。
- ・特に無し。

【理工学部・機械科学】

- ・これからの計画ができた。
- ・友達ができた。
- ・コミュニケーション能力。
- ・文のまとめ方が上達した。
- ・発表と議論の良い練習となった。
- ・発表する力が身についた。
- ・レポートの書き方。
- ・コミュニケーションの勉強になった。
- ・いかに相手を納得させるような弁論をすることが難しいか理解した。
- ・レポートの書き方など。
- ・普段自分が考えないことを考えられた。
- ・友達作り。
- ・ダイバートをするなら題材を1つに絞った方がより完成度の高いものができたと思う。
- ・他者とのコミュニケーションが取れやすくなった。
- ・チームワーク。
- ・レポートの書き方。
- ・レポートの書き方。
- ・プレゼンをする際の注意点を学べた。
- ・レポートを書く上で役に立った。
- ・レポートの書き方が役に立った。
- ・レポートの書き方が分かった。
- ・プレゼンの練習に役立った。
- ・レポートの書き方が分かった。
- ・友達ができた。
- ・プレゼンテーション能力。
- ・レポートの書き方が分かった。
- ・ほぼ初面の人とダイバートで協力できた点。
- ・話自体は分かりやすかった。
- ・人の前に立って話す。
- ・専門的な知識を身につける事ができた。
- ・グループで協力できたこと。
- ・レポートの書き方。
- ・伝達能力が身についた。
- ・人に伝えるということを学ぶことができたと思う。
- ・積極的に参加できる場が設けられた。
- ・分からない。
- ・コミュニケーション能力が増えた。
- ・レポートの作成方法が理解できた。
- ・友達ができた。
- ・コミュニケーション。
- ・論理的思考が養われた。
- ・自分の述べる内容を相手に伝えやすいようにあらかじめまとめめる能力が身についた。
- ・レポートの書き方が良く分かった。
- ・雰囲気を知ることができた。

- ・ダイバートのやり方、資料の重要性。
- ・話し合いをスムーズに進めるための役割分担が重要だと言うことが分かり良かった。
- ・他者との協力。
- ・将来就きたい仕事を探すために役立った。
- ・レポートの書き方は分かりやすかった。
- ・レポートの書く雰囲気。
- ・レポートに耐える心構え。
- ・ダイバートで交流を深められた。
- ・レポート。
- ・レポートの書き方。
- ・実際に実験を出来ることで楽しかった。
- ・機械の使い方がよく分かった。
- ・ダイバートというものを初めてできた。友達できた。
- ・仲良くなった。
- ・ダイバートの仕方の説明が足りなかった。
- ・他者に自分の思いを伝えることの難しさがよく分かった。
- ・ダイバートの方法。
- ・ダイバートで、議論をどのように進めていくのか、理解できた。
- ・特に無し。

【理工学部・社会基盤】

- ・役に立った。
- ・何をすれば良いか分かった。
- ・友達ができた。
- ・単位が取れる。
- ・話し合い。
- ・皆と協力するところ。
- ・自分で学べる力がついた。
- ・授業だけでなく生で体験できた。
- ・知識が深まった。
- ・友人関係ができた。
- ・先に少し専門的な部分にも触れながらできた。
- ・良かった。
- ・調べ学習。
- ・知らないことを多く知れた。
- ・幅広い知識が得られた。
- ・自分の将来に関連づけて考えたこと。
- ・勉強を意欲的に取り組める友人ができた。
- ・基礎学力。
- ・協力すること。
- ・いろいろ。
- ・専門知識を学べた。
- ・他者と協力して活動する点。
- ・興味の視野を広げることができた。
- ・実際に研修などででダムに訪れたので、肌でどう作られているかなどを理解できた点。
- ・レポートについて学べた。
- ・自主的にプレゼンを作成する技術。
- ・プレゼン力がついた。
- ・広い視野で捉えるようになった。
- ・皆と協力することの大切さを学んだ。
- ・他者との協調性。

- ・ 自分で専門的なことを調べようとするきっかけづくりとなった。
 - ・ コミュニケーション能力の向上。
 - ・ 自主性。
 - ・ 普段できないような活動ができた。
 - ・ 知らない人と交流できた。
 - ・ 興味が持てた。
 - ・ 普段話すことのない人と話すことができた。
 - ・ プレゼンやレポートの書き方が身についていた。
 - ・ 他者との協力する能力があった。
 - ・ レポートの書き方・評価の基準。
 - ・ プレゼンの仕方を書いた。
 - ・ 合宿を通して友人ができた、ダムを実際見られた。
 - ・ コミュニケーション力がついた。
 - ・ 体験できたこと。
 - ・ 実際にものを見られたこと。
 - ・ 自分のプレゼン力がとても磨かれた。
 - ・ 専門的なことを調べることができた。
 - ・ 様々なことを体験できた。
 - ・ 仲間と協力することで仲間意識が芽生えた。
 - ・ 大規模建造物の規模の大きさ。
 - ・ 視点が広がった。
 - ・ あの日に友達関係ができて、良い大学生活のスタートが切れた。
 - ・ レポートの書き方が身についた。
 - ・ プレゼンテーションに関して役に立った。
 - ・ プレゼンテーションやレポートの書き方などが役に立った。
 - ・ 話できる人が増えた。
 - ・ 協調性。
 - ・ 他人と協力する力身につけられた点。
 - ・ ダムは面白くない。
 - ・ 専門的な知識を身につけることができた。
 - ・ 自分の興味のある分野を追求できて良かった。
 - ・ 現実に見に行っったこと。
 - ・ 浅いが、多少なりとも終った内容を勉強できたことが役立った。
 - ・ プレゼンテーションによる発表が役に立った。
 - ・ レポートの書き方は役に立った。
 - ・ 友好関係を築けた。
 - ・ 協力して発表まで行う、ということが非常に役に立った。
 - ・ 課題をなんとしてでも遂行する力。
 - ・ 特に無し。
- 【理工学部・情報光】**
- ・ 授業数が少ない。
 - ・ 身の回りのことを考えることに役に立った。
 - ・ 自分の生活を見直すことができた。
 - ・ 大学生活が本格的化する前に目標などを明確に記すことは良かったと思う。
 - ・ 研究室を見られたのは良かった。
 - ・ 協調性。
 - ・ KJ法は役に立った。
 - ・ どの研究室がなにをしているか分かった点。
 - ・ プレゼンスキル。
 - ・ プレゼン力が高まった。
- ・ レポートの書き方、プレゼンの仕方について学べた点。
 - ・ 協調性。
 - ・ 他者との協力の大事さ。
 - ・ 知り合いができた。
 - ・ レポートに慣れることができた。
 - ・ KJ法などのやり方があることを知ったのでこれから役立てる機会があれば活用していきたい。
 - ・ レポートの書き方を理解できたこと。
 - ・ レポートの書き方や内容なんかがよく分かった。
 - ・ グループ製作などを通して協調性などがより良くなった。
 - ・ プレゼンテーションのテーマをもっと具体的にものにしたほうが良いと感じた。
 - ・ 誰かと協力することの難しさを、知ることができた。
 - ・ プレゼンをする機会が良かった。
 - ・ 協働力。
 - ・ プレゼンはいらないと思う。その時間を交流会にして相互理解を深めるべきだ。
 - ・ 友人ができたことで大学生活を安心して送れる様になり、学修にも力を入れることが可能になった。
 - ・ プレインストリーミングを利用してアイデアを出せた。
 - ・ グループワーキングのやり方が分かった。
 - ・ 色々見られた。
 - ・ 同学年、同学科の人と話し合うことができた点。
 - ・ 発表する力。
 - ・ 友達と仲良くなった。
 - ・ 班のメンバーと意見を出し合って考えること。
 - ・ プレゼンの経験を得たこと。
 - ・ 発表の内容をまとめる力が身についた。
 - ・ レポートの書き方が分かった。
 - ・ 一つの課題について複数人で解決案を考案する方法を知ることができた点。
 - ・ これから先、1人では出来ない学習を一緒に助け合える仲間を作る機会となった。
 - ・ スライドの作成方法。
 - ・ レポートの書き方など。
 - ・ プレゼンの仕方。
 - ・ プレインストリーミングを学べたこと。
 - ・ KJ法とプレストに関しては仕事でも使ったりするので、それを早い段階で知ることが出来たのは良かった。
 - ・ 友達ができる。
 - ・ 友達ができた。
 - ・ プレゼンの仕方を書いた。
 - ・ グループワークを行うことによって同じ学科の学生と比較的容易にコミュニケーションをとることができた。
 - ・ 協調性の大切さ。
 - ・ 同級生と関わりを持てた。
 - ・ KJ法が役立った。
 - ・ グループ活動を行うことで、友好関係を築くことができた。
 - ・ レポートを書くためのテクニカルライティングが身に付いたこと。
 - ・ レポートの書き方やプレゼンテーションの仕方はとても役に立った。
 - ・ 他の人のプレゼンから、どのようなプレゼンをしたら相手に伝わるかがある程度理解できた。
 - ・ プレゼンや発表の仕方が分かった。
 - ・ 単位ゲットだぜ。
 - ・ プレゼンの効果的な発表の仕方を書いた。
 - ・ グループ活動の中で積極的に意見を述べたり話し合いに参加したりと協調性の向上に役立った。
 - ・ 話したことのない同学年の学生と話す機会が出来たのは非常に役に立った。

- ・ 問題を聞いたり教えたりできる友達ができた。
- ・ グループ内で積極的に意見を出している点。
- ・ 他の学生との交流。
- ・ グループで協力するのが良かった。パワーポイントも協力して作成できた。
- ・ 他の講義やイノベーションプロジェクトでの会議に役に立った。
- ・ プレインストームング。
- ・ グループワークでの重要な点を学べて良かった。
- ・ 仲間との協働性。
- ・ プレゼンの体験が出来たのは良い経験だった。色々な研究室を見れたのが良かった。
- ・ レポートや論文を書く能力。
- ・ PowerPointの作り方が分かった。
- ・ コミュニケーション力。
- ・ 高校では習わなかったプレゼンテーションの方法。
- ・ テクニカルライティングの講座。
- ・ テーマの設定を間違えると難しいことが分かった。
- ・ プレゼン力がついた。
- ・ 会議でのコミュニケーションの仕方を学べる。
- ・ パワーポイントを使って大勢の人前で緊張の中わかりやすい説明ができるように心がけると
- ・ いうことを体験できた点。
- ・ グループで学習をしたことでコミュニケーション能力が分かった。
- ・ グループ活動での大切なこと。
- ・ 文書作成について学ぶことができた。
- ・ コミュニケーション力向上に繋がった。
- ・ 専門的な知識の学習をしたくなった。
- ・ 大学の学修ではグループで行うものも多くグループ内のディスカッションのやりかたを早く学ぶことができたので役に立った。
- ・ レポートの書き方が分かった。各研究室の概要を理解することができた。
- ・ プレゼンのための資料を作る勉強になった。
- ・ レポートの書き方、プレゼンテーションの仕方が学べた。
- ・ コミュニケーションを積極的にとれるようになった。
- ・ プレゼンテーションの力が改善された。
- ・ コミュニケーション能力が高まった。
- ・ 友達を作れた点。
- ・ 特に無し。

【理工学部・電気電子】

- ・ プレゼンの練習ができた。
- ・ プレゼンテーション力が身についた。
- ・ レポートの書き方が身についた。
- ・ 共同力。
- ・ 自分で考えられるようになる。
- ・ レポートの書き方について。
- ・ プレゼン力が身についた。
- ・ プレゼンの仕方、パワポの使い方。
- ・ 様々な知識を身につけることができた。
- ・ コミュニケーションを取れる機会が多い。
- ・ プレゼン力と協調力を学べた。
- ・ 協力の重要性を知った。
- ・ チームワーク力。
- ・ レポートの書き方。
- ・ どのような研究室があるか分かった。

- ・ 他者と協力して目的を達成することの重要性を理解した。
- ・ 研究室を見学できた。
- ・ 説明するのは難しい。
- ・ 発表の仕方。
- ・ 難しくてもまずは大枠をとらせることが大事だということに気付かされた。
- ・ プレゼン力。
- ・ 大まかな流れについて学べた。
- ・ レポートの書き方。
- ・ プレゼンのやり方、パワポの仕方、グループワークの仕方。
- ・ ポスターの発表をしたことは今後役に立つと思う。
- ・ この大学の研究所での研究内容を知ることができた。
- ・ 今まで学ばなかった詳しいレポートの書き方やプレゼンテーションの仕方。
- ・ 様々な研究を見ることができ、興味があるものもあった。
- ・ 研究室を見に行く事によって徳島大学の研究内容を知ることができた。
- ・ プレゼンにおいて直接、指導していただけたのが良かった。
- ・ プレゼンテーションを一回確認したこと。
- ・ 研究の現場に触れることができた。
- ・ 研究の現場を体験できた。
- ・ 発表の重要性が理解できた。
- ・ SIH道場でレポートの書き方を学んだため、他の授業でレポートが出された際に学んだことを生かし、書くことができた点。
- ・ プレゼン能力が身についた。
- ・ 自分で学ぶ姿勢。
- ・ 自分で調べる事ができるようになる。
- ・ 自分でプレゼン力。
- ・ 自分の興味外の分野のことを知ることができ、新たに興味を持った分野ができたこと。
- ・ 研究室を訪問し、研究風景や実験器具を間近で見ただけで、将来のイメージを持つことができずイメージが上がった。
- ・ 学修の方法について大まかに分かった。
- ・ プレゼンのやり方を学べた。
- ・ 大学のサイト。
- ・ アクティブラーニングがどういうものか理解できた。
- ・ プレゼンする能力が身につく。
- ・ パワーポイントの作成方法やプレゼンテーションの仕方を理解できた。
- ・ パワーポイントの使い方が分かった。協調性が身についた。
- ・ 特に無し。

【生物資源産産学部】

- ・ 企業の営業を直接見学することができ、D620・D680 将来の仕事に役立つと思う。
- ・ 進路を真剣に考えることができた。
- ・ 大いに学べる事があった。
- ・ 大学生活を送る上での不安が減ったこと。
- ・ 様々な企業をまわられて、とても勉強になった。まだまだ知らないことが多いので、頑張りたいと思っ
- ・ 実物を見られたこと、実用的な研究を見学できたこと、コースに進んだときにどんなことを研究するのかが具体的に分かったこと。
- ・ プレゼンの姿勢等今後役に立つことを学べた点。
- ・ 自分の進路について参考になる。
- ・ 今後の学習意欲が増えてきたこと。
- ・ 自ら知る大切さを知った。
- ・ 専門的な知識を得る楽しさが分かった。

- ・ 実際に現場を見学できたこと。
- ・ コミュニカ。
- ・ プレゼンテーションについての説明が個人プレゼンをやるにあたって役立った。
- ・ 今までの価値観が変わった。
- ・ 企業に研修に行くことで、これからの勉強内容に興味を持った。”
- ・ 知らない事を知れた。
- ・ 学外研修により少しは研究について学べた。
- ・ 班と協力して知識を深めることの重要性や、プレゼン、レポートのまとめ方などが分かった。
- ・ 自分の意見だけでなく人の意見も聞くことで視野が広がった。
- ・ kJ法などを実践できた。
- ・ 専門分野に取り組みモチベーションがあがった。
- ・ 事前学習。
- ・ 今後の進路の参考になった。
- ・ 班の子と話す機会があったこと、プレゼンテーションにより他の子の意見が聞けたこと。
- ・ レポートの書き方。
- ・ 視野を広げられた。
- ・ グループ学習の重要性。
- ・ 徳島の地域の情報が分かる。
- ・ プレゼンテーションの仕方を学ぶことができ、今後の大学生活に役立てていきたいと思った。
- ・ 表現の仕方。
- ・ プレゼン研修の反省点を自分なりに振り返ることができたこと。
- ・ 人前で発表すること。
- ・ レポートやプレゼンテーションなどを具体的にどうすれば良いのかを理解することができた。
- ・ 主体性の大切さが分かったし、少し身についていた気がする。
- ・ 積極的に参加すること。
- ・ これからであるので、仲間と協力しながらプレゼンテーションの取り組み方を学べた。
- ・ 自分自身の考えをまとめるだけでなく、仲間と協力しながらプレゼンテーションの取り組み方を学べた。
- ・ 新しい知識を得ることができた。
- ・ 自分の興味のある分野とそれ以外の分野を結びつけることが大切だということを知ることができた。
- ・ プレゼンの方法。
- ・ 自分一人ではまだできないことを、今後出来るように指導して貰えたと思う。レポート作成や実際の現場を見ることなど。
- ・ 学外研修に関する予習や振り返りの仕方、また、その大切さがよく分かった。
- ・ 徳島県の企業さんがどういった取り組みを行っているか知れた点。
- ・ 自分の改善点が見つかった。
- ・ 大学で学ぶ事の説明や、課外活動の説明があった点。
- ・ 自分がやりたいと思う研究について大まかな目標を立てることができた。
- ・ どういった取り組み方をすれば良いのかよく分かった。
- ・ 自分の知識が不十分だと自覚できた。
- ・ 接ぎ木などの技術に興味を持てるようになった。
- ・ 今後、始まったばかりでそんなに書けないが今の段階では授業の後に復習をするようにする。
- ・ 現在専門として学ぶことを探すのに役立つと思う。
- ・ 実際の現場を見ることができた。
- ・ 大学の講義イメージ。
- ・ 体験学習が将来の夢を考えると役に立っている。
- ・ 振り返りをちゃんどやる事の重要さ。
- ・ プレゼンテーションがどんな感じか分かった。
- ・ 話し合いは重要であると分かった点。
- ・ 特に無し。

【医学部・医学科】

- ・ 他者と議論する能力が身についた点。
- ・ レポートの書き方。
- ・ 他者との交流。
- ・ これからに繋がると思う。
- ・ 発表する力が身についた。
- ・ 実際に病院で体験実習をすることで視野が広がる。
- ・ 現代医療の問題点について他学部の人と考えることができた点。
- ・ どういう風にレポートを書いたら上手く書けるかや、KJ法を用いて意見をまとめる方法を知れて、これからの役に立つと思った。
- ・ 積極性。
- ・ 自分の意見を積極的に言うことができるようになった。
- ・ 将来と向き合える。
- ・モチベーションの向上に役立った。
- ・ 話し合うところ。
- ・ 他学部との交流ができたことや、他学部の方の考え方を知れたこと。
- ・ 協力する大切さを学んだ。
- ・ 他の学部学科との交流は多くのことを学び、価値観が大きく変わるため、もっと機会を設けて行くべきだと思う。
- ・ 他者との意見交換を通じて新しい考えが生まれたり自分にはない考えを吸収できた。
- ・ 振り返りの重要性を認識することで、学習に対する基本姿勢を学べたと思う。
- ・ 普段関わりのない他学部生と交流できた点。
- ・ 協力する重要性が学べた。
- ・ 他学部との意見交換ができた点。
- ・ 他学部の人と協力して作業する経験はとともよかった。
- ・ 初めての会人と発表するなど将来に役立ちそうな事が体験できた。
- ・ 自分が今後学習していくにあたっての目標を確認できた点。
- ・ 通常カリキュラムにある授業では学べない様々なことについて学ぶことができた点。
- ・ 文章の書き方と研究倫理について。
- ・ チーム医療での協力について。
- ・ 他学部と交流できた。
- ・ 診療現場を見られたこと。
- ・ 1つの課題に対して 多面的に考える習慣を身につけるきっかけとなった点。
- ・ 文章の書き方。
- ・ 大学での勉強のやり方を知った。
- ・ 自力では取り組まないようなことに触れることができた点。
- ・ 人前で5分間、発表をした点。
- ・ 他学部の考えに触れることができた。
- ・ 協力して課題に取り組むこと。
- ・ 他学部他学科と協働できたこと。
- ・ ワークショップなどを通じて様々な人と交流できた点。
- ・ グループワークの経験。
- ・ プレゼンテーションの力はSJD道場で身につけ、大学での学修に役立った。
- ・ 学習の意欲を高めることができた。
- ・ 他の学部の人と協働してプレゼンテーションを行う機会が設けられていた点
- ・モチベーションが上がった。
- ・ 自分の意見言えるようになった。
- ・ 文章、レポートの書き方や、プレゼンテーションのやり方など、大学生にとつての必須技能を学べた点。
- ・ 実際の現場を見られた点。

- ・他学部との協力。
- ・早期臨床体験実習が2回開催され、自分の第一希望の分野の見学ができた点はもちろん満足したが、希望外の分野の見学でも非常に興味を持って、実習に取り組むことができたという点でも満足した。
- ・他学部の人たちの意識が高いことがわかったので刺激になった。
- ・特に無し。

【医学部・栄養学科】

- ・話し合いの仕方。
- ・よくわかった。
- ・医療について理解が深まった。
- ・他学部の人と交流する機会が持てたのがよかった。
- ・先生たちと話ができこれからの授業が楽しみになりました。
- ・レポートの書き方。
- ・早期研究室体験学習はこれからのことを考えるために役に立つと思った。
- ・他の学部生との交流。
- ・協調性が増えた。
- ・退学生活に必要な基礎が身に付いた。
- ・他者との交流ができた。
- ・大学生活を始めるとは始めた後において基礎的な知識が得られた点。
- ・討論の進め方。
- ・研究室について知る事ができた。
- ・普段大学生活を送る中で他学部の人と関わる機会は少ないので、今回のSIHを通して他学部の人と意見の交換などを行い将来自分が携わるであろうチーム医療を少し体感できた点。
- ・他学部と話し合うことで多々面からの考えかたがあることがわかった
- ・話し合いの場が設けられたこと。
- ・チームワークの重要性・楽しさ。
- ・研究室を見学できた。
- ・他の学部の人達と交流することと、チーム医療の大切さを理解することができた。
- ・プレゼンテーションについて学べたことはとてもよかったです。
- ・研究室の見学ができたのはよかったです。
- ・コミュニケーション能力の向上。
- ・他人の考えが聞けたことです。
- ・他の学部の人と交流できたのはよかったです。
- ・他学部学生との小売ユマの機会。
- ・特に無し。

【医学部・看護学科】

- ・レポートの書き方や、チーム医療入門のワークショップは、レポートの作成や自分の意見をまとめて話す時に役に立った。
- ・他の学部と絡むことができた。
- ・レポートの書き方。
- ・レポートの書き方。
- ・発表力。
- ・プレゼンテーションの仕方がわかった。
- ・自分の持っている視野が広がった。
- ・事前学習の大切さを知った。
- ・ランダムでグループが振り分けられているため、普段話さないような人とも話す機会が増え、交友関係も広がる点。
- ・グループで話し合いやプレゼンができて、色々な意見をきけてよかった。
- ・文章力が鍛えられる点。

- ・合同ワークショップでは、他学部や他学部の人と交流することで、医療関係のことについて色々な視点からの考えを学ぶことができた。
- ・他者との協力の大切さを学べた。
- ・レポートの書き方。
- ・プレゼンテーションの練習。
- ・発表の際の注意点や他者と協力する際の注意点がよくわかった点。
- ・他職種について知れた。
- ・他学部の学生との交流。
- ・大学出の学びの姿勢を理解できた。
- ・プレゼンテーションに対する抵抗が減った。
- ・他学部の人たちと交流できる。
- ・人前で話すことが苦手だったが、プレゼンテーション力が少しついた。
- ・グループワークの仕方。
- ・他の学部、学科の人と交流できた点。
- ・レポートの書き方を学ぶことができた点
- ・他学部の人と交流できたこと。
- ・他学部の学生と意見を交換すると、違った視点から考えたりして新しい発見があったこと。
- ・大学で身につけるべきことが理解できた。
- ・レポートの書き方。
- ・レポートの書き方。
- ・チーム医療について考えることができた。
- ・レポートの書き方ある程度は理解できた。
- ・レポートの書き方を学ぶことができた。
- ・チームワークの大切さを学んだ。
- ・先輩の話を聞くことができたのが良かった。
- ・職種によって1つのことにおいても視点が様々であることを学べた。
- ・他者の意見を取り入れ、自分の考えと結びつけながら考えを深めることができた。
- ・プレゼンテーション能力。
- ・レポートの書き方がよくなってよかった。
- ・レポートの方法。
- ・レポートの書き方。
- ・他学部の考えが欠けた点。
- ・他者との協調性を磨く良い機会だった。
- ・自ら考えて自分たちで協力して進めていくことで、理解が深まった。
- ・コミュニケーション力がついた。
- ・話し合いの仕方がわかった。
- ・チーム医療を実感することができた。
- ・レポートの書き方などが身についた。
- ・レポートの書き方。
- ・様々な学科の人と交流できたこと
- ・プレゼンテーションの苦手意識が薄れた。
- ・グループワークで他者と協力することの大切さを学んだこと。
- ・プログラムを受ける前よりも将来像がはっきりした。
- ・知識の増加。
- ・コミュニケーション能力の大切さ。
- ・特に無し。

【医学部・放射学科】

- ・パワーポイントを作る上での注意点を学ぶことができた点。
- ・研究室体験を通して、今後学ぶべきことを明確にできた。
- ・協調性を学べた。

- ・ プレゼンのときに順序立てて説明できるようになった。
- ・ 積極性が身につきました。
- ・ 専門性に触れることができた。
- ・ これからのどのような科目を勉強すればよいかのわかかったという点。
- ・ 知らない人とのコミュニケーション能力がついた。
- ・ これから習っていくであろう専門知識を先立って学ぶことができ、これからの学習の意欲に繋がった。
- ・ プレゼンテーションのやり方がわかった。
- ・ 他者と協力しあう大切さを学んだ。
- ・ 研究室体験からもっと勉強不足であるということが明確にわかり、勉強に力を入れていく必要があるとわかった。
- ・ 同じ学科の先輩との繋がりができ、自分の専攻する分野についてより一層興味を持つことができ
- た。
- ・ パワーポイントの作り方が分かった点。
- ・ 協力して作業する力がついたと思う。
- ・ 他者との協力。
- ・ 他の学部の子とコミュニケーションがとれていろいろんなことも知れた点。
- ・ 他者とのコミュニケーションの取り方。
- ・ プレゼン発表。
- ・ 限られた分野のみではあるが、これから学修する専門知識の基礎を自分達で調べて理解できた点。
- ・ 医療について知れた点。
- ・ 特に無し。

【医学部・検査学科】

- ・ プレゼンテーションのやりかたがなんとなくわかった気がする
- ・ 他学科とのグループワークはとても良かったです。
- ・ いろいろな意見を知れた。
- ・ 振り返りの重要性。
- ・ どんな事を学ぶか分かった。
- ・ 専攻の先生方から将来のことについてのお話を聞くことが出来たこととはとても役に立ちました。
- ・ 普段なかなかお話を聴けない方の講演を聴くことが出来て、質問などの交流があった点。
- ・ 他の学科の人達と交流することで、チーム医療の大切さを感じることができた。
- ・ 他人とのコミュニケーションを取る機会となったこと。
- ・ レポートの参考文献の扱い方が理解できた。
- ・ チーム医療について想像しやすくなった。
- ・ 知らなかったことを知ることができた。
- ・ コミュニケーション力が上がった。
- ・ 協調性が身についた。
- ・ 特に無し。

【歯学部・歯学科】

- ・ スピーチ力の意識。
- ・ よかった。
- ・ 他学部と話すことができた点。
- ・ コミュニケーション力の向上。
- ・ コミュニケーション能力の向上。
- ・ プレゼンが多いのは経験が積める。
- ・ 専門教科の勉強に対して患者さんの気持ちも考えて臨めるようになったこと。
- ・ 自分の意見を他者に伝えることができた点。
- ・ 役にたった点として、人前で発表することの出来る自信を身に付けることができた。
- ・ コミュニケーション能力の向上。

- ・ 協力の仕方がよくわかった。
- ・ グループワークを通して学部内の仲が深まった。
- ・ 他の一般教養のレポートを書くためのいい練習になった。
- ・ これから専門分野に進むにあたって、どういう力をつけなければいけないか、また具体的にどんなことをしていくのかという点が少しわかった。
- ・ 他者の視点も学べる点。
- ・ 他学部と意見交換を行えたのは刺激になってよかった。
- ・ 専門的なことまで踏み込んで学ぶことができた。
- ・ グループでの話し合いにおいて、さまざまな意見に触れることができた。
- ・ 協力して意見を出したり、プレゼンをしたりするのに慣れることができた点。
- ・ 貴重な話をたくさん聞くことができて、ためになったと感じている。
- ・ 他者との意見交換を素直に行えるようになった。
- ・ 専門分野の勉強へのモチベーションを保つことができた点。
- ・ レポートの書き方。
- ・ 幅広い分野の視点から物事が考えられた。
- ・ 知らなかったことを理解できた。
- ・ レポートの書き方の参考になった。
- ・ 特に無し。

【薬学部・薬学科】

- ・ 普段の授業で行えないことができた。
- ・ 他者の意見が分かった。
- ・ 文章を書く力を養うことができた。
- ・ プレゼンテーションを経験できたこと。
- ・ 自分と違う学部の人と話すことができた。
- ・ モチベーションの維持に役立った。
- ・ 社会に出て必要な能力を養うことができた点。
- ・ 話し合いの重要性を感じることができた。
- ・ 基本的な能力を習得できた。
- ・ 決められた時間内で他者と協力してプロダクトを作ったり、発表まで持ち込めるようになった。
- ・ KJ法などアイデアを出し合う方法を学べたところが役に立った。
- ・ 他の授業にも共通する点などがあり、事前に考える機会となった。
- ・ 大学の勉強をするうえでのモチベーションになった。
- ・ 他者とのコミュニケーションをとることの重要性を改めて認識できた点。
- ・ ワークショップのやり方がよくわかった。
- ・ 仲間と協力することが大切だとわかった。
- ・ 他者とのコミュニケーション。
- ・ 大学での学習は高校までの学習方法とは異なっているとわかっていた点。
- ・ レポートの書き方は役に立った。
- ・ グループでの意見交換の方法がわかった。
- ・ 他学部の人と交流できて良かった。
- ・ 上の質問のようなこと。
- ・ 発表することに慣れること。
- ・ いろいろな観点・立場の人の意見が聞けて、自分の考えの幅が広がった点。
- ・ 専門の内容に早期に触れることができた。
- ・ チーム医療の重要性。
- ・ 学生生活をうまく過ごす方法を学べた。
- ・ レポートの書き方。
- ・ 様々な学部の方の意見を聞いた。
- ・ KJ法。
- ・ 名前の通り、入学してすぐに行われるので、これからの大学生活や社会に出たときに参考になる

- ・ グループワークや課題活動にもっと取り組んでみたかった。
- ・ とつつきにくい話題もあった。
- ・ プレゼンの練習をさせて欲しかった。人数が多いため、難しいかもしれないが、手元にレジュメが欲しい。
- ・ シラバスの内容と授業内容がかなり異なる場合があるのはいかがなものか。
- ・ 大塚国際美術館に行っても自分の学習に役立てられなかった。
- ・ 授業方法。
- ・ 話が長い。
- ・ スケジュールがタイトだった。
- ・ 学生生活についての講話を短くして欲しい。
- ・ キャリアプラン入門とSIH 道場の講義の意図の差異を明確にして欲しい。
- ・ 学籍番号が近い人だけでなく、他の学生ともコミュニケーションを取る機会が欲しい。
- ・ 総合科学入門講座での課題の採点基準がよくわからないところがあった。
- ・ レポートの評価の基準点がわからない。
- ・ 論理的思考が身に付いた。
- ・ プレゼンテーションの仕方。
- ・ 学んだことを使う練習として、学習内容(考え方、書き方)を直接反映できる課題ならもっとよいと思う。
- ・ 入学式前のSIH 道場をもう少しコンパクトにまとめ、日数を減らして欲しい。
- ・ 最初にいっぱいやりすぎて、いっぱいいっぱいになった。
- ・ 哲学、歴史、地域、政治をやったが理数系もあってよいと思う。
- ・ もう少し的を絞って話をしてよかつたと思う。
- ・ 大学で学習する上で、必要な力について具体的に教えていただけたらと助かる。
- ・ 大塚美術館に行く意味はなかった。
- ・ 少しつまなかつた点。
- ・ 大学で学ぶとはどういうことかがよくわかつた。
- ・ より「学びたい」「受けたい」と思える講義内容を増やすとよい。
- ・ 特に無し。

【生物資源産業学部】

- ・ 働く環境を見て、将来の仕事を考えることができる。
- ・ 大いに学べる事があった。
- ・ まだ動画などが見えないこと。
- ・ 行き来が多いので効率よくまわれば良いと思った。
- ・ 実際に器具に触れられなかった点、使用しているところを見学できなかつた点。
- ・ 過去に行ったプレゼンの例を配布等で参考に出来るようにすれば、更にスムーズにまとめられるようになるかと思う。
- ・ 完結に説明すれば分かりやすいと思う。
- ・ 具体的なものを見ることができて役に立った。
- ・ 自ら知る大切さを知った。
- ・ 良い体験になったこと。
- ・ コミュニ力。
- ・ これからの大学生生活楽しみになった。
- ・ 事前学習の仕方がわからなかつたから不十分であった。
- ・ 知らない事を知れた。
- ・ 学外研修が受動的になっていたのもっと積極的にするべきだと思った。
- ・ グループ発表のテーマが広くてまとめの時間に時間がかかる。
- ・ レポートの書き方などがわかつた。
- ・ レポートの書き方などをもっと詳しく教えて欲しい。
- ・ 事前学習。
- ・ もう少し詳しく説明して欲しかった。

- ・ 点が多々あった点。
- ・ 沢山出した意見をまとめる方法。
- ・ 自分で考える力が大切だということがわかつた。
- ・ プレゼンテーションをする力が身についた点。
- ・ 協働力。
- ・ 授業を通して将来の進路についての視野が広がった点。
- ・ 高校と大学を繋ぐ、医療を学ぶ上での導入。
- ・ 特に無し。

②改善点

【総合科学部】

- ・ 長かった。
- ・ 話が難しい。
- ・ 国際系のことについてもっと聞きたかった。
- ・ 疑問点を持った時、すぐに質問をしに行ける態度が身についた。
- ・ 説明が足りないところがある。
- ・ 大学でどのような学びの姿勢を持てばよいかわかつた。
- ・ 面白くない先生と面白い先生の差が激しい。
- ・ 入学式前のスケジュールがハードすぎる。
- ・ 幅広くも必要ではあるが、もう少し詳しく知る機会を増やして欲しい。
- ・ 何の目的がある授業なのかわからないものがあった。
- ・ 入学式前のオリエンテーションが多い。
- ・ 履修登録についてよくわかつた。
- ・ 専門性がない。
- ・ 思う・考えるを使わない、資料は参考にすぎない、資料は学ぶにすぎない。
- ・ 学生の授業に対する積極性は人によって異なると思うが、もっと学生のことを考えて SIH 道場を進めた方がよい。
- ・ 友達づくりの機会を増加。
- ・ 座っている時間が長すぎる。
- ・ 興味ない話がある。
- ・ もっと短期間でもよいと思う。
- ・ もう少しわかりやすくレポートの書き方を教えて欲しかった。
- ・ 難しい話が多かつた。
- ・ もっと学生が発言する機会を増やしたら良いと思う。
- ・ 大塚美術館見学の時間が少し短かつた点。
- ・ もう少し授業回数が少なくてもよい。
- ・ 大学での評価の基準についてより詳しい説明が必要である。
- ・ 授業詰め込みすぎて集中がもたない授業もあった。
- ・ 出席確認が曖昧だったので、機械を使った方が良いと思った。
- ・ 講義を聴くことが多かつたので、もっと実習的なことが多い方が身につくとと思う。
- ・ レポートの書き方。
- ・ レポートの書き方をもっと詳しく知り知り欲しかった。
- ・ 日が詰まっついて、新入生としては意欲がなくなつた。
- ・ 大学の学びとは何かというところが理解はできた。
- ・ 内容を入学式の前から始めるのは心身に負担・疲労がある点。
- ・ 一気に詰め込まれた感がある。
- ・ もう少し内容をまとめて説明してもらいたい。
- ・ せつなく総合科学部が集まる場ということを利用し、学生同士で1分くらい話し合う時間を小刻みにとってほしいと思う。受け身だけで講義を聞く学生も比較的減るだろうし、先生と学生の集中力を失わないだろうし、先生と学生のコミュニケーションにもなる。その機会が今より増やせばもっと良くなるのではないかと。

- ・プレゼンテーションの考える時間がもう少し欲しかった。
- ・地震の講義が長いと思った。
- ・自分の興味のあるものについて詳しく学びたい。
- ・グループ学習の重要性。
- ・畜産業もやってみたい。
- ・動画が見えるようにして欲しかった。
- ・これからどんな能力が必要か分かった。
- ・KJ法についてより詳しく教えて欲しい。
- ・コミュニケーションをもっと。
- ・プログラム自体は良いけれど入学式前にやるのはバタバタするのでせめて入学式直後にして欲しい。
- ・気になることは質問する。
- ・事前学習をもっと深くするべきだった。
- ・入学前からだったので、慣れないことばかりで最初は戸惑いも多かった。
- ・個人の希望に合わせた企業に行けたら良いと思った。
- ・忙しい。
- ・レポートの内容などまだ少しよくわからないので説明して欲しい。
- ・レポートの各項目の書き方や内容があまりわからない。
- ・自分をもっと事前に知識を深めておかないといけない点。
- ・やることへの説明がアバウト過ぎる。
- ・企業見学をする事で、今後の将来の道がまた1つ開けた気がする。
- ・入学前で切羽詰った時期における実施はよかったとは言えない。
- ・目標をより明確にして取り組んでいきたい。
- ・入学前から忙しい。
- ・授業以外の学習時間を増やすこと。
- ・レポートの書き方や違いがわかりにくかった。
- ・レポートの書き方をもう少しアドバイスして欲しかった。
- ・レポートとかの書き方を教えて欲しい。
- ・特に無し。

【理工学部・応用化学】

- ・議論形式を取り入れでもよいと思う。
- ・なんかボケっとしていた時間が多かった。
- ・無駄な時間があった感じがした。
- ・隙間時間を使って効率よく勉強すること。
- ・もう少し遊びたい。
- ・履修登録のことをもっと詳しくして欲しい。
- ・履修が分かりにくい。
- ・周りとの交流が正直少ない。特定の人としか交流しなくてもなんとかなる。
- ・履修に関しても一すこし具体的に。
- ・もう少しクラスなど全体での協力する行事を増やした方がよいと思った。特定の人としか協力できていない気がする。
- ・同じ話を何回もしている。
- ・同じような内容の説明が多い。
- ・説明が多すぎて寝そうになってしまった点。
- ・履修の仕方。
- ・自分のすることに責任を持つこと。
- ・レポートの書き方や大学での自習学習のやり方を詳しく教えて欲しかった。
- ・もっと交流を多くしたほうがよいと思う。
- ・もう少し色々な人と話しやすい企画もあればよいと思った。
- ・レポートの書き方がわかりにくい。

- ・履修の大切さ。
- ・1度話したことを省略すればもっと効率的に内容を伝えることができるのではないかと思った。
- ・同じ話をしている。
- ・人数を減らし動きやすくする。
- ・大学のことを知れた。
- ・人と協力すること。
- ・仲間との協力。
- ・システム理解。
- ・研修旅行の案内を配布して欲しいという点。
- ・もう少し内容を把握させること。
- ・確かに楽しかったし、友好を深めることができたが、もっと化学にちなんだ体験学習がしたかった。
- ・体験学習の数を増やすこと。
- ・先輩。
- ・筋道をたてて作文すること。
- ・レポートの書き方についてこの時に教えて欲しい。
- ・授業への取り組み方を具体的に助言して欲しかった。
- ・特に無し。

【理工学部・応用理数】

- ・もっとレポートを工夫しようと思う。
- ・じっくり学習できる時間が欲しい。
- ・レポートの書き方やプレゼンテーションのやり方をもっと詳しくして欲しい。
- ・研究室訪問のたいたい目安を20分より伸ばして欲しい。
- ・研究室訪問してからレポートをまとめて発表するまでの日数。
- ・グループで話し合う時間ももう少し欲しかった。
- ・もっと構成を考える。
- ・何のためにやるのかの意義と関連性を自分なりに考えてやってみること。
- ・時間が少ない。
- ・時間が足りない点。
- ・細かなところまで気を配るべきだった。
- ・プレゼンがプレゼンの練習になっていない。
- ・もう少しやりやすい内容にして欲しい。
- ・チェックシートの使い方が少しわかりにくかった。
- ・もう少し時事的なことも感じ取れればよいなと感じた。
- ・発表の際、他の班の発表で聞こえなくなることが多々あった。できるなら部屋を分けていた方がよいと思った。
- ・もう少し時間をかけて資料を作成する。
- ・前を見て話す。
- ・時間の余裕が無い。
- ・時間が少ない。
- ・もう少し時間にゆとりが欲しい。
- ・コミュニケーション。
- ・最初から意味をもっと知った上で学習を始めれば良かった。
- ・プレゼンに対する準備をもっとしつかりしていきたい。
- ・1つに絞りたい。
- ・数学についてもわかりやすくレポート書けるようにわかりやすい説明をして欲しい。
- ・わからなかったり、気にならなかったりすることはすぐ調べるという点。
- ・もう少し研究室訪問の時間があって欲しかった。
- ・話し方、下書きの大切さを学び、以後気をつけようと思う。
- ・質問や報告などの準備をしつかり行う。

- ・ 研究室へのメールの送り方がわかった。
- ・ 班との協調やpowerpointの扱い方。
- ・ 発表の意味が無いくらい字は見えないし、声もほかの班の声で聞こえない。発表という形式をとるならパワーポイントを使うなどの工夫が欲しい。
- ・ 特に無し。

【理工学部・機械科学】

- ・ いきなり知らない人とディベートするのはきつい。
- ・ コミュニケーション能力。
- ・ 時間を眺めにする。
- ・ ディベートにもっと緊張感をもたせろ。
- ・ あらかじめからもっと準備をしておく。
- ・ ディベートの説明。
- ・ どれも必要だと思うから改善点はない。
- ・ 大学らしさを知れた。
- ・ 一回しかなかったのかで、何回かしたい。
- ・ 他者とのコミュニケーション能力。
- ・ 課題を易しくする。
- ・ 内容が多かった。
- ・ レポートの書き方についてももう少し詳しくやって欲しかった。
- ・ もう少し準備の時間が欲しかった。
- ・ 課外活動がよかった。
- ・ レポートが少し多かった。
- ・ 大学での学修についてもっと説明が欲しかった。
- ・ 時期が早すぎて協力ができなかった。
- ・ 指導員を少し増やして欲しい。
- ・ レポート指導がもう少し充実して欲しい。
- ・ 時間が少なかったのかで、ディベートまでの時間が忙しかった。
- ・ 友達ができた。
- ・ もっと時間を。
- ・ 時期を変えたほうが良い。
- ・ あの時期にやっても会話が生まれぬ。
- ・ 雰囲気を知る以上の利点はあまり無かったように思う。
- ・ 内容の開示。
- ・ 回数が少なすぎると感じた。
- ・ 発表の場を設ける。
- ・ あまり人との交流がなかった。
- ・ 土曜日の朝から行うのは止めて欲しいと思った。
- ・ 一年に2回しかないのにする意味のなさ。
- ・ いつやるのか分からない。
- ・ 他の学科と比べると時間が少なかった。
- ・ 雑だった。
- ・ もう少しわかりやすいレポートにして欲しい授業もあった。
- ・ もっと自分でやりたい。
- ・ 海行きたかった。
- ・ ディベートではなくもっとほかの方法があったのではないか。
- ・ 皆の前で話せるようになった。
- ・ もう少し時間に余裕が欲しかった。
- ・ 特に無し。

【理工学部・社会基盤】

- ・ 説明をもう少し増やすべき。
- ・ もう少し細かく説明して欲しかった。
- ・ 友達ができていたこと。
- ・ ポスターをもっと上手くまとめるようになる。
- ・ よく知らないまま実習などをすると効果が薄い。
- ・ もう少し精密な調査が必要だった。
- ・ もう少し早く教えて欲しかった。
- ・ 予習復習のやる気くください。
- ・ 話を聞いただけでなくアクティブをもっとしたかった。
- ・ 少し教員のアドバイスも欲しい。
- ・ 目的を明確にして欲しい。
- ・ 自己管理と積極性。
- ・ 内容が濃すぎる。
- ・ 生徒の自主性が養われた。
- ・ 人間関係が良くない場合の措置が欲しい。
- ・ もう少し知識を付けてから見学に行きたかった。
- ・ もっとわかりやすくすすめるべき。
- ・ 発表の緊張を克服するべき。
- ・ 難易度が高過ぎることがある。
- ・ 内容が少し難しかった。
- ・ 講義外活動が多い。
- ・ 教授に方針をしっかりと教えるほうがよい、教授が各週ごとに話す内容が違っていたので注意して欲しい。
- ・ 生徒同士のレベルのしあいをやめて欲しい。
- ・ テストのレベルが低すぎる。
- ・ より興味があった。
- ・ 連絡が少し遅い。
- ・ 生徒が投票すると仲のよい子に投票するのは目に見えて分かっているし、自分のグループに投票する子選もいたので公平性にかけてと思う。
- ・ どのような目的なのか明確でない。
- ・ 担当の先生によって学び方にムラがあること。
- ・ 先生が発表の時に寝ているのが気になった。
- ・ 大きい雑音とピーマンがめっちゃ余ったのでそれを減らして欲しい。焼きそばを味わいたかった。
- ・ もう少し期間が欲しい。
- ・ パーベキューの肉の量が少ない。
- ・ こうも交流できるプログラムにして欲しい。
- ・ 教員の指導の違いが評価に比例すること。
- ・ 友達たくさんできた。
- ・ プレゼンのコツを指導して欲しかった。
- ・ もっと研究室間での施設的な差を無くして欲しい。
- ・ SH道場を通して、大学での学修の在り方がよくわからないと時々思った。
- ・ プレゼントテーションのコツを教えて欲しかった。
- ・ 協働はわざわざ言われるまでもないことが多かった。
- ・ 肉を増やして欲しい。
- ・ もっと情報を分かりやすく共有するべき。
- ・ 基礎的なことは学べた。
- ・ 特に無し。

【理工学部・情報光】

- ・ 他人との協働の大切さが分かった。

- ・ もう少し授業の意図を説明すべき。
- ・ KJ法の「はらわたを取り出す」という作業の正しいやり方がよくわからなかった。
- ・ 他のコースの内容のところが楽しそう。
- ・ 時間が少ない。
- ・ 全体での方法論の落とし込みをもう少し行なって欲しい。
- ・ 自発的に行動すること。
- ・ 他学科との共同作業でもよいと思う。
- ・ プレゼン力をもっと身に付けたかった。
- ・ 講義の評価値がわからなかった。
- ・ 質問できる雰囲気作りがもっと大事な気がする(生徒の問題でもあがあるが。)
- ・ 他のグループの発表に対して質問を考えさせるのが良いと思う。
- ・ 少しコマ数が少ないと感じた。
- ・ グループ製作の時間を少し増やして欲しい。
- ・ 研究室の見学は自分のコースを理解することに役立ったと思う。
- ・ 話を聞くばかりではなく実際に話し合う時間を増やす方が良い。
- ・ テーマを自分で決めた方が断然良いと思う。
- ・ 目的、内容をはつきりとさせて欲しい。
- ・ プレゼンの練習時間を増やして欲しい。
- ・ 宿題の内容を写しやすくして欲しい。
- ・ KJ法の説明がわかりづらかった点。
- ・ 授業時間が長引くこと。
- ・ 積極的に発言して欲しい。
- ・ もっと具体的な題にして欲しい。
- ・ 学生の考えやすいうように教えて欲しい。
- ・ 発表の準備をする期間が短すぎたのが残念だった。
- ・ スライドの講義を詳しく述べる。
- ・ 配属される研究室によって差が激しく、ひどい研究室があった。
- ・ コースによって無いように差がありすぎ。
- ・ 役割が偏りがち。
- ・ 与えられたテーマ悪すぎワロタ。
- ・ SIH 道場のテキストはどこで使うのか分からなかったので使わないなら配布しないで欲しい。
- ・ グループワークの時間の確保。
- ・ 目的をもう少しはっきりして欲しい。
- ・ 発表会の通知がわかりにくかった。
- ・ 講義で与えられたテーマが取り組みにくかったこと。
- ・ レポートの書き方やプレゼンテーションの仕方のプリントがあったら見直せたりできてよかったです。
- ・ プレゼンの課題で、プレゼンの題目はもっと明確にした方がよいと思う。
- ・ 授業の連絡をしっかりとって欲しい。
- ・ 授業に行かなくても単位が欲しいなあ、単位は大切なんだよなあ。
- ・ 内容や目的がはつきりしないときがあった。
- ・ 文書作成ツールなどについてももう少し具体的に説明したら良かった。
- ・ 発表するときのマイクの性能を向上して欲しいと思った。
- ・ プレゼンの題が抽象的で理解しづらかった点。
- ・ 話し合いのテーマ「徳大生としての在り方」が大難題であるのもう少しを深めたい。
- ・ プレゼンまでの時間が少ない。
- ・ もっとプレゼン発表の機会を増やすほうがいいと思う。
- ・ スライドで発表する際にポインタや棒のような物があれば良かった。
- ・ 段取りが悪かった。
- ・ レポートをなくして欲しい。
- ・ もう少しグループワークに使える時間が欲しい。

- ・ 考えるべきテーマをしっかりとしたものにする。
- ・ もっと生能に興味のあるテーマにしたほうが良い。
- ・ プレインストロミングとKJ法についての説明をもっと欲しいと思った。
- ・ SHのプログラムを見直しては？
- ・ プレゼンテーションのテーマを考えにくかった。
- ・ グループでのディスカッションの題をわかりやすくすること。
- ・ アクティブラーニングはプレゼンを体験させるという意味で良かったが、研究紹介などは1回生の時にやっても4回生になる時には何も覚えていない可能性が高いので、もう少し時期を送らせてもよいと思う。
- ・ プレゼンについて1回ではなく何回かに分けて教育すべきだ。
- ・ グループで何かをするときに、責任を持って積極的に協力することができた。
- ・ 説明が長く眠った。実際に作業をしながら説明をして欲しい。
- ・ コミュニケーション苦手な人のことも考えるべき。
- ・ 発表が聞かえにくい点。
- ・ 特に無し。

【理工学部・電気電子】

- ・ 知識が身についた。
- ・ グループ決りがわかりにくかった。
- ・ 皆で協力する機会を増やす。
- ・ もう少し為になることをしたい。
- ・ 授業が多い。
- ・ 回数が少ない。
- ・ これから必要な知識を知れること。
- ・ 準備時間が短すぎると感じた。
- ・ 準備期間がもう少し欲しい。
- ・ 時間が短い。
- ・ グループワークがよい。
- ・ もっと授業回数を増やす。
- ・ もう少し深く掘えられるようにしたい。
- ・ ポスター発表の時間がもう少し欲しい。
- ・ プレゼンのグループ作り。
- ・ 研究室の紹介は他でできちんとやって欲しい。
- ・ 4月のオリエンテーションは時期的にとっても厳しい。
- ・ 来ていたし、期末前にプレゼンは時期的にとっても厳しい。
- ・ もっと大勢の前でのプレゼンテーションを経験するべきだと思う。
- ・ 意味のある講義にして欲しい。
- ・ プレゼンテーションをしたときに、スラスラと自分の言葉で伝えることができなかった点。
- ・ 短期間で終わらすべき。
- ・ 結構難しい。
- ・ レポートの書き方。
- ・ パワーポイントを作る時間をもう少し長くすること(研究室訪問から発表までの期間をもっと長くすれば、職員同士で話し合い、考える時間が増えるので、よりよい発表ができたかもしれない)
- ・ 研究内容が難しかった。
- ・ もっとプレゼン力を上げる必要があると思った。
- ・ もっと学生が自主的に学修できるプログラムが良い。
- ・ 内容が大学院のものなので難しかった。
- ・ 皆ともっと協力して計画を立てれば良かったと思った。
- ・ もっと自分から行動できるようにする。

- ・ 特に無し。
- 【医学部・医学科】
 - ・ もっと自分の意見を伝えられるようになる。
 - ・ 協同性が身についた。
 - ・ スピーチなどが長く、あとのプログラムの進行に支障が出ていた点。
 - ・ もう少し話し合いの時間があればいいと思った。
 - ・ もっと学生の自主性を養う取り組みを行って欲しい。
 - ・ 学修がパターン化されてしまっていて新鮮味がなかった。
 - ・ 事前学習と実際に行ったものの関連性が希薄。WSの時間が長過ぎる気がする。
 - ・ 課題が多かった。
 - ・ 皆が積極的に参加したくなるためにももう少し内容に変化が必要だと思う。
 - ・ 徳大のお偉いさん方が思いつかないようなことを、まだ専門的なことや、行政の仕組みについて理解していない人達に思いついてみる、議論してみろといっても何も成されるわけがないことは自明。酒と金と女と遊ぶことしか考えていない人達にSHH 道場のアクティブラーニングのよいうなことをやらせても、浅はかな意見しか出てこない。まともなことを発言できる人はまず徳島大学に来ていないだろう。基礎となる知識がなければ、いくらSHH 道場をやらせようとも成果は出ない。教授の自己満足に終わるだけ。カンニング黙認の実験動物学の試験を廃止し、医と法の授業で期末試験を課し、行政について一定の理解をさせ、そのうえでSHH 道場を実施すれば良いと思う。
 - ・ 豊かな一個人の戯言であるため、現状何の問題もなければこのままでも構わない。
 - ・ 時間が長い。
 - ・ まだ専門的なことを学んでいない一年生では、出る意見が似たり寄ったりになっているのではなにかと感じた。
 - ・ ワークショップで積極的に参加できている人とあまり積極的ではない人との差が大きかった点
 - ・ 課題内容が漠然としている点。
 - ・ 医歯薬の関わりは正直無かった。
 - ・ プレゼンテーションスキルについてはあまり身に付か無かった点。
 - ・ もう少し色々なジャンルのの方の講演が聞きたかった。
 - ・ もう少しSHH 道場を行う回数を増やした方が効果的ではないか。
 - ・ 時期が遅いと感じるプログラムもある。
 - ・ 事前学修はする人としらない人の差が大きくなる点。
 - ・ 課題が曖昧過ぎた。
 - ・ より早い時期にあった方がよかった。
 - ・ 地域医療についての理解。
 - ・ 地域医療について考えるきっかけとなりその方面の学問も学べたらなと思った。
 - ・ 特に無し。

【医学部・栄養学科】

- ・ 時間が長い。
- ・ 役割が無い人の活躍が減る。
- ・ 疑似チーム医療がやりやすかった点です。
- ・ 内容が取っ掛かりにくい。
- ・ もっと時間を長くする。
- ・ みんなが積極的に参加できていない。
- ・ 班に知っている人が1人は欲しい。
- ・ 討論を学科でもやるべき。
- ・ 他の研究室についてもみてみたかった。
- ・ レポートの書き方やプレゼンテーションの方法は特に指導がなかったように感じます。その指導もあると良いかと思えます。

- ・ 事前学習の量が多い点。
- ・ 実施回数が少ない。
- ・ 最初の講演会が長すぎる。
- ・ 講義がどんな重要性があるのかをはっきりと示してもらいたい。
- ・ スライドなどの資料が手元にあると嬉しいです。
- ・ オープンキャンパス時よりも、もう少し色々な研究室が見れたらよかったです。
- ・ 自分が行った以外の研究室のことが全然わからないうままだった。
- ・ “事前学習をしていないと思われる学生がいたため、KJ法の途中で討議が終了しました。プリントにまとめてくださってありがとうございますですが、プレゼン時に少し困ったので、当日に時間を少し取って簡単な説明をしてほしいです。
- ・ 私のいたグループだけかもしれませんが、時計係は決めなくて良いと思います。
- ・ 夏休み中にするのはやめて欲しい。
- ・ 回数が少ない。
- ・ 特に無し。

【医学部・看護学科】

- ・ 他の学部との講義をもっと増やして欲しい。
- ・ もう少し道具をいろいろ使えばいいと思う。
- ・ 時間が長い。
- ・ 目的があまりわからない。
- ・ みんなのやる気がなさすぎるので、もっとアクティブな活動がしたい。
- ・ 他学部、他学科ともっと関わる時間を作る。
- ・ 文章力がついた点。
- ・ すべきことが抽象的だった。
- ・ もう少し資料を作成する時間が欲しかった。
- ・ チーム医療について学べた。
- ・ 目的がよく理解できなかつた
- ・ レポートの書き方。
- ・ もう少し、他学科との交流の時間を増やしてもらいたい。
- ・ 夏休みを使ってワークショップを行った点。
- ・ チーム医療入門のワークショップのテーマが、もう少し目指す職種によって考え方に差がでるようなテーマであってほしかった。今回のテーマだと、学科などが違っても考えにあまり差が無かった。
- ・ 発表の仕方がどのグループも伝えたいことを伝えられていない気がしたので、発表の仕方が学べれば良いと思った。
- ・ どのようなことをするのかの説明が不十分だったように感じる。
- ・ 交流しやすい場を提供してほしい。
- ・ 事前学習や事後レポートの説明が曖昧なのでやりづらいつらい部分があった。
- ・ 時間無い。
- ・ チーム医療入門のワークショップでの他学科との交流の時間が短かった。
- ・ 時間配分。
- ・ 時折指導に余計な言動が含まれていた。
- ・ いろんな学部の方と交流ができた。
- ・ もっと回数が欲しい。
- ・ チーム医療とはどんな感じなのか少し感じられた。
- ・ チーム医療入門でもっと役割を發揮できるようにワークショップにして欲しい。
- ・ 他の方の課題に対してもう少し時間をかけて取り組まないで、グループメンバーと深く関わる事が出来ず、思うように発言できない人いるため、1日だけというのでは改善すべきだと思う。

- ・ レポートの提出をしているが、それに対するリプライが無い、又は遅い、又は遅いと感じている。返却が遅く、復習するには時間が経ち過ぎておりそれならいっそのリプライが無くてもいいのではないかと
思う。毎回レポートを出すのではなく、数回に一度ぐらいのペースにして、それら全てを迅速に返却するべきだと思う。
- ・ もう少し時間を増やしても良いと思う。
- ・ もう少し早めにレポートの書き方の講義をした方がよいと思います。
- ・ 授業の時間の長さ。
- ・ コミュニケーション力の向上。
- ・ 他学科との交流がもう少しあればよいと思った。
- ・ 特に無し。

【薬学部】

- ・ 前期で終わってしまふこと。
- ・ 意見がたくさんあって、よかった。
- ・ もっとたくさんの方が参加できるように工夫をしたほうがよいと思う。あまり話していない人もいた。
- ・ 基礎を少し学べた。
- ・ グループワークでは協力しやすしい雰囲気作りも意識してほしい。
- ・ 期間をもう少し短く短くした方がよいと思う。
- ・ 間隔が空きすぎている。
- ・ 全員が積極的に参加できていない。
- ・ 普段の講義の学習方法についての説明がもっとあつてほしい。
- ・ レポートの書き方を学ぶ機会がなかった。
- ・ もう少しチーム医療入門の時期を早くしてほしい。
- ・ レポートの書き方をちゃんと説明してもらふ機会がなくなるとよく分からないまま書いているためしっかりと説明してくださった方がありがたい。
- ・ 先輩からの話を聞く機会が欲しい。
- ・ 考えのまとめ方。
- ・ SH 道場では、もっと学科に関連した体験を行える方がよい。
- ・ 最後の合同ワークショップの際に、同じ学科が複数人いると、そこだけで進む場合があると思うので、できる限り学科がバラバラになるように改善した方がよい。
- ・ 人数が多かったため、何もしなくてもいい人が出てしまったのが問題点だと思う。
- ・ 発表者が限られる。
- ・ 議題が、議論するには少し難しかったように思う点。
- ・ 教員によるアドバイスが少なかつた。
- ・ 医療の現場に就かない人にとっては必要なのか疑問である。
- ・ もっと医療に関係した内容について、他学部と交流したい。
- ・ 夏休みの真ん中に行うのは帰省や留学の妨げになるので夏休みの初めが終わりのどちらからかにしてほしい。
- ・ 動画を見るサイトがわかりにくい。
- ・ もっと他学部との協働実習などを行つてもいいと思う。
- ・ 創製薬科学科への対応。
- ・ 全体的にやり方を説明だけして、実際に行う機会が少なかつたので、活用する機会をもっと学生が主体的に参加できるプログラムを増やしたほうがよい。
- ・ 班ごとにはなしあふ時間見知りがない。
- ・ チーム医療の授業は、1回だけでなく複数回行う方がより深い議論を行えると思った。
- ・ もっと他の学部と関わられるプログラムを増やしてほしい。
- ・ 文章力。
- ・ チーム医療入門の事前学習で、インターネットのページのごく見たら良いかいまいち分からなかつた。
- ・ 特に無し。

- ・ もう少し数を増やした方がよいと考える。
- ・ 特に無し。

【医学部・放射線科】

- ・ 短期研究室体験はもう少し早く始めたらいいたいと思う。
- ・ もう少し他学部との交流授業を増やしてほしい。
- ・ 効率が悪かつた。
- ・ 専門すぎない内容なので、少しだけわかりやすくしてほしい。
- ・ 研究室体験は一年生には早すぎます。
- ・ 取っ付きづらかつた。
- ・ アイスブレイクが欲しい。
- ・ 専門性が高いため、発表において相手に伝えることが難しい。
- ・ それぞれの職種の仕事も関連づけた授業を行って欲しい。
- ・ 放射線について何も知らない状態からのスタートであつたため、研究内容を理解するのが大変だつた。
- ・ 段取りをよくする点。
- ・ 夏休み中にプログラムを入れたい。
- ・ 興味も湧いた。
- ・ 体験開始時期が少し遅かつた。
- ・ 全く専門知識知識のない状態から、プレゼンの計画・準備をするのはかなり大変だつた。まず初めに全員で基礎を学んでから研究室体験を行つた。
- ・ もう少し早く終わればよいと思う。
- ・ 特に無し。

【医学部・検査科】

- ・ レポートの書き方はいまだにわからない。
- ・ 時間が少し短い。
- ・ 講義をただ行うのではなく、その講義の重要性をはっきりと示してもらいたい。
- ・ 1グループ6人であつたので、間割ることができなかつた学部が一部あつた。
- ・ 討論の中でもう少し積極的に参加すべきだつた。
- ・ 仕事をやる人とやらない人がいたのが少し残念だつた。
- ・ 特に無し。

【歯学部】

- ・ もう少し、さまざまなデータを知らる機会にしたかかつた。
- ・ もっと楽しくできるやつが良い。
- ・ 素晴らしい。
- ・ 講義を事前にチェックし！意欲を。
- ・ 身近な問題から議論したい、その後に専門的なことを学ぶ方がよい。
- ・ 授業の目的や意味をもっと明確にして欲しい。
- ・ 講義の授業はあまり身にならないなかつた気がした。
- ・ 少し時間が長い気がした。
- ・ レポート等の評価が悪い。
- ・ 学生同士で意見を述べ合うワールドカドカド形式の授業がもう少しあつてもよかつたのではないかと
思う。
- ・ カレポート書き方について、もう少し詳しくやつて欲しい。
- ・ 話を聞くだけでなく自分たちで考えるプログラムも増やしたいと思う。
- ・ レポートの評価があるかどうか気がなる。
- ・ パンフレットがわかりにくい
- ・ もう少し具体的に示していただきたいだつた。

3) SIH 道場教員アンケート結果概要

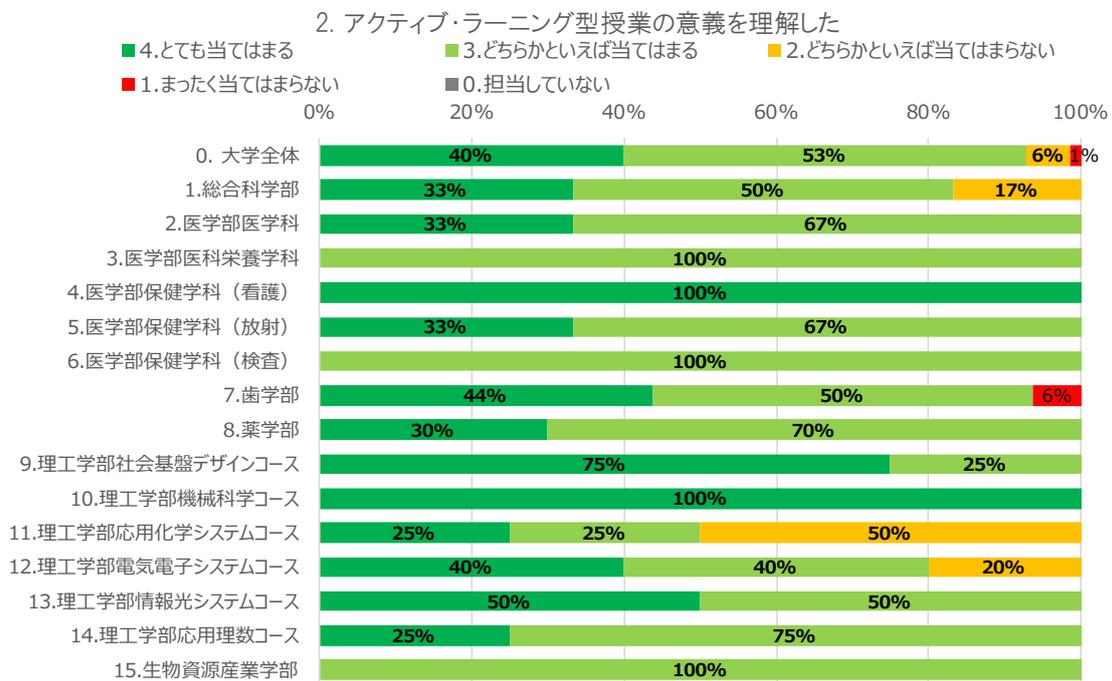
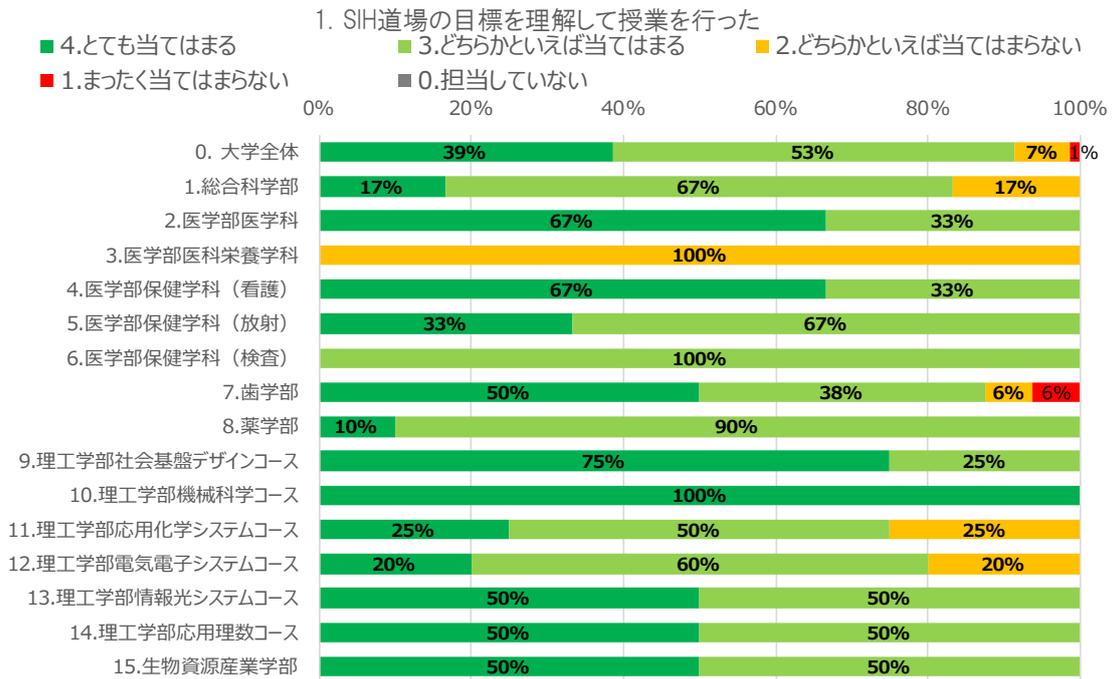
教員アンケートは、各学部・学科の SIH 道場終了後に実施している。教員は、到達目標に関連する、「1.SIH 道場の目標理解」「2～4.アクティブ・ラーニング型授業の意義理解・実施・導入」「5～7.反転授業の意義理解・実施・導入」「8～10.ルーブリックの意義理解・使用・導入」「11～13.学生の学修の振り返り」「14～16.自らの教育の振り返り」「17.SIH 道場の満足度」についての 17 設問に 4 件法（一部 5 件法）で回答した（回答率 40.0%）。

主だった項目について結果を確認すると、「1.SIH 道場の目標理解」については、「とても当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」を選択した教員が、最も高いプログラムでは 100%、最も低いプログラムにおいて 80%大学全体では 92%となっており、多くのプログラムで、SIH 道場の意義や目標についての理解が進んでいる結果になった。この結果は昨年度とほぼ同じ値であり、4 年目を迎えた SIH 道場への理解浸透は成熟した段階にあると言える。

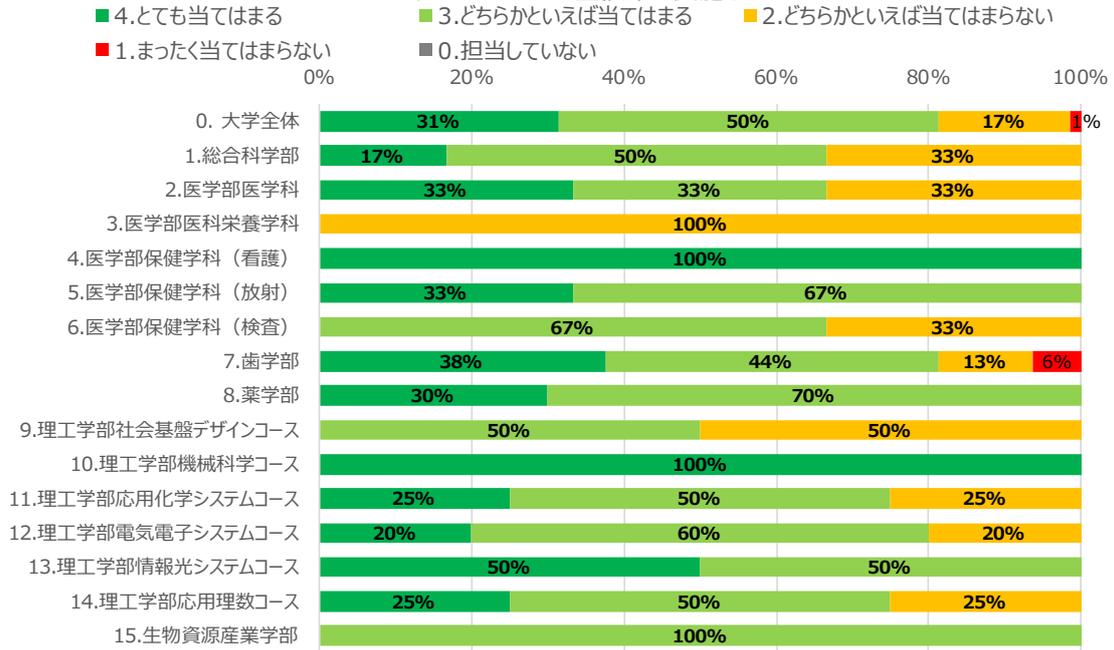
さらに、平成 30 年度の教員アンケート結果から見える傾向の 1 つに、ルーブリック評価と振り返りに関する意識の高まりが認められる。昨年度（平成 29 年度）の調査結果では「反転授業やルーブリックについては、意義の理解を尋ねた項目での肯定的な回答はそれぞれ 58%、71%と比較的低い割合に留まっており、今後の改善が求められる」と指摘されていた。これらの項目について、「5.反転授業の意義を理解した」「6.反転授業を実施することができる」の項目に関しては、それぞれ 60%、50%といずれも例年並み¹であるが、ルーブリック評価や学修の振り返りに関する項目では、昨年度と比較して 3%から 17%の肯定的意見の高まりが確認された²。ルーブリック評価や学修の振り返りについて理解の高まりが窺える一方、「13.学生に学修の振り返りをさせることを他の授業で導入したい」は 68%から 61%、「14.自らの教育経験の振り返り（e ポートフォリオ等）を行った」は 59%から 50%へと肯定的意見の割合が低くなっている。このような結果から、ルーブリック評価や学修の振り返りについて、教員間での関心の高まりがある一方で、その具体的な導入・実施に関しては課題が残る現状が明らかとなった。この点に教員の需要があることを考えると、平成 31 年度はルーブリック評価に関する FD を実施するなど、支援体制を検討・充足させていく必要がある。

¹ 大学全体の割合について、平成 29 年度は「5.反転授業の意義を理解した」が 58%、「6.反転授業を実施することができる」が 49%であった。

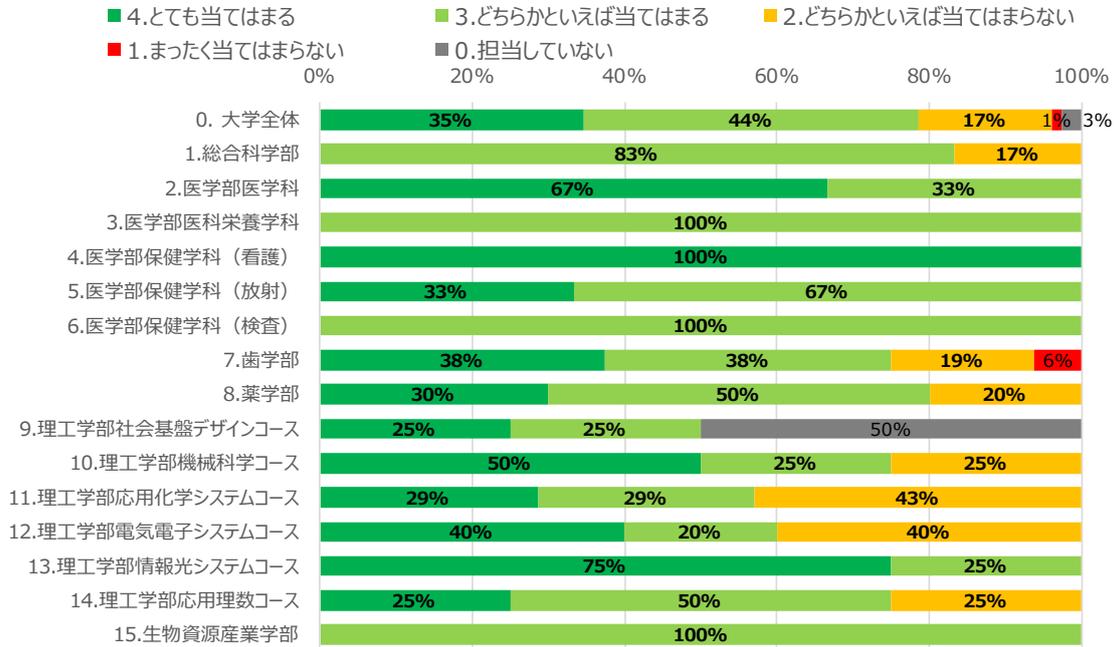
² 「8.ルーブリックの意義を理解した」は 71%から 79% (+8%)、「9.ルーブリックを用いて学生を評価することができる」は 67%から 72% (+5%)、「10.ルーブリックを担当する他の授業で導入したい」は 52%から 55% (+3%)、「11.学生の学修に振り返りをさせる（フィードバックを行う）ことができる」は 67%から 84% (+17%)、「12.学生に学修の振り返りをさせることの意義を理解した」は 80%から 85% (+5%) という結果であった。

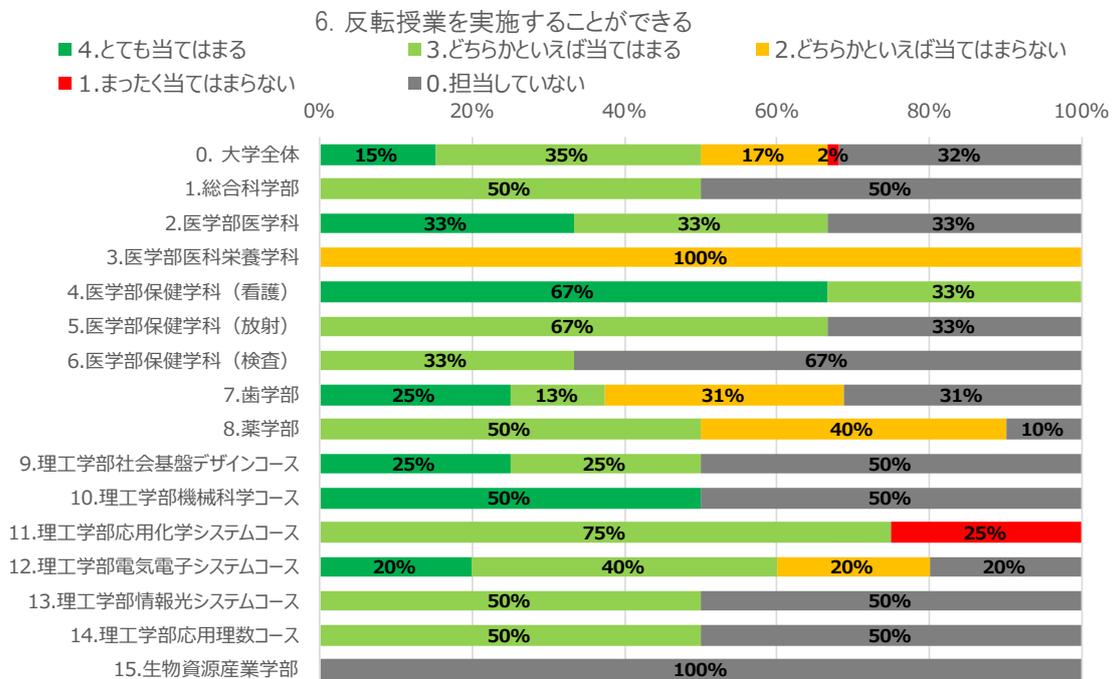
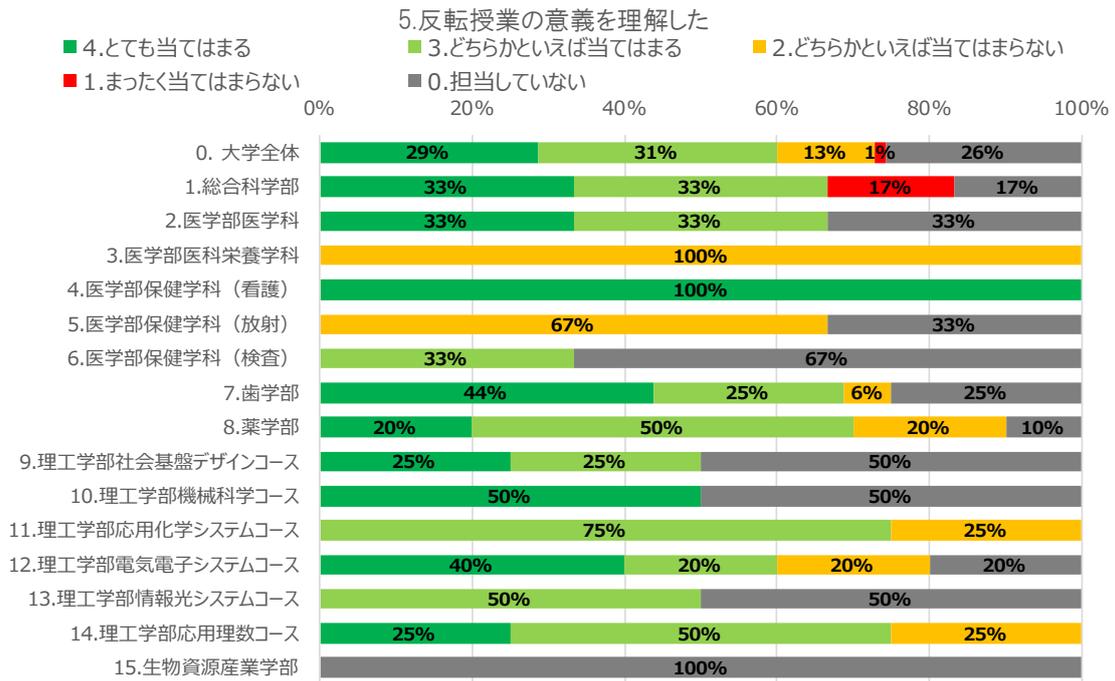


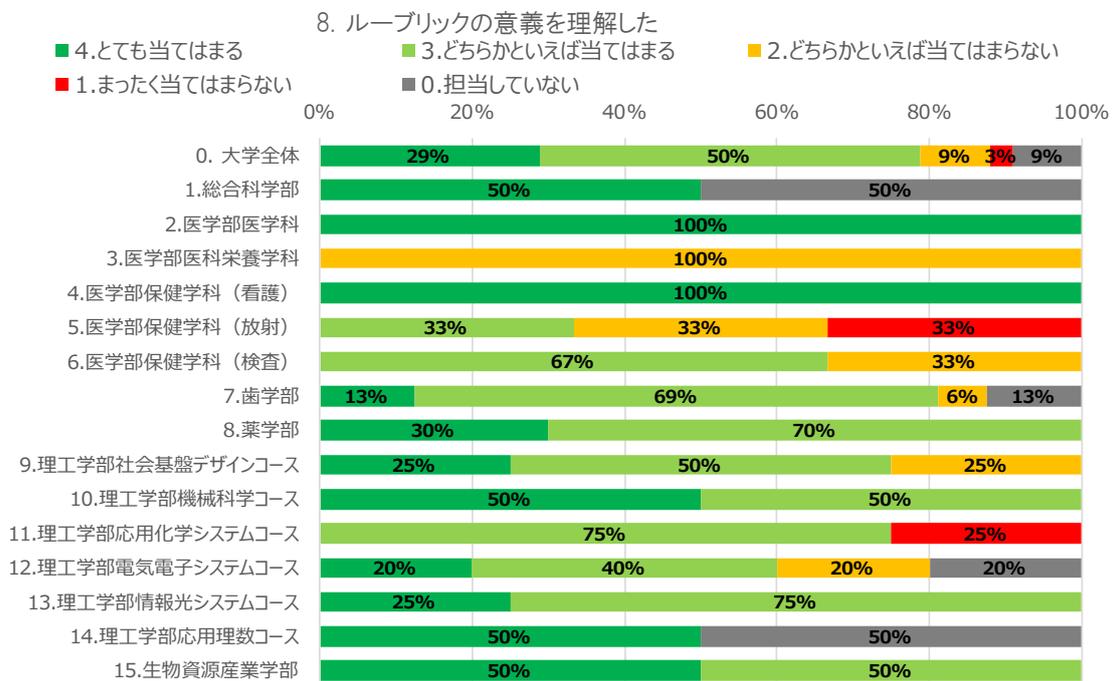
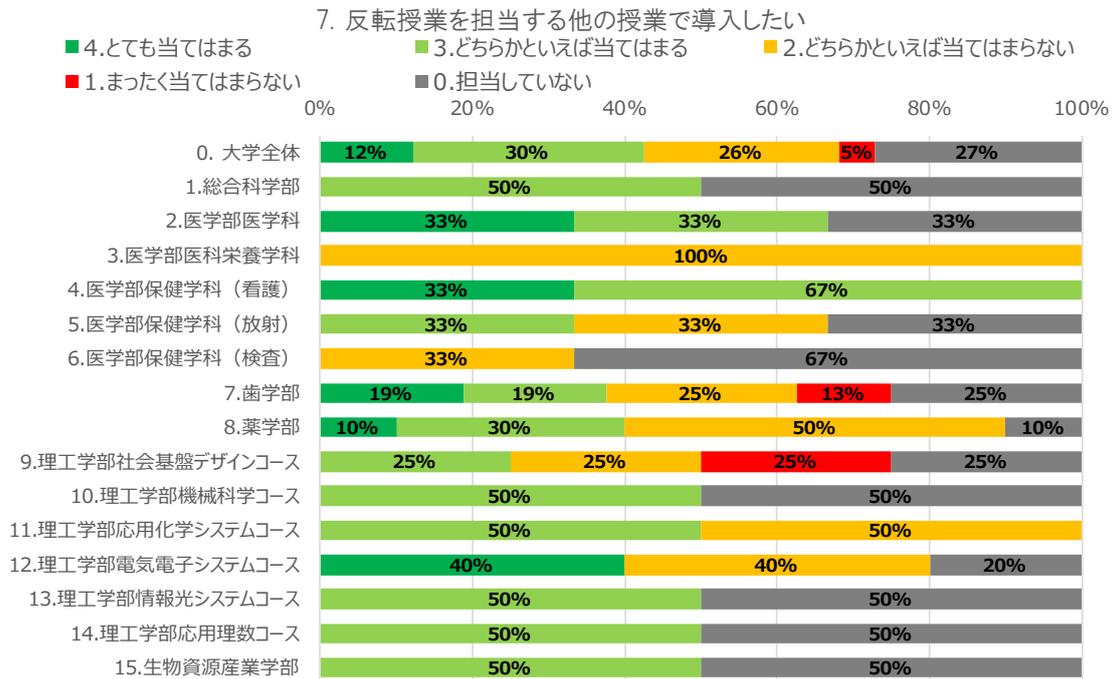
3. アクティブ・ラーニング型授業を実施することができる

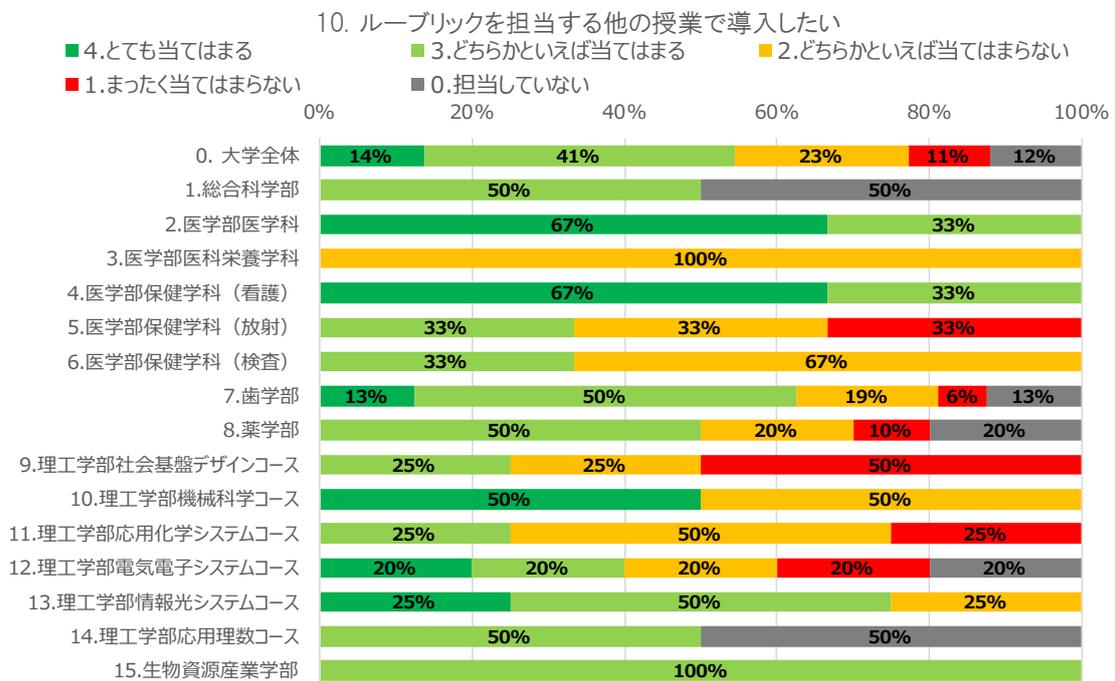
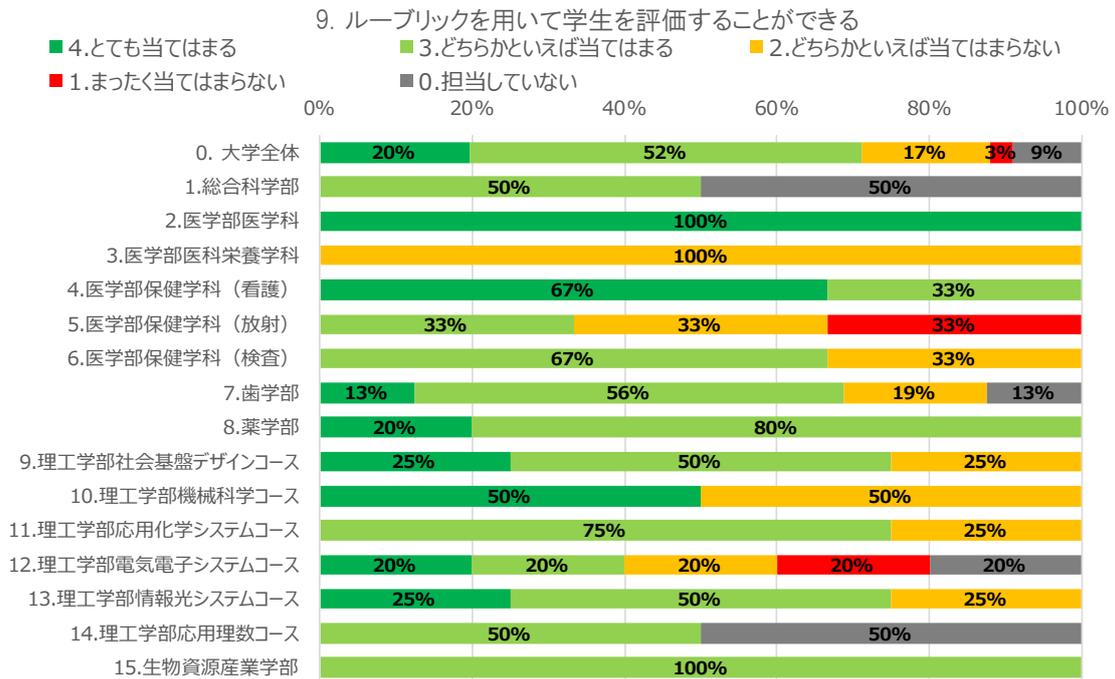


4. アクティブ・ラーニング型授業を担当する他の授業で導入したい

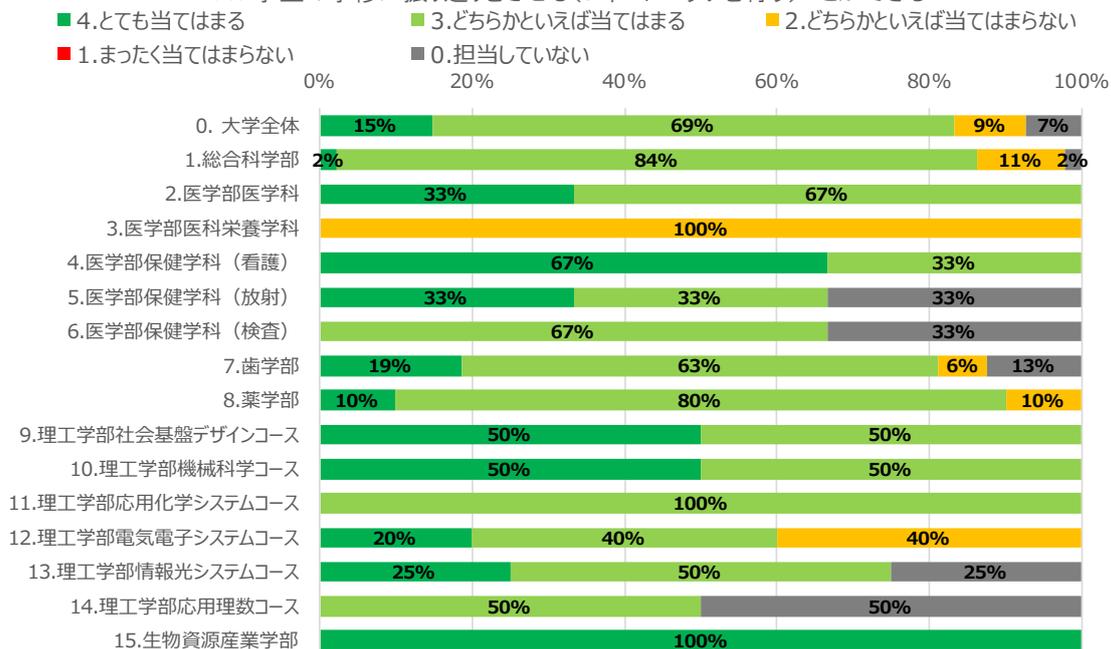




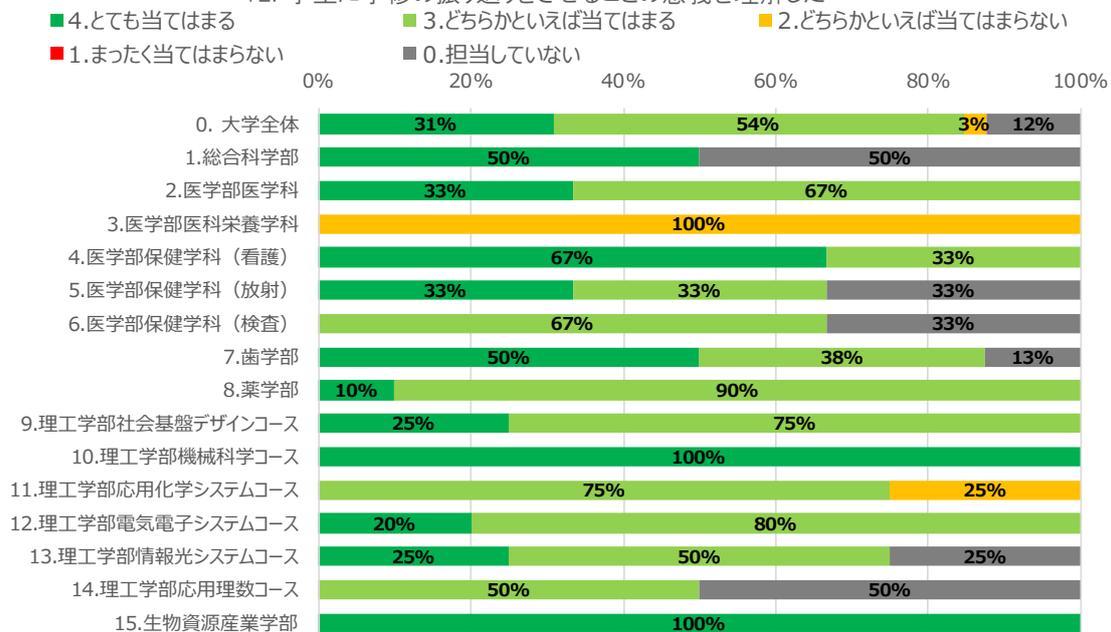


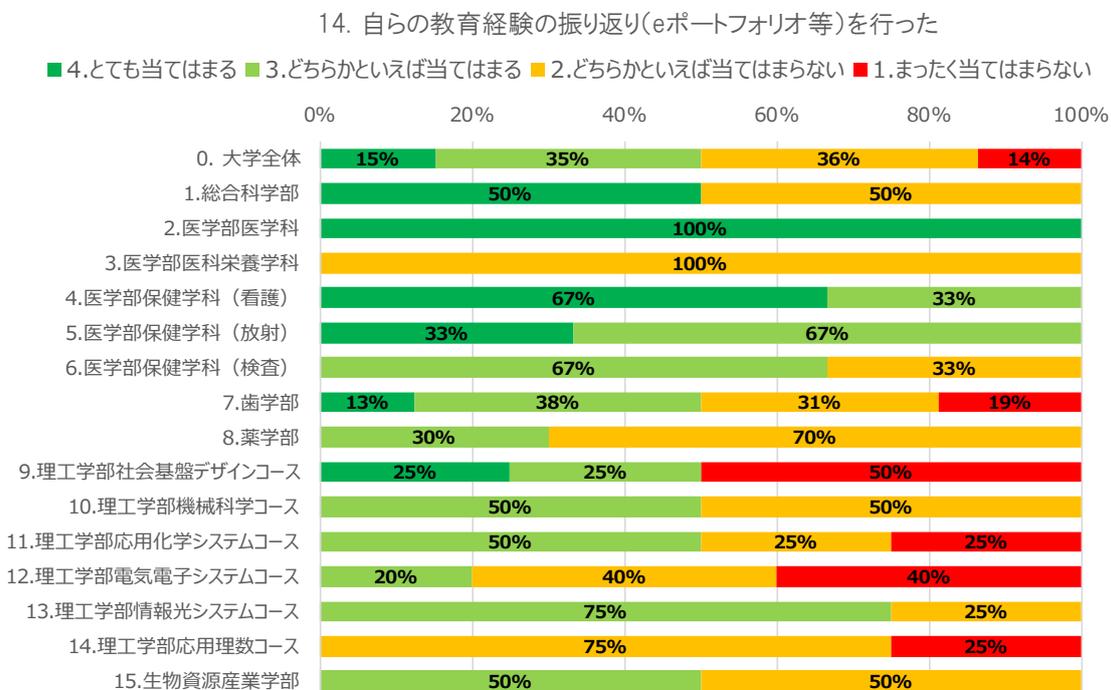
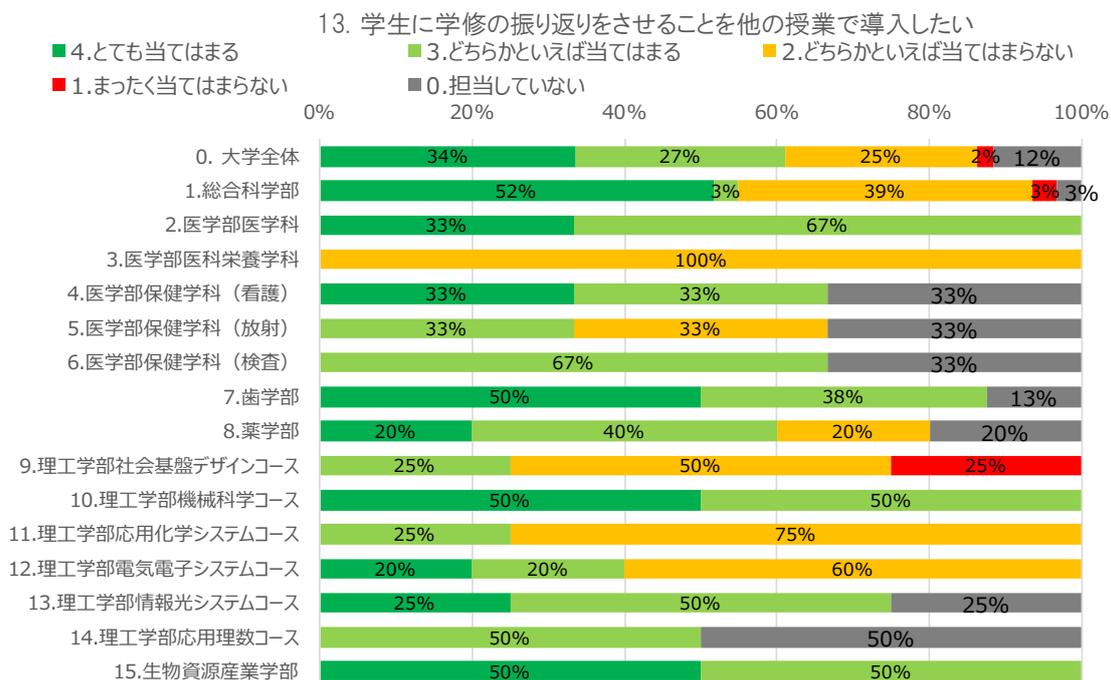


11. 学生の学修に振り返りをさせる(フィードバックを行う)ことができる



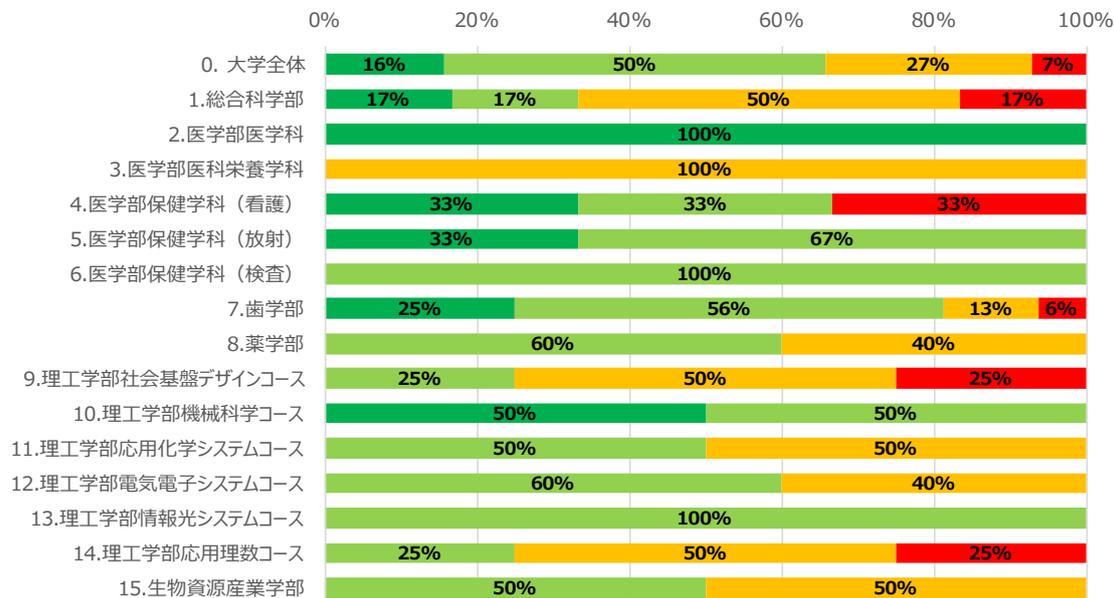
12. 学生に学修の振り返りをさせることの意義を理解した





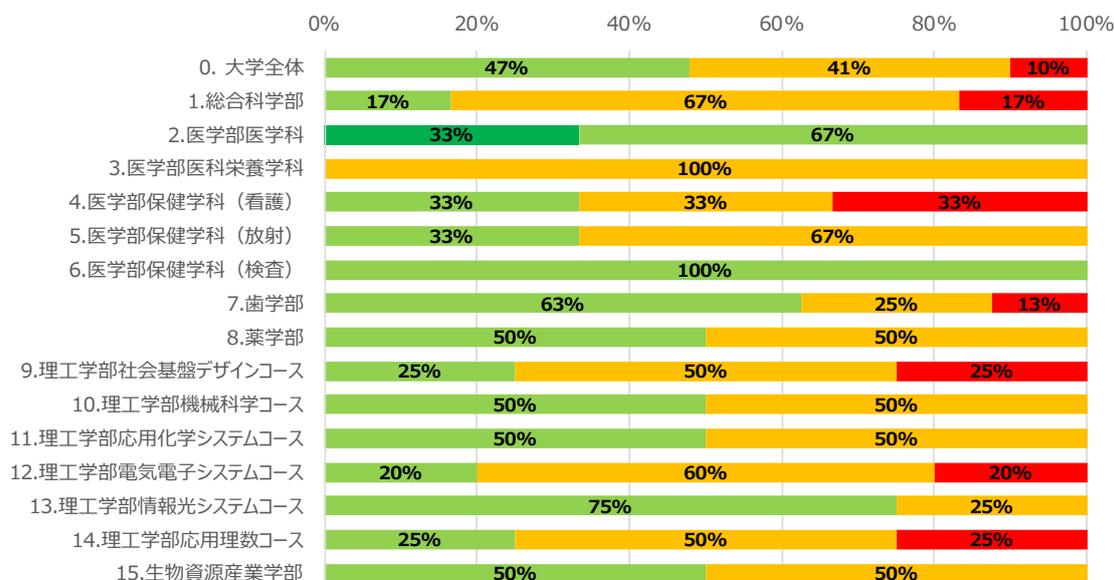
15. 自らの教育経験の振り返り(eポートフォリオ等)の意義を理解した

■ 4.とても当てはまる ■ 3.どちらかといえば当てはまる ■ 2.どちらかといえば当てはまらない ■ 1.まったく当てはまらない

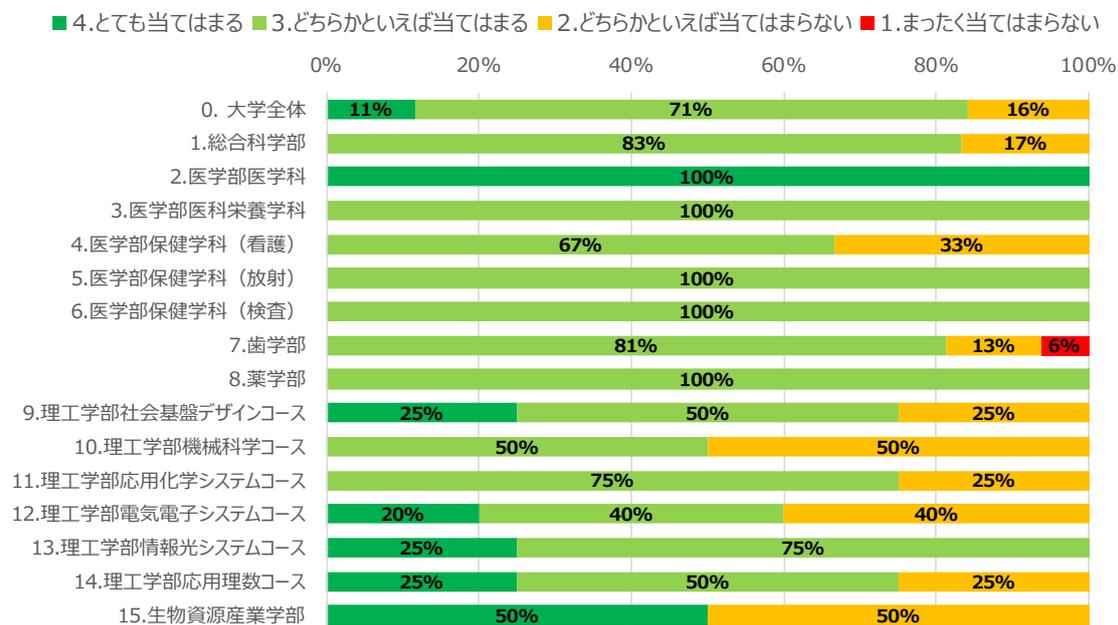


16. 自らの教育経験の振り返り(eポートフォリオ等)を担当する他の授業で行いたい

■ 4.とても当てはまる ■ 3.どちらかといえば当てはまる ■ 2.どちらかといえば当てはまらない ■ 1.まったく当てはまらない



17. SIH道場の教育プログラムは全体的に満足できるものであった



- 教育に有効なプログラムだと思つたため。
 - それなりに機能した教育プログラムだと感じたため。
 - 学生の提出したレポートを読んで、学部を超えた学生間の交流によって、学生の視野が広がったことが読み取れたから。
 - 生徒が主体となったプログラムであったため。
 - 学生に学修の振り返りをさせることで、学生の理解が深まった。
 - SIH 道場を通して、診療放射線技師という医療スタッフに対するモチベーションを学生に対して高めることが出来た。
 - 短期研究室体験報告会にて、学生に質問させるようにしたところ、活発な質疑応答が行われていた。これからの学習に対する意識が向上したように思える。
 - 第12回蔵本地区1年生合同チーム医療入門ワークショップのチューターを担当したが、異なる学科の学生同士が協同して考えたり、発表したりして、チーム医療の大切さを実感できたと思われた。
- ◆ 「2. どちらかといえば当てはまらない」「1. まったく当てはまらない」を選択した理由
- 教務員としての参加のため、履修指導と引率しか担当していないため。
 - 意義が分からない内容をいくつが残しているため。
 - 2ヶ月間のSIH道場で、本当に「鉄を熱いうちに打て」といえる効果があったように感じられなかった。
 - 教員側の連携、準備の不足が目立ちました。
 - 労力のわりに成果がない。
 - 歯学部の場合、早期体験の2コマが該当しており、当分野では2人の教員がそれぞれ、1コマずつ担当して行っています。SIH道場の考え方、基本コンセプトは理解できるのですが、実際、歯学部学生に行われる SIH 道場の全体像と具体的な内容や、担当する早期体験との位置付けについて少し不明瞭であったので、上記質問群に対する回答が困難でした。
 - 歯学部歯学科の学生が私が担当した部分以外に、SIH 道場の教育プログラムでどのような教育を受けているのか分からないから。
 - よくわからない。
- 問3. アクティブ・ラーニング、反転授業、ルーブリック、学生・教員の振り返り等について、意見がありましたらお書きください。
- 必要であることは理解しているが、少々（かなり）負担が重い。
 - 方法論は方法論以上の意味を持たないので、必要以上に強調するのは愚かでは。
 - 教育効果のあるものは担当している講義に積極的に取り入れたい
 - ルーブリック評価を導入することには、非常に注意が必要である。試験での評価にプラスアルファをする場合、学生の意欲を高め、個人に合わせた対話的な指導を行うことが効果的であると考える。一義的にかつ定性的な評価項目を作成した場合のルーブリックは、機械的となり、学習効果においてマイナスになると考える。

- ⑱ ⑰の項目を選択した理由をご記入下さい。
- ◆ 「4. とても当てはまる」「3. どちらかといえば当てはまる」を選択した理由
- 学生の入学時、及び今後の学修に、たいへん意義のあるプログラムであるから。
 - 実践できていないところもあったため。
 - レポート公表などはこれに該当する。
 - (関与した) 校外学習については、事前授業が学生の課題への取り組みにつき反映されている。課題の量、時間に対してやや詰込み過ぎな点は改善の余地あり。
 - 今年度、良いプログラムを設計できたため。
 - 従来の講義で十分と思います。
 - 他の科目の見直しを考えた。
 - 学生の文章作成能力よりも、私自身の文章評価能力が格段と向上したのが一番の成果。
 - 現状では、そのような時間が取れない。
 - 受講者数と時間の制限から。
 - SIH 道場の講義を担当することで自分の勉強にもなったから。
 - ふりかえりは、非常に重要だと思いますので、コストをかけずに毎回必ずできるようにしたいです。
 - モチベーションが高い1回生の時に、早期体験（研究室訪問）とそれに伴うグループディスカッション、プレゼン、文書作成を体験させていくのは、後の学習に大きくプラスに働くと考えたため。
 - 学生が将来行いたいと思う分野や今まで興味をもっていなかった分野の教員と触れ合うことで、興味が深化したりひろがったりする様子が見られたこと。
 - 毎年、プログラム内容が充実してきている。
 - 学生が積極的に多職種学生間でディスカッションし、取り組んでいたため意義があると感じた。
 - 学生の意欲によることもある。
 - 今回初めて KJ法を用いた授業を経験した。学生の自主性を強く感じた。
 - 各部署の独自性に任せているところがあるが、既存のカリキュラムを SIH 道場と読み替えることで意識付けがたかまつた。
 - ポートフォリオの利用方法がよくわかっています。ましてや e とすると。
 - 特になし。例年と同様。
 - よい取組みだと実感しました。
 - 初年次教育として適したものだと思うから。
 - 大学ならではの専門分野に触れるとともに、能動的に考察し、アウトプットできるようなプログラムになっていたと思います。また、現代社会においては、SNSの普及に伴い、文字によるコミュニケーションが中心となりがちですが、学生間で直接コミュニケーションをとり、協力してプロジェクトを作成する力を養うよい機会になったと思います。
 - 回を重ねることで教員の理解が深まり、学部が提供するプログラムの内容が改善されているように感じる。
 - 学生の主体性を養うのにまだまだ改善点があると思つたから。

- 私は数学の教員ですが、数学で演習問題を解かせる、本読みのゼミを行なうという、何十年前から数学教育で標準で行なってきた教育は、アクティブ・ラーニングであり反転授業であり、十分効果の高いものであったと思います。現在では教員数が不足して満足できておりませんが、今のSH道場がこうした従来型の教育よりアクティブ・ラーニングや反転授業という見地から見ると、優れているようにも感じられませんでした。ルーブリックや学生・教員の振り返りに関しても、大学初年級の教育としての効果がどれほどあるのか、従来型の演習やゼミより優れているのは何なのか、学術的な調査を踏まえた査読論文があれば勉強したいと思えますので、ご教授いただきたいと思えます。現在、徳島大学の人的リソースは限られている中で、SH道場を行なう意義が私には最後までわかりませんでした。
- 人数が多い講義で、意義のある反転授業は難しい。
- 文章力を向上させるには、時間数が少ない。他の教養教育科目との水平連携が必要。
- アクティブ・ラーニングや学生の学修の振り返りは大変意義があると考えますが、反転授業はかなりアドバンスレベルと考えると、初めて学修する内容については、今の学生にとってハードルが高いと感じます。一度習った後の応用編として取り入れるのであれば、意義があるとは思いますが、ルーブリック評価も、自分の担当する講義内容を考えてみますと、その評価項目は多岐にわたります。大変困難と感じました。教員の振り返りは各自行なっていることと思えますので、eポートフォリオが必要かどうかはその方略に向き不向きがあると考えますので、各人が判断した方が良いのではないのでしょうか。
- アクティブ・ラーニングや反転授業は現在、通常の授業科目でも試行しています。しかしその評価は、科目によってはルーブリック評価では不十分な点も多く、まだ導入していません。
- 学術的好奇心のもとに自ら自由に勉強してこそ身につくものだと思います。「振り返りをさせる」ということは、学生側から見ると「させられた。やらされた。」となるわけで理想的な勉強法ではないように思います。最近では、教育学の手法・技法といった形式を意識しすぎない傾向にあるように思います。
- 薬学部に関しては、徳島大学は上記の取り組みが多い方だと思う

③ ②について、テキストが使いやすいかった、または使いにくかった理由を、自由にお書きください。

- QRコードの記載は使いやすい。
- レポートの書き方に関しては、昔、工学部で作っていた「学びの技」はじめの「一歩」の方が良かったので、コピーして配布した。
- 文章が多く、学生の日本語能力から考えて本当に理解できるのか疑問。
- 疑問が生じたとしてどこを読めば良いかわかりづらい。本文の体裁が初学者にはなじみの薄い構造である。意見が分かれるような内容を確定的に書いてある。
- テキストに沿ってそのまま講義を進めることができたから。
- ごめんなさい、SH道場のテキストがあることを把握していませんでした。
- 一通り見ましたが、SH道場として活用できるものには感じられませんでした。
- ほとんど見ずに進行了た。
- 説明がわかりやすい。
- 困ることはなかった。
- 使う必要性を感じなかった。
- 読んだのですが、今回の早期体験の内容ではテキストを使う必要がありませんでした。
- 早期体験実習の担当の時間には「研究室の研究内容を紹介すること」を教授から依頼されており、SH道場のテキストは使用しなかったのです。
- あまり使用しませんでした。
- 25と26については、テキストを使っていますので、回答困難です。
- 使用しなかったのが当てはまらないを選択しました。
- SH道場のテキストを直接は使用していません、判断できない。
- 情報が多く感じたため簡潔に書かれてあたららも良かった。
- 使う機会が一度だけだったので。
- 使っていないので判断できない。
- 授業の流れが記入されていたのは良かったが、生徒がどこまでの理解ができているのか(どの資料まで配られているのか)が分かりにくかった。
- 自分が担当する講義等で利用していませんので、使いやすいか使いにくいかわ判断できない。
- 特にはありませんが、使いにくくはなかったのです。

⑥ ⑤について、Mahara が使いやすいかった、または使いにくかった理由を自由にお書き下さい。

- 担当者自身が、使いこなせていない。
- 使っていない。
- 特に必要とする局面がなかった。
- 飛ぶノートが2頁しか使えないので、実験レポートに適用できないことが分かった。表紙+1頁のレポートはありえない。
- Mahara でなければできないような事でなければ、manaba などの方が使いやすい。
- 講義資料配布、その学生のプロセスの様子など分かり、ありがたく思っています。
- 特に利用しなかったのではありません。
- まだ、授業では mahara を利用していません。
- ページを作ったりしてめんどうくさい。簡単なフォームマツト（すぐ使える）がほしい。
- ftp が使えないので、資料のアップロードがやりにくい。どこからか既存のシステムを購入したものでしょうが、配付資料を自分の PC でローカルに作成しておいたものを一括アップロードできない今の仕様はひどすぎます。
- 使っていないのでわからない。
- 学生番号の読み取りがうまくいかなかった。また、エラーになった時に、連絡しないと復旧できないので、複数回エラーになると連絡を躊躇ってしまう。
- もっと単純な構造で十分である。
- 使っていない。
- 入力画面のレイアウトがわかりにくく、慣れるのに時間がかかる。
- 使っていないので分かりません。私の場合は、使うシチュエーション自体が分かりませんでした。
- 今回は使わなかったので評価できません。
- 早期体験実習の担当の時間には「研究室の研究内容を紹介すること」を教授から依頼されており、Mahara は使用しなかったの。
- 28 と 29 については、Mahara を使っていませんので、回答困難です。
- 使い方について不慣れであるため。
- 使っていないので判断できない。
- パスワードで入った先に、目的場所がどこにあるのかわかりにくかった。
- 使ったことが無いので、判断できない。
- 使い方の資料があったので。

⑦その他、SIH 道場の実施支援に関わる取組について、特に役に立った点と改善点があればお書き下さい。

- 担当の若い教員のみならず、日頃の業務、研鑽、ご苦労様です。私も、少しでもみなさんの苦勞に報いられたらと思います。

- コーディネーターは、当該年度の実施担当者の代表者が併任の方が実質的で機動的だと思ふ。
- 説明会での資料の不備（カラーでない、資料の欠落等）の改善。
- 徳島大学全学 LMS の manaba を今年初めて活用して（存在を知って）非常に便利に感じた。今後も使っていきたいと思う。
- アクティブラーニング、反転授業の実験経験を、教員自身が体験できる機会が必要と思ふ。
- 1 年生相手に研究の最先端を触れさせてプレゼンテーションまでもっていくという試みは悪くはないと思います。が、ルーブリックなどのシートの内容が意味不明で教育効果に疑問を感じます。どういった効果があるのか、また実証的な研究があるのか、私は知りませんが、大学の教育に使うにははつきり言って稚拙なものと感じられませんでした。個別の教員が自分の裁量でできることは自分の責任で行ないますが、SIH 道場として枠を上から決めているわけですから、責任者の方には現状のシステムが有意義であることを示す先行する教育研究の存在と合せて、明確に説明していただきたいと思ふます。最後に、この Web アンケートも欄が一行だけであり、使いにくい仕様になってます。このアンケート作成者に良識が欠けてるとしか思えません。この点に関しては深く反省してください。
- アクティブ・ラーニングの理解が深まった。
- 本当に続けるべきか疑問である。次年度の人にも送る際も、かわいそうだと思う感じがする。
- 協同作業は非常にいい感じで進んでいっています。座学やレポートは通常の感をなかなかか脱出し得ない感じがします。
- 私が今年、e ポートフォリオを使わなかったことは私の落度なんでしょうか？だとすれば、説明・サポートが不十分です。あるいは、私はアンケート対象者ではないのに、回答を求められたのでしょうか？いづれにせよ、このアンケートは、責められているような気がして、あまり気持ちのよいものではありませんでした。
- 「様々な教育方法がある」ということを学ぶ、FD としての良い機会であり、将来役に立つと思われまふ。ただ、改善点としては、一般論だけでなく、一般論を学んだ後に、各学部の教育内容に相応しい取り組み方について、説明や紹介がある方がよいと感じました。また、実際学生は SIH 道場を通じて、全学的な内容と専門的内容に触れるようなシステムになっていると思ふますので、そういう実際に自分が担当する学生が受ける内容の全体と、担当する講義の位置付けを説明していただけると、より具体性があつてよかつたと思ふます。
- SIH 道場はたいへんよい取組みと思われまふが、準備の段階から評価まで、教員の時間的負担が多すぎるように思えます。今後は内容をスリム化できないか検討すべきと思ふます。
- 当該授業の学生の振り返りへのコメント（フィードバック）の締切よりも、本アンケートならびにポートフォリオの締切が早いので、対応が難しい。
- すでにこのプログラムがスタートして暫く経つてから徳島大学に赴任したため、最初は何のこともだか全体像がさっぱり解らなかつた。プレスリリース程度の内容や量で良いので、概要を一目で把握できるレジュメがあると良いのではないのでしょうか。
- Mahara を活用したいという気持ちはありません。
- アクティブ・ラーニングの意義が理解できたのが役に立った。

3-2. 教育について考え提案する学生・教職員専門委員会 「SIH道場評価・改善ワーキンググループ」の活動

(1) ワーキンググループ設置趣旨

SIH 道場は、本学の新入生全員が受講する初年次教育プログラムで、アクティブ・ラーニングについて、学生、教員が共に基礎スキルを修得し、学士課程全般にわたり実践していくための基盤となる取り組みである。大学教育再生加速プログラム（以下、「AP 事業」という）を遂行する上でも SIH 道場ではさまざまな視点から評価・改善を行っていくことが重要である。その一つの取り組みとして、学生と教職員双方の視点からの評価・改善に関わる WG を設置し、SIH 道場の成果や課題等について意見交換や議論を行い改善に繋げる。

(2) 設置する組織

AP 事業の支援部門である総合教育センターには、「教育について考え提案する学生・教職員専門委員会（以下、「専門委員会」という。）」が設置されており、専門委員会の背景・趣旨は「学生の声を教育改革に取り入れるために、学生と教職員が、教育の現状・課題について意見交換を行い、具体的な提案等を行う組織」となっている。SIH 道場に関する評価・改善 WG 設置の趣旨と専門委員会の趣旨が似通っており、また、専門委員会との活動と連動するところもあるので、平成 27 年度、専門委員会の下に、SIH 道場に関する評価・改善 WG を設置し、SIH 道場の評価・改善に関する議論を行った。このワーキンググループを平成30年度も継続し、平成30年度入学生を学生委員として活動を行った。

(3) ワーキンググループの活動

SIH 道場の各プログラム実施単位（※）から平成 30 年度入学生 1 名以上を選出し、計 22 名の学生委員が活動を行った。なお、ワーキンググループは、専門委員会の教員委員が中心となり運営し、9 月～10 月の間に学生委員を対象に SIH 道場に関するインタビュー調査を行った。平成 30 年 11 月 16 日の SIH 道場振り返りシンポジウムにおいては、SIH 道場評価・改善ワーキンググループの学生委員が意見を報告し、学生委員 3 名がディスカッションのパネリストの一人として壇上で質疑応答を行った（※詳細については本報告書「SIH 道場振り返りシンポジウムの概要」を参照）。次に、インタビューで学生委員から提案された意見の要点と今後のポイントを記載したまとめを示す。

※プログラム実施単位とは、次の学部・学科・専攻の単位である。

- ①総合科学部（4 コース合同）、②医学部医学科、③医学部医科栄養学科、
- ④医学部保健学科看護学専攻、⑤医学部保健学科放射線技術科学専攻、
- ⑥医学部保健学科検査技術科学専攻、⑦歯学部（2 学科合同）、⑧薬学部、
- ⑨理工学部社会基盤デザインコース、⑩理工学部機械科学コース、
- ⑪理工学部応用化学システムコース、⑫理工学部電気電子システムコース、
- ⑬理工学部情報光システムコース、⑭理工学部応用理数コース、
- ⑮生物資源作業学部（3 コース合同）

(4) 学生委員の意見と今後のポイント

<p>体験学習</p>	<p>【得られた意見】</p> <p><職業体験></p> <ul style="list-style-type: none"> ● 病院内の薬剤部など、実際の現場を体験してみたかった。(薬学部) ● 勤務の様子を実際に見ることができた。(医学科)(保健学科検査) ● 現場で勤務している方との懇談会の機会が得られた。(医学科) ● 中小企業の産業を見ることができたが、各コースの分野の産業に触れられるとより良い。(生物資源産業学部) ● 将来、職業で携わる場所である太龍寺・長安口ダムを見学し、モチベーションが上がった。(社会基盤) ● 保健師・養護教諭・専門看護師の方からお話を聞かせていただいたことで視野を広げることができた。ただし、話を聞くだけだったため、もう少し体験型の学びができればよかったと思う。(保健学科看護) <p><研究室訪問></p> <ul style="list-style-type: none"> ● 将来の選択肢がわかった。しかし、見学だけでなく体験として何か作ってみたいかった。(生物資源産業学部) ● 研究室訪問はコース選択の参考になった。(応用理数) ● 担当教員の研究内容の体験が今後の学習内容を先取りすることができた。(保健学科放射) ● 研究室訪問や機械設備に触れることは、学ぶ内容を実感する事ができた。しかし、教養が多く、専門性が少なかった。(歯学部) ● 研究室訪問は専門の内容に触れる機会が少なく、結びつきを感じる事ができなかった。研究室の訪問は学生番号で振り分けずにある程度希望をとってほしい。(医科栄養学科) ● 訪問した研究室の教授が「困ったことがあればいつでも相談しておいで」と言ってくださったのが良かった。研究室見学は名前順に訪問先が決められたので、もう少し学生の希望が反映されると良いと思った。(医科栄養学科) ● 研究室訪問で実験・研究について触れ、学習内容と結びつきを意識できた。(電気電子) ● 研究室見学を行った。研究室見学にあたっては、事前に下調べを行い、見学後にはレポートを作成した。もっと学生の興味に基づいた見学・体験ができれば良い。また見るだけでなく、実際にプログラミングを体験するなどの作業を試してみたかった。(情報光) <p><その他></p> <ul style="list-style-type: none"> ● 美術館見学は入学直後の友達作りに丁度よかった。(総合科学部) ● 友人作りには役立ち、グループワークを通じてスキルを身につけることができた。しかし、専門への結びつきが不明であった。総合科学部の基盤・体系についての説明や、各コースの趣向を反映させた体験学習の企画があれば良い。(総合科学部) ● コミュニケーション・交流が目的で、地引き網体験を行った。研究室訪問や化学の実験の体験があれば良い。(応用化学) ● BBQ が良い交流の機会になった。(社会基盤) ● 討論はしたが、体験学習もしたかった。専門の内容について触れることができる研究室訪問がしてみたかった。(機械科学)
--------------------	---

	<p>【今後に向けて】</p> <p>「体験学習」によって学生は将来の進路・職業選択について考える機会を得ている。これらの取組は学生にとって大学での学修意欲を高めたり、将来設計を検討したりする機会として有効である。また、これらは学生間の交流の場としても機能しており、入学して間もない学生が安心して学べる環境を形成するきっかけにもなっている。</p> <p>「体験学習」の実施体制や企画について、各コースは成熟した内容を有しているが、「各コースの分野の産業に触れられるとより良い」「研究室の訪問は学生番号で振り分けずにある程度希望をとってほしい」など、次年度の取組として反映することができそうな学生の意見も窺える。より充実した企画に向けて、継続的な取組が求められる。</p>
<p>ラーニングスキル (文章力)</p>	<p>【得られた意見】</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 教員からのコメントで指導があった。(応用数理) ● 動画視聴によってラーニングスキルについて学習することができた。教員へのレポート提出があったもののフィードバックコメントは少なかつたように思う。実習先での指導があったのは良かった。(保健学科看護) ● 講義後レポートを提出しループリックでの振り返りも行ったが、教員からの添削はまとめて返却だったため、日が空いてしまっていた点が改善されると良い。(医学科) ● 書き方の基礎講義を受けて読書レポートの課題が課される「即実践」の環境があった。もっとフィードバックされる環境が欲しい。(総合科学部) ● SIH 道場では高校で学んだ内容を振り返った。教員によるレポートの書き方、添削、フィードバックがあった。(機械科学) ● 講義内容とレポートのつながりが薄かった。(保健学科検査) ● 1 週間での詰め込み型授業だったが、足りない部分はその後の授業につながっていた。ただし、SIH 道場が 1 週間で完了するため、事前・事後の間が短く、アンケートの実施には不満が残った。(生物資源産業学部) ● レポートの提出のみあった。(医科栄養学科) ● SIH 道場テキストの紹介がなされ、ループリック評価によるコメントももらえた。実験レポートの型があり、参考になった。(医科栄養学科) ● 1 日目に体験した事項について記入する形式の感想文を提出した。(応用化学) ● 文献紹介のみで講義がなかった。(保健学科放射) ● 1000 字のレポート添削を受けたが、コメントの返却がなかったので振り返りができない。(歯学部) ● ポートフォリオに SIH 道場の感想入力があったが、重複感があった。(生物資源産業学部) ● SIH 道場のレポートの指導時間は雑談が多かった。また、読書レポートは提出締め切りまでかなり日があるので、間延び感がある。もう少し早く締切を設けてほしい。(総合科学部) ● 3 回しか SIH 道場の授業がなかった。足りない部分は別の授業で補完されていると思う。(電気電子)

	<ul style="list-style-type: none"> ● 少人数（分野別）に分かれポスター発表を行い、レポートを作成した。原稿作成や練習によって文章力を身につけることができた。（社会基盤） ● 講義を受け、文章力の基礎を身につけることができた。しかし、説明に終始していて、レポート作成（実践の場）がなかった。回数を重ねた練習がしたい。（情報光） <p>【今後に向けて】 ほとんどのコースにおいてレポート作成の機会が設けられているが、学生が作成したレポートに対し、教員によるフィードバックが行われる体制が取られているかは学部学科により大きな開きがあるようである。文章力は一朝一夕に身につくものではないが、実践を重ね、添削（フィードバック）を受けることが上達に繋がっていく。限られた時間の中ですべてを実現することは困難かもしれないが、文章の書き方に関する講義に留まらない取組を検討する必要がある。</p>
<p>ラーニングスキル （プレゼンテーション力）</p>	<p>【得られた意見】</p> <ul style="list-style-type: none"> ● プレゼンを学ぶ機会になった。（薬学部） ● 講義後のワークショップと結びついていない。また、学科内では人数が多すぎる。（保健学科） ● プレゼンに関する授業はワークショップと別に学科内で実施した。また、ジグゾー法により全員発表する機会が持てた。（医学科） ● 1人1回の質問のノルマが課せられたので、質疑応答の対応の仕方が身についた。（保健学科放射） ● グループでまとめたことを代表者が他のグループの前で発表した。（歯学部） ● 準備をする期間が短く日程調整が困難であったことから、グループ内での作業担当の偏りが出た。高校時代からプレゼンテーションの機会があったので、復習するような機会となった。（保健学科看護） ● 他の人の視点による刺激があったが、1分間のプレゼンであったのでプレゼン力が上がったのか実感がなかった。（生物資源産業学部） ● 学科独自のプログラムの中では行われず、プレゼンをする機会がなかった。（医科栄養学科） ● 全員発表をしなかったのでプレゼン力を身につけるのは難しかった。（医科栄養学科） ● ビデオ教材でプレゼンの方法を学習し、グループでプレゼンを行った。全員が発表した。発表方法やその内容に関する教員からのフィードバックがほしかった。（電気電子） ● グループで話し合い、代表者2名がまとめて発表をした。SIH 道場を終えてみて、何がプレゼン力向上を図った取組だったのか不明だった。（総合科学部） ● プレゼン力を鍛える取組がなかった。代表者だけでなく全員が参加・発表するような取組を企画してほしい。（機械科学） ● パワーポイントの作成方法・プレゼン方法について学べた。しかし、今回は一部の人だけ発表していたので、全員が話す体制をとってほしい。発表テーマについて工夫がほしい。（情報光）

	<ul style="list-style-type: none"> ● “デザインすること”について各分野視点でプレゼンをした。全員が話す体制をとってほしい。(社会基盤) ● シールの色が全員同じだったことで自己投票可能な状況であったため、班評価の際、公平性がなかった。班別に色を変えたり、自分の班への投票は不可にしたりなど、公平性を担保してほしい。(社会基盤) ● プレゼンの場がなかった。(応用化学) <p>【今後に向けて】 SIH 道場の実施形式にもよるが、時間的な制約上プレゼンテーションを受講生全員が経験することは難しい。広く発表機会を与えられるかどうかは受講生の人数にも影響されるものであり、受講生全体をいくつかのグループに分けて発表させるなど、一人でも多くの学生がプレゼンテーションを経験できるよう検討する余地がある。また、発表内容・方法に対して教員が質問やコメントをする時間を設けるなど、学生のアウトプットを評価する工夫も必要である。</p>
<p>ラーニングスキル (協働力)</p>	<p>【得られた意見】</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 患者の症状について討論した。(歯学部) ● SIH 道場期間内ではグループ活動の機会が少なく、足りない部分は他の授業で経験した。(保健学科放射) ● グループ活動になっていない班があったが教員による介入はされなかった。(電気電子) ● ディベートに向けた打ち合わせにグループで協力して取り組めた。(機械科学) ● テーマが簡単であるのに、話す時間が5~6時間は長すぎる。(情報光) ● 事前学習に協働についての動画の講義があったのはとても参考になった。(医学科) ● グループのメンバーに積極的に声をかけ、取組を行った。みんなでひとつの成果物を作るのは達成感があり、良いと思った。(医科栄養学科) ● プレゼン準備の時間がグループ活動相当であったが、準備期間が短いことから、メンバーが一同に会することが難しく、結果的にグループ活動が困難であった。(保健学科看護) ● 他学部学科の活動内容を知り、もっと学生間の交流に重点を置いた企画があると良いと思った。(保健学科看護) ● 遠慮がちで意見をなかなか言わない人が見られたため、協働することの難しさを感じた。(保健学科看護) <p>【今後に向けて】 ディベートに向けた準備活動に留まらず、体験学習やプレゼンテーションなど SIH 道場の取組全体を通じて、「協働力」を意識する機会は得られているようである。グループ活動を行う際に、特定の人物だけが取り組むことのないよう、発言の少ない学生に意見を求めるよう促すなど、教員や院生コーディネーターによる介入を効果的に行っていく必要がある。</p>

<p>その他</p>	<p>【得られた意見】</p> <p><ビデオ・テキスト教材の活用></p> <ul style="list-style-type: none"> ● QRコードが配布され、リンク先のビデオを視聴した。しかし、ビデオについては周知の徹底がされていれば良かった。(社会基盤) ● 入学前にSIH道場が実施されたため、cアカウントの入手が間に合わず、ビデオ教材の活用など、一部取組に支障が出た。教員もcアカウントの入手時期を把握していないようだった。ビデオ教材の説明をもっとしてほしいかった。(生物資源産業学部) ● 任意ではあったが、ビデオ視聴の周知がなされた。とても参考になった。(保健学科看護) ● テキストの紹介があった。ビデオ視聴はしていない。(医科栄養学科) <p><実施時期・期間></p> <ul style="list-style-type: none"> ● 4月の入学前の時期のみの実施だったため、詰め込まれた印象が強い。もう少し時間をかけても良いのではないか。(生物資源産業学部) ● SIH道場は入学式時期の4月初めに2回だけの実施だった。もう少し時間をかけてほしい。(機械科学) <p><SIH道場の目的></p> <ul style="list-style-type: none"> ● 「SIH道場」の枠組がはっきりわからない。(応用化学)
	<p>【今後に向けて】</p> <p>教材の活用は十分とはいえないが、「ビデオ教材」の視聴を経験した学生たちからは「予習ができ、わかりやすかった」などと意見が得られており、導入される学部学科が増えるよう、教材の活用を呼び掛けていく必要がある。また、学生たちがSIH道場の目的や概要を事前に認識したうえで授業に臨めるよう、説明の場を確実に設けていきたい</p>

3-3. 「SIH 道場～アクティブ・ラーニング入門～」の取組と課題

—大学教育再生加速プログラム（AP）実施専門委員会委員による報告—

1) AP 実施専門委員会委員による報告の趣旨

SIH 道場授業設計コーディネーターは、SIH 道場の終了後に、次年度のプログラム改善に向けて、「プログラム設計評価シート」のフォーマットに基づき、次年度の改善に向けた振り返りを行う。各学部の大学教育再生加速プログラム実施専門委員会委員は、各学部学科の SIH 道場プログラムについて、授業設計コーディネーターが作成した「SIH 道場授業設計表」「SIH 道場授業詳細」や「SIH 道場プログラム設計評価シート」の記述を参照しながら、取組概要、成果（受講学生と担当教員が SIH 道場を通して身につけたこと）、今後の課題（プログラム設計・授業運営、その他について）を報告する。本報告は、次年度の SIH 道場授業設計コーディネーターがプログラム改善を行う際の資料となるだけでなく、大学教育再生加速プログラム事業全体の自己評価の資料の一つにもなる。

2) 各学部・学科の取組と報告者

<SIH 道場実施報告者（授業設計コーディネーター）>

総合科学部		教授	村上 敬一
医学部	医学科	教授	勢井 宏義
医学部	医科栄養学科	教授	酒井 徹
医学部	保健学科看護学専攻	教授	近藤 和也
医学部	保健学科放射線技術科学専攻	准教授	河野 理
医学部	保健学科検査技術科学専攻	教授	遠藤 逸朗
歯学部	歯学科	教授	藤猪 英樹
歯学部	口腔保健学科	教授	松山 美和
薬学部		准教授	藤野 裕道
理工学部	社会基盤デザインコース	助教	井上 貴文
理工学部	機械科学コース	講師	日下 一也
理工学部	応用化学システムコース	教授	今田 泰嗣
理工学部	電気電子システムコース	助教	鈴木 浩司
理工学部	情報光システムコース	准教授	森田 和宏
理工学部	応用理数コース	教授	守安 一峰
生物資源産業学部		教授	刑部 敬史
医療教育開発センター		准教授	吾妻 雅彦

総合科学部
「SIH 道場～アクティブ・ラーニング入門～」の取組と課題

村上 敬一

1. 取組概要

文章作成力の向上を目的として、レポートの書き方、メディア・リテラシーに関する内容を「総合科学入門講座」とともに学ぶ。

プレゼンテーション力、協働力に関するアセスメントとして学友コミュニケーションの場を設ける。アセスメントの結果を受けて、個人のテーマ、目標を明確にした上で「課題発見ゼミナール」に繋げる。

体験学習の実践として大塚美術館を見学する。「ディスクリプション」の方法により、作品鑑賞を通じた客観的記述のあり方を学ぶ。

2. 成果（受講学生と担当教員が SIH 道場を通して身につけたこと）

（学生）

レポートの書き方、引用の仕方、プレゼンテーションの仕方など、自分の考えをまとめ発現する基本的な知識を習得できた。

総合科学部の学びと、これからどのような目的意識を持って学修すべきか、具体的な道のりが明らかになった。

（教員）

SIH道場を担当することで、自身の授業や学生対応にも、学ぶべき点が数多くあった。年を重ねるごとに、プログラムの内容を改善していくことで、教育に対する取組や考え方も、良い方向に向かっていっていると思われる。

3. 今後の課題（プログラム設計・授業運営、その他について）

美術館見学において、事前授業が学生の取り組む姿勢に十分反映されている一方で、課題の分量や所要時間が、やや負担になっているかもしれない。

教員の中で、ポートフォリオやeラーニングの導入にはまだまだ不慣れなことも多く、使いこなせていないことは今後の課題である。

4. 「SIH 道場振り返りシンポジウム」における議論を経た新たな気づきや今後の課題

「SIH道場」の受講前と受講後で、学生の大学の授業に対する依存度が高まる、という調査結果が出された。教員側が、学生に対して懇切丁寧になるほど、授業への取り組みが受身になるということであろうか。丁寧な指導と放任のバランスをどのように考えるか、今後の課題であると感じた。

医学部医学科
「SIH 道場～アクティブ・ラーニング入門～」の取組と課題

勢井 宏義

1. 取組概要

事前学習、診療現場見学およびワークショップ形式の振り返り学習によって、医師の役割・業務内容、必要とされる能力、それらと関連づけた大学における学習について学生が理解することを目指す。診療現場見学は体験学習として学修の動機付けをはかり、ワークショップでは協働力およびプレゼンテーション力、振り返りレポート作成では文章力の向上をはかる。さらにこれら一連の学習によって、学修振り返りの方法を学ぶ。

2. 成果（受講学生と担当教員が SIH 道場を通して身につけたこと）

（学生）

- 1) 医師の役割・業務内容、必要とされる能力について説明できる。
- 2) 医学科における学修目標について説明できる。
- 3) 診療現場でのルールを理解し、それを遵守できる。
- 4) グループで協働して意見をまとめ、それをプレゼンテーションできる。
- 5) 自らの学修経験に基づいて、自分の考えを文章にまとめることができる。
- 6) 学修経験に基づいて振り返りを行い、今後の学修計画を立てることができる。

（教員）

- 1) 診療現場での学生に対する体験学習を実施できる。
- 2) KJ 法を用いたグループワークを実施できる。
- 3) 協働力、文章力、プレゼンテーション力のルーブリック評価を行うことができる。
- 4) アクティブ・ラーニングの目的と方法について理解し、その実践ができる。
- 5) ティーチングポートフォリオの作成方法について理解し、それを作成できる。

3. 今後の課題（プログラム設計・授業運営、その他について）

- 1) 診療科によって実施時間の長さや内容に格差があるので、前もって担当の教員どうしが目的や意義を共有しつつ調整をはかる必要がある。
- 2) 文章力やプレゼンテーション力の向上をはかるため、その授業の時間を増やし、SIH 道場テキストを十分に活用する。
- 3) 協働力やプレゼンテーション力についての学生の理解を深めるために、学生同士のピア評価の充実を検討する。
- 4) 学修振り返りについての理解が十分ではないため、省察をテーマとしたワークショップを新たに企画する。

4. 「SIH 道場振り返りシンポジウム」における議論を経た新たな気づきや今後の課題

SIH 道場と同時期に受講している教養科目のほとんどが、未だ旧態の座学・講義型であり、SIH 道場の活動が生かせていない。学生個々においても、他の科目における予習や振り返りなどの学修行動が有効に実行できていない。

医学部医科栄養学科
「SIH 道場～アクティブ・ラーニング入門～」の取組と課題

酒井 徹

1. 取組概要

研究室早期体験により専門教育および研究活動への関心を高める。SIH 道場を通じて、基本的な文章力、プレゼンテーション能力および医療現場で必要とされる協働力を学修する。また、学修における振り返りの重要性を知る。

2. 成果（受講学生と担当教員が SIH 道場を通して身につけたこと）

（学生）

SIH 道場の「体験学習」は専門科目の学習において役立っていると回答した者の割合は、[とても当てはまる]が 17%、「どちらかといえば当てはまる」が 63%であり、合計 82%と早期体験学習が効果的であった。レポート等の学術文章を書く際に必要な準備や基本的なルールを理解した割合は、「とても当てはまる」および「どちらかといえば当てはまる」者の割合は 68%、SIH 道場で学修した「レポートの書き方」は役に立っていると回答した割合は、「とても当てはまる」および「どちらかといえば当てはまる」合わせて 72%であり、学習効果があったと考えられる。プレゼンテーションを効果的に行うために必要な準備・姿勢・資料を理解した割合は、「とても当てはまる」および「どちらかといえば当てはまる」者の割合は 85%、SIH 道場で学修した「プレゼンテーション」は役に立っていると回答した割合は、「とても当てはまる」および「どちらかといえば当てはまる」合わせて 75%であり、学習効果があったと考えられる。

（教員）

今回は担当者の変更が急遽 10 月にあり、担当教員へのアンケート回答に関する十分なフォローアップができないこともあり、サンプル数が少なく的確な評価を行うことができなかった。

3. 今後の課題（プログラム設計・授業運営、その他について）

準備状況も含めて教員の負担を可能な限り減らす企画運営が必要と考える。

4. 「SIH 道場振り返りシンポジウム」における議論を経た新たな気づきや今後の課題
学生の意見を考慮し改善ができる箇所は修正していく必要がある。特に大きな変更が必要でなければ現状維持でも良いのではないかと。

医学部保健学科看護学専攻
「SIH 道場～アクティブ・ラーニング入門～」の取組と課題

近藤 和也

1. 取組概要

徳島大学医学部保健学科看護学専攻の新入生が、大学における学習について理解するとともに、自身の専門分野における先輩からの仕事や研究に関する講演を通して、興味関心を喚起し、徳島大学における学習・研究に対する動機づけを行う。また、学習の基本となる文章の書き方、プレゼンテーションの仕方、振り返りの仕方を学び、それらを実践することで、大学における能動的な学習の基本となる知識、技能、態度を身につける。

2. 成果（受講学生と担当教員が SIH 道場を通して身につけたこと）

（学生）

- (1) 自身の専門分野における現場と大学における学習について、関連させて説明することができる。
- (2-1) 論理的文章の作成・レポートの作成において、注意すべき点について1つ以上説明することができる。
- (2-2) 効果的なプレゼンテーションを行うための基本的な手法・ツール等を1つ以上説明することができる。
- (2-3) 他者と協同して1つの課題に取り組むことができる。
- (3) 自身の学習活動を振り返る習慣を身につけることができる。

（教員）

- 1) 協働力、文章力、プレゼンテーション力のルーブリック評価を行うことができる。
- 2) アクティブ・ラーニングの目的と方法について理解し、その実践ができる。

3. 今後の課題（プログラム設計・授業運営、その他について）

- 1) 学生が提出されたレポート評価を教員間でどのように共有するか

4. 「SIH 道場振り返りシンポジウム」における議論を経た新たな気づきや今後の課題

アクティブラーニングが重要であるのは理解できるが、保健学科のように医療系の資格取得を目指す場合にはスクール形式で基礎的な知識を学び、身に付けることも大事である。アクティブラーニング（反転授業など）は取り入れるにあたって、適した科目に適用すべきではないかと考える。

医学部保健学科放射線技術科学専攻
「SIH 道場～アクティブ・ラーニング入門～」の取組と課題

河野 理

1. 取組概要

本学放射線技術科学専攻新生に、大学における学修について理解させるために、オリエンテーション時に、1) 学生生活や行動規範に関する講義とグループワーク、2) 各分野の専門技師による講演会を実施した。さらに、前期期間に、専門分野における先端研究の体験を通して、興味関心を喚起し、徳島大学における学修・研究に対する動機づけを行うために、3) 各研究分野紹介（7分野）の講義、4) 短期研究室体験、5) 短期研究室体験報告書の作成、5) 短期研究室体験発表会を実施した。この中で、文章の書き方、プレゼンテーションの仕方、協働の仕方および質疑応答の仕方を学ぶことができるように授業設計を行った。

2. 成果（受講学生と担当教員がSIH 道場を通して身につけたこと）

（学生）

大学における能動的な学修の基本となる知識、技能、態度を身につけることができたと考えられる。

（教員）

授業設計の中に、質疑応答をさせることを組み入れることにより、学生に能動的な取り組みをさせることができるということがわかった。

3. 今後の課題（プログラム設計・授業運営、その他について）

学生に、現代社会が抱えている様々な問題と意味を理解させ、感動を与えるように授業を設計していくことが今後の課題である。そのためには、何よりもまず、教員自らが、楽しんで、エキサイトしながら、研究及び授業をしていることが重要であろう。

4. 「SIH 道場振り返りシンポジウム」における議論を経た新たな気づきや今後の課題

アクティブ・ラーニングを小手先の教授法として教員が形式的に導入するのではなく、常に、学生に立場にたって、授業を運営していくことが重要である。

医学部保健学科検査技術科学専攻
「SIH 道場～アクティブ・ラーニング入門～」の取組と課題

遠藤 逸朗

1. 取組概要

早期体験として臨床検査技師の先生に講師をお願いして自身の将来像が描けるような内容の授業と質疑応答まで施行していただいた。ラーニングスキルに関しては、複数回のレポート提出、小グループ毎の課題取り組みとプレゼンを行った。SIH 道場関連の授業ではフィードバックに時間を多めにとり、教員と学生、学生間での意見交換を行った。

2. 成果（受講学生と担当教員が SIH 道場を通して身につけたこと）

（学生）

早期体験授業では内容への満足度が高く、疑問点を持った学生からの質問が増えた。また、将来の仕事内容を早期に学習することで、学生の意欲も上昇し、学修効果は良好と考える。複数回のレポート提出で学生個々の記述や考察に向上が認められ、学修効果はあったと考える。小グループ毎の課題取り組みとプレゼンにより考える力や意見を言う力が身についたとの評価であった。

（教員）

学生が自身の学修効果や知識量の多寡を認識できたら学修に対する姿勢や意欲も変わると言うこと、フィードバックセッションの重要性を理解した。

3. 今後の課題（プログラム設計・授業運営、その他について）

学生の取り組む姿勢にはまだ個人差がある。このような学生に対する介入について検討する必要があると考える。教員がかけている時間に対する対費用効果のような指標があればいいと感じました。

4. 「SIH 道場振り返りシンポジウム」における議論を経た新たな気づきや今後の課題

歯学部

「SIH 道場～アクティブ・ラーニング入門～」の取組と課題

藤猪 英樹・松山 美和

1. 取組概要

歯学部における大学入門講座のコンテンツである「気づきの体験実習」、「相互歯磨き学習」及び「研究室体験」、歯学科第2年次「早期体験実習」の中の「シャドウイング」と前後の「感染対策・医療倫理・振り返り」に加え、本年度は歯学科3年次の「歯学英语」を、口腔保健学科2年次の「オーラルヘルスプロモーション」をSIH道場パフォーマンス科目として組み込んだ。「気づきの体験実習」および「相互歯磨き学習」では、患者の気持ちになって良い医療を考えるきっかけとし、また感染対策・医療倫理の講義に加え、シャドウイングにより低学年から歯科医療の現場を知り、学びのモチベーションを上げることを目標とし、更に担当教員を増やし教員のスキルアップを目指した。

2. 成果（受講学生と担当教員がSIH道場を通して身につけたこと）

（学生）

早期体験：歯学科第2年次の「シャドウイング」では、病院での臨床の見学というだけでなく、担当教員にある程度の時間つくことで、病院勤務における多様な業務を認識することができ、また病院のシステムについての理解ができたようで、単なる診療の見学以上の効果があったようである。歯学科・口腔保健両学科の1年次のプログラムにおいても「基本的マナー」、「コミュニケーション力」、「ホスピタリティ・マインド」、というキーワードが多くの学生のe-ポートフォリオに認められ、こちらが期待した効果が得られていると考えている。

「研究室体験プログラム」によって基礎科学的治験を基盤とした医療の重要性、研究によって得られた知見を臨床にフィードバックする流れを理解し、学びのモチベーションも上がったようである。

ラーニングスキル文章力：「アカデミック・ライティング入門」の講義においては、論理的な文章の書き方や表記・表現・文章構成を学び、「読書レポート」に反映させようという努力の片鱗が感じられた。但し、SIH道場のコース内で学んだ作法を忠実に守ることに留まっている段階との印象を受けた。

ラーニングスキルプレゼン力：歯学科の1年次前期に行われる「PBL・TBL 入門」では、大学入学までと異なるアプローチにインパクトがあったようで、問題点の設定における話し合い等にも新鮮さを感じたようである。また統一した正解がないという医療では頻繁に起こる現象に戸惑いを感じているようであり、この体験は貴重であると思われる。一方、口腔保健学科「高齢者交流学習」での4名の教員によるルーブリック評価（①内容の構成、②姿勢、③質疑応答）は、全てのグループで、概ね良好の内容であり、学習の成果が認められた。本年度は、SIH道場パフォーマンス科目として、諸年次のSIH道場科目のアウトプッ

トを評価するために、歯学科では3年次後期の「歯学英语」、口腔保健学科では2年次後期の「オーラルヘルスプロモーション」を設定しており、SIH道場での学びの習得・成果を後期末に評価する。

ラーニング協働力：歯学部両学科合同の「新入生研修」では、ワールドカフェ、PBL/LTB入門にてグループ討議とプレゼンテーションを行った。学生達は初対面の者同士が、きっかけをつかみながらコミュニケーションを取っていくことを難しいと感じながらそれを乗り越えることが出来た達成感を感じるとともに、チーム感を感じてくれたようで実りが多いものであったようである。また、蔵本地区「チーム医療入門」では、学部内で経験したグループミーティングとは異なり、学部を超えたメンバー間で話し合いのきっかけを見つけるのに苦労をしていたようであるが、それを乗り越えた達成感は得られたようである。

(教員)

歯学部では、平成30年度には、教員37名がSIH道場に参加しており、また全員が説明FD・WSに当日参加できなかったが、何らかの形で、SIH道場の説明を受けその趣旨を理解してくれたと感じられた。そして多くの講義で、振り返り時間とe-ポートフォリオ・レポート、もしくは独自のレポートを課し、それらに対する教員からのフィードバックを行うことが定着してきているように思われた。

3. 今後の課題（プログラム設計・授業運営、その他について）

学習課題に対して自ら調べ、発表するスキルは、高校時代にトレーニングをされているのか一定のレベルの高さを感じている。ただ、そこからSIH道場で学んだ力が加味されているかを評価する必要がある。一方、「コミュニケーション力」では、仲間との交わりが苦手で、グループ間での情報共有ができない学生が散見される。SIH道場で学んだことをどれだけ学生生活の中で実行できているかを評価するシステムも必要だと感じる。歯学部では歯学科・口腔保健学科ともに順調に、SIH道場担当教員が増えているが、残念ながら、まだ義務的に参加させられている感が拭えていない。教員の能動的な参画を後押しする学部、大学をあげての仕組みも必要と感じる。

全体としては、学生からはSIH道場は好意的に受けとめられているが、多くは学生個人の「アクティブ」さに依存していると思われる。また、読書レポートの振り返りなどにおいて、教員からのコメントが遅い、コメントのやり取りの往復が少ないなど、学務・教員側がさらに汗をかく必要も痛感した。今後対策を講じなければならない重大な点である。尚、引き続き臨床現場に出る学生には、感染症対策の観点から、抗体価のチェックとワクチン接種の意義を理解してもらい、これを実施していく。

4. 「SIH道場振り返りシンポジウム」における議論を経た新たな気づきや今後の課題

全学共通のプログラムをもっと増やしてもいいのかと思う。協同においては、蔵本地区で行われている学年が上がっても行なわれる多職種連携教育（IPE）はいいモデルかと思う。SIH道場パフォーマンス科目は、本プロジェクトで重要な位置を占めると思う。

「相互歯磨き学習と振り返り」



「ワールドカフェ」



「蔵本地区：多職種連携チーム医療入門（IPE）」



薬学部（共通）

「SIH 道場～アクティブ・ラーニング入門～」の取組と課題

藤野 裕道

1. 取組概要

本年度から、薬学科と創製薬学科との初めての分離入試が行われたため、早期体験として薬学科は「薬局で働く」、創製薬科学科は「働くってなに？」と異なる講演を同時並行で聴講した。また全国薬害被害者団体連絡協議会（薬被連）講師2名と弁護団による「薬害について」と「B型肝炎について」の講演および、映画「薬学の祖を学ぶ～ころざし～」を視聴した。これらの学修を通して、薬剤師や創薬研究者としての具体的なイメージおよび、薬物の内包する「薬」と「毒」の両義性を理解した。またチーム医療入門として基調講演「地域包括ケアシステムを担う」を聴講した後に、医学部や歯学部学生とともにワークショップを行い、その成果を発表した。さらに今年度から始まるパフォーマンス科目として2年制の「薬理学実習」を当て、実習に関して振り返りを行ってもらった。

2. 成果（受講学生と担当教員がSIH道場を通して身につけたこと）

（学生）早期体験を通して、薬剤師や創薬研究者としての具体的なイメージおよび、薬物の内包する「薬」と「毒」の両義性を理解した。またチーム医療入門のワークショップを通して自分自身に関する紹介やプロダクト作成中の発言や意見交換などを積極的に行い、文章力、プレゼン力、さらには協働力についての到達目標をクリアしたと考える。

（教員）チーム医療の振り返りに関する教員の温度差や考え方の違いによりコンセンサスが取れないことが、ルーブリック評価表を用いても滲み出てしまう印象があったが、学生の振り返りレポートの評価作業を通して、一連のSIH道場授業全体の把握と考証ができ、またそれに対する教員のコメントを学生にフィードバックできたと考える。

3. 今後の課題（プログラム設計・授業運営、その他について）

1年生に、このプログラムの「意図すること」を理解させることは可能かもしれない。しかしながら学生それぞれラーニングカーブが違うので、「実際に実施させること」は、難しい場合もあるかもしれない。そのため「全員を一律に評価すること」もまた、難しいことであるかもしれないと感じた。また学生の多くは「コミュニケーションの難しさ」を記載していたが、その多くは「ファシリテーションの難しさ」を指している場合が多いとの印象を持った。また本年度のチーム医療において創製薬科学科の学生の何人かは「将来は新薬の研究者を志望しているため、チーム医療の現場に直接かかわることはないと思う」などの意見がでた。それらの学生が本プログラムに積極的に参加していない訳ではなく、むしろ「それ程多くない機会」とポジティブに捉えていた感触が伺えた。しかしながらSIH道場の柱の一つである「専門分野の早期体験」の習得を行えたかについては、少々疑問を感じる。今後創製薬科学科の学生が将来の自分像として想像可能なプレイヤーと、そのロールを設定できないだろうか。

4. 「SIH道場振り返りシンポジウム」における議論を経た新たな気づきや今後の課題

「コミュニケーション」について、学生はカンパセーションをメインに考えている印象があるのに対して、教員はディスカッションやディベートを想定している様なので、コミュニケーションの定義や分類（種類）を、プログラムの最初に理解させる方が良いのではないかと感じた。

理工学部理工学科社会基盤デザインコース 「SIH 道場～アクティブ・ラーニング入門～」の取組と課題

井上 貴文

1. 取組概要

大学における学習について、理解するとともに、社会基盤に関する興味関心を喚起し、学習・研究に対する動機づけを行う。また、学習の基本となる文章の書き方、プレゼンテーションの仕方、振り返りの仕方を学び、それらを実践することで、大学における能動的な学習の基本となる知識、技能、態度を身につける。具体的には、社会基盤施設の現状調査・見学のための合宿研修を実施し、さらに、4から5人のグループ単位で社会基盤に関する個別テーマを設け、能動的に調査し、結果をレポートやポスターにまとめ、発表会においてプレゼンテーションを行った。

2. 成果（受講学生と担当教員が SIH 道場を通して身につけたこと）

（学生）

社会基盤施設の見学を通して、専門分野に対する興味を深めることができたと考えている。また、学習の基本となる文章の書き方、プレゼンテーションの仕方、振り返りの仕方を学び、それらを実践することで、大学における能動的な学習の基本となる知識、技能、態度を知ることができ、さらに、それらのある程度身につけることができたと考えられる。

（教員）

学生が専門分野に対する興味を深めるために必要なことを考える機会を得た。文章の書き方、プレゼンテーションの仕方、振り返りの仕方、ルーブリックを用いた評価方法を改めて学んだ。

3. 今後の課題（プログラム設計・授業運営、その他について）

SIH 道場総括者が SIH 道場の全体を把握すること。

4. 「SIH 道場振り返りシンポジウム」における議論を経た新たな気づきや今後の課題

説明した内容について、学生が想像以上に理解していない事項が存在していることがわかった。

理工学部理工学科機械科学コース
「SIH 道場～アクティブ・ラーニング入門～」の取組と課題

日下 一也

1. 取組概要

学習の基本となる文章の書き方、プレゼンテーションの仕方および振り返りの仕方を学び、それらを実践することで大学における能動的な学習の基本となる知識、技能、態度を身につける。具体的なプログラムとして、大学入門講座集中研修においてディベートを行うことで論理的な思考能力とプレゼンテーション能力を養う。また、コース専門科目の機械科学実験（授業科目「**機械科学実験 1**」）を通して機械工学分野のエンジニアとして必要な技術を早期に修得することを目指す。

2. 成果（受講学生と担当教員が SIH 道場を通して身につけたこと）

（学生）「**機械科学実験 1**」を通して機械工学分野のエンジニアとして必要な技術を早期に修得することができた。さらに、「**機械科学実験 1**」の実験テーマごとに課すレポート、大学入門講座を振り返るレポート、「レポートの書き方」で課した人生設計を考慮した学生生活に関するレポートと複数回のレポート作成を行うことで、自らが果たした役割、反省点などを客観的に振り返る文章を書くことができるようになった。大学入門講座集中研修で実施したディベートを体験することで、論理的な思考能力とプレゼンテーション能力を養うことができた。

（教員）ルーブリックを使った客観的な評価が可能になった。これにより、複数の教員の評価に対しても公平性を確保することができるようになった。個人的には数多くのレポートを厳密に採点、評価コメントを残すことで、レポート評価能力が格段に向上した。

3. 今後の課題（プログラム設計・授業運営、その他について）

大学入門講座で行う集中研修では、振り返り学習やコミュニケーション力、論理的な記述力などの重要性を認識する入門的な内容であったが、これを浸透させるには継続的な指導が必要である。実験のレポート採点時などが継続的な指導の機会となるので上記のような能力を高めるよう折に触れ指導することが必要である。

4. 「SIH 道場振り返りシンポジウム」における議論を経た新たな気づきや今後の課題

振り返りシンポジウムにおいて他学部、他コースのポスター報告を聞き、反転授業ビデオコンテンツの存在を知った。これを活用することで本コースのプログラムはより充実すると考えられる。受け取った資料の自コースのパートしか確認しなかったことが反省すべき点である。今年度で SIH 道場のコーディネート業務を完結させてしまうのではなく、次年度に補佐役として協力することでプログラムの改善が図られる。

理工学部理工学科応用化学システムコース 「SIH 道場～アクティブ・ラーニング入門～」の取組と課題

今田 泰嗣

1. 取組概要

(1) 4月第1週に、導入教育として、教務委員およびSIH担当教員から、①大学での学修と心構え、②コースの教育理念、目標、教育課程、4年間のカリキュラムの流れ、③SIHプログラムに関するガイダンス、オリエンテーションを行った。

(2) 4月21日(土)に実施した日帰り校外学習において、会場の設営、片付けなどをクラス全員で行わせ、協働の訓練の一環とした。またこの校外学習を、入学直後のクラスメート達と慣れ親しむための手助けとした。

(3) 半年間の講義科目「STEM演習」の時間を用いて、学生3~4名の小グループによるグループ研究を行った。ここで各グループには1人の教員をアドバイザーとして配し、化学に関連するテーマを一つ自由に選定し、そのテーマに関する自由研究を行わせ、その結果について要旨を作成し、メンバー全員による15分間のプレゼンテーションを行った。その後、SIH担当教員から、理科系の作文技術、実験レポートなどのテクニカル文書の作成上の注意などに関する講義を行い、その内容を考慮して、再度自由研究の要旨を作成、提出させ、アドバイザー教員による採点、助言を行った。

いずれの取り組みにおいても、ルーブリック評価表を活用して自己評価を行った。

2. 成果（受講学生と担当教員がSIH道場を通して身につけたこと）

(学生) 入学式と同じ週という早い段階で、大学での学修と心構えに関して、高校とは全く異なるということを自覚できた。特に、高校の学習内容では既に答の分かっていることがほぼすべてを占めているのに対して、大学で扱う内容は答が分かっていることと分からないことの両方があり、前者は後者のための準備に過ぎないことを自覚できた。グループ学習では、協働作業の重要性の認識、文書作成とプレゼンテーションの訓練ができた。

(教員) 従来、学生から教員に一方的に内容を教える、伝える教育ではなく、学生の自主性を引き出しつつ、またフィードバックをかけつつ、学生の理解を深めていくプロセスを経験することができた。

3. 今後の課題（プログラム設計・授業運営、その他について）

特になし。来年度も同様の内容で行う予定である。

4. 「SIH道場振り返りシンポジウム」における議論を経た新たな気づきや今後の課題

シンポジウムでは、以上の内容についてポスター発表を行った。ポスターへの来訪者による質問や議論があったが、新たに得られた気づきや今後の課題などは特になかった。

理工学部理工学科電気電子システムコース 「SIH 道場～アクティブ・ラーニング入門～」の取組と課題

鈴木 浩司

1. 取組概要

当コースでは、SIH 道場を全 3 回の集中講義形式として、ラーニングスキルに関する講義と、ポスタープレゼンテーションの発表会を実施した。一方、1 年生の前期科目である STEM 演習を専門分野の早期体験として連携し、プログラムを設計・実施した。

SIH 道場の第 1 回・第 2 回では、文章力、プレゼン力、協働力に関する講義を行い、第 2 回の後に学生を 25 のグループに分け、グループごとに電気電子システムコースの研究室見学を実施した。第 3 回ではグループごとに研究室見学の結果をポスターにまとめ、学生相互に発表・質問を行った。この発表会にはコースの教職員も参加している。SIH 道場の終了後、学生は最終レポートと自己評価のルーブリック表を mahala 上で作成し、SIH 道場担当教員が分担してフィードバックを行った。

STEM 演習では、専門分野習得の基礎力として、物理実験に関する取り組み方やレポートの書き方に関して担当教員から毎週添削を受けることで、SIH 道場の文章力に関するスキルを身に付けている。

2. 成果（受講学生と担当教員が SIH 道場を通して身につけたこと）

（学生）文章力に関しては、STEM 演習を受講する前後で大きく成長していることが確認した。プレゼン力、協働力に関しても、第 3 回のプレゼン発表において SIH 道場での受講内容を応用できていることが確認できた。

（教員）アクティブ・ラーニングの基礎知識が得られた。また、manaba を使ったレポート提出により、LSM を使ったアクティブ・ラーニングに実際に触れることができた。

3. 今後の課題（プログラム設計・授業運営、その他について）

授業運営に関して、本年度からポスタープレゼンの内容を変更したため、研究室見学の日程が遅くなり、ポスター作製の時間が十分確保できなかったため、年度当初から準備する必要がある。学修の最終レポートに関しては、レポートのフォーマットを作成して学生に配布したものの、学生によって記入する文量のばらつきが大きく、各項目を 1 文でまとめている学生も見られた。文量が多ければよいということはないが、記入量の目安を提示するなどの工夫が必要と考える。

4. 「SIH 道場振り返りシンポジウム」における議論を経た新たな気づきや今後の課題

振り返りシンポジウムでは、他のプログラムでの実施内容を直接コーディネータ教員から聞ける貴重な機会であったが、時間が短く 2 件程度しか聞けなかった。

理工学部理工学科情報光システムコース
「SIH 道場～アクティブ・ラーニング入門～」の取組と課題

森田 和宏

1. 取組概要

大学における学修の基本となる協働力、文章力、プレゼン力を身につける目的で、ブレインストーミングと KJ 法を用いたグループワークを実施した。また、情報、光、知能工学分野における興味関心を喚起し、学修・研究に対する動機付けを目的とした体験学習も実施した。グループワークでは、与えられた課題に対する解決策をグループごとに提案し、全履修者の前で発表した。体験学習においては、各研究室で取り組んでいる最先端の研究に触れ、各研究に関連した実習や、実際に手を動かすものづくり体験をおこなった。

2. 成果（受講学生と担当教員が SIH 道場を通して身につけたこと）

（学生）

グループワークにおいては、役割分担やコミュニケーションの重要性に気づく学生が多かった。また、プレゼン発表やレポート課題を通じて、文章力やプレゼン力が身についたと感じている学生も多かった。体験学習においては、今年度から系別に実施したことにより、それぞれの最先端研究に触れることが専門科目の学修に対するモチベーション向上に寄与したと考えられる。

（教員）

レポートの出題や課題の提出において、manaba などの LMS の活用方法を習得できた。

3. 今後の課題（プログラム設計・授業運営、その他について）

本コースは二つの系に分かれているため、今年度から体験学習においては系それぞれで実施した。その際に内容のすりあわせを行わなかったため、レポート課題等に差が生じた可能性がある。また、協働力、文章力、プレゼン力に対する授業は、2ヶ月程度で集中的に実施したが、グループワークやプレゼン準備の時間が十分ではない場合もあったため、スケジュールの検討が必要である。

4. 「SIH 道場振り返りシンポジウム」における議論を経た新たな気づきや今後の課題

体験学習は情報光システムセミナーの授業の中で実施しており、SIH 道場のグループワークとの関連性がわかりにくかったことに気づかされた。二つをうまく誘導・連携できるようなプログラムの工夫が必要と思われる。

理工学部理工学科応用理数コース
「SIH 道場～アクティブ・ラーニング入門～」の取組と課題

守安 一峰

1. 取組概要

新入生に対して、大学における学習について理解させるとともに、自身の専門分野における先端研究の体験をさせることで興味関心を喚起し、徳島大学における学習・研究に対する動機づけを行う。また、学習の基本となる文章の書き方、プレゼンテーションの仕方、振り返りの仕方を学ばせ、それらを実践させることで、大学における能動的な学習の基本となる知識、技能、態度を身につけさせる。

2. 成果（受講学生と担当教員が SIH 道場を通して身につけたこと）

（学生）

研究室訪問で専門分野に触れることにより、大学における学習に対する意欲が増した。興味ある分野に加え、まったく知らない分野の研究室に行くことで、視野が広がった。協働作業の面白さと重要性を知ることができた。

（教員）

ポートフォリオの意義と利用方法を理解することができた。
振り返りシートをチェックすることで、学生がどのように感じながら授業に取り組んでいるのかを理解することができた。

3. 今後の課題（プログラム設計・授業運営、その他について）

細かい部分での改善点はあるが、プログラム設計や授業運営に関しては概ね良好であった。学生が振り返りを行った後にお互いで話し合う時間を設けることができなかったのが残念である。時間の組み方を工夫することで、そのような時間を確保できたら良いと思われる。また、最後に行われるプレゼンテーションの環境の改善も考えるべき点の一つである。

4. 「SIH 道場振り返りシンポジウム」における議論を経た新たな気づきや今後の課題

学部・学科により様々な取り組みがあることが分かった。応用理数コースは、多くの分野が混在するコースであることから、何かに的を絞った取り組みは難しく、現在の取り組み方で十分であると改めて感じた。研究室訪問でお世話になった先生から、短い時間での対応なので質問内容などを十分検討してもらいたい、という要望があった。指導してきたつもりであるが、新入生であることを加味した細かな助言の必要性を感じた。

生物資源産業学部
「SIH 道場～アクティブ・ラーニング入門～」の取組と課題

刑部 敬史

1. 取組概要

生物資源産業学部の SIH 道場は、4 月始めの新入生オリエンテーション時に短期集中型導入教育として、学部を構成する応用生命、食料科学、生物生産システムの各コース教員 2 名とコーディネーターが担当し、新入生を約 33 名の 3 班に分けて実施した。学外研修前の事前学習、学外研修（公的機関：徳島県工業技術センター、種苗企業：竹内園芸、農業資材メーカー：OAT アグリオの見学）、学外研修後の振り返り学習（個人プレゼンテーションおよび小グループ毎の KJ 法実践とポスター発表）に構成して行い、今後の専門分野における興味関心の喚起と、今後の学習・研究に対する動機づけを行った。さらに総合レポート作成を課すことにより、能動的学習の基盤となる学習技術を習得させた。

2. 成果（受講学生と担当教員が SIH 道場を通して身につけたこと）

（学生）

事後アンケートから、ほとんどの参加学生から、学外研修により専門分野への関心を高めることができたとの回答を得た。学習技術の修得については、振り返り学習での個人プレゼンテーションでは、他者の主張を聞いて自分の意見との類似点、相違点を考えプレゼンすることを学んだ。少グループによる KJ 法ポスター発表では、自分の意見と他者の意見を組み合わせることで新たなアイデアが創造できること、また積極的に議論する喜びを実感した。総合レポート作成では学外研修で体験した様々な内容に自身で事前、事後に調査した内容を加味して起承転結的に文章をまとめさせることができた。また、振り返り学習には Mahara を使用することで、基礎的な情報処理学習に役立った。

（教員）

SIH 道場中において実施された各項目について、ルーブリック評価表により評価を行ったため、学習効果の評価方法の一つとして習得することができた。また、実施にあたり、Moodle や Mahara などの学習支援システムを利用したことで、講義・演習へ反転授業、双方向フィードバックといったアクティブ・ラーニング導入の動機付けができた。

3. 今後の課題（プログラム設計・授業運営、その他について）

新入生オリエンテーション時に SIH 道場があり、全体的に慌ただしい印象があったが、時間配分を考慮して進めていくことで、学生への効果は十分にあったと思われた。生物資源産業学部の学外研修先選びは学生の今後の学習意欲にダイレクトに繋がるため、一日で見学が可能な時間配分に配慮しつつ、見学先を早めの準備で選定することで、今後の専門分野における興味関心の喚起と、今後の学習・研究に対する動機づけに大きな効果が生まれると思われる。

4. 「SIH 道場振り返りシンポジウム」における議論を経た新たな気づきや今後の課題

シンポジウムで紹介された他学部の取り組みや議論の中で、短期集中型の SIH 道場によって学生が実践した学修内容をいかに継続させるか、学修の程度が伸びているか定期的に確認するなどの取り組みが重要であることを強く感じた。各年度の主要講義内で、SIH 道場での学びを確認していける講義設定が重要である。

4. SIH 道場の実施支援に関する取組

4-1. SIH 道場の授業設計および実施に係る支援

1) 概要

開講 4 年目となる、平成 30 年度の「SIH 道場～アクティブ・ラーニング入門～」の開始に向けて、各学部・学科・コース・専攻での授業（プログラム）設計および授業実施支援のため、総合教育センター教育改革推進部門を中心に、同センターの ICT 活用教育部門、これら部門のメンバーを含む SIH 道場コンテンツ作成ワーキンググループが活動を行った。支援内容は、大きく次の 5 つである。①SIH 道場授業設計に関する支援、②授業で使用可能な教材コンテンツの作成、③授業計画・実施中の随時個別相談対応、④授業担当者に対する FD の実施、⑤授業改善に向けた評価の支援。これらの詳細について以下に述べる。

2) SIH 道場授業設計に関する支援

SIH 道場は、①専門分野の早期体験、②ラーニングスキル（文章力・プレゼンテーション力・協働力）の修得、③学修の振り返りの 3 つを必須要素とし、これらを組み込んだプログラム設計を各学部・学科・コース等の単位で行う（平成 30 年度は 15 プログラムが展開）。各学部・学科・コース等の SIH 道場の授業設計は、プログラム単位で 1 名以上選出された「授業設計コーディネーター」（以下、コーディネーター）が担っている。コーディネーターは、授業実施に向けて、アクティブ・ラーニング型授業の設計（目的・目標・スケジュール・教材・評価等、シラバスの作成）および授業担当者の選定などの準備を行い、実施後には次年度の改善に向けた振り返りとして、プログラム設計評価シートへの記入を行う。

コーディネーターは準備として、SIH 道場の 3 つの必須要素を組み込んだ授業の概要を「必須項目設計表」に記し、詳細な授業展開を「授業詳細」において明確にし、これらを担当する教員を記載した「担当者リスト」を提出する。教育改革推進部門は、これらの作成をスムーズに行えるよう、コーディネーターを参加対象とする「SIH 道場キックオフミーティング」を開催し、「必須項目設計表」と「授業詳細」のサンプルや実施方法のポイントを記した資料を配布し、SIH 道場の目的、三つの必須要素を説明した上で授業設計や授業方法のポイントを解説している。加えて、Moodle 上に、「平成 30 年度 SIH 道場コーディネーター準備コース」を作成し、「必須項目設計表」と「授業詳細」だけでなく、授業で使用可能な教材コンテンツ等も掲載している。さらに、昨年度の各プログラムの実施内容や実施後の振り返りを参照できるように、前年の平成 29 年度「SIH 道場」の 16 プログラムの「必須項目設計表」や「授業詳細」も Moodle 上に掲載している。

3) 授業で使用可能な教材コンテンツの作成

SIH 道場のプログラムをそれぞれの学部・学科・コースで実施するための支援として、学生用テキスト、反転授業用ビデオ教材、ルーブリック、e ポートフォリオ等に関する各種教材コンテンツを作成し提供している。これらの作成は、総合教育センター教育改革推進部門、ICT 活用教育部門の教員に加えて、SIH 道場コンテンツ作成ワーキンググループのメンバーが担当している。これらの詳細について以下に述べる。

3.1 学生用テキスト教材

SIH 道場の学生用教材として、テキストを作成している。主な内容は、SIH 道場の概要と目的、大学での学修のポイント、体験学習、ラーニングスキル、学修の振り返りの要点と解説、ワークシートである。巻末に簡単なブックガイドを付すことで、学生が興味関心を広げられるようにしている。本テキストは、SIH 道場を受講する1年次生全員に配布すると共に、授業担当教員を含む全学の教員に配布している。

テキストの内容について見直しを行い、平成29年度の改訂版となる平成30年度版を作成した。さらに、平成30年度からは、スマートフォン用徳島大学アプリと連携し、アプリからスマートフォンを用いてテキスト及び後述のビデオ教材を閲覧・視聴できるよう設計を行った。

3.2 反転授業のビデオ教材の提供

反転授業用のビデオ教材として、SIH 道場の概要および三つのラーニングスキル（「文章力」「プレゼンテーション力」「協働力」）について、事前学修・事後学修で使用可能なビデオ教材を Moodle 上で提供している。ビデオ視聴後のクイズ（確認テスト）、参考文献リストも掲載しており、コーディネーター、授業担当教員は、これらのビデオ教材を用いた授業設計を行うことができる。学生は、Moodle 上の学生用コースから、テキスト、ループリック、反転授業用ビデオを観て、事前学習・事後学習に役立てられるようにしている。なお、Moodle の使用法等に関する相談については、eラーニングサポート室が受け付けている。平成30年度は、これらの反転授業用ビデオ教材のうち、「協働力」のコンテンツの内容を更新した。

3-1. SIH道場<文章力> 反転授業コンテンツサンプル

※サンプルコンテンツは、自由にご使用ください。
ループリックは適宜修正・加筆してください。ビデオコンテンツは観点ごとに使用できます。学生配布用のサンプル教材も作成を行います。

★ループリック評価表

 SIH道場<文章力>ループリックサンプル_2015.2.11

★ビデオコンテンツ（事前学習） ビデオコンテンツはループリック表の観点と対応しています。

-  主張の根拠付け
-  構成の明快さ
-  文章表現の適切さ
-  出典表示など

★クイズ（ビデオ視聴後の確認テスト）

-  主張の根拠づけ
-  構成の明快さ
-  文章表現
-  出典表示など

★参考文献リスト（学生の学習を促進するために）

 文章力についてさらに学修するための参考文献リスト

3.3 ループリック評価表

ループリックは評価の観点と基準を示した表であり、SIH 道場においては、学生の学修成果を評価する際に、ループリックを使用することを推奨している。ループリックは、教員が学生のラーニングスキルを評価したり、学生同士でピア評価をさせたり、学生が自己評価する際に用いる

ことができる。現在は、サンプルルーブリックとして、「ラーニングスキルの3つ（「文章力」「プレゼンテーション力」「協働力）」を作成し、SIH 道場テキストに収録し学生に示している他、反転授業のビデオ教材と共に Moodle 上に掲載している（3つのラーニングスキルに関する反転ビデオは、それぞれのスキルの観点に沿った内容となっている）。教員は、サンプルルーブリックの電子ファイルをダウンロードし、適宜修正や加筆の上使用することができる。サンプルルーブリックについては、SIH 道場コンテンツ作成ワーキンググループにおいて、年度ごとに内容を見直し修正を行っている。

3.4 eポートフォリオ上での教員の振り返り

SIH 道場は、アクティブ・ラーニングを用いた授業を実践しながら教員が手法を学ぶという OJT 型 FD の場でもある。授業を担当した教員は、SIH 道場終了後に eポートフォリオ (Mahara) 上で、授業で実践した方法を記述しながら、今後も継続したいこと、改善したいこと等を振り返ることで今後の目標につなげることができる。そのため、昨年度と同じ形式のテンプレートと記入例を提供した。

The screenshot shows a web interface for creating a reflection template in Mahara. The page is titled "テンプレート" (Template) and includes a search bar and a "Go" button. Below the title, there are navigation tabs for "ダッシュボード", "コンテンツ", "マイポートフォリオ", and "グループ". The main content area is divided into several sections:

- 0. 授業概要** (Lesson Overview): Includes fields for "授業名" (Lesson Name), "担当教員" (Instructor), "対象者" (Target Audience), and "授業概要" (Lesson Summary).
- 1. 授業の方法** (Lesson Method): Includes a field for "授業の方法" (Lesson Method) and a "添付ファイル" (Attach File) button.
- 2. 授業の評価** (Lesson Evaluation): Includes a field for "授業の評価" (Lesson Evaluation) and a "添付ファイル" (Attach File) button.
- 3. 授業の振り返り** (Lesson Reflection): Includes a field for "振り返り" (Reflection) and a "添付ファイル" (Attach File) button.
- 4. 今後のアクションプラン** (Future Action Plan): Includes a field for "アクションプラン" (Action Plan) and a "添付ファイル" (Attach File) button.
- 5. その他の参考資料** (Other Reference Materials): Includes a field for "参考資料" (Reference Materials) and a "添付ファイル" (Attach File) button.

4) 授業計画・実施中の随時個別相談対応

コーディネーターが、SIH 道場の3つの必須要素を組み込んだ「必須項目設計表」、「授業詳細」を作成する際には、教育改革推進部門が窓口となり相談を随時受け付けている。平成30年度は、SIH 道場の実施4年目ではあるが、コーディネーターは入れ替わっているため、SIH 道場の趣旨や学生の到達目標、目標に到達できるような授業設計をどのように行うか等について詳細な説明が必要となった。また、実施前の準備期間だけでなく、実施中においても、学生の学修の振り返りに使用する eポートフォリオの使用方法など、授業を行う上で寄せられた疑問点について回答を行った。なお、eポートフォリオシステムの使用方法の詳細については、eラーニングサポート室が個別の相談に応じる等の支援を行った。

5) 授業担当者に対するFDの実施

5.1 概要

目的：

平成30年度SIH道場授業担当者が大学教育再生加速プログラムの概要、当該学科のSIH道場の詳細について理解し、SIH道場の授業を担当するために必要な知識と技能を習得する。また、OJT型のFDとして、授業実施から振り返りまでのプロセスを理解し、実践できるようになる。

対象者：SIH道場授業設計コーディネーター、SIH道場授業担当者等

開催日時・場所：

※ 参加対象者は計4回のうちいずれか1回参加する

	常三島キャンパス 地域創生・国際交流会館共用室 301	蔵本キャンパス 藤井節郎記念医科学センター2階多目的室 1・2 室
第1回	3月2日(木) 17:00~18:40	3月1日(水) 17:00~18:40
第2回	3月7日(火) 15:00~16:40	3月6日(月) 15:00~16:40

プログラム：

時間	内容	詳細項目	担当者
20分	SIH道場の概要	①目的・概要 ②スケジュール(設計→実施→振り返り)	新原将義
25分	eポートフォリオシステム	①システムの概要 ②学生の利用の仕方 ③教員の利用の仕方	金西計英 高橋暁子
55分	アクティブ・ラーニングと学びを促す評価	①アクティブ・ラーニングとは ②アクティブ・ラーニングの実践 ③学びを促す評価方法	川野卓二 吉田博

主催：大学教育再生加速プログラム実施専門委員会

5.2 詳細

「SIH道場の概要」では、SIH道場の目標、内容、実施体制、授業設計の必須項目、教育改革推進部門およびSIH道場コンテンツ作成WGの提供する教材について説明を行った。さらに、SIH道場の改善に向けた評価として、学生および教員アンケートの実施やコーディネーターが行うプログラム設計評価シートによる振り返り等について説明を行った。

「eポートフォリオシステム」では、学生および教員が授業で学んだ内容や授業実践について振り返りを行うための学生のツールであるeポートフォリオの使用法について説明を行った。

「アクティブ・ラーニングと学びを促す評価」では、アクティブ・ラーニングの定義や学修効果、ルーブリックによる評価法について説明を行った。選択式ワークとして、参加者が日頃の授業実

践を振り返りながら行うことのできるワーク（アクティブ・ラーニング事例カード作成あるいはルーブック「改造」の検討）を実施した。

6) 授業改善に向けた評価の支援

SIH 道場の授業改善、プログラム改善に向けて、大学教育再生加速プログラム（AP）実施専門委員会で策定された評価指標に基づき、学生と教員の目標到達度を把握するためのアンケートを作成し、実施結果の集計およびとりまとめを行っている。平成 30 年度からは、手続きの簡便化と授業設計コーディネーターの負担軽減のため、学生アンケートを Web 上で実施するよう変更を行った。また、授業設計コーディネーターが、学生の学修成果やアンケートの集計結果を参照し、設計したプログラムが学生の学修や研究への意欲を高めるものだったか、ラーニングスキルが修得できるものであったか、学修の振り返りができるものであったかを振り返りための「プログラム設計評価シート」を作成している。さらに、AP 実施専門委員会主催の「SIH 道場振り返りシンポジウム」の企画および運営を行い、平成 30 年度の各学部・学科の SIH 道場の内容や課題を全学的に共有する機会を設定している。その他、SIH 道場に関する評価・改善ワーキンググループの学生委員へのインタビュー調査を行い、平成 30 年度の SIH 道場の良い点・改善点のとりまとめを行い、SIH 道場のプログラム改善や AP 事業の自己評価の資料として提供している。

4-2. eポートフォリオシステムの構築

1. 概要

1.1 システム概要

2015年4月よりeポートフォリオシステム「Mahara (マハラ) ⁽¹⁾」の運用を開始した。図 1.1 にトップページを示す。Mahara は世界中で利用されているオープンソースのeポートフォリオシステムである。本学用のカスタマイズとして、後述する「飛ぶノート」システムとの連携機能、「テンプレート機能」を追加したが、この2点以外の仕様変更はなく、標準的な Mahara となっている。徳島大学の全学生および全教職員は、統合認証経由でいつでも Mahara にアクセス可能である。

Mahara は様々な使い方が出来る汎用的なeポートフォリオシステムであるが、成果物の蓄積、活動の振り返りレポートの作成、外部への自己PRページの作成を得意とする。2018年度は、前年度と同様に、学生は主にSIH道場のレポート等の成果物の蓄積、SIH道場担当教員は主に授業実践の振り返りレポートの作成を行うことを狙った。



図 1.1 Mahara トップページ (ログイン後)

1.2 飛ぶノート

飛ぶノートは、スキャナなどでPDFファイルに変換した手書きファイルをMaharaサーバの各学生ページや教員が作成したグループページに転送するツールである。飛ぶノートとMaharaサーバの図 1.2.1 のような連携をする。教員は担当授業で学生に課したマークシート付き手書きレポートを集め、必要に応じてコメントを書いた後、紙ファイルをスキャナでPDFファイルに変換する。その後、PCのブラウザソフトを起動して「飛ぶノート」(図 1.2.2)へアクセスし、PDF

ファイルをアップロードする。あとは飛ぶノートシステムがレポート上部のマークシートから学籍番号を読み取り、Mahara サーバの学生ごとのファイル保存領域へファイルを自動保存する。学生は各自で Mahara へアクセスし、教員から返却されたレポートを確認する（図 1.2.3）。

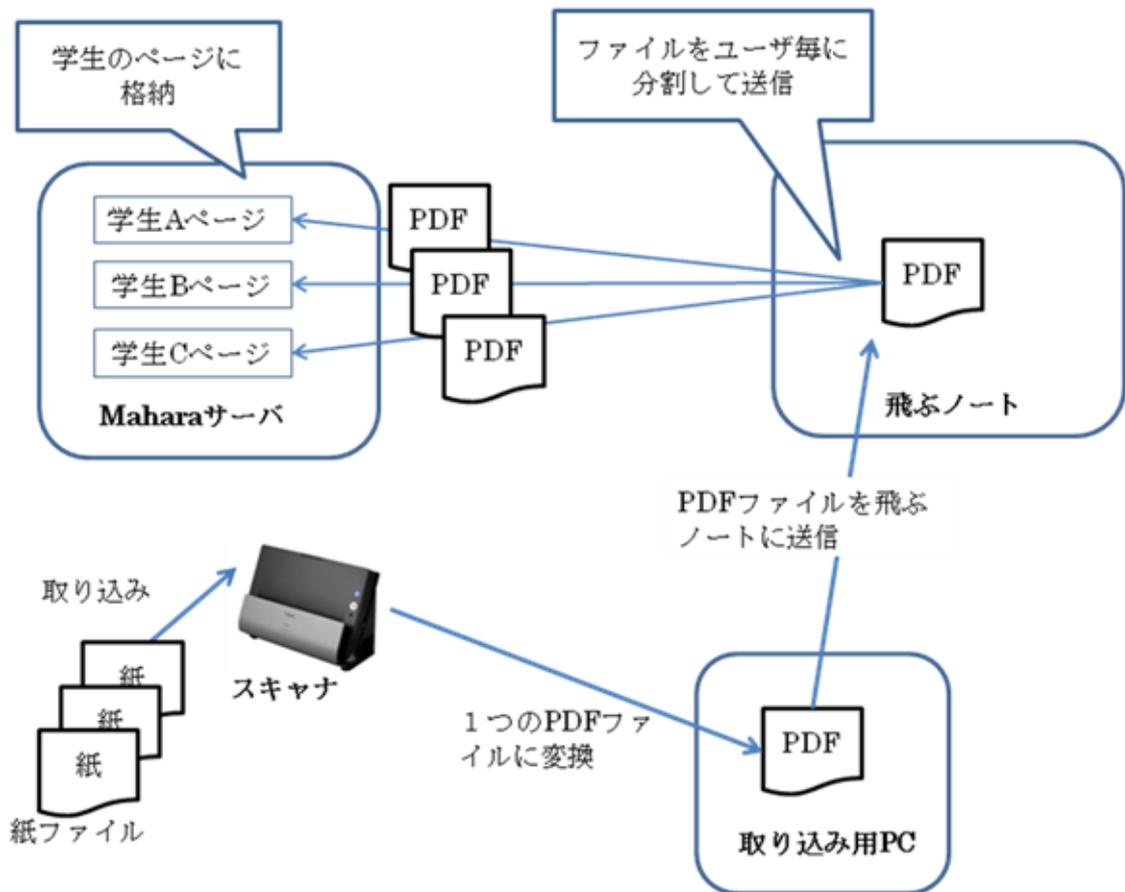


図 1.2.1 飛ぶノート-Mahara 連携図（飛ぶノート利用マニュアル⁽²⁾ p.2)

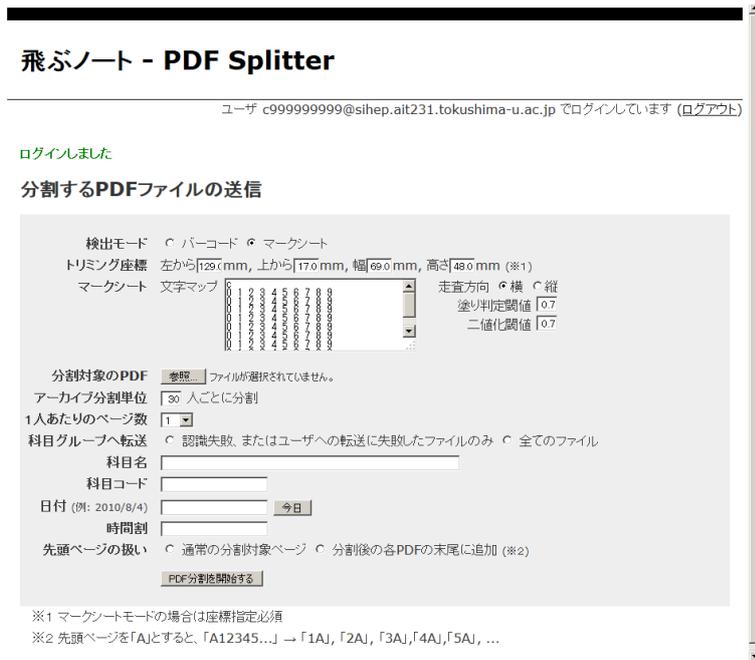


図 1.2.2 飛ぶノート PDF ファイルアップロード設定画面 (飛ぶノート利用マニュアル⁽²⁾ p.9)

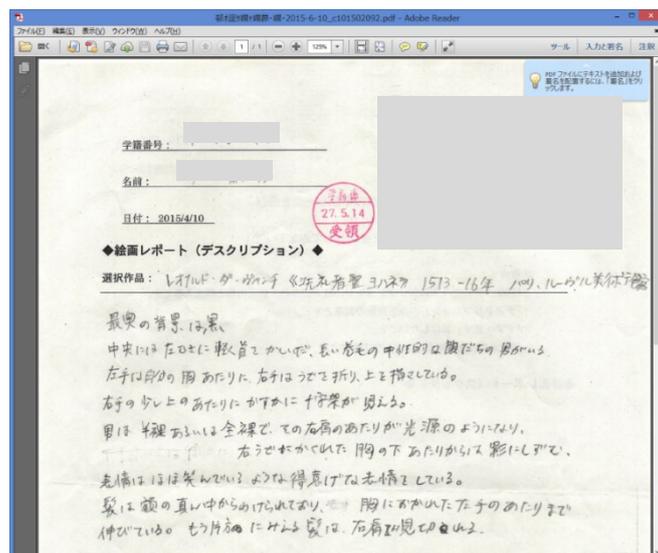


図 1.2.3 Mahara へアップロードされた手書きレポートの例

1.3 テンプレート

Mahara は、標準機能として蓄積した学習成果を整理し、振り返りや他者へ PR するページを作成することができる。しかし、振り返りの観点を指定したい場合などは、教員があらかじめ見本となるページを作成し、学生が見本をコピーして一部を書き換えるほうが効果的・効率的である。Mahara の標準機能でもページのコピーは可能であるが、その方法が複雑であるため、本学では「テンプレート機能」を追加した。テンプレート例を図 1.2.3 に示す。

一方で、これまでテンプレート機能は広く利用されてこなかった。これはテンプレート機能の仕様として、テンプレートを作成できるのは Mahara の管理者のみであったためだと推察される。そこで 2016 年度からは、Mahara の標準機能を用いて、簡便にコピー・共有する設定方法を推奨し、教員へ案内した。

図 1.2.3 テンプレート例

2. 利用状況

2.1 全体

本稿執筆時点（2019年1月28日 13:00）において、登録ユーザ数は11,100人、グループ数は151である。表 2.1.1 および図 2.1.1 に示すとおり、毎年度ユーザ数は増えている。

表 2.1.1. 年度別ユーザ数

	2015年度 (2016年3月31日時点)	2016年度 (2017年3月31日時点)	2017年度 (2018年3月31日時点)	2018年度 (2019年1月28日時点)
登録ユーザ数	2,463人	4,202人	8,999人	11,100人

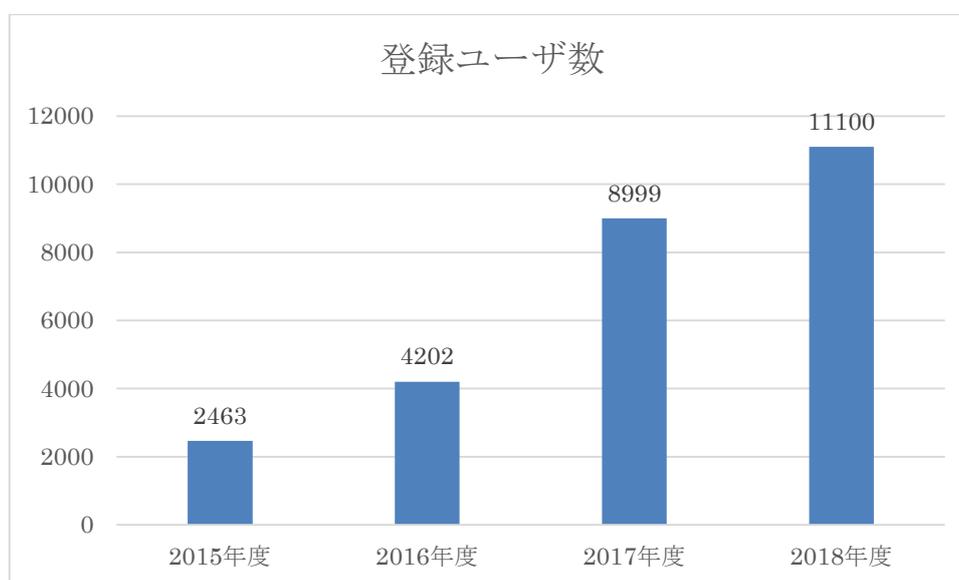


図 2.1.1. 年度別ユーザ数の推移

もっとも利用されているのはファイルのアップロード機能である。四半期ごとのファイル更新数を表 2.1.2 および図 2.1.2 に示す。2018年度は、前年度より4-6期のアップロード数が落ち込んでいるが、他の期はほぼ横ばいと考えられる。また、2015年度は後期の利用が極端に落ち込んだが、2016年度～2018年度は後期になっても活発に利用されていることがわかった。

表 2.1.2. ファイル更新数

	2015年度	2016年度	2017年度	2018年度
4-6月期	1,019	1,297	2,423	1,527
7-9月期	1,195	924	1,707	1,543
10-12月期	709	1,267	1,498	1,336
1-3月期	156	1,456	1,239	—
総計	3,079	4,942	6,867	4,406

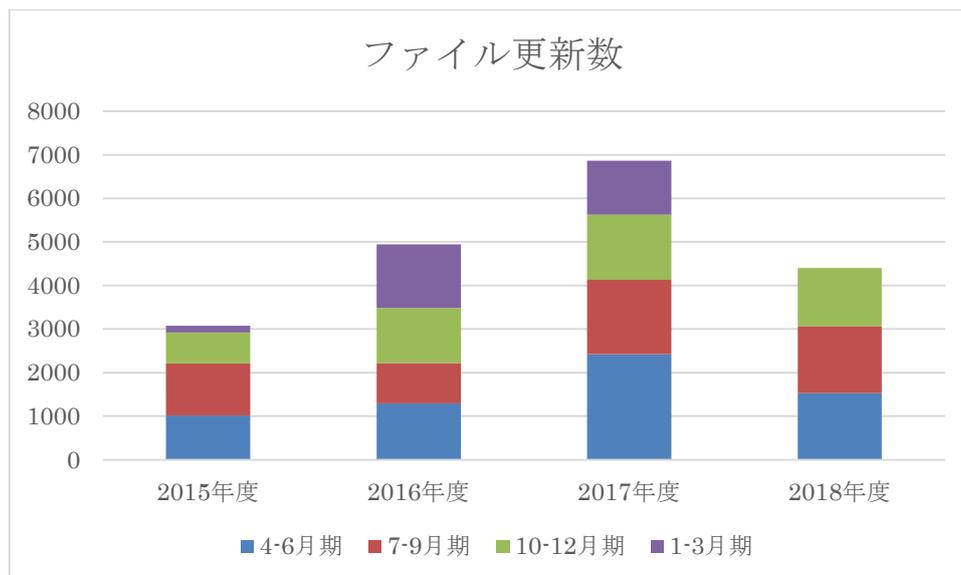


図 2.1.2. 年度別ファイル更新数

なお、アップロードされたファイルのうち、「飛ぶノート」を活用した手書きレポートについて、四半期ごとのファイル数を表 2.1.3.に示す。2015 年度は 2450 ファイル、2016 年度は 4,224 ファイル、2017 年度は 3,612 ファイル、2018 年度は 3,466 ファイルであった（管理者ユーザの利用を除く）。図 2.1.3 に示すようにアップロードされたファイルのうち、2015 年度は 80.0%、2016 年度は 85.3%、2017 年度は 52.6%、2018 年度は 78.7%が、飛ぶノートを利用してアップロードされた手書きレポートだと考えられる。2017 年度のみ飛ぶノートと飛ぶノート以外のファイルアップロードが半々であったが、それ以外の年度はファイルアップロードの 8 割程度は飛ぶノートの利用だと思われる。

表 2.1.3. 飛ぶノートを利用したファイル更新数

	2015 年度	2016 年度	2017 年度	2018 年度
4-6 月期	902	1,617	1,420	1,438
7-9 月期	966	416	964	1,006
10-12 月期	517	943	1,228	1,022
1-3 月期	65	1,248	1,195	—
総計	2,450	4,224	3,612	3,466

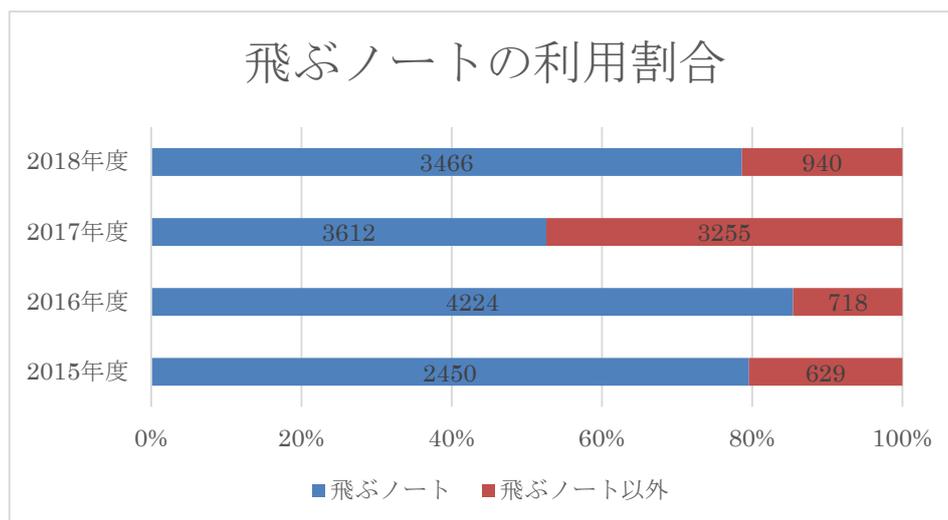


図 2.1.3. 飛ぶノートと飛ぶノート以外のファイル更新割合

また、プロフィールページ（自己紹介ページ）やグループページ等を除いた、個人が独自に作成したページについて、四半期ごとのページ更新数を表 2.1.4 および図 2.1.4 に示す。2016 年度のページ更新数は総計 1,195 であり、前年度の 3 倍に迫っている。その後、2017 年度は 958、2018 年度 1,077 と、横ばい状態である。また、2016 年度～2018 年度は、4-6 月期に多くのページ更新がある。

表 2.1.4. ページ更新数

	2015 年度	2016 年度	2017 年度	2018 年度
4-6 月期	130	827	725	767
7-9 月期	181	131	15	211
10-12 月期	112	178	100	99
1-3 月期	3	59	118	—
総計	426	1,195	958	1,077

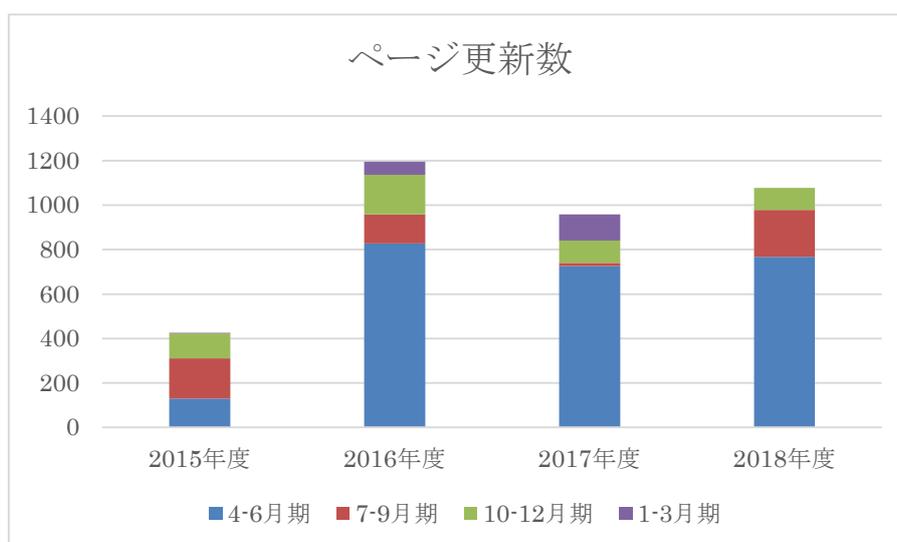


図 2.1.4. 年度別ページ更新数

さらに、Mahara では個人が作ったページなどを他者へ公開設定をすることで閲覧者からコメントをもらうことが可能となる。四半期ごとのコメント数を表 2.1.5 および図 2.1.5 に示す。2016 年度はコメント総数が 1,635 であり、前年度より活発な意見交換がなされていた。2017 年度は 938、2018 年度は 12 月末時点で 715 と、どちらも 2016 年度より少ない。

表 2.1.5. コメント数

	2015 年度	2016 年度	2017 年度	2018 年度
4-6 月期	16	446	422	571
7-9 月期	140	169	0	120
10-12 月期	242	531	366	24
1-3 月期	289	489	150	—
総計	687	1,635	938	715

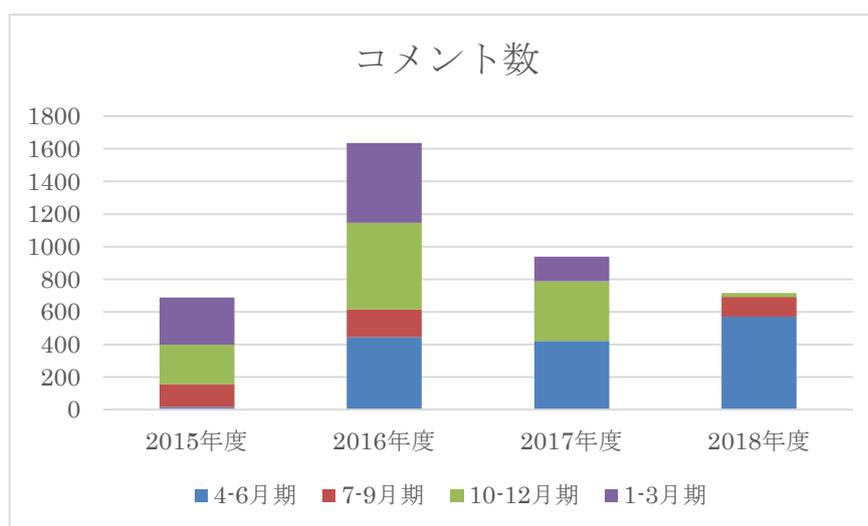


図 2.1.5. 年度別コメント更新数

2.2 学生による利用状況

学生による利用は、成果物のアップロードが主なものだと考えられる。Mahara とともに導入した「飛ぶノート」を用いた手書きレポート（図 1.2.3）や、PDF ファイル、PowerPoint ファイルなどが Mahara へアップロードされていた。

また、前年度に引き続き、SIH 道場の振り返りページを確認することができた。Mahara 上に教員がグループを作成して振り返りフォーマットを用意し（図 2.2.1）、学生はコピーして振り返りページを作成し、教員がコメントを返信する形での振り返り活動（図 2.2.2）が行われたと思われる。



図 2.2.1 振り返りレポートのフォーマット例



図 2.2.2 学生が作成した振り返りページの例

2.3 教員による利用状況

2018年度は、前年度に引き続き、SIH道場担当教員を対象に、授業の振り返りを行うためのテンプレートを用意した(図 2.3.1)。教員は担当授業終了後、部局毎に用意したテンプレートをコピーして、記入のヒントなどを参考に授業を振り返るページを作成してもらうこととした。作成例を図 2.3.2 に示す。教員の振り返りレポートは、「2018SIH道場担当教員」というグループ内で公開し、授業担当教員同士で閲覧可能とした。なお、2018年度も前年に引き続き、振り返りレポートの共有が自動的に行われるように設定した。



図 2.3.1 教員用テンプレート



図 2.3.2 教員の振り返りレポート例

2.4 その他の利用

Mahara には SIH 道場以外にも、授業のページがいくつか作成されていた (図 2.4.1)。2.1 で示したように、SIH 道場実施期間以外にも Mahara の利用が活発になっており、様々な教育場面で Mahara が活用されつつあると考えられる。

The screenshot shows the Mahara interface for a course titled "2018年度 情報メディアと教育". At the top, there is a navigation bar with "ダッシュボード", "コンテンツ", "マイポートフォリオ", "グループ", and "管理". Below this, a breadcrumb trail indicates the current page is "2018年度 情報メディアと教育". The page features a list of themes (テーマ) with their respective submission and release dates:

- テーマ0 練習用 10/16
- テーマ1 10/31
- テーマ2 11/06
- テーマ3 11/13
- ...

The main content area is currently empty, showing only the course title "2018年度 情報メディアと教育" and a "はじめに" (Introduction) section. The introduction text states that the group was created for the 2018 academic year and is intended for students. It mentions that various information can be shared, and that the main focus is on sharing and using resources. It also notes that the submission deadline is 17:00 on the day of the exam.

図 2.4.1 授業ページ例 (情報メディアと教育)

3. まとめと今後の課題

2018 年度においては、Mahara 登録ユーザ数は 1 万人を超えた。Mahara の実運用が 4 年目となり徳島大学のほとんどの構成員が Mahara へ登録されていると思われる。また、2016 年度以降はページ更新数などが大幅に伸びることはなく、横ばい状態であった。様々な学習活動に Mahara を用いることが一般的になってきたと考えられる一方で、一部のユーザやプロジェクトによる利用にとどまっている可能性もある。今後も引き続き、Mahara を用いた振り返り活動の事例の紹介や、ICT が苦手な教職員に対する個別相談会の実施などによって、まだ e ポートフォリオシステムを利用したことがないユーザへの普及につなげていきたい。

参考文献

- (1) Mahara, <https://mahara.org/>
- (2) 飛ぶノート利用マニュアル 3.0 版 (2015), <https://moo2.chi.tokushima-u.ac.jp/course/view.php?id=227> (教職員限定ページで公開)